岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第569集

尼坂遺跡・牡丹野遺跡・作屋敷遺跡
発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業都鳥地区関連遺跡発掘調査

２０１０

岩手県県南広域振興局農林部農村整備室
(財)岩手県文化振興事業団

尼坂遺跡・牡丹野遺跡・作屋敷遺跡
発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業都鳥地区関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことの出来ない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、経営体育成基盤整備事業都鳥地区に関連して、平成20年度に発掘調査を実施した奥州市尼坂遺跡、牡丹野遺跡、作屋敷遺跡の調査成果をまとめたものです。

調査の結果、平安時代の集落跡の存在が明らかとなりました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご援助、ご協力を賜りました岩手県県南広域振興局農林部農村整備室、奥州市教育委員会を始めとする関係各位に衷心よりの謝意を表します。

平成22年２月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　武　田　牧　雄

例　　言

1　本書は、岩手県奥州市胆沢区南都田字国分370-1ほかに所在する尼坂遺跡、奥州市胆沢区南都田字国分371ほかに所在する牡丹野遺跡、奥州市胆沢区南都田字作屋敷487ほかに所在する作屋敷遺跡の発掘調査結果を収録したものである。

2　各遺跡の発掘調査は、経営体育成基盤整備事業都鳥地区の事業に伴う事前の緊急発掘調査であり、岩手県教育委員会生涯学習文化課の調整を経て、岩手県県南広域振興局農林部農村整備室の委託を受けた（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施したものである。

3　岩手県遺跡登録台帳番号と遺跡略号は以下のとおりである。

尼 坂 遺 跡　遺跡番号…ＮＥ25－1123／遺跡略号…ＡＳ－08

牡丹野遺跡　遺跡番号…ＮＥ25－0185／遺跡略号…ＢＴＮ－08

作屋敷遺跡　遺跡番号…ＮＥ25－0144／遺跡略号…ＳＫＹ－08

4　野外調査の期間と調査面積および担当者は、以下の通りである。

尼 坂 遺 跡　平成20年５月１日～５月15日／　322㎡／星　雅之・田中美穂

牡丹野遺跡　平成20年４月10日～６月12日／2,698㎡／星　雅之・田中美穂

作屋敷遺跡　平成20年６月９日～８月12日／2,044㎡／星　雅之・田中美穂

5　室内整理期間と担当者は、以下の通りである。

尼 坂 遺 跡　平成20年11月４日～平成20年12月26日／星　雅之

牡丹野遺跡　平成20年12月１日～平成21年１月30日／星　雅之

作屋敷遺跡　平成20年11月４日～平成21年２月13日／田中美穂

6　業務委託は、以下の機関・個人に委託した。

基準点設置：（株）中央測量設計、（株）アクト技術開発

空中写真：（株）東邦航空

石器・石製品の石材鑑定：花崗岩研究会

火山灰分析：弘前大学大学院・理工学研究課科　柴　正敏

放射性炭素年代測定：（株）加速器分析研究所

金属製品の保存処理：岩手県立博物館

7　本報告書の編集と執筆は、星　雅之と田中美穂が行なった。

8　土層の色調は、『標準土色帳』（農林水産省農林技術会議局監修）に準拠した。

9　調査および室内整理に際しては次の方々、機関に御指導・御協力を賜った。（順不同・敬称略）
井上雅孝（滝沢村埋蔵文化財センター）、斎藤邦雄・吉田充・櫻井友梓・千葉正彦（岩手県教育委員会）、佐々木いく子・高橋千晶・朴沢志津江・重森直人（奥州市教育委員会）、伊藤博幸・佐藤良和・千田幸生・伊藤みどり・遠藤栄一（奥州市埋蔵文化財調査センター）

10　これまでに、調査成果の一部を現地公開資料、調査略報、奥州市遺跡報告会などで公表しているが、本書と記載事項が異なる場合はすべて本書が優先する。

11　発掘調査に伴う出土遺物および諸記録は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　遺跡の立地・環境 …… 1
1　地理的環境 …… 1
2　周辺の遺跡 …… 4
3　基本層序 …… 15

Ⅲ　野外調査と室内整理の方法 …… 19
1　野外調査 …… 19
2　室内整理 …… 20

Ⅳ　尼坂遺跡 …… 22
1　遺跡の位置・概要 …… 22
2　これまでの調査歴 …… 22
3　検出遺構 …… 23
4　出土遺物 …… 23
5　総括 …… 23

Ⅴ　牡丹野遺跡 …… 25
1　遺跡の位置・概要 …… 25
2　これまでの調査歴 …… 25
3　検出遺構 …… 25
4　出土遺物 …… 34
5　総括 …… 35

Ⅵ　作屋敷遺跡 …… 60
1　遺跡の位置・概要 …… 60
2　これまでの調査歴 …… 60
3　検出遺構 …… 60
4　出土遺物 …… 90
5　総括 …… 93

Ⅶ　自然科学分析 …… 153
1　作屋敷遺跡における放射性炭素年代（ＡＭＳ測定） …… 153
2　岩手県奥州市胆沢区作屋敷遺跡より採取されたテフラについて …… 156
報告書抄録 …… 206

図版目次

第１図　遺跡位置図 …… 2
第２図　周辺地形と尼坂・牡丹野・作屋敷遺跡
　　調査範囲 …… 3
第３図　地形分類図 …… 5
第４図　周辺の遺跡分布 …… 7
第５図　尼坂・牡丹野遺跡基本層序 …… 17
第６図　作屋敷遺跡基本層序 …… 18
＜尼坂遺跡＞
第７図　グリッド配置図、陶磁器 …… 24
＜牡丹野遺跡＞
第８図　遺構配置図 …… 38
第９図　調査区南部遺構配置図 …… 39
第10図　調査区中央部・西部遺構配置図 …… 40
第11図　１号竪穴住居跡、１・２・４号土坑 …… 41
第12図　２号竪穴住居跡、１号竪穴状遺構 …… 42
第13図　３号土坑、２・４号溝跡 …… 43
第14図　１・３号溝跡 …… 44
第15図　調査区南部柱穴群 …… 45
第16図　調査区中央部柱穴群① …… 46
第17図　調査区中央部柱穴群② …… 47
第18図　１号旧河道 …… 48
第19図　旧河道流路推定図、２号旧河道 …… 49
第20図　３・４号旧河道 …… 50
第21図　古代の土器（１）…… 54
第22図　古代の土器（２）・弥生土器 …… 55
第23図　陶磁器 …… 56
第24図　石器 …… 57
＜作屋敷遺跡＞
第25図　遺構配置図 …… 100
第26図　調査区西部・北部遺構配置図 …… 101
第27図　調査区中央部・東部遺構配置図 …… 102
第28図　１号竪穴住居跡① …… 103
第29図　１号竪穴住居跡②、2号竪穴住居跡 …… 104
第30図　３号竪穴住居跡 …… 105
第31図　４号竪穴住居跡、３～５号土坑、１号焼土遺構 106
第32図　５号竪穴住居跡① …… 107
第33図　５号竪穴住居跡②、６号竪穴住居跡① …… 108
第34図　６号竪穴住居跡② …… 109
第35図　６号竪穴住居跡③、７号竪穴住居跡 …… 110
第36図　８号竪穴住居跡、１号竪穴状遺構 …… 111
第37図　１号掘立柱建物跡① …… 112
第38図　１号掘立柱建物跡②、１号土坑 …… 113
第39図　２・６・７・９・10号土坑 …… 114
第40図　11～13・15・16号土坑 …… 115
第41図　18～22号土坑 …… 116
第42図　１・２号溝跡 …… 117
第43図　３・４号溝跡 …… 118
第44図　５号溝跡、８・14号土坑①、
　　６・８号溝跡① …… 119
第45図　８・14号土坑②、６・８号溝跡②、
　　７号溝跡 …… 120
第46図　17号土坑、９～11号溝跡 …… 121
第47図　12・13号溝跡 …… 122
第48図　14・15号溝跡 …… 123
第49図　16号溝跡 …… 124
第50図　17号溝跡 …… 125
第51図　18～21号溝跡 …… 126
第52図　２号焼土遺構、１・２号陥し穴状遺構 …… 127
第53図　調査区西部柱穴群①・② …… 128
第54図　調査区北部柱穴群①・② …… 129
第55図　調査区北部柱穴群③・④ …… 130
第56図　調査区中央部柱穴群①・②・③ …… 131
第57図　調査区中央部柱穴群④・⑤ …… 132
第58図　調査区東部柱穴群①・② …… 133
第59図　調査区東部柱穴群③・④ …… 134
第60図　調査区東部柱穴群⑤・⑥ …… 135
第61図　古代の土器（１）…… 140
第62図　古代の土器（２）…… 141
第63図　古代の土器（３）…… 142
第64図　古代の土器（４）…… 143
第65図　古代の土器（５）…… 144
第66図　古代の土器（６）…… 145
第67図　古代の土器（７）…… 146
第68図　古代の土器（８）…… 147
第69図　土製品、陶磁器、鉄製品 …… 148
第70図　石器 …… 149

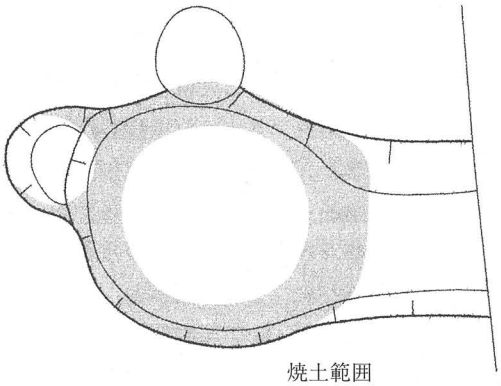
表　目　次

第１表　周辺の遺跡一覧表①　…… 8
第２表　周辺の遺跡一覧表②　…… 9
第３表　周辺の遺跡一覧表③　…… 10
第４表　胆沢区内調査歴のある遺跡　…… 12
＜尼坂遺跡＞
第５表　陶磁器観察表　…… 23
＜牡丹野遺跡＞
第６表　竪穴住居跡観察表　…… 52
第７表　竪穴状遺構観察表　…… 52
第８表　土坑観察表　…… 52
第９表　溝跡観察表　…… 52
第10表　旧河道観察表　…… 52
第11表　柱穴状土坑観察表　…… 53
第12表　古代の土器観察表　…… 58
第13表　弥生土器観察表　…… 59
第14表　陶磁器観察表　…… 59
第15表　剥片石器観察表　…… 59
第16表　礫石器観察表　…… 59
＜作屋敷遺跡＞
第17表　竪穴住居跡観察表　…… 136
第18表　竪穴状遺構観察表　…… 136
第19表　掘立柱建物跡観察表　…… 136
第20表　土坑観察表　…… 136
第21表　溝跡観察表　…… 137
第22表　焼土遺構観察表　…… 137
第23表　陥し穴状遺構観察表　…… 137
第24表　柱穴状土坑観察表①　…… 138
第25表　柱穴状土坑観察表②　…… 139
第26表　古代の土器観察表①　…… 150
第27表　古代の土器観察表②　…… 151
第28表　土製品観察表　…… 152
第29表　陶磁器観察表　…… 152
第30表　鉄製品観察表　…… 152
第31表　礫石器観察表　…… 152

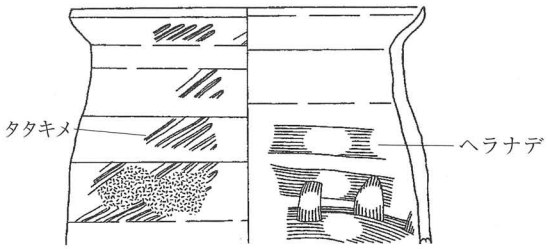
写真図版目次

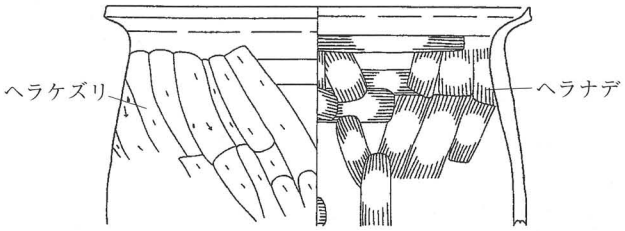
＜尼坂遺跡＞
写真図版１　調査区全景航空写真　…… 160
写真図版２　南側・西側調査区全景　…… 161
写真図版３　調査風景、陶磁器　…… 162
＜牡丹野遺跡＞
写真図版４　遺跡全景　…… 163
写真図版５　１号竪穴住居跡　…… 164
写真図版６　２号竪穴住居跡、1号竪穴状遺構　…… 165
写真図版７　１～４号土坑　…… 166
写真図版８　１～４号溝跡　…… 167
写真図版９　１～４号旧河道、作業風景　…… 168
写真図版10　古代の土器（1）　…… 169
写真図版11　古代の土器（2）、弥生土器、陶磁器　170
写真図版12　石器　…… 171
＜作屋敷遺跡＞
写真図版13　遺跡全景　…… 172
写真図版14　１号竪穴住居跡　…… 173
写真図版15　２号竪穴住居跡　…… 174
写真図版16　３号竪穴住居跡（１）　…… 175
写真図版17　３号竪穴住居跡（２）、
４号竪穴住居跡　…… 176
写真図版18　５号竪穴住居跡　…… 177
写真図版19　６号竪穴住居跡（１）　…… 178
写真図版20　６号竪穴住居跡（２）　…… 179
写真図版21　７号竪穴住居跡　…… 180
写真図版22　８号竪穴住居跡、1号竪穴状遺構　…… 181
写真図版23　１号掘立柱建物跡（１）　…… 182
写真図版24　１号掘立柱建物跡(２)、
１・２・10号土坑　…… 183
写真図版25　２～５・10号土坑、１号焼土遺構　…… 184
写真図版26　６・８・９・11・12号土坑　…… 185
写真図版27　13～15号土坑　…… 186
写真図版28　16～19・21号土坑　…… 187
写真図版29　20号土坑、1～3号溝跡　…… 188
写真図版30　４・５号溝跡　…… 189
写真図版31　６～10号溝跡　…… 190
写真図版32　11～14号溝跡　…… 191
写真図版33　15～17号溝跡　…… 192

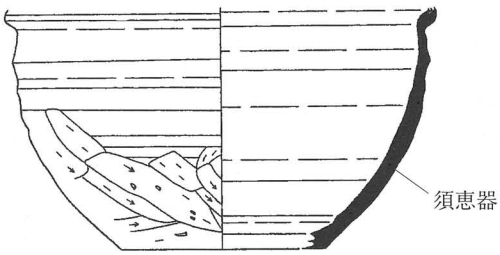
写真図版34　18～21号溝跡 ……193
写真図版35　１・２号焼土遺構 ……194
写真図版36　１・２号陥し穴、作業風景 ……195
写真図版37　作業風景 ……196
写真図版38　作業風景、現地公開 ……197
写真図版39　古代の土器（１）……198
写真図版40　古代の土器（２）……199
写真図版41　古代の土器（３）……200
写真図版42　古代の土器（４）……201
写真図版43　古代の土器（５）……202
写真図版44　古代の土器（６）、土製品（１）……203
写真図版45　土製品（２）、陶磁器、鉄製品 ……204
写真図版46　石器 ……205

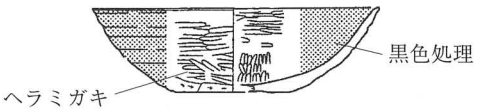


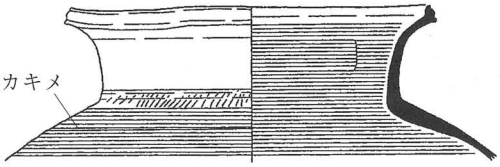
焼土範囲

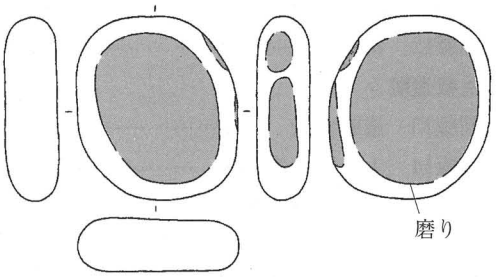












凡　　例

Ⅰ　調査に至る経過

経営体育成基盤事業都鳥地区の事業区域内には作屋敷、牡丹野、尼坂、国分の４つの埋蔵文化財包蔵地が存在し、事業施行に際し試掘調査を行ったところ、作屋敷、牡丹野、尼坂の３遺跡について記録保存が必要となったため発掘調査を実施したものである。

都鳥地区は、奥州市胆沢区南都田地区に位置し、水田の大部分は昭和26年～29年にかけて積雪寒冷地土地改良事業により10a区画に整備されているが、農業機械の大型化が進む中で小区画となったこと、農道は幅員２～３ｍと狭小で通行に支障があること、水路は用排兼用土水路であるため用水不足や排水不良であり維持管理に多大な労力を投じていることなどから、地域営農の確立に十分な対応ができない状況である。このため本事業により水田約235haを標準区画１haの大区画化とし、併せて用排水路、道路の整備を行い、もって地域農業の中心となる経営体を育成し活力があり生産性の高い地域営農の確立を目指している。

工事施工に先立ち地区内に存在する４遺跡について、当室は岩手県教育委員会に対し試掘調査を依頼（平成19年9月21日付け県南広農整第483号）した。岩手県教育委員会は、平成19年10～11月にかけ４遺跡の試掘調査を実施し、作屋敷、牡丹野、尼坂の３遺跡について発掘調査が必要である旨を回答（平成19年11月15日付け教生第946号）してきた。

その結果を踏まえて、当室は、岩手県教育委員会との協議調整を経て財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに委託し発掘調査を実施することとなった。

（岩手県県南広域振興局農林部農村整備室）

Ⅱ　遺跡の立地・環境

１　地理的環境

（１）遺跡の位置と立地

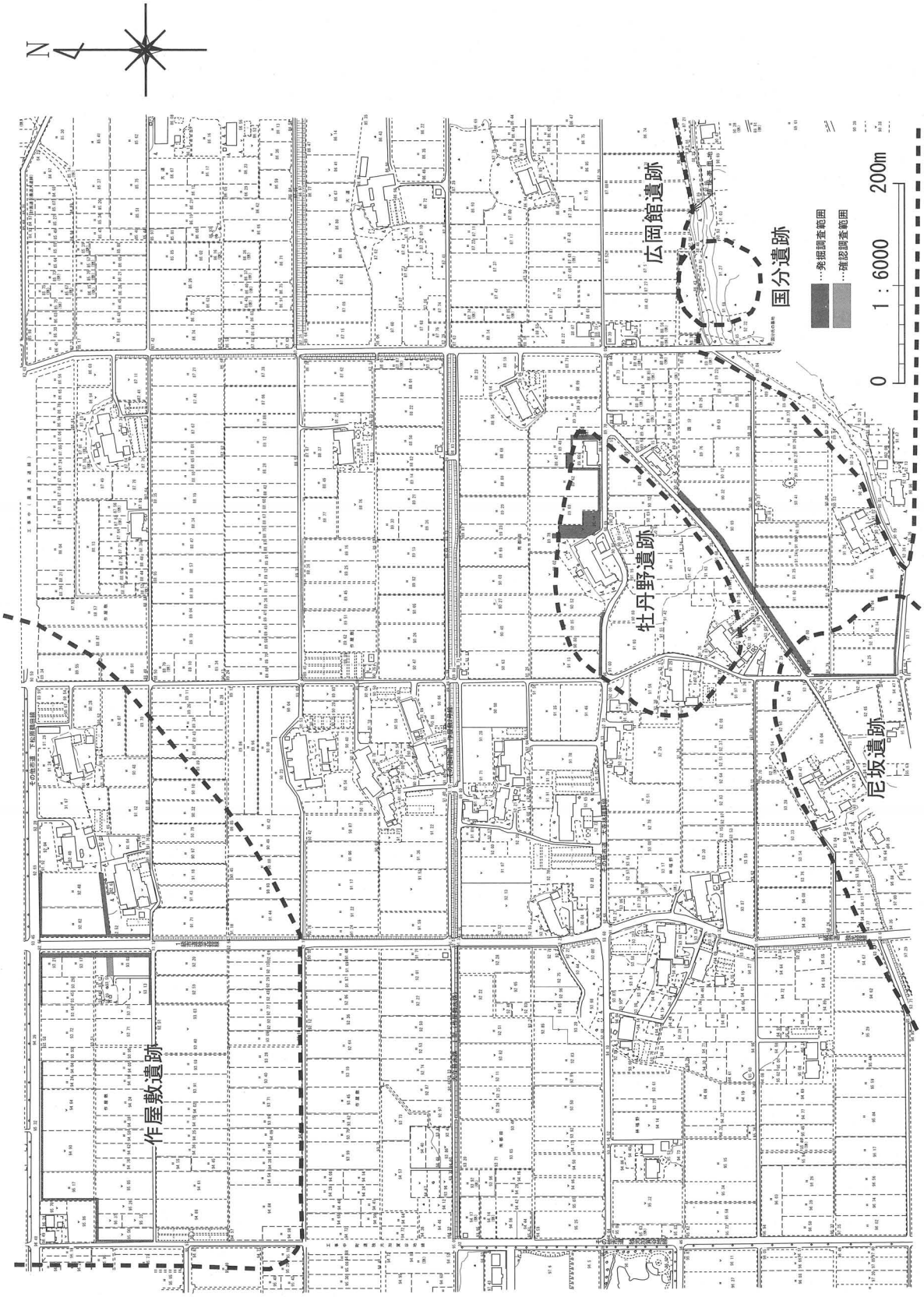
尼坂遺跡、牡丹野遺跡、作屋敷遺跡は岩手県奥州市胆沢区南都田に所在する。奥州市は、岩手県の南部に位置し、北に胆沢郡金ヶ崎町、北上市、花巻市、東に一関市、遠野市、気仙郡住田町、南に西磐井郡平泉町及び一関市、西は秋田県雄勝群東成瀬村に接する。平成18年２月20日に水沢市、江刺市、胆沢町、前沢町、衣川村による５市町村の合併によりできた市である。東西約57㎞、南北約37㎞、総面積993.35k㎡、人口約13万人を有する。

尼坂遺跡・牡丹野遺跡・作屋敷遺跡の位置は、ＪＲ東北本線水沢駅から西方６～７㎞、胆沢総合支所（旧胆沢町役場）から北東約２㎞にある。これら３つの遺跡は、胆沢川と衣川・北股川に挟まれた胆沢扇状地に立地する。国土地理院発行の２万５千分の１地形図「供養塚」ＮＪ-54-14-14-３の図幅に含まれ、尼坂遺跡は北緯39度７分34秒、東経141度４分38秒付近に、牡丹野遺跡は北緯39度７分45秒、東経141度４分47秒付近に、作屋敷遺跡は北緯39度７分53秒、東経141度４分24秒付近に位置する。

本調査は、経営体育成基盤事業に伴いパイプライン用地、支線道路、排水路、田区などを対象とし行われた。調査地の標高は、尼坂遺跡では92～94ｍ、牡丹野遺跡では89～92ｍ、作屋敷遺跡では92～96ｍである。調査前の現況は、水田を中心に、農道、水路、畑地であった。

40°
40°
奥州市
香取
寺下
窪
井羅北堰
井羅中
古城
餞倉
境田
倉舘
道下
谷地中
清水下
上代
本木
下田中
新中
広表
塚田
小道水路
三反町
田中前
寺村
南都田
四ツ柱
独光
作屋敷
作屋敷
稲荷
供養塚
下松原
駒木
大道
本松
箸塚
牡丹野
広岡
国分
要害
林福野
尼坂
井羅南堰
茂
胆沢町
荻之窪
滑志田

第１図　遺跡位置図



第２図　周辺地形と尼坂・牡丹野・作屋敷遺跡調査範囲

（2）遺跡周辺の地形と地質

東北地方を縦断する奥羽山脈は、中新生以降のグリーンタフ変動によって形成され、新第三系中新統及び火山岩類を主体としている。形成期が比較的新しく、河川は急流が多いため、この山脈に源を持つ北上川の西側支流には多量の土砂が供給された。したがって、北上川中流域右岸（西岸）においては、胆沢扇状地をはじめとする大小の堆積地形が発達し、広く平野部を形成している。

胆沢扇状地は、北は胆沢川、南は北股川や衣川に挟まれ、胆沢川上流市野々（いちのの）付近を頂点とする。その面積約20,000haにもおよぶ。胆沢扇状地は、南から北に向かって新期の河岸段丘が配列する、傾斜扇状地であることが大きな特徴でもある。胆沢扇状地の段丘（河岸段丘）は、南側から高位段丘、中位段丘、低位段丘、河岸低地に大別される。堆積土には、奥羽山脈にある焼石岳や栗駒山付近から供給された火山灰層が厚く堆積し、段丘を成している。当地域の段丘区分は、中川久夫ほかの先行研究があり（中川ほか：1963）、火山灰層序を明らかにし、段丘区分に際してその層序が適用された。その後、火山灰研究の成果が補填され、段丘存在を示す火山灰層の分布が明らかになりつつある（大上・吉田：1984）。以下には大上・吉田に従い各段丘について記述する。補足として、各段丘の形成年代については、『地名・屋号が物語る胆沢の歴史と自然』（胆沢町教育員会：2005）の中で佐々木いく子氏・小岩直人氏による記載内容を引用して示す。

高位段丘は、大歩（おあご）段丘、一首坂（いっしゅざか）段丘、西根段丘に区分されている。大歩段丘は、胆沢川左岸の金ヶ崎町永栄（ながさかえ）付近に分布する。標高240～200mで段丘面は開析が進み小丘陵をなしている。一首坂段丘（60～30万年前）は、扇状地南端に発達し、南東方向に標高を減じ、ゆるやかに傾斜している。標高220～150mである。西根段丘（60～30万年前）は、胆沢扇状地の南端扇頂部（標高290～220m）や、低位段丘の中に残丘（標高140～110m）として分布するとともに、胆沢川左岸の一部にも丘陵性台地（標高190～180m）として分布している。

中位段丘である胆沢段丘は、高位から上野原段丘（標高250～80m、30～13万年前）、横道段丘（標高240～70m、30～13万年前）、堀切段丘（標高240～70m、11.5万年前）、福原段丘（標高130～60m、８～９万年前）の４つに細分され、南から北に向かって配列し、いずれもほぼ北東方向に標高を減じている。これら胆沢段丘の中では、堀切段丘が特に発達し、最も広く分布している。なお、福原段丘については、黒沢尻火山灰以上の火山灰がのり、火山灰層序からみて北上地区（和賀川流域などに顕著）などに分布する村崎野段丘に対比される可能性がある（大上・吉田：1984）。

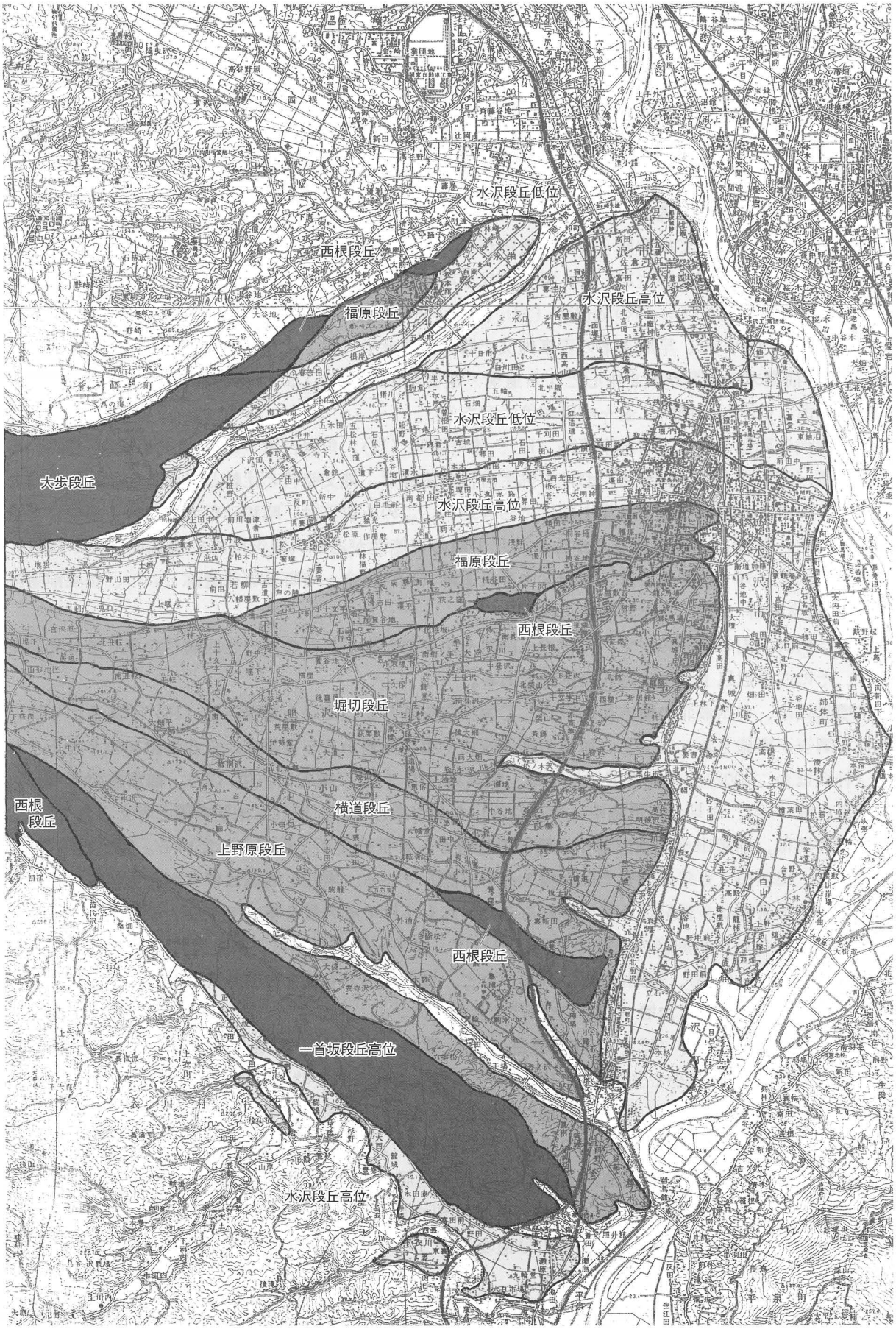
低位段丘である水沢段丘は、胆沢扇状地北端や東端、胆沢川岸と北上川に沿って分布する。この水沢段丘は、水沢段丘高位面（標高290～40m、２万年前）と水沢段丘低位面（標高120～38m、３千年前）の２つに区分される。水沢段丘高位面は、胆沢川、北股川、北上川の各河川に沿うように分布するが、特に扇状地の扇端部に広く分布している。これは北上川の氾濫により扇端部が序々に削り取られたためである。水沢段丘低位面は、胆沢川の中流～下流の両岸を中心に分布する。

河岸低地は、胆沢川の下流の両岸、北上川の両岸を中心に分布する。

2　周辺の遺跡

（1）遺跡周辺の遺跡

岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の平成18年３月31日現在のまとめによると、奥州市には1,069箇所の遺跡が登録されている。その内、胆沢区（旧胆沢町）には185箇所の遺跡が登録されている。第４図及び第１・２表には今回調査した３遺跡の所在する胆沢区南都田を中心に、南北約12km


水沢段丘低位
西根段丘
福原段丘
水沢段丘高位
水沢段丘低位
大歩段丘
水沢段丘高位
福原段丘
西根段丘
堀切段丘
西根段丘
横道段丘
上野原段丘
西根段丘
一首坂段丘高位
水沢段丘高位

第３図　地形分類図

東西約８kmに所在する遺跡を示した。ここでは、図幅中に所在する各時代の遺跡を中心に記述する。なお、胆沢区の遺跡には１～71、水沢区の遺跡には101～213、前沢区の遺跡には301～313、金ヶ崎町の遺跡には401～455の番号を付した。

＜旧石器時代＞胆沢区内にある旧石器時代の遺跡は、全て若柳地区にあり図幅外西側に所在する。これらの遺跡は後述することとする。なお、図幅中には平成４～６年に調査された金ヶ崎町柏山館（かしわやまだて）跡（448）がある。

＜縄文時代＞胆沢区には縄文時代の遺跡が85箇所登録されているが、今回作成した図幅中にも38箇所が所在する。傾向としては前期・中期の遺跡が多い。ここでは図幅内で過去に発掘調査が実施された遺跡を記述する。漆町遺跡（12）は、縄文時代早期の蛇王洞Ⅱ式とされるものをはじめ早期の貝殻文系の土器が出土している。芦（よし）の随（ずい）遺跡（27）は、前期の集落跡と中期の遺物などが確認されている。小十文字遺跡（29）は、早期末葉の表裏縄文土器や前期前半大木２式などが出土している。浅野遺跡（39）は、前期末～中期初頭を中心とする遺構・遺物が出土している。胆沢区以外に図幅中には、水沢区28箇所、前沢区６箇所、金ヶ崎町20箇所がある。

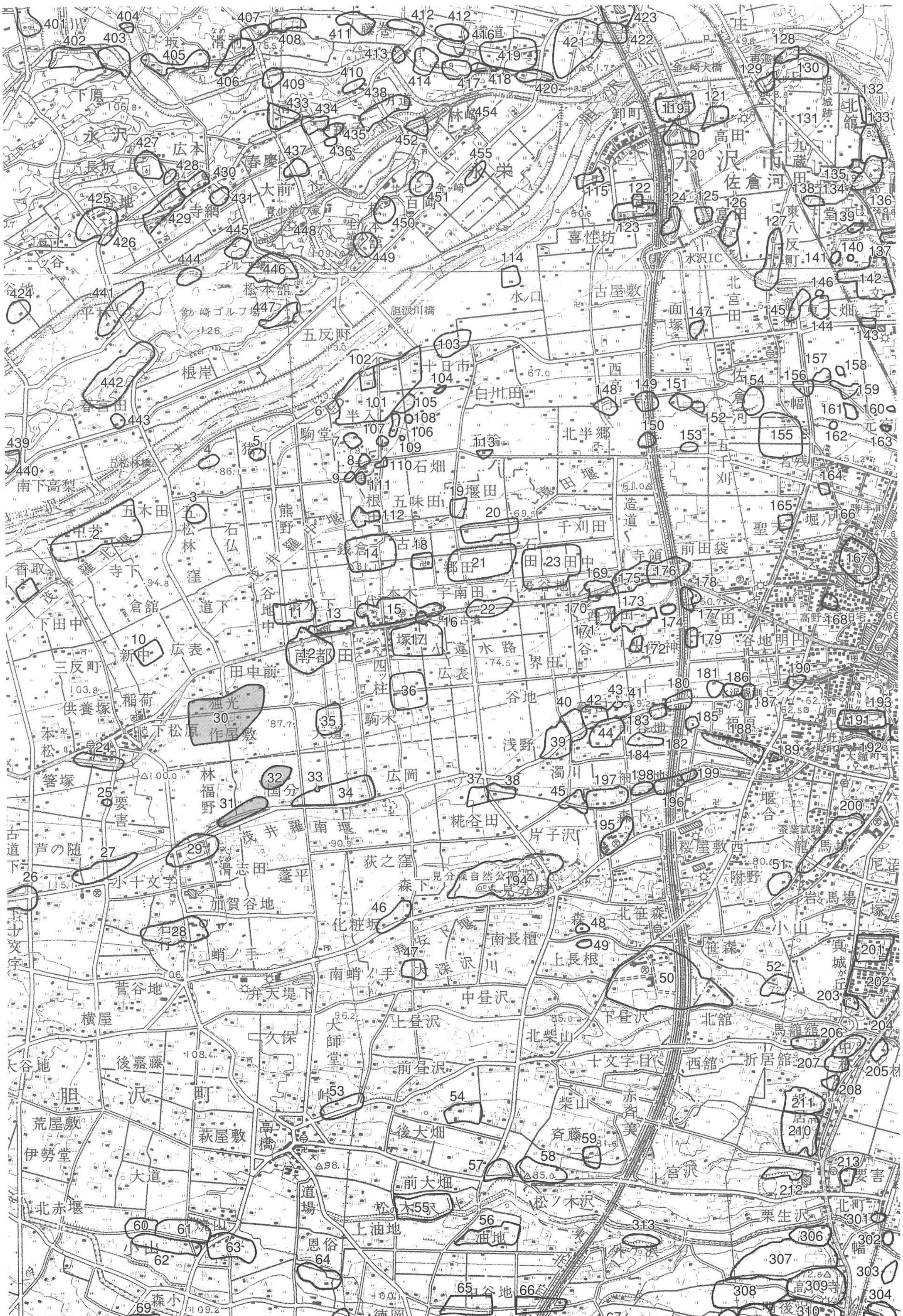
＜弥生時代＞図幅中には、清水下遺跡（11）、漆町遺跡（12）、角塚古墳（16）、牡丹野遺跡（32）、小田切遺跡（68）がある。胆沢区における弥生時代の遺跡は、縄文時代と比較して少ない。特記事項としては、清水下遺跡の石包丁発見を挙げておきたい。この石包丁は、昭和52年水路改修工事中に２点発見された。時期は不確定にあるが弥生時代中期の可能性がある（胆沢町町史編纂委員会：1981）。次に、胆沢区以外で図幅内には、水沢区中半入（なかはんにゅう）遺跡（101）、金ヶ崎町長坂後遺跡（427）、長坂前遺跡（428）、清水遺跡（433）などが挙げられる。

＜古代＞胆沢区内の遺跡の中で、古代の土師器や須恵器が出土したのは、今回調べた限りでは65箇所あり、その内半数以上が平安時代の遺跡である。

古墳時代は、本州最北の前方後円墳として国指定史跡となっている角塚（つのづか）古墳（16）がある。４次にわたる調査が実施され、出土した埴輪の制作技法や墳丘形態から５世紀末から６世紀初めと考えられる（朴沢ほか：2002）。角塚古墳以外では、蝦夷塚古墳（６）、糀谷田古墳（37）、鶴田古墳群（43）、見分森古墳（194、※見分森遺跡中に含まれる）などが挙げられ、何れも末期古墳と考えられている。蝦夷塚古墳は、周溝出土の須恵器や土師器の特徴から８世紀後半と推定されている。鶴田古墳群は、平成14年・15年の２カ年の調査では古墳３基を確認している。墳丘と周溝は伴うが、主体部が未検出にある。出土遺物は９世紀代と推定されるが、何れも小片でその量も極めて少ないことから、造営時期は明確ではない。胆沢区の東隣の水沢区内には、中半入遺跡（101）、膳生（ぜんしょう）遺跡（120）、面塚（おもてづか）遺跡（147）、高山遺跡（148）、西大畑遺跡（149）など、岩手県内でも稀な古墳時代の遺跡が集中してみられる。金ヶ崎町は二ノ宮古墳（421）を挙げておきたい。

奈良時代は、漆町遺跡（12）、二本木遺跡（13）、要害遺跡（15）、机地（つくえじ）遺跡（20）、塚田遺跡（17）、石田Ⅰ・Ⅱ遺跡（23）、小十文字遺跡（29）など、縄文時代や平安時代との複合遺跡が多くみられる。塚田遺跡は、奈良時代を中心とする遺物が出土している。二本木遺跡は漆町遺跡の東側、清水下遺跡の南東側に隣接し、奈良～平安時代の遺構・遺物が出土している。要害遺跡は、奈良時代後期から平安時代後期（８世紀後半～11世紀）にかけての竪穴住居跡が検出され、「北海道系」とされる沈線文を持つ土器なども出土している。その他として図幅中には、水沢区は玉貫遺跡（119）、玉貫前遺跡（121）、権現堂遺跡（134）を、金ヶ崎町は道場遺跡（411）、五郎屋敷古墳（415）、西根遺跡（423）、飛鳥田遺跡（453）、を挙げておきたい。

平安時代は、上記のとおり前時期と比較して遺跡数の増加が著しい。尼坂遺跡（31）、牡丹野遺跡


水沢市
胆沢町
水沢IC
胆沢川橋
金ヶ崎ゴルフ場
五反町
根岸
十日市
白川田
北半郷
石畑
堰田
五味田
千刈田
前田袋
南都田
独光
作屋敷
下松原
林
福野
国分
広岡
茂井羅南堰
滑志田
加賀谷地
化粧坂
南蛸ノ手
中昼沢
上昼沢
北柴山
十文字目
後大畑
前大畑
上油地
恩俗
徳岡
北赤堰
小山
荒屋敷
伊勢堂
萩屋敷
高橋
道場
桜屋敷西
蚕業試験場
龍馬場
岩馬場
真城
北館
馬籠館
折居館
宮沢
粟生沢
北町
松ノ木沢
見分森自然公園
佐倉河
高田
東八反町
北宮田
古屋敷
喜性坊
卸町
永栄
春慶
大前
寺網
長坂
永沢
下原
平林
松本館
香取
中芝
寺下
倉館
下田中
三反町
供養塚
稲荷
一本松
箸塚
要害
芦の随
小十文字
古道下
大谷地
横屋
後嘉藤
大道
小田切
四屋
片子沢
浅野
谷地
広表
水路
界田
谷地明円
福原
聖天
堀ノ内
高野
大鐘
堰合
附野
塚
小山
笹森
北笹森
上長根
南長檀
森下
荻之窪
蓬平
十文字

第４図　周辺の遺跡分布

第１表　周辺の遺跡一覧表①

No	遺　跡　名	種　別	時　代	遺　構　・　遺　物	所　在　地	備　　考
1	香取根館	城館跡	中世	土塁、堀	胆沢区若柳字新里	
2	中井	散布地	平安	須恵器	胆沢区南都田字中井	
3	寺屋敷	散布地	平安	土師器	胆沢区南都田字五松林	
4	河原田	散布地	平安	土師器	胆沢区南都田字猪川	
5	新屋敷	散布地	平安	土師器	胆沢区南都田字猪川	
6	蝦夷塚古墳	古墳	奈良	土師器、須恵器、マウンド	胆沢区南都田字駒堂	岩埋文第380集(2002年)
7	小姓堂	散布地	平安	土師器	胆沢区南都田字駒堂	
8	外記Ⅱ	散布地	縄文、平安	縄文土器、土師器	胆沢区南都田字外記	
9	外記Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区南都田字外記	
10	新里館（若柳方八丁）	城館跡	平安	土師器、須恵器、堀	胆沢区若柳字島塚	
11	清水下	散布地	弥生・平安	弥生土器、縄文早期土器片、石包丁、土師器	胆沢区南都田字清水下	
12	漆町	散布地	縄文・弥生・奈良・平安	土師器、須恵器、縄文早期土器片	胆沢区南都田字漆町	
13	二本木	散布地	奈良・平安	土師器、須恵器、墨書土器、暗文土器	胆沢区南都田字清水下	胆沢町教委第13集(1984)、※胆沢町教委1997年調査
14	銭倉	散布地	奈良・平安	土師器	胆沢区南都田字銭倉	
15	要害（止々井館）	散布地・城館跡	奈良・平安・近世	土師器、須恵器、土塁	胆沢区南都田字本木	胆沢町教委第26集(1995年)
16	角塚古墳	古墳	古墳時代	埴輪	胆沢区南都田字塚田	胆沢町教委第28集(2002年)
17	塚田	散布地	奈良・平安	土師器、須恵器、※奈良時代の土器	胆沢区南都田字塚田	胆沢町教委第14集(1985年)
18	机地館（盛興館）	城館跡	中世	水堀	胆沢区南都田字古城	
19	堰田	散布地	平安	土師器	胆沢区南都田字堰田	
20	机地	散布地	奈良・平安	土師器	胆沢区南都田字机地	
21	沢田	散布地	奈良・平安	土師器	胆沢区南都田字沢田	胆沢町教委第18集(1988年)
22	宇南田	集落跡	平安	土師器	胆沢区南都田字宇南田	
23	石田Ⅰ・Ⅱ	散布地	平安	土師器、須恵器	胆沢区南都田字石田	
24	箸塚	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器	胆沢区若柳字箸塚	
25	若柳要害館	城館跡	中近世	土師器	胆沢区南都田字害館	
26	十文字	散布地	縄文・古代	縄文土器（早期）、土師器、石匙、石鏃	胆沢区小山字上十文字	
27	芦の随	散布地	縄文・平安	縄文土器（前・中）、石器、土師器	胆沢区若柳字芦の森	胆沢町教委第21集(1991年)
28	石行	散布地	縄文・古代・近世	土師器、須恵器	胆沢区南都田字石行	胆沢町教委第27集(1996年)
29	小十文字	集落跡	縄文・古代	縄文土器（前期）、土師器(平安)	胆沢区南都田字小十文字	
30	作屋敷	祭祀跡・集落跡	古代	土師合甕、土師器、須恵器	胆沢区南都田字作屋敷	※胆沢町教委1994年調査
31	尼坂	散布地・集落跡	縄文・古代	縄文土器（早・前期）、石器、装飾具、土師器	胆沢区南都田字尼坂	胆沢町教委第22・23・24・25集(1992～1994年)
32	牡丹野	散布地	古代・縄文	縄文土器、土師器、須恵器	胆沢区南都田字牡丹野	岩手文調告第126集(2008年)
33	広岡館（飯坂館）	城館跡	中世	二重堀、土塁	胆沢区南都田字国分	
34	国分	散布地	古代・近世	縄文土器、土師器、須恵器、石鏃、石斧	胆沢区南都田字国分	胆沢町教委第21集(1991年)
35	川端	散布地	平安	土師器	胆沢区南都田字大道	※胆沢町教委1995年調査
36	堤	散布地	平安	土師器	胆沢区南都田字四ツ柱	
37	糀谷田	散布地	縄文・古代	縄文土器（前期）、土師器	胆沢区南都田字糀谷田	
38	片子沢	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器、須恵器、フレーク	胆沢区南都田字片子沢	
39	浅野	散布地	縄文・古代	縄文土器（前・中期）、土師器、須恵器、土偶、弥生土器	胆沢区南都田字浅野	胆沢町教委第17集(1988年)
40	浅野前	集落跡	縄文・古代	縄文土器（前・中期）、須恵器、土師器	胆沢区南都田字浅野	
41	鶴田Ⅰ	散布地	平安	土師器	胆沢区南都田字鶴田	
42	鶴田Ⅱ	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器、須恵器、フレーク	胆沢区南都田字鶴田	
43	鶴田古墳群	古墳群	古代		胆沢区南都田字鶴田	胆沢町教委第29集(2002年)
44	濁川	集落跡	縄文・平安	縄文土器（前・晩期）、土師器、須恵器	胆沢区南都田字濁川	
45	合野	散布地	縄文・古代	縄文土器（前・晩期）、石鏃	胆沢区南都田字合野	
46	森下	散布地	縄文・古代	土師器、竪穴住居跡	胆沢区南都田字森下	※胆沢町教委調査
47	南蛸の手	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区小山字南蛸の手	
48	森Ⅰ	散布地	平安	土師器	胆沢区小山字森	
49	森Ⅱ	散布地	平安	土師器	胆沢区小山字上長根	
50	中島	散布地	縄文・古代	縄文土器（前・中期）、石器、装飾具、土師器	胆沢区小山字大深沢	
51	附野森	散布地	縄文・中世	縄文土器、陶磁器	胆沢区小山字附野森	
52	南笹森	散布地	縄文	縄文土器（前期）、石鏃、石匙	胆沢区小山字南笹森、昼沢	
53	峠	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区小山字北峠	
54	小山方八丁館	城館跡	中世・近世	空濠、三郭	胆沢区小山字方八丁	
55	大畑	散布地	縄文	縄文土器（前・中期）、石器	胆沢区小山字前大畑	
56	油地	散布地	縄文・古代	縄文土器（中期）、石斧、土師器	胆沢区小山字西油地	
57	後大畑	散布地	縄文	縄文土器（中期）、石器	胆沢区小山字後大畑	
58	船戸	散布地	縄文	縄文土器（中期）、石斧、石鏃、石匙	胆沢区小山字斉藤	
59	壇山	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器、須恵器	胆沢区小山字斉藤	
60	念仏塚	散布地	縄文	縄文土器（中期）	胆沢区小山字北赤堰	
61	恩俗長根	散布地	縄文	縄文土器（中期）、石鏃	胆沢区小山字恩俗長根	
62	明山	散布地	縄文	縄文土器、石器	胆沢区小山字明山	
63	上恩俗	散布地	縄文	縄文土器（前・中期）	胆沢区小山字上恩俗	
64	長根	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区小山字長根	
65	中谷地	散布地	平安	土師器	胆沢区小山字上中谷地	
66	四ツ屋	散布地	平安	土師器	胆沢区小山字下中谷地	
67	高日向北		縄文？	土坑３基、陥し穴状遺構１基	胆沢区小山字前四ツ屋	
68	小田切	散布地	縄文	縄文土器（前期）、弥生土器、石斧、陥し穴状遺構	胆沢区小山字小田切	
69	上狼ヶ志田	散布地	縄文	フレーク	胆沢区小山上狼ヶ志田	
70	狐森	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器	胆沢区小山字狐森	
71	渋民沢	散布地	縄文	縄文土器（中期）	胆沢区若柳字渋民	
101	中半入	集落跡・古墳	平安	土師器、須恵器、弥生土器	水沢区佐倉河字中半入	岩埋文第380集(2002年)
102	半入豪族屋敷	環濠屋敷	中・近世	濠	水沢区佐倉河字中半入	
103	兵法田	散布地	縄文・平安	土師器、須恵器、石組炉	水沢区佐倉河字西田中	
104	中ノ目	散布地	平安	土師器	水沢区佐倉河字中ノ目	
105	太田Ⅰ	集落跡	平安	土師器、須恵器	水沢区佐倉河字太田	
106	太田Ⅱ	散布地	平安	土師器、須恵器	水沢区佐倉河字太田	
107	太田Ⅲ	散布地	平安	土師器、	水沢区佐倉河字太田	
108	玉ノ木Ⅰ	散布地	平安	土師器	水沢区佐倉河字玉ノ木	
109	玉の木Ⅱ	散布地	平安	土師器、須恵器	水沢区佐倉河字玉ノ木	
110	石畑	散布地	平安	土師器	水沢区佐倉河字石畑	
111	曽根田（常楽寺舘）	散布地・城館跡	平安	土師器	水沢区佐倉河字曾根田	
112	銭倉	散布地	平安	土師器	水沢区佐倉河字五味田	
113	高谷宿	散布地	平安	土師器	水沢区字高谷宿	
114	崩田	散布地	奈良・平安	土師器、須恵器	水沢区佐倉河字崩田	
115	喜正坊	集落跡	奈良・平安	土師器	水沢区佐倉河字喜正坊	
116	今泉	集落跡	古墳～平安	竪穴住居群、土師器、須恵器	水沢区佐倉河字今泉	

第２表　周辺の遺跡一覧表②

No	遺　跡　名	種　別	時　代	遺　構　・　遺　物	所　在　地	備　　考
117	今泉Ⅱ	集落跡	奈良・平安	土師器、須恵器	水沢区佐倉河字今泉	
118	今泉Ⅲ	集落跡	奈良・平安	土師器、須恵器	水沢区佐倉河字今泉	
119	玉貫	散布地	奈良	土師器、須恵器	水沢区佐倉河字玉貫	
120	膳性	集落跡	古墳～平安	土師器、須恵器、フレーク	水沢区佐倉河字膳性	
121	玉貫前	集落跡	奈良	土師器、須恵器	水沢区佐倉河字玉貫	
122	佐野舘（タテッバタケ）	城館跡	中世	平場	水沢区佐倉河字宿	
123	宿	集落跡	奈良・平安・近世	土師器、須恵器	水沢区佐倉河字宿	
124	富田（Ａ）	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器、須恵器	水沢区佐倉河字富田	
125	富田（Ｂ）	散布地	縄文	縄文土器、スクレーパー	水沢区佐倉河字富田	
126	獅子鼻	散布地	平安	土師器、須恵器	水沢区佐倉河字獅子鼻	
127	大曽根	散布地	縄文・奈良・平安	縄文土器（早～前期）、土師器、スクレーパー、フレーク	水沢区佐倉河字大曽根	岩埋文第44集(1982年)
128	上舘（古舘・速瀬舘）	城館跡	中世	平場、堀	水沢区佐倉河字北田中	
129	八ツ口	集落跡	平安	土師器、須恵器	水沢区佐倉河字八ツ口	
130	北田中	集落跡	平安	土師器、須恵器、須恵器系土器	水沢区佐倉河字北田中	
131	胆沢城（方八丁）	城柵跡	平安	土師器、須恵器、郭	水沢区佐倉河字渋田他	
132	北舘（川端舘・長斎舘）	散布地・城館跡	奈良・平安・近世	土師器、須恵器	水沢区佐倉河字北舘	
133	祇園	集落跡	平安	土師器、須恵器	水沢区佐倉河字祇園	
134	権現堂	集落跡	奈良	土師器	水沢区佐倉河字権現堂	
135	三ヶ町	散布地	平安	土師器、須恵器	水沢区佐倉河字三ヶ町	
136	八幡巾	集落跡	縄文	縄文土器（後期）、石匙、石鉄、小形、石斧	水沢区佐倉河字北幅	
137	藤古	集落跡	縄文・平安	須恵器	水沢区佐倉河字藤古	
138	外和田	散布地	平安	土師器	水沢区佐倉河字外和田	
139	伯済寺	集落跡・官衙跡	平安	土師器、須恵器	水沢区佐倉河字薬師堂	
140	杉本Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器（晩期）、土師器	水沢区佐倉河字杉本	
141	杉本Ⅱ	集落跡	平安	土師器、須恵器	水沢区佐倉河字杉本	
142	竈堂	散布地・祠社	平安	土師器	水沢区佐倉河字竈堂	岩埋文第44集(1982年)
143	竈堂Ⅱ	集落跡	中世		水沢区佐倉河字中田	
144	東大畑	集落跡	縄文・奈良・平安	土師器、須恵器、フレーク	水沢区佐倉河字東大畑	岩埋文第44集(1982年)
145	東大畑Ⅰ	集落跡	縄文・平安	土師器、須恵器、石鏃	水沢区佐倉河字東大畑	
146	東大畑Ⅱ	散布地	平安	須恵器	水沢区佐倉河字東大畑	
147	面塚	集落跡	古墳・奈良	土師器、須恵器	水沢区佐倉河字面塚	
148	高山	集落跡	古墳	竪穴住居跡、土師器	水沢区佐倉河字西高山	
149	西大畑	散布地	古墳・平安	竪穴住居跡、土師器、須恵器	水沢区佐倉河字西大畑	
150	五千刈	散布地	縄文	縄文土器	水沢区字小中	
151	西舘	散布地	平安	土師器	水沢区佐倉河字西舘	
152	築舘（塩釜古舘）・松本舘	城館跡	中世	平場	水沢区字築舘	
153	稲荷田	散布地	平安	土師器	水沢区字平沢	
154	幅下	散布地	縄文	縄文土器（中期）	水沢区字幅下	
155	里鎗	集落跡	縄文	縄文土器（晩期）、石器、土偶	水沢区字里鎗反町他	
156	東幅	散布地	縄文	縄文土器	水沢区佐倉河字東幅	
157	腰廻	散布地	平安	土師器、須恵器	水沢区佐倉河字腰廻	
158	道本	散布地	平安	土師器、須恵器	水沢区佐倉河字道本	
159	久田	散布地	平安	土師器、須恵器	水沢区佐倉河字久田	
160	元宿	散布地	平安	土師器、須恵器	水沢区佐倉河字元宿	
161	南久田	散布地	平安	土師器、須恵器	水沢区佐倉河字久田	
162	中城	散布地	縄文	縄文土器	水沢区字中城	
163	釜石	散布地	縄文	縄文土器	水沢区佐倉河字釜石	
164	北栗林	散布地	縄文	縄文土器	水沢区北栗林	
165	小石田	散布地	縄文後期・晩期・弥生	縄文土器・弥生土器・土師器	水沢区字聖天	
166	水沢女子高敷地	散布地	平安	土師器、須恵器	水沢区字搦手丁	
167	水沢城（要害）	城館跡	中世・近世		水沢区大手町一丁目他	
168	新小路	散布地	縄文	縄文土器（後・晩期）、石器	水沢区字新小路	
169	西光田Ⅰ	散布地	平安	土師器、須恵器	水沢区字西光田	
170	西光田Ⅱ	集落跡	平安	土師器、須恵器	水沢区字西光田	
171	西光田Ⅲ	散布地	平安	土師器	水沢区字西光田	
172	大明神	集落跡	平安	土師器、須恵器	水沢区字大明神	
173	足袋針Ⅰ	集落跡	縄文・平安	縄文土器、土師器、須恵器	水沢区字足袋針・大明神	
174	足袋針Ⅱ	集落跡	平安	土師器、須恵器	水沢区字大明神	
175	寺領	散布地	奈良・平安	土師器、須恵器	水沢区字寺領	
176	石田	集落跡	奈良・平安	土師器、須恵器	水沢区字西寺領	
177	後田	集落跡	奈良・平安	土師器、須恵器	水沢区字後田	
178	要害舘	城館跡	中世	平場	水沢区字後田	
179	一本杉	散布地	平安	土器	水沢区字釜田	
180	南矢中	集落跡	平安	土師器、須恵器	水沢区字南矢中	
181	南矢中Ⅱ	集落跡	平安	土師器、須恵器	水沢区字南矢中	
182	西田Ⅰ	集落跡	平安	縄文土器、土師器、須恵器	水沢区字西田	
183	西田Ⅱ	集落跡	平安	土師器、須恵器	水沢区字西田	
184	前谷地	集落跡	平安	土師器、須恵器	水沢区字前谷地	
185	寿安舘（福原舘）	城館跡	中世	平場	水沢区字福原	
186	北田	集落跡	縄文・平安	縄文土器、土師器、須恵器	水沢区字北田	
187	高屋敷	集落跡	平安	土師器、須恵器	水沢区字高屋敷・字北田	
188	福原	集落跡	平安	土師器、須恵器	水沢区字福原	
189	大橋	散布地	平安	土師器	水沢区字大橋	
190	駈上	散布地	縄文	縄文土器（早期）	水沢区星ヶ岡町字天文台通り	
191	駒形神社公園	散布地	縄文	縄文土器（中期）、石器	水沢区中上野町	
192	東上野	散布地	縄文	縄文土器（中期）	水沢区東上野町	
193	小山崎	散布地	縄文・平安	縄文土器（中期）、土師器、須恵器	水沢区山崎町	
194	見分森	生産跡	平安	土師器、須恵器	水沢区字見分森	
195	森下Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器（前期）	水沢区字森下	
196	袖谷地Ⅰ	集落跡	平安	土師器、須恵器	水沢区字袖谷地	
197	袖谷地Ⅱ	散布地	平安	土師器、須恵器	水沢区字袖谷地	
198	袖谷地Ⅲ	集落跡	平安	土師器、須恵器	水沢区字袖谷地	
199	袖谷地Ⅳ	集落跡	縄文・平安	土師器、須恵器、フレーク	水沢区字袖谷地	
200	龍ケ馬場	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器、須恵器	水沢区字龍ケ馬場	
201	雷神Ⅰ	集落跡	平安	土師器、須恵器	水沢区真城字雷神他	
202	真城ガ丘団地	集落跡	平安	土師器、須恵器、砥石、炭火米、栗、クルミの実	水沢区真城字真城ヶ丘	
203	浜田	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器、須恵器	水沢区真城字浜田	

第３表　周辺の遺跡一覧表③

No	遺　跡　名	種　別	時　代	遺　構　・　遺　物	所　在　地	備　考
204	上林下	散布地	古代	土師器	水沢区真城字上林下	
205	中林下	集落跡	平安	土師器、須恵器	水沢区真城字中林下	
206	中林Ａ	集落跡	平安	土師器、須恵器	水沢区真城字中林	
207	中林Ｂ	集落跡	平安	土師器、須恵器	水沢区真城字中林	
208	中林Ⅲ	散布地	平安	土師器、須恵器	水沢区真城字中林	
209	馬籠舘	城館跡	中世	石の枕、仏壇用祭祀器	水沢区真城字馬篭舘	
210	堤ケ沢Ⅰ	集落跡	平安	土師器、須恵器	水沢区真城字堤ケ沢	
211	堤ケ沢Ⅱ	集落跡	平安	土師器、須恵器	水沢区真城字堤ケ沢	
212	折居舘	城館跡	中世		水沢区真城字中崎	
213	要害	城館跡	中・近世	濠、土塁、単郭	水沢区真城字要害	
301	北舘	環濠屋敷跡	中世	土師器	前沢区古城字北舘	
302	北舘東Ⅱ	散布地	縄文・古代		前沢区古城字北舘東	
303	砂子田	散布地	古代	土師器	前沢区古城字砂子田	
304	舘合下	散布地	平安	土師器、須恵器	前沢区古城字舘合下	
305	下町	散布地	縄文・平安	縄文土器、石器、土師器、須恵器	前沢区古城字下町他	
306	熊野	散布地	平安	瓦	前沢区古城字幅	
307	幅	散布地・瓦窯跡？	縄文・平安	縄文土器・土師器・焼土	前沢区古城字幅他	
308	前堀	散布地	縄文・古代		前沢区古城字前堀	
309	八郎舘	散布地・城館跡	平安・中世・縄文	土師器、須恵器、堀、郭	前沢区古城字高代寺	
310	宗角舘	城館跡	中世・平安	溝、柱穴、白磁、かわらけ	前沢区古城字姥沢	
311	明後沢	散布地・城館跡？	平安	布目瓦・屋根瓦・鬼瓦	前沢区古城字明後沢・姥沢	
312	鳥子沢	散布地・城館跡	平安・中世	堀跡・土師器	前沢区古城字鳥子沢	
313	古城外ヶ沢	散布地	古代・縄文前期	縄文土器（中期）、土師器、球状石器	前沢区古城字外ヶ沢	
401	川目	散布地	奈良・平安	土師器、須恵器	金ヶ崎町西根李田	
402	三居寺館	城館跡	中世	堀、土塁、平場、郭	金ヶ崎町西根雛子沢	
403	雛子沢	散布地	奈良・近世	土師器	金ヶ崎町西根雛子沢	
404	萱刈場	散布地	縄文	縄文土器（中、後、晩期）、石鏃、小玉	金ヶ崎町西根萱刈場	
405	坂水	散布地	縄文	縄文土器（中期）	金ヶ崎町西根和田・坂水	
406	滑利	散布地	縄文～中世	縄文土器（中期）、土師器、須恵器、石棒	金ヶ崎町西根滑利	
407	取揚石	集落跡	奈良・平安・縄文	縄文土器	金ヶ崎町西根取揚石	
408	藤巻	散布地	縄文	縄文土器	金ヶ崎町西根藤巻	
409	清水畑	散布地	縄文	縄文土器（晩期）、石鏃、磨製　石斧	金ヶ崎町永沢清水	
410	黒沢	散布地	奈良・平安	縄文土器（晩期）	金ヶ崎町永沢南黒沢	
411	道場	古墳（円）	奈良・縄文	縄文土器（前、中期）、土師器	金ヶ崎町西根道場	
412	畑田	散布地	奈良・平安	土師器、須恵器、直刀、刀子、　ガラス小玉	金ヶ崎町西根下畑田	
413	勾玉社下	散布地	奈良・平安	土師器、須恵器	金ヶ崎町西根前谷地	
414	前谷地	散布地	奈良・平安	土師器、須恵器	金ヶ崎町西根前谷地	
415	五郎屋敷古墳	古墳	奈良	須恵器、管玉、直刀、五鈴鏡、轡金口	金ヶ崎町西根荒屋敷	
416	荒屋敷	散布地	奈良・平安	土師器、須恵器	金ヶ崎町西根荒屋敷	
417	三反田古墳	古墳（円）	奈良		金ヶ崎町西根三反田	
418	五葉館跡	城館跡	平安・中世	土師器・堀・郭	金ヶ崎町西根揚場	
419	揚場		奈良・平安・中世	土師器・須恵器・掘立柱	金ヶ崎町西根揚場	
420	揚場古墳	古墳（円）	奈良・中世	勾玉、刀	金ヶ崎町西根揚場	
421	二ノ宮古墳	古墳	古墳・奈良・平安		金ヶ崎町西根二ノ宮後	
422	鳥海柵跡（弥三郎館）	城柵跡	平安・奈良	土師器、須恵器、郭、堀	金ヶ崎町西根原添下、鳥海	
423	西根	集落跡	奈良・平安	土師器	金ヶ崎町西根原添下	
424	頭坊館	城館跡	中世		金ヶ崎町永栄永沢頭坊下	
425	堀切後	散布地	奈良・平安	土師器	金ヶ崎町永沢堀切後	
426	堀切	散布地	縄文	縄文土器	金ヶ崎町永沢堀切	
427	長坂後	散布地	弥生～平安	弥生土器、土師器	金ヶ崎町永沢長坂後	
428	長坂前	散布地	縄文	縄文土器（晩期）	金ヶ崎町永沢長坂前	
429	横沢	散布地	縄文	縄文土器（中期）	金ヶ崎町永沢横沢	
430	関田	経塚	中世		金ヶ崎町永沢関田	
431	米ぼさつ供養塚	塚	近世	石碑	金ヶ崎町永沢橋本	
432	春慶	散布地	縄文	石器	金ヶ崎町永沢春慶	
433	清水	散布地	弥生	弥生土器	金ヶ崎町永沢清水	
434	関谷	散布地	縄文	縄文土器（晩期）	金ヶ崎町永沢関合	
435	関合	散布地	縄文	縄文土器	金ヶ崎町永沢関合	
436	宿田	散布地	縄文	縄文土器（晩期）	金ヶ崎町永沢宿田	
437	踊子	散布地	縄文	縄文土器（晩期）	金ヶ崎町永沢踊子	
438	明道	散布地・城館跡	奈良・平安・中世	土師器	金ヶ崎町永沢明道	
439	的岡	散布地	奈良・平安	土師器	金ヶ崎町永栄的岡	
440	ヌカ塚古墳	古墳（円）	奈良	土師器	金ヶ崎町永栄的岡沢	
441	平林後	散布地	縄文～平安	縄文土器（中期）、土師器、石棒、石鏃	金ヶ崎町永沢平林後	
442	細越城	城館跡	中世	堀、土塁、平場	金ヶ崎町永栄茶畑	
443	後養害	環濠屋敷	中世	土塁	金ヶ崎町永栄後養害	
444	笹森	散布地	縄文	縄文土器（晩期）	金ヶ崎町永沢笹森	
445	不動沢	散布地	縄文	縄文土器（前期）	金ヶ崎町永沢不動沢	
446	観音寺廃寺	寺院跡	中世	礎石、平場、塚	金ヶ崎町永沢大林	
447	八幡館	城館跡	平安・中世	堀、土塁、平場、郭	金ヶ崎町永栄九石	
448	柏山館跡	城館跡、集落	旧石器～中世	堀、平場、竪穴住居	金ヶ崎町永沢下館他	
449	下田谷	散布地	奈良・平安	土師器、須恵器	金ヶ崎町永栄下田谷	
450	斉林寺	散布地	奈良・平安・縄文	土師器、須恵器、石斧	金ヶ崎町永栄斉林寺	
451	百岡	集落跡	縄文～平安	土師器、石鏃、硯、石臼、明銭	金ヶ崎町永栄沖	
452	飛鳥田Ⅱ	散布地	奈良	土師器	金ヶ崎町永栄飛鳥田	
453	飛鳥田	古墳（円）	奈良	土師器	金ヶ崎町永栄飛鳥田	
454	林崎	散布地	奈良・平安	土師器、須恵器	金ヶ崎町永栄林崎	
455	寒入田	散布地	奈良・平安	土師器	金ヶ崎町永栄寒入田	

(32)、作屋敷遺跡（30）の周辺だけをみても、漆町遺跡（12)、沢田遺跡（21)、宇南田遺跡（22)、十文字遺跡（26)、小十文字遺跡（29)、川端遺跡（35)、堤遺跡（36）など、多数の遺跡が分布する。宇南田遺跡は、９世紀中頃を中心とする遺構・遺物が出土している。沢田遺跡は、平安時代を中心とする集落跡で竪穴住居跡６棟をはじめ該期の遺物が出土している。小十文字遺跡は、埋土に十和田ａ火山灰を含む野鍛冶遺構と報告されている竪穴住居跡などが検出されている。この野鍛冶遺構からは、灰釉陶器がしている。胆沢区以外の平安時代の遺跡は、図幅中にあるだけでも相当数に上る。主な遺跡として、水沢区では中半入遺跡（101)、今泉遺跡（116)、胆沢城跡（131)、伯済寺（139)、石田遺跡（176)、南矢中遺跡（180)、福原遺跡（188)、見分森遺跡（194）が、前沢区では明後沢遺跡（311)、金ヶ崎町では鳥海柵跡（422)、観音寺廃寺跡（446）などを挙げるに留める。

＜中世・近世＞胆沢区における中世・近世は、遺跡台帳からは14箇所読み取れるが、塚田遺跡調査報告書を参照すると25箇所とあり、多少の混乱が看取される。しかしながら、塚田遺跡の調査報告書刊行から約25年を経過していることを鑑みれば、城館跡に限らず、中世や近世の陶磁器など遺物が出土した遺跡数を加えると、大幅に増加していることは想像に難くない。事実、今回調査を実施した３遺跡においても、少ないながらも該期の陶磁器類が出土している。図幅中で主なものを挙げると、広岡館（33)、小山方八丁館（54)、若柳要害館（25)、香取根館（１）がある。胆沢区以外についても、図幅中には多くの城館跡がみられる。水沢区は竃堂Ⅱ遺跡（143)、佐野舘（122)、築舘・松本舘（152)、水沢城跡（167)、要害館（178）などが、前沢区は環濠屋敷跡である北舘（301）が、金ヶ崎町は、三居寺館（402)、五葉館跡（418)、頭防館跡（424)、細越城跡（442)、柏山館跡（448）などが、その他図幅外で松本館跡がある。

（２）胆沢区の調査歴のある遺跡

第３表には、胆沢区内における調査歴のある遺跡（※調査報告書が発刊されている事例）について、集成を試みた。遺漏も考えられるが、試掘確認調査を含めると52箇所（以上）に上る。時期別にみると、旧石器時代８箇所、縄文時代が38箇所以上、弥生時代10箇所、古代20箇所、中世・近世・近代５箇所で、縄文時代が圧倒的に多く、また旧石器時代や弥生時代はそのほとんどが縄文時代との複合遺跡である。以下には、調査歴のある遺跡から導かれる時代毎の傾向についてまとめてみる。

＜旧石器時代＞胆沢区内にある旧石器時代の遺跡は、全て若柳地区にあり第４図より西側に所在する。分布傾向として、胆沢扇状地中位段丘の上野原段丘や横道段丘を中心に立地し、上萩森遺跡、山の神遺跡、二の台長根遺跡が調査されている。なお、未調査には上佐布遺跡が登録されており、さらに近年の調査成果から岩洞堤遺跡、大平野Ⅱ遺跡、下嵐江Ⅰ遺跡、下嵐江Ⅱ遺跡の４箇所が追加される。

＜縄文時代＞縄文時代の調査遺跡を時期毎に概観すると、草創期は現時点で土器の出土は未確認にあるが下尿前Ⅳ遺跡（※この遺跡は現在下尿前Ⅱ遺跡に変更・追加されている）と宮沢原遺跡（※報告時は宮沢原Ｅ東遺跡）から有舌尖頭器が出土している。早期は、南都田地区の尼坂遺跡、漆町遺跡、小十文字遺跡、小山地区の休場遺跡、若柳地区の下尿前Ⅱ遺跡などに代表され、地形的には中位段丘を中心に分布する。竪穴住居跡などの検出例は少なく、現状で集落跡として認知できるのは休場遺跡と尼坂遺跡に留まろう。前期は、南都田地区の浅野遺跡・尼坂遺跡・芦の随遺跡、若柳地区の大清水上遺跡・下尿前Ⅱ遺跡などが集落遺跡として挙げられる。地形的には中位段丘を中心とする。中期の分布は、基本的には前期を踏襲しながらも、低位段丘や沖積地にも若干みられる。ただし、該期の土器を出土する事例や陥し穴を検出した事例は多いものの、竪穴住居跡など集落跡を窺わせる事例は少なく、宮沢原遺跡や下中沢Ⅱ遺跡に留まる。後期は、竪穴住居跡を検出した遺跡をみると、現時点で

第４表　胆沢区内調査歴のある遺跡

遺　跡　名	地区	時　　代	地　　形	標　高	特記事項（主な遺構）	文　　献
下尿前Ⅱ遺跡	若柳	縄文(後期前葉),弥生後期	緩斜面	281～290	竪穴住居跡３（後期前～中葉）	岩埋文252集
下尿前Ⅳ遺跡	若柳	縄文(早期・前期),弥生後期	緩斜面	292～294	物見台式、大木６式、有舌尖頭器２点	岩埋文269集
尿前Ⅱ遺跡	若柳	縄文（後期前葉）	崖錐性扇状地	330～350	竪穴住居跡早期末～前期初頭１・後期前葉８・後期中葉２・晩期中葉１、土坑41、集石遺構１	岩埋文288・343集
穴山堰遺跡	若柳	不明（調査地部分は近世末～昭和初期）	段丘・段丘崖	250前後	平堰跡主体部分・穴堰跡入口部分、余水吐５箇所・石積・水門	岩埋文311集
市野々遺跡	若柳	縄文前期～晩期・弥生・平安	水沢段丘高位面	240		岩埋文397集
大清水上遺跡	若柳	縄文前期後葉,弥生	上野原段丘北縁	270	竪穴住居跡74、土坑203、陥し穴99	岩埋文475集
大清水遺跡	若柳	縄文	上野原段丘北縁	270	土坑19、陥し穴７、大木６式、大木8b～10式、大洞C2～Ａ式	岩埋文373集
鹿合館跡	若柳	中世	一首坂段丘	257～271	陶磁器など	胆沢20集
南中沢遺跡	若柳	縄文	水沢段丘高位面			胆沢５集
萱刈窪遺跡	若柳	縄文	堀切段丘			胆沢４集
宮沢原下遺跡	若柳	縄文	堀切段丘	175～180	陥し穴270	岩埋文495・512集
宮沢原遺跡	若柳	縄文中期後～末葉	堀切段丘	175前後	竪穴住居跡６（全て複式炉）、大木９～10式、有舌尖頭器２点	胆沢：1976
赤剥遺跡	若柳	縄文	堀切段丘	175前後	後期初頭～晩期中葉	胆沢教委：1976
山の神遺跡	若柳	旧石器,縄文,弥生	堀切段丘	144～151	陥し穴21、前期初頭～前葉の土器	岩埋文512集
坪渕Ⅱ遺跡	若柳	縄文	河岸段丘	346～353	縄文中期～晩期	岩埋文546集
大平野Ⅱ遺跡	若柳	旧石器,縄文中期末葉～後期初頭	斜面地	358～371	竪穴住居跡８(縄文中期末葉～後期初頭)	岩埋文524集
下嵐江Ⅰ・Ⅱ遺跡	若柳	旧石器,縄文	河岸段丘	345	竪穴住居跡１（縄文後期）	岩埋文546集
上萩森遺跡	若柳	旧石器,弥生	上野原段丘	268		胆沢10・19集
漆町遺跡	南都田	縄文,弥生,平安	水沢段丘高位面	87	縄文早期、弥生末、奈良・平安	胆沢：1977
芦の随遺跡	南都田	縄文前期前葉,平安	福原段丘縁辺	109	縄文竪穴住居跡４、平安２	胆沢21集
国分	南都田	縄文,平安	福原段丘	91	縄文	胆沢21集
小十文字遺跡	南都田	縄文,奈良,平安	福原段丘	103	早期末、前期前葉(大木2b式)、中期、晩期、奈良、平安	胆沢11集
浅野遺跡	南都田	縄文前期後～末葉,弥生,奈良,平安	福原段丘	70～74	縄文前期竪穴住居跡２、大木４～７b式	胆沢17集
尼坂遺跡	南都田	縄文早期,前期,後期,晩期,平安	水沢段丘高位面~福原段丘	92～97	縄文早期竪穴住居跡８、平安竪穴住居跡７	胆沢12・22～24集
牡丹野遺跡	南都田	弥生後期,平安	水沢段丘高位面	89～92	竪穴住居跡２	岩手県教委126集
作屋敷遺跡	南都田	縄文,平安	水沢段丘高位面	92～96	竪穴住居跡(平安)	
角塚古墳	南都田	弥生,古墳	水沢段丘高位面	76		胆沢28集
蝦夷塚古墳	南都田	古墳	水沢段丘低位面	74～78		岩埋文380集
鶴田古墳群	南都田	古墳	福原段丘	71		胆沢29集
塚田遺跡	南都田	奈良	水沢段丘低位面	76		胆沢14集
二本木遺跡	南都田	奈良,平安	水沢段丘高位面	82		胆沢13集
要害遺跡	南都田	奈良,平安,近世	水沢段丘高位面	77		胆沢26集
沢田遺跡	南都田	奈良,平安	水沢段丘高位面	70		胆沢18集
宇南田遺跡	南都田	平安	水沢段丘高位面	75		胆沢16集
石行遺跡	南都田	縄文中・後期,平安,近世	福原段丘	104		胆沢27集
一の台遺跡	小山	縄文,古代	上野原段丘	190		岩手県教委120集
一の台Ⅲ遺跡	小山	縄文	上野原段丘	185		岩手県教委120集・岩埋文455集
一の台Ⅳ遺跡	小山	縄文	上野原段丘	190		岩手県教委120集・岩埋文455集
二の沢遺跡	小山	縄文	上野原段丘	125～130		岩手県教委120集
屋敷遺跡	小山	縄文	一首坂段丘	143～149	陥し穴５など	岩埋文397集・岩手県教委120集
岩洞堤遺跡	小山	旧石器,縄文	堀切段丘	143	石器集中区９、土坑37(陥し穴33・貯蔵穴２・墓壙２)	岩埋文531集
二の台長根遺跡	小山	旧石器	上野原段丘	125～130		岩埋文476集
上狼ヶ志田遺跡	小山	縄文	上野原段丘	110		岩埋文397集
上中沢Ⅰ遺跡	小山	近代	一首坂段丘	180		岩埋文397集
上中沢Ⅲ遺跡	小山	縄文	一首坂段丘	170		岩埋文397集
二の台遺跡	小山	縄文,奈良	一首坂段丘	165		岩埋文397集
一の台Ⅱ遺跡	小山	縄文	上野原段丘	184		岩埋文397集・岩埋文455集
鶴供養遺跡	小山	縄文	上野原段丘	145～147		岩埋文455集
上大畑平Ⅰ遺跡	小山	縄文	上野原段丘	176	※試掘調査	岩埋文469集
上大畑平Ⅱ遺跡	小山	縄文	上野原段丘	164～172	※試掘調査	岩埋文469集
休場遺跡	小山	縄文後葉	上野原段丘	120		岩埋文331集
下中沢Ⅱ遺跡	小山	縄文中期	上野原段丘	172	竪穴住居跡２(縄文中期後半)	岩手県教委112集

尿前Ⅱ遺跡や下尿前Ⅱ遺跡など、胆沢扇状地扇頂付近より西の胆沢川左岸の崖縁上に立地する事例が中心である。それらは竪穴住居跡の数が10棟以下の小規模集落が点在する様相で捉えられよう。晩期は、調査歴のある遺跡を見る限り、良好事例は看取できない。

縄文時代の調査事例を総括すると、竪穴住居跡などを検出する集落遺跡は現状では少なく、大清水上遺跡を除くと集落の様相を検討するには未だ資料不足の感は否めない。ただ、地形的には時期を問わず中位段丘中心に集落跡が立地する様相である。陥し穴を検出する狩り場遺跡については、中位段丘を中心にし、特に上野原段丘や堀切段丘に立地する遺跡からの事例が急増している。大清水遺跡や宮沢原下遺跡の報告書中において、平面形・断面形の形態や、火山灰混入の有無などから精力的な考察が試みられている（佐藤：2001、戸根：2007、濱田・吉田・菊池：2008ほか）。本県における陥し穴研究に一石を投じるものと期待される。

＜弥生時代＞弥生時代は遺構の検出事例が少なく、土器のみを確認した事例が多い。全般的には、下尿前Ⅱ遺跡など弥生時代後期の土器を出土する遺跡が一定数散見できるが、前期や中期は少ない。現状の調査事例からは、中位段丘と低位段丘を中心に分布し、空間的には胆沢扇状地扇頂付近及び扇頂より西に所在する遺跡が多い様相で捉えられる。

＜古代＞古代は、分布傾向として胆沢扇状地扇央～扇端にかけての地域に多いことが読み取れる。古代を古墳時代、奈良時代、平安時代に分けて述べると、古墳時代の遺跡は角塚古墳、蝦夷塚古墳、糀谷古墳、鶴田古墳群など、何れも南都田地区にみられ、岩手県内の中でも特に多い地域として知られている。地形的には低位段丘を中心に中位段丘にも分布がみられる。古墳時代の遺跡が、この南都田地区に多い理由について、鈴木明美氏は塚田遺跡報告書中で、「各々眼前に広がる沖積地・湿地帯と密接な関連があるものと考察される」（鈴木：1985）と述べている。角塚古墳の西に近接する宇南田遺跡の調査報告書（鈴木・佐藤：1986）などを見る限り、湿地面・旧河床面・微高地の３種の地形が存在することは明らかであり、上述の観点からも今後さらなる検討が必要と思われる。奈良時代は、基本的には古墳時代を踏襲した空間占地にあり、前時期同様に南都田地区を中心とする。それらのほとんどは、次の平安時代と複合する遺跡が多い。平安時代は、空間占地は奈良時代を踏襲しながらも、さらに分布域が拡大し、遺跡数も多くなる。特徴として、平安時代になり営まれる集落遺跡も数多い。

＜中世・近世・近代＞現時点で中世・近世及び近代の調査事例としては、穴山堰遺跡、鹿合遺跡、要害遺跡、石行Ⅰ遺跡、上中沢Ⅰ遺跡が挙げられる。中世の城館跡の調査事例は鹿合館跡があり、胆沢扇状地扇頂部において東西方向に長く形成された河岸段丘に立地する。用水堰について、中半入遺跡第２次発掘調査報告書によれば胆沢扇状地を灌漑する用水堰には、主要なものだけでも藤五堰、茂井羅堰、三堰、籌庵堰、穴山堰、二の台堰があり（西澤：2004）、その中で穴山堰跡の一部分の調査が実施されている（半澤：1999）。また、これらの堰の中で、最も古い藤五堰は中世まで遡れることが予想されている。

参考・引用文献

【市町村史・論文・研究会発表資料など】

胆沢町町史編纂委員会　1981『胆沢町史１－原始古代編－』胆沢町史刊行会

大上和良・吉田充　1984「北上川中流域，胆沢扇状地における火山灰層序」『岩手大学工学部研究報告』第37巻

加藤孝　1954「陸中尼坂遺跡調査概報」『岩手史学研究』NO19岩手史学会

中川久夫・岩井淳一・大池昭三・小野寺信吾・森由紀子・木下尚・竹内貞子・石田琢二　1963「北上川中流沿岸の第四系および地形」『地質雑誌』１巻69号

【岩手県市町村報告書など】

千田政弘・千葉周秋・菊池節子　1996『三ヶ尻荒巻横道上遺跡』岩手県金ヶ崎町文化財調査報告書第33集金ヶ崎町教育委員会

岩手県教育員会　2001『岩手県内遺跡発掘調査報告書』岩手県文化財調査報告書第112集

岩手県教育員会　2006『岩手県内遺跡発掘調査報告書』岩手県文化財調査報告書第120集

【旧胆沢町教育員会関連文献（発刊年順）】（※胆沢町埋蔵文化財調査報告書は胆沢埋文第00集と表記する）

伊藤鉄夫　1976『宮沢原Ｅ東遺跡・赤剥遺跡』調査報告書　胆沢町教育委員会

伊藤鉄夫　1977『漆町遺跡調査報告書』胆沢埋文第９集

安倍庄吉　1981『小十文字遺跡－発掘調査報告書－』胆沢埋文第11集

安倍庄吉　1983『尼坂遺跡－発掘調査報告書－』胆沢埋文第12集

小原正治・鈴木明美　1984『二本木遺跡－緊急調査報告書－』胆沢埋文第13集

鈴木明美・安倍庄吉　1985『塚田遺跡－緊急調査報告書－』胆沢埋文第14集

鈴木明美・佐藤美枝子　1986『宇南田遺跡－緊急調査報告書－』胆沢埋文第16集

鈴木明美　1988『浅野遺跡－調査報告書－』胆沢埋文第17集

鈴木明美　1988『沢田遺跡－調査報告書－』胆沢埋文第18集

菊池強一　1988『上萩森遺跡－調査報告書－』胆沢埋文第19集

鈴木明美　1988『鹿合遺跡－調査報告書－』胆沢埋文第20集

安倍庄吉・宍倉圭介　1991『国分遺跡・芦の随遺跡緊急調査報告書－』胆沢埋文第21集

山口興典・佐々木いく子・安倍庄吉　1992『尼坂遺跡－第二次緊急発掘調査報告書－』胆沢埋文第22集

山口興典・佐々木いく子・安倍庄吉　1993『尼坂遺跡－第三次（東）緊急発掘調査報告書－』胆沢埋文第23集

山口興典・佐々木いく子・安倍庄吉　1993『尼坂遺跡－第三次（西）緊急発掘調査報告書－』胆沢埋文第24集

安倍庄吉・佐々木いく子　1994『尼坂遺跡－第四次緊急発掘調査報告書－』胆沢埋文第25集

佐々木いく子・安倍庄吉　1995『要害遺跡－緊急発掘調査報告書－』胆沢埋文第26集

佐々木いく子・安倍庄吉　1996『石行遺跡－緊急発掘調査報告書－』胆沢埋文第27集

朴沢志津江・辻秀人・阿部惠彦・国生尚・佐藤公保　2002『角塚古墳発掘調査報告書』胆沢埋文第28集

国生尚・朴沢志津江　2002『鶴田古墳群発掘調査報告書』胆沢埋文第29集

胆沢町教育員会　2003『発掘調査から知る胆沢の歴史～町内遺跡発掘展～』胆沢町郷土資料館第11回企画展

胆沢町教育員会　2005『地名・屋号が物語る胆沢の歴史と自然』胆沢町郷土資料館第13回企画展

【財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター報告書など（発刊年順）】（※岩埋文第00集と表記する）

瀬川司男・中川重紀・高橋與右衛門　1982『金ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書」　竈堂遺跡・東大畑遺跡：大曽根遺跡』岩埋文第44集

杉沢昭太郎　1997『下尿前Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩埋文第252集

中村英俊・小山内透　1997『松本館跡発掘調査報告書』岩埋文第256集

中村直美　1998『下尿前Ⅵ遺跡発掘調査報告書』岩埋文第269集

酒井宗孝　1999『尿前Ⅱ遺跡Ａ地区発掘調査報告書』岩埋文第288集

岩手埋文　1999『平成19年度発掘調査報告書』岩埋文第311集

中村直美・平めぐみ・高橋與右衛門
2000『休場遺跡発掘調査報告書』岩埋文第331集
小原眞一　2000『尿前Ⅱ遺跡Ｂ地区発掘調査報告書』岩埋文第343集
佐藤淳一　2001『大清水遺跡発掘調査報告書』岩埋文第373集
高木晃　2002『中半入遺跡・蝦夷塚古墳発掘調査報告書』岩埋文第380集
岩手埋文　2002『平成13年度発掘調査報告書』岩埋文第397集
西澤正晴　2004『中半入遺跡第２次発掘調査報告書』岩埋文第443集
佐藤淳一・中村絵美　2006『大清水上遺跡発掘調査報告書』岩埋文第475集
吉田充　2006『二の台長根遺跡発掘調査報告書』岩埋文第476集
戸根貴之ほか　2007『宮沢原下遺跡発掘調査報告書』岩埋文第495集
岩手埋文　2007『平成19年度発掘調査報告書』岩埋文第524集
岩手埋文　2008『平成20年度発掘調査報告書』岩埋文第546集

3　基　本　層　序

今回調査を実施した３遺跡は、何れも胆沢区南都田に所在し、尼坂遺跡と牡丹野遺跡は隣接し、また牡丹野遺跡と作屋敷遺跡は約500ｍの距離にある。今回の調査地は、同じ胆沢扇状地低位段丘高位面（※尼坂遺跡自体は中位段丘と低位段丘を跨ぐが、今回の調査地は低位段丘高位面）に立地することもあり、旧河道や旧沢部分などを除くと、ほぼ同様の土層がみられる。

（１）尼坂遺跡の基本層序

尼坂遺跡の基本層序は、調査開始初期に第１～５の５本の試掘トレンチを掘削し、土層の堆積状況を把握した。概ね以下のような堆積順を示す。

Ⅰ層　表土・水田土・整地層　層厚20～50㎝……現代の文化層で平均的には30㎝程。
Ⅱ層　黒褐色シルト　層厚０～10㎝……古代を中心とする文化層と推定される。
Ⅲ層　黒色シルト　層厚０～40㎝……縄文時代前期前葉以降の文化層と推定される。
Ⅲａ層　黒色シルト　層厚０～30㎝……縄文時代前期前葉以前の文化層と推定される。
Ⅳ層　黄褐色粘土（地山）

尼坂遺跡は、調査区南部においては耕作土を除去した段階で、Ⅳ層黄褐色粘土（地山）が直に露出する状況にあった。このことから、昭和28年に実施された耕地整理などにより削平が著しいことがわかった。調査区西部においては、Ⅱ層は確認できなかったものの、Ⅲ層は窪地部分（沢跡と考えられる）に比較的広範囲に残存し、またその地点のⅢ層下位より浅黄橙色砂状堆積物のレンズ状の堆積を確認した。この浅黄橙色砂状堆積物に関係する遺構・遺物が無かったことから、科学分析を実施していないが、肉眼観察からは十和田中掫火山灰（To－Cu）の可能性が示唆される。従って、この窪地自体は、縄文時代前期前半には開口していた可能性が高く、合わせてⅢ層は十和田中掫火山灰降下期以降に形成された土層と推定されよう。また、この窪地の壁を構成するⅢａ層と命名した黒色シルトは、土器などの遺物が出土しなかったことから詳細はわからないが、十和田中掫火山灰降下期より古い時期に形成された土層と推定される。

（２）牡丹野遺跡の基本層序

牡丹野遺跡の基本層序については、試掘トレンチや調査成果から次のように考えられる。

Ⅰ層　表土　層厚20～150 ……水田耕作土や水田造成に伴う盛土である。
Ⅱ層　黒褐色シルト　層厚０～50……古代若しくは弥生時代以降に形成された土層と捉えられ、

弥生時代後期の土器、平安時代の土師器などが出土した。

Ⅲ層　黒色シルト　層厚０～20㎝……縄文時代に形成された土層と捉えられる。

Ⅳ層　黄褐色粘土（地山）……地点によっては径５～40㎝の円礫を含む。

牡丹野遺跡では、表土を除去した段階で、調査区北西部や中央の一部にⅡ層黒褐色シルトのプライマリーな土層の堆積が確認されたものの、大部分は直にⅣ層黄褐色粘土（地山）が露出する。従って、過去の耕地整理の際に大規模な削平を受けていると捉えられる。なお、地権者によれば、大規模な耕地整理が行われたのは、昭和28年であるらしい。また、調査区北西部から調査区中央部に向かって流れる旧河道が検出されたが、これらについても昭和28年若しくはその頃に実施された耕地整理に伴い、堰きとめられ廃絶された可能性もある。

補足として、調査開始初期に試掘トレンチを設定・掘削したが、調査進行上の関係で、重機により表土除去する際の目安に用いることとし、トレンチ箇所の平面実測を割愛した。従って、トレンチ箇所は明示していないことをお断りしておく。

（３）作屋敷遺跡の基本層序

作屋敷遺跡の基本層序について、試掘トレンチや調査成果から次のように考えられる。

Ⅰ層　表土　層厚20～50㎝……現代の水田耕作土や盛土などを一括する。

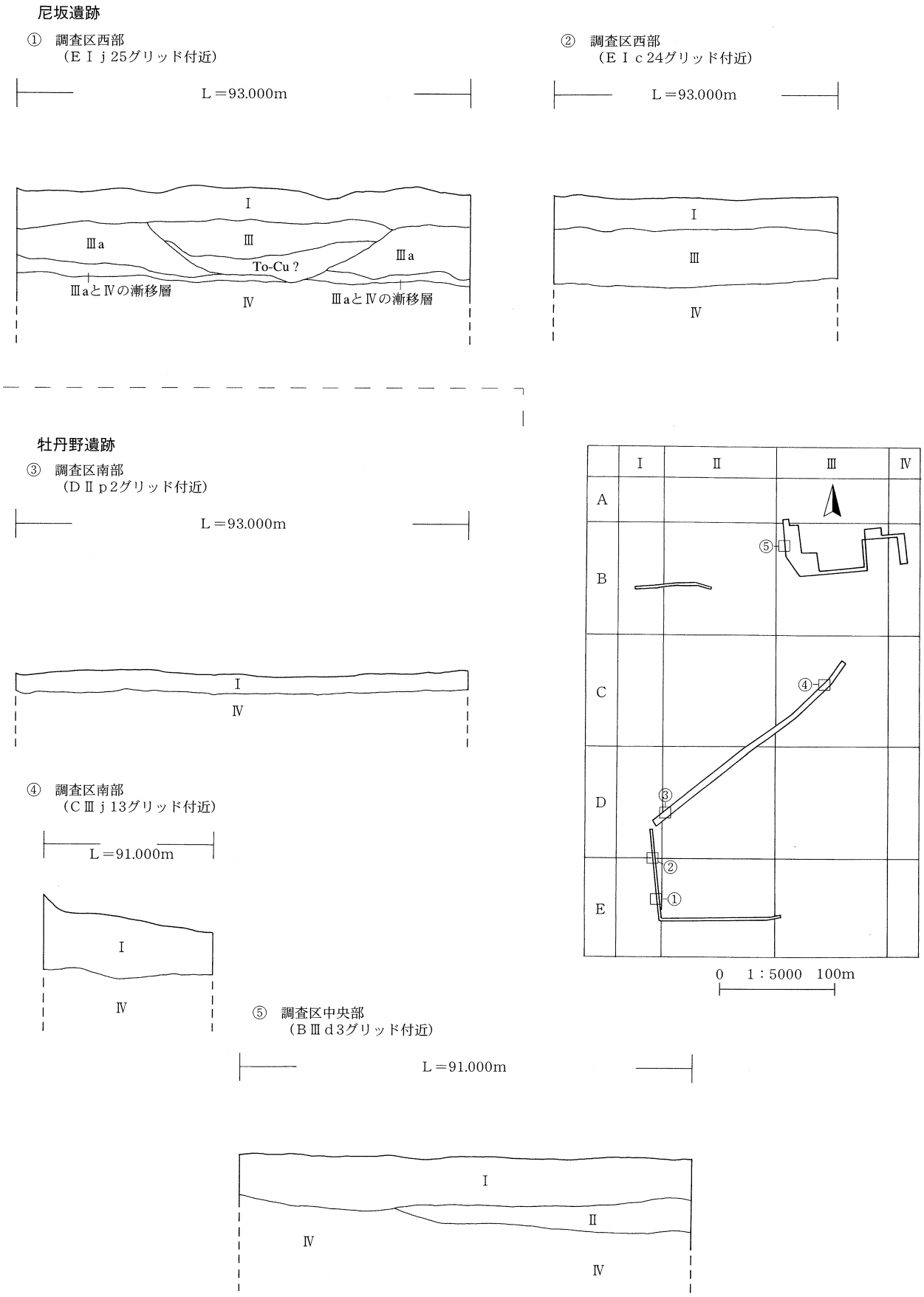
Ⅱ層　黒褐色シルト　層厚０～20㎝……古代の遺構埋土の主体を占める。

Ⅲ層　黒色シルト　層厚０～40㎝……古代以前に形成された土層と捉えられ、陥し穴状遺構の埋土上位などに堆積する。

Ⅳ層　黄褐色粘土（地山）……地点により礫が混じる部分もある。

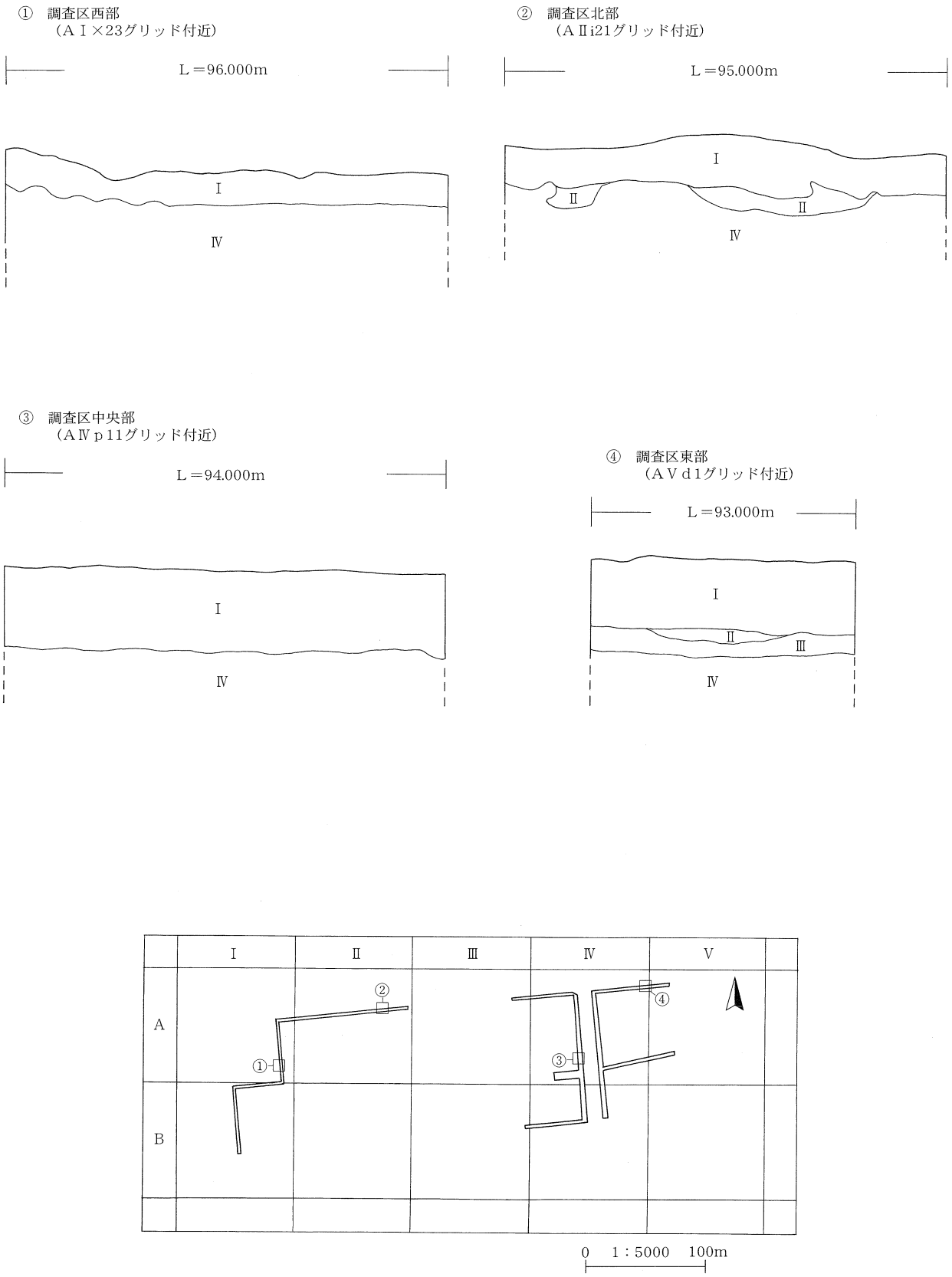
作屋敷遺跡では、表土を除去した段階で、大部分は直にⅣ層黄褐色粘土（地山）が露出する。従って、調査区全体的にみられるのはⅠ層とⅣ層である。ただし、尼坂・牡丹野遺跡と比較した場合、耕地整理時の地山掘削深度が浅かったものと思われ、遺構の遺存状態が良好であった。Ⅲ層は、調査区中央部の北端や、調査区東部の北端付近など極わずかな範囲で認められたが、遺物の出土はなかった。上記のとおり、陥し穴状遺構の埋土上位にみられる黒色シルトは、Ⅲ層に由来すると考えられる。

補足として、調査開始初期に試掘トレンチを設定・掘削したが、調査進行上の関係で、重機による表土除去する際の目安に用いることとし、トレンチ箇所の平面実測を割愛した。従って、トレンチ箇所は明示していないことをお断りしておく。



第５図　尼坂・牡丹野遺跡基本層序

3　基本層序



第6図　作屋敷遺跡基本層序

Ⅲ　野外調査と室内整理の方法

1　野　外　調　査

（1）尼坂遺跡・牡丹野遺跡の調査面積について

尼坂遺跡・牡丹野遺跡の調査予定面積は、尼坂遺跡が270㎡、牡丹野遺跡が2,864㎡であったが、パイプライン部分の調査区幅が２ｍ→1.5ｍに変更されたことに伴い調査面積に変更が生じたことや、当初可能性ありとして尼坂遺跡に含めていた部分が牡丹野遺跡に含めることになるなど、若干の変更が行われた。県南広域振興局農林部農村整備室と生涯学習文化課による協議を経て、最終的には尼坂遺跡が322㎡、牡丹野遺跡が2,698㎡の調査を実施した。

（2）作屋敷遺跡の調査面積について

作屋敷遺跡の調査予定面積は、1,944㎡であったが、現地協議で調査区北部100㎡が追加となり、最終的には2,044㎡の調査を行った。なお、2,044㎡の内、調査地中央部（神社鳥居の前付近）150㎡は確認調査のみを実施している（この部分からは遺構・遺物ともに発見されなかった）。

（3）調査区の区割設定

尼坂遺跡と牡丹野遺跡は、地続きの関係にあり、実際の発掘調査においても並行して調査を行った経緯があることから、この２つの遺跡は一括して扱い記述することとする。

＜尼坂遺跡・牡丹野遺跡＞尼坂遺跡・牡丹野遺跡の区割設定は、世界測地系（平面直角座標第Ｘ系）を座標変換した調査座標を用いて、調査区全体を網羅するよう設定した。調査座標原点は、Ｘ＝－9650.000、Ｙ＝21000.000を採用し、一辺100ｍの大グリッドを設定し、さらにこれを一辺４ｍの小グリッドに区割した。グリッドの名称について、大グリッドは原点より北から南に向かってアルファベットのＡ→Ｂ→Ｃ…と、西から東に向かってローマ数字のⅠ→Ⅱ→Ⅲ…と付した。小グリッドは、北から南へアルファベットのａ～ｙ、西から東へ算用数字の1～25を付し、上記した大グリッドと組み合わせて「ＡⅠａ１」・「ＡⅠｂ１」のように表した。

基1　Ｘ＝－96953.000、Ｙ＝21194.000、Ｈ＝91.730ｍ
基2　Ｘ＝－96953.000、Ｙ＝21101.000、Ｈ＝92.513ｍ
基3　Ｘ＝－96873.000、Ｙ＝21096.000、Ｈ＝92.180ｍ
基4　Ｘ＝－96785.000、Ｙ＝21194.000、Ｈ＝91.567ｍ
基5　Ｘ＝－96730.000、Ｙ＝21160.000、Ｈ＝90.625ｍ
補1　Ｘ＝－96953.000、Ｙ＝21160.000、Ｈ＝92.144ｍ
補2　Ｘ＝－96953.000、Ｙ＝21132.000、Ｈ＝92.375ｍ
補3　Ｘ＝－96919.000、Ｙ＝21096.000、Ｈ＝92.413ｍ
補4　Ｘ＝－96842.000、Ｙ＝21132.000、Ｈ＝92.159ｍ
補5　Ｘ＝－96763.000、Ｙ＝21231.000、Ｈ＝90.885ｍ

＜作屋敷遺跡＞作屋敷遺跡の区割設定は、世界測地系（平面直角座標第Ｘ系）を座標変換した調査座標を用いて、調査座標原点はＸ＝－96000.000、Ｙ＝20400.000（世界測地系）を起点とし、その設定方法は尼坂・牡丹野遺跡に準じている。

基1　X＝－96203.000、Y＝20447.000、H＝96.134m
基2　X＝－96203.000、Y＝20488.000、H＝95.280m
基3　X＝－96138.000、Y＝20527.000、H＝95.542m
基4　X＝－96138.000、Y＝20577.000、H＝94.441m
基5　X＝－96121.000、Y＝20735.000、H＝92.783m
基6　X＝－96121.000、Y＝20761.000、H＝92.763m
基7　X＝－96185.000、Y＝20735.000、H＝93.799m
基8　X＝－96185.000、Y＝20761.000、H＝92.733m
基9　X＝－96231.000、Y＝20735.000、H＝93.020m

（4）粗掘り・遺構検出

調査開始と同時に調査区内に試掘トレンチを設定し、人力で掘削して土層の堆積状況及び遺構検出面の確認に努めた。その後、重機（バックホー）を用いて表土（主に水田耕作土や盛土）を除去した。表土除去後、人力で鋤簾、移植ヘラを用いて遺構の検出を行った。

（5）遺構の命名・精査

検出された遺構は、検出順に○号住、○号土坑、○号溝跡などと命名した。遺構の精査は、竪穴住居跡の場合は、上層から１層ずつ掘り下げ、埋土中および貼り床内の遺物はできるだけ層毎に取り上げた。土坑は２分割して、土層記録後に、残る半分を精査する際に層毎ごとに取り上げた。現場で作成した実測図は、平面図は電子平板を用い、断面図は原則的に1/20で従来の手実測で作成した。写真撮影は、6×7㎝判のモノクローム１台と35㎜モノクローム１台、35㎜リバーサル１台、デジタルカメラの４台で行った。原則として報告書掲載用の写真はデジタルカメラで撮影したものを使った。航空写真撮影は、セスナ機により行い、6×7㎝判のモノクロとカラーの２種類を撮影した。

2　室　内　整　理

（1）遺　構　図　面

遺構図は、電子平板のデータで作成した平面図と、現場で人力により作成した断面図をスキャナーで取り込み、全てデジタルデータとした後、編集した。

（2）遺　　物

遺物は、先に水洗と出土地点ごとの仕分け作業を行った後、遺物の種類毎に以下のように進めた。土器類は、水洗後に袋単位で通し番号を付けて重量の計測と登録作業を行った。その際に袋に付けた通し番号は、注記番号として採用した。選択基準は、①残存率の良いもの、②遺構の時期推定になる層位的資料、③口縁部資料、などの順に優先して選択し、仮番号を付け登録した後、掲載遺物として更に選択した。土製品・石器・鉄製品は、水洗後、仮番号付け、掲載物の選択を行った後、掲載番号を付した。陶器類は、水洗後、仮番号を添付し登録した。その後、近世までのものを優先し選択を行った後、掲載番号を付した。

（3）写真類の整理

撮影した遺構写真は、撮影カード順の写真台帳を作成した。6×７㎝判モノクローム、35㎜モノク

ローム、35㎜リバーサルの種類ごとにアルバムに整理し、デジタルカメラで撮影したデータは日付順に整理した。航空写真は６×７㎝判モノクロ・カラーを撮影した。遺構写真図版はデジタルカメラで撮影したものを選び、デジタル編集し作成している。遺物写真は、当センターの写真技師により原則として１点ごとに撮影番号を付してデジタルカメラで撮影した。

（４）報告書について

＜原稿執筆・編集＞報告書の執筆・編集は星と田中が行った。
＜遺構の記載＞遺構の記載は、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、竪穴状遺構、土坑、溝跡、炉跡・焼土、柱穴状の順に編集している。
＜遺物の掲載＞遺物掲載番号は、尼坂遺跡１～４、牡丹野遺跡１～55、作屋敷遺跡１～109と付し、遺物図版・遺物写真図版・観察表とも同一の番号となっている。
＜遺構図版＞遺構図版は、１／50を基本とするが、遺構の性格に応じて縮尺を変えている。遺構はデジタルでトレース・編集を行い作成した。
＜遺物図版＞遺物図版は、土器は１／３を原則として突出して大きいものを１／６、土製品は１／２、陶磁器は１／２、鉄製品は１／２、石器は１／２で掲載した。
＜遺構写真図版＞遺構写真図版の掲載順は、本文や遺構図版と同様である。デジタルデータを編集し、図版作成を行った。
＜遺物写真図版＞遺物写真図版は、遺物図版と同じ縮尺を基本とする。デジタルデータを編集し、図版を作成した。

（５）観察表について

＜遺構観察表＞遺構の規模について、他の遺構や攪乱で破壊を受けているものについては残存値に以上をつけて明示した。ただし、残存状況が特に悪いものについては不明や空欄とした。
＜遺物観察表＞土器、土製品、石器、石製品などの法量値は、欠損する場合は残存部の数値を（　）で示した。ただし、土器類の破片などについては、割愛する。

Ⅳ 尼 坂 遺 跡

1　遺跡の位置・概要

尼坂遺跡は、岩手県奥州市胆沢区南都田字国分370-1ほかに所在する。遺跡は、ＪＲ東北本線水沢駅から西約７㎞、胆沢総合支所（旧胆沢町役場）から北約２㎞の位置にあり、胆沢扇状地福原段丘～水沢段丘高位面に立地し、調査地の標高は92～94ｍ、現況は水田、畑、水路、道路、宅地などである。

今回の調査区は水沢段丘高位面にあり、すぐ南側が調査区より３ｍほど高い福原段丘である。従って、段丘境に近い部分を調査した。

「尼坂」という地名は、牡丹野で尼さんたちが薬草を栽培し、その薬草を運ぶのに通った坂に由来するらしい。

今回の尼坂遺跡の調査区は、牡丹野遺跡と地続きの関係にあることと、当初両者の境界とされていた牡丹野遺跡３号溝跡を検出した付近は埋蔵文化財包蔵地に隣接する「可能性あり」とされていた部分でもあった。従って、遺跡の境界が不明瞭にあったことと、周知範囲の隣接地ということから、どちらの遺跡範囲に含めるか不確定な部分でもあった。この部分からの検出遺構としては、牡丹野遺跡３号溝跡として編集・掲載した遺構があり、調査時は尼坂遺跡として調査を進めていた。県教育員会とその後の協議の結果、最終的にはこの部分を牡丹野遺跡に含めることなった。

2　これまでの調査歴

尼坂遺跡は、古くは昭和26年８月東北大学によって調査が行われ、縄文時代早期～前期前半の重要な遺跡として注目されていた（加藤：1954）。その後、旧胆沢町教育委員会により４回調査が行われている（第一～四次調査）。ここでは旧胆沢町教育委員会が調査した第一次から第四次調査について、その概要をまとめてみる。

＜第一次調査＞第一次調査は、町道改修工事（町道鶴田愛宕線拡幅工事に伴う）に関わり昭和56年11月12日～12月９日にかけて6,500㎡が調査されている。平安時代の竪穴住居跡５棟、ピット跡、溝跡が検出され、縄文時代前期前半の土器、石器、土師器、須恵器、羽口、鉄器、砥石が出土している（山口・佐々木・安倍1983）。

＜第二次調査＞第二次調査は、住宅建設に関わり平成３年10月15日～12月８日にかけて1,196.5㎡が調査されている。土器集積土坑、住居跡９棟（※内平安１棟）、土坑11基、溝状土坑（※陥し穴）７基、焼土遺構４基、木根攪乱２基が検出されている。遺物は、縄文時代早期～前期の土器、石器、土師器が出土している（山口・佐々木・安倍：1992）。

＜第三次調査＞第三次調査は、第三次調査（東）と第三次調査（西）に分け報告書が発刊されている。

第三次調査（東）は、町道拡幅（町道独光舘線）に伴い平成４年７月２日～９月５日まで1,539.53㎡が調査されている。平安時代竪穴住居跡、性格不明遺構、性格不明の周溝遺構２基、大小種々の土坑群・ピット群が検出されている。遺物は、縄文時代早期～前期・後期の土器、須恵器、石器が出土している（山口・佐々木・安倍1993）。

第三次調査（西）は、胆沢ダム建設に伴う移転世帯の宅地造成に伴い平成４年６月23日～７月14日

にかけて730㎡が調査されている。溝状土坑４基、土坑２基、性格不明のピット群３基が検出されている。遺物は、縄文時代早期～前期の土器、石器が出土している（山口・佐々木・安倍1993）。
＜第四次調査＞第四次調査は、宅地造成に伴い平成５年６月20日～８月９日にかけて792.8㎡が調査されている。陥し穴状土坑４基、楕円形土坑２基、円形土坑２基が検出されている。遺物は、縄文時代前期前半・後期～晩期の土器、石器が出土している（安倍・佐々木：1994）。

3　検　出　遺　構

尼坂遺跡からの検出遺構はない。基本層序の項で上述したとおり、縄文時代の沢跡と推定された窪地が１箇所見つかったが、人為による遺構ではないことと、出土遺物がなかったことから、不掲載とした。

4　出　土　遺　物

調査開始初期に掘削したトレンチから５点の陶磁器類が出土した。その内、明らかに現代のもの１点を除き、１～４の４点を掲載した。２は18世紀代の大堀相馬の碗である。それ以外は、産地・年代とも不明にあるが、近代以降と推定される。

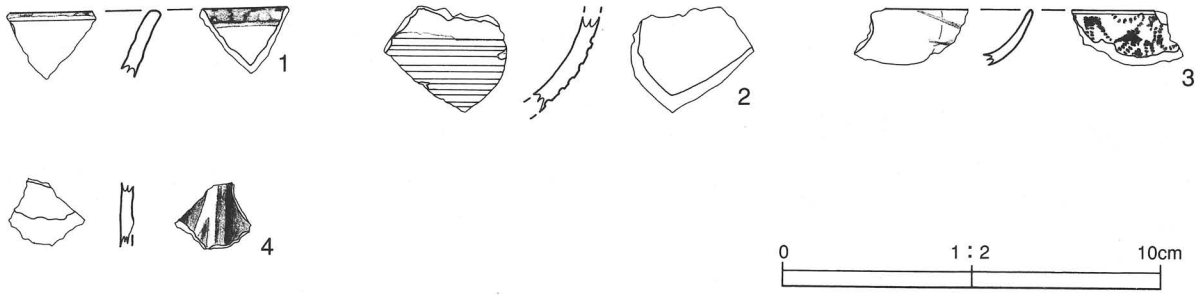
5　総　　括

今回の調査では、遺構の検出はなく、遺物については近世と近世以降と推定される陶磁器片が５点出土した。過去の発掘調査で顕著に見られた縄文時代早期～前期や古代の遺構・遺物の発見には至らなかった。

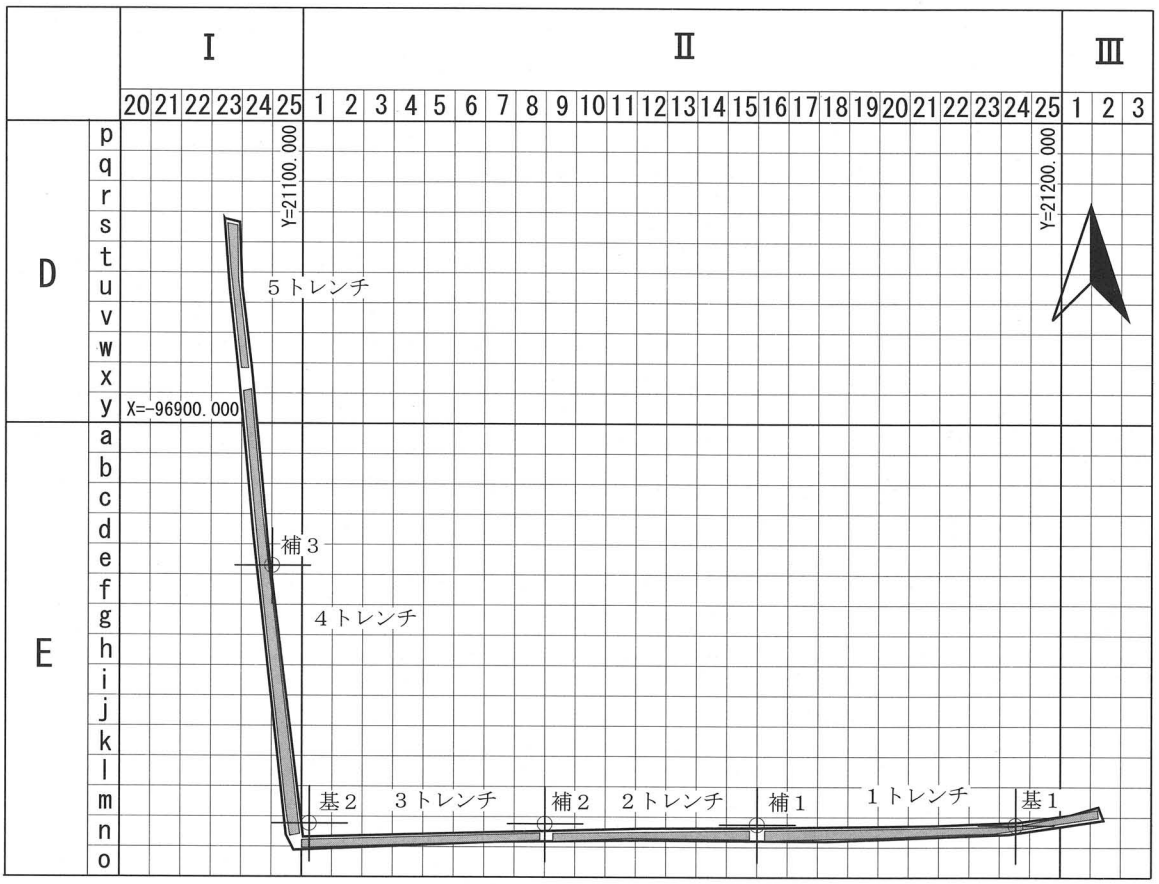
昭和26年に東北大学で行った発掘調査を含めると、今回の発掘調査は６回目となる。過去５回の発掘調査が行われている地点は、町道鶴田愛宕線の北側で、今回の調査区からみて南西方向にある。今回の調査区は、水沢段丘高位面に相当し標高が92～94ｍである。対して、過去の調査区は、福原段丘及びその北崖縁辺に相当すると考えられ、標高が95～97ｍで今回の調査区より３～５ｍ高い。この標高差は、実際の現地においても看取される。先にも上述したとおり、過去の発掘調査で縄文時代早期～前期を中心とする遺物が顕著に出土しているが、今回該期の遺物が出土しなかった理由の一つとして、この段丘の差異が関係する可能性もある。また、古代の遺構・遺物についても未発見に終わったが、これについては調査区の西側や牡丹野遺跡のある北側に展開する可能性を示唆するものである。

No	出土地点	層　位	器　種	産　地	時　代	備　考
1	2トレンチ	耕作土直下	不明	不明	現代	
2	2トレンチ	耕作土直下	椀	大堀相馬	18世紀	上部が灰釉、中～下部が鉄釉
3	2トレンチ	耕作土下層	小皿	不明	不明	
4	4トレンチ	検出面	皿	不明	不明	

第５表　陶磁器観察表



陶磁器



グリッド配置図

0　1：1000　50m

第７図　グリッド配置図、陶磁器

Ⅴ　牡丹野遺跡

1　遺跡の位置・概要

牡丹野遺跡は奥州市胆沢区南都田字国分371ほかに所在する。ＪＲ東北本線水沢駅から西約７㎞、胆沢総合支所（旧胆沢町役場）から北約２㎞の位置にあり、胆沢扇状地水沢段丘高位面に立地し、調査地の標高は89～92ｍである。現況は水田、水路、農道で、耕地整理などにも関連して平坦な土地が広がる。地形図で現道などの標高値を見ると、西から東へ、そして南から北へ、少しずつ標高が下がる。従って基本地形は南西→北東へ向かって緩やかに傾斜することが読みとれる。「牡丹野」という地名は、昔この地で尼さんたちが、薬草（キキョウ）の栽培を行った場であることに由来するらしい。

2　これまでの調査歴

牡丹野遺跡は、『胆沢町史』（胆沢町町史編纂委員会：1981）の記述を参照すると、大正の頃から土師器片・須恵器片の散在が確認され、昭和40年頃桑畑造成時に土師器甕が発見されている。発掘調査は、岩手県教育委員会により平成19年２月に約200㎡が実施されている（岩手県教育員会：2008）。９世紀後半と推定される竪穴住居跡１棟、土坑２基を検出している。岩手県教育員会による調査地点は、２号旧河道を検出した調査区西部と呼んでいる部分から南西へ約70ｍにある。野外調査時にこの周辺の畑を踏査した際にも、須恵器片の散布を確認している。

3　検　出　遺　構

牡丹野遺跡の今回の調査で検出した遺構は、竪穴住居跡２棟、竪穴状遺構１基、土坑４基、溝跡４条、柱穴状土坑32基、旧河道４条である。遺構の記載に際して、若干説明を補足すると、位置の項では調査区が細長いことから、調査区を便宜的に調査区北西部・南部・中央部の３つに分け呼称し、記述に用いることとする。規模の項では、遺構の両端が調査区外に延びることが多かったため、調査区の幅そのものが遺構の長さになる場合が多い。その場合は、「不明」か検出部の数値に「以上」を付して明記することとする。竪穴住居跡や溝跡などが主に該当する。埋土の項では、土層の記載に際して基本層序はⅠ～Ⅳ層のローマ数字を用い、個々の遺構埋土は１層・２層・３層・・などのアラビア数字を用いている（※規模と埋土については作屋敷遺跡も同様である）。

（1）竪穴住居跡

１号竪穴住居跡（第11図、写真図版５）

＜位置・検出状況＞調査区南部のＤⅡｈ10～ｉ11グリッドに位置する。検出面はⅣ層中において、黒褐色シルトによる方形気味の広がりとして把握した。水田造成時に竪穴本体は削平を受けたと思われ、壁はほとんど残っておらず、床面付近のみが残存する。

＜重複関係・建替え＞１・２・４号土坑に切られる。

＜平面形・規模・長軸方向＞平面形は、隅丸長方形と推定されるが、北側が未検出なため明確ではない。規模も明確ではないが、長軸と捉えられる南北方向では４ｍ以上、短軸と捉えられる東西方向においては約4.1ｍを測る。検出面からの深さは、６㎝以下が大部分で、直に床面が露出している部分

もある。長軸方向は南－北と考えられる。
＜埋土＞第11図の土層断面Ａ－Ａ´・Ｂ－Ｂ´の11～14層が本遺構に伴う堆積土である。12層と13層がわずかに残存する埋土である。暗褐色シルトを主体とし、自然堆積と判断される。11層系と14層は貼り床土と推定される。
＜床面・壁＞Ⅳ層地山を床面とするが、埋土で述べたとおり11層系と14層が貼り床土で部分的に貼り床が施されていると判断される。硬化面は認知できない。貼り床上面では全体的に平坦である。壁は、上記のとおり、水田造成時に破壊されているため、ほとんど立たない。
＜カマド＞検出されていない。
＜柱穴・付属施設＞柱穴は屋外から１個検出した。床面からは確認できない。付属施設として、南東隅から浅い土坑を検出した。
＜遺物＞（第21図１～５、写真図版10）出土遺物は、土器類361.91ｇ、陶磁器類４点が出土した。１～４は土師器甕の口縁部で、何れもロクロによる調整がみられる。５は須恵器坏の胴部下半～底部である。陶磁器類は検出作業中に出土したもので、何れも近代若しくは現代のものであることから、不掲載とした。
＜時期＞出土土器は小破片で詳細な時期は特定できないが、９世紀後半～10世紀前半と推定される。重複遺構との関係からは、本遺構を切る１号土坑の埋土中に十和田ａ火山灰の混入が認められたことから、本遺構は十和田ａ火山灰降下期より古いと考えられる。従って、出土遺物から得られている９世紀後半～10世紀前半の年代とは整合する。

２号竪穴住居跡（第12図、写真図版６）
＜位置・検出状況＞調査区南部のＣⅡＸ23グリッド付近に位置する。本遺構プランは調査区外南に延びる。検出面はⅢ～Ⅳ層中で、黒褐色シルトによる不整気味のプランとして把握した。
＜平面形・規模・長軸方向＞南側は調査区外へ延びることから詳細は不明であるが、平面形は方形と推定される。検出部で把握できた規模は、長軸1.1ｍ以上×短軸2.1ｍ、検出面からの深さは約20㎝を測る。長軸方向は北西－南東と推定される。
＜埋土＞１層は現在の水田耕作土、２層は水田床土である。３層が本遺構に伴う堆積土である。３層は、黒褐色シルトを主体とし、人頭大の礫が多量に混入する。礫は、自然磨耗した河原石が主体であるが、人為による磨痕との見分けのつかないものが混じる。これらの礫自体は、人為による投げ込みと捉えられるが、堆積土自体は自然堆積層と考えられる。
＜床面・壁＞Ⅳ層地山を床面とし、ほぼ平坦である。貼り床は認められない。壁は、外傾して立ち上がる。
＜カマド＞北壁の東隅より煙道部を検出した。煙道部は、天井部分は削平されているが、遺存状況は概ね良好で、北西方向を向く。煙道底面は、竪穴住居床面からみて、平行気味に延びた後に外傾して立ち上がる。煙出し部は明確には認知できなかったが、あるいは第12図Ｂ－Ｂ´土層断面の８層が堆積する凹地部分が煙出し部の一部かもしれない。燃焼部と袖部については認められない。
＜遺物＞（第24図54、写真図版12）出土遺物は、石器１点である。先にも上記したとおり、埋土中～床面にかけて多量の礫が投げ込まれていたが、その中の１点を磨石と認知した。また、検出作業時に時期や産地が不明の陶磁器１点が出土したが、現代の可能性が極めて高いことから不掲載とした。
＜時期＞古代と推定されるが、出土遺物、重複遺構、火山灰などが無く、明確にはわからない。

（2）竪穴状遺構

1号竪穴状遺構（第12図、写真図版6）

＜位置・検出状況＞調査区南部のＤⅡｎ4グリッド付近に位置する。表土除去後、Ⅲ層～Ⅳ層で黒褐色シルトの方形状プランとして把握した。柱穴やカマドの検出がなかったことから、竪穴住居跡ではなく、竪穴状遺構として遺構登録した。

＜平面形・規模・主軸方向＞プランの南東側が調査区外に延びるため明確にはわからないが、平面形は方形基調である。規模は把握できる北西－南東方向では2.8mである。検出面からの深さは6～10㎝である。上部はかなり破壊を受けていると考えられる。主軸方向は不明である。

＜埋土＞1層は現代の水田床土である。2層が本遺構に伴う堆積土で黒褐色シルトである。黄褐色粘土ブロックの混入具合からは人為堆積層の可能性がある。

＜床面・壁＞床面には緩い凹凸がある。壁は外傾して立ち上がる。

＜遺物＞出土遺物は土器類3.31ｇである。磨滅した小片なことから不掲載とした。

＜時期＞不明。埋土の様相からは、古代の遺構と考えられる。

（3）土　　坑

1号土坑（第11図、写真図版7）

＜位置・検出状況＞調査区南部のＤⅡｈ11グリッド付近に位置する。検出状況は、Ⅳ層上面において1号竪穴住居跡と共に認知した。

＜重複関係・建替え＞1号竪穴住居跡を切る。

＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は円形を呈する。開口部径は160×140㎝、深さは1号竪穴住居跡の床面より12～24㎝深い。断面形は浅皿状を呈する。

＜埋土＞1～4層に分層した。埋土上位に堆積する1層は黒色シルト、その下位に2層にぶい黄橙色層の十和田ａ火山灰層がみられ、3層黒褐色シルト、4層暗褐色シルトにより構成される。土層の堆積様相から、自然堆積と判断される。

＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がる。

＜遺物＞なし。

＜時期＞重複遺構との関係からは、1号竪穴住居跡より本遺構が新しい。従って、9世紀後半より新しい可能性で考えられる。また、埋土中には十和田ａ火山灰が堆積することから、10世紀前半より古い。従って、9世紀後半より新しく、10世紀前半より古いと捉えられる。

若干所見を付記すると、1号竪穴住居跡出土遺物と、本遺構の埋土に十和田ａ火山灰が堆積する内容を鑑みると、1号竪穴住居跡の廃絶時期と、本遺構の構築された時期は大差ない可能性はある。

2号土坑（第11図、写真図版7）

＜位置・検出状況＞調査区南部のＤⅡｈ11グリッド付近に位置する。検出状況は、Ⅳ層上面において1号竪穴住居跡と共に認知した。

＜重複関係・建替え＞1号竪穴住居跡を切る。

＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は長楕円形を呈する。開口部径は165×98㎝、深さは1号住居跡の床面より約24㎝深い。断面形は浅皿状を呈する。

＜埋土＞黒褐色シルトを主体とする。埋土下位の24層中に十和田ａ火山灰が微量混入する。自然堆積か人為堆積かの明確には判断できないが、自然堆積と捉えておきたい。

＜底面・壁＞底面は丸底気味である。壁は外傾して立ち上がる。
＜遺物＞なし。
＜時期＞重複遺構との関係からは、１号竪穴住居跡より本遺構が新しい。従って、９世紀後半より新しい可能性で考えられる。また、埋土中には十和田ａ火山灰が堆積することから、10世紀前半より古い。従って、９世紀後半より新しく、10世紀前半より古いと捉えられる。若干所見を付記すると、１号竪穴住居跡出土遺物と、本遺構の埋土に十和田ａ火山灰が堆積する内容を鑑みると、１号竪穴住居跡の廃絶時期と、本遺構の構築された時期は大差ない可能性はある。

３号土坑（第13図、写真図版７）
＜位置・検出状況＞調査区中央部のＢⅢｊ７グリッド付近に位置する。Ⅳ層中で黒褐色シルトの広がりとして検出した。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は隅丸長方形を呈する。開口部径は188×98㎝、深さは約24㎝である。主軸方向は北西－南東方向をみる。
＜埋土＞１層黒褐色シルトによる単層である。黄褐色粘土ブロックと礫が少量含まれる。人為堆積と考えられる。
＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がる。
＜遺物＞なし。
＜時期＞詳細な時期は不明である。埋土の様相から古代と考えられる。

４号土坑（第11図、写真図版７）
＜位置・検出状況＞調査区南部のＤⅡｈ11グリッド付近に位置する。検出状況は、Ⅳ層上面において１号竪穴住居跡と共に認知した。
＜重複関係・建替え＞１号竪穴住居跡を切る。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は不整楕円形を呈する。開口部径は185×140㎝、深さは１号住居跡の床面より約28㎝深い。断面形は浅鉢状を呈する。
＜埋土＞埋土上～中位に１層黒褐色シルトが、埋土中～下位に暗褐色シルトが堆積する。自然堆積ではないかと考えられる。
＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がる。
＜遺物＞（第21図６、写真図版10）出土遺物は土器類17.5ｇである。６の土師器甕１点が出土した。
＜時期＞重複遺構との関係からは、本遺構が１号竪穴住居跡を切ることから、９世紀後半～10世紀前半より新しいと捉えられる。出土遺物からは９世紀後半～10世紀前半で考えられる。

（４）溝　　跡

１号溝跡（第14図、写真図版８）
＜位置・検出状況＞調査区中央部のＢⅢｄ２～ｉ10グリッド付近に位置する。表土除去後、Ⅶ層中で黒褐色シルトによる長方形の広がりとして把握した。西側は調査区外へ続く。東側は途中で途切れる。
＜重複関係＞４号旧河道を切る。
＜平面形・規模・主軸方向＞調査区内での規模は、長さ約30ｍ、溝幅0.6～0.9ｍ、深さ10～40㎝である。主軸方向は、西から東へ向かった後、南東方向に折れる。

＜埋土＞黒褐色シルトによる単層である。自然堆積の可能性が高い。
＜床面・壁＞底面は平坦である。水が流れるとした場合、溝底の標高値からは北西→南東に向かう。ただし、溝底の比高はほとんどない。壁は外傾して立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。
＜柱穴・付属施設＞なし。
＜遺物＞（第21・24図７～11・49・50写真図版10・12）出土遺物は土器類102.52ｇ、石器２点である。土器類は、７は土師器坏、８・９は土師器甕、10は須恵器の坏？、11は須恵器甕である。石器は、49・50のスクレイパー２点が出土している。
＜時期＞出土遺物から９世紀後半～10世紀前半と推定される。

２号溝跡（第13図、写真図版８）
＜位置・検出状況＞調査区南部のＣⅢｊ13～ｋ13グリッド付近に位置する。表土除去後、Ⅳ層中で黒褐色シルトによる長方形の広がりとして把握した。溝上～下部は削平され、溝底に近い部分が遺存していたと捉えられる。
＜平面形・規模・主軸方向＞調査区内での規模は、長さ6.8ｍ、溝幅0.6ｍ、深さ３～12㎝である。長軸方向は、北から南へ直線的に延びる。
＜埋土＞１層は現水田耕作土、２層は耕地整理前の旧水田耕作土と判断される。本遺構に伴うのは３・４層と命名した土層で、黒褐色シルトを主体とする。自然堆積の可能性が高い。
＜床面・壁＞底面はやや凹凸がある。水が流れていたとすると、溝底の標高値からは南→北へ向かって流れる可能性が高い。壁は外傾して立ち上がる。
＜遺物＞なし。
＜時期＞検出面から、昭和20年代後半の耕地整理より古いことは確実である。しかしながら、出土遺物、重複遺構などが無く、時期は不明にある。埋土の様相についても、埋土の遺存状況が悪く、古代かそれより新しいか判断できない。

３号溝跡（第14図、写真図版８）
＜位置・検出状況＞調査区南部のＣⅠｐ25グリッド付近に位置する。表土除去後、Ⅳ層中で黒褐色シルトによる溝状のプランとして把握した。補足として、この付近は平成19年段階では埋蔵文化財包蔵地周知外の部分であったが、岩手県教育委員会生涯学習文化課の試掘調査結果から、埋蔵文化財包蔵地に追加された部分である。尼坂遺跡と牡丹野遺跡の境界付近であったことから、調査開始前はどちらの遺跡範囲にも属さない「可能性あり」とだけされていた部分である。従って、調査開始当初は便宜的に尼坂遺跡に含めていたが、岩手県教育委員会生涯学習文化課とのその後の協議で牡丹野遺跡に含めることとなった。
＜平面形・規模・主軸方向＞両端は調査地外に延びる。調査区内での規模は、長さは4.0ｍ以上、溝幅0.7ｍ、深さ35～45㎝である。主軸方向は北西－南東方向に向かって直線的に延びる。
＜埋土＞１層は水田の耕作土である。２・２ａ・３層と命名した土層が本遺構に伴う。２層と２ａ層は黒褐色シルトで、黄褐色粘土質砂質土（この近辺の地山土）を５～７％含有する。３層は、黄褐色粘土質砂質土で地山土の再堆積土である。第14図Ａ－Ａ´断面では２層と２ａ層が３層を挟むような堆積が確認された。対してＢ－Ｂ´断面では２層が埋土上～中位に、３層が埋土中位～底面に堆積する。２層は自然堆積土とおもわれたが、Ａ－Ａ´断面の土層堆積様相を憂慮すると、全て人為により埋め戻された可能性もある。ただ若干の留意点として、Ｂ－Ｂ´断面の下位にみられる３層の締まり

具合などからは、３層は底面の嵩上げを意図した整地土にも思える。その場合は、３層上面が使用時の溝底である可能性があり、２ａ層は溝掘り方への混入層である仮定もできようか。
＜床面・壁＞床面は平坦な部分が主体で、所々丸底気味の部分もある。水が流れていたと仮定した場合、溝底の標高値からは、北西→南東方向へ流れる可能性がある。壁は外傾して立ち上がる。
＜遺物＞出土遺物は土器類1.45ｇである。磨滅した土師器小片１点が出土した。不掲載とした。
＜時期＞不明にある。埋土の様相などから古代と推定される。

４号溝跡（第13図、写真図版８）
＜位置・検出状況＞調査区中央部のＢⅢｉ14グリッド付近に位置する。表土除去後、Ⅳ層中で黒褐色シルトによる細長いプランとして把握した。現況は水田で、調査時は調査事務所や駐車場への進入路として鉄板を敷設した直下に相当する部分である。調査の運営上、調査最終日にバックホーで表土を除去し、検出・精査を行った経緯のある地点で、早急な調査を行う必要があった。検出面はⅣ層ではなくⅠ層であった可能性があり、従って近世～現代の遺構であると推定される。土層断面図についても作成できなかったことを補足しておく。
＜平面形・規模・主軸方向＞南－北方向に延びるが、南側は途切れる。北側は、表土除去を行った際に、誤って80㎝程調査区外まで掘削してしまったが、更に調査区外へ延びることは確実である。規模は、長さ1.5ｍ、幅0.3ｍ、深さ10㎝前後である。
＜埋土＞上記のとおり土層セクション図を作成していないが、黒褐色シルトによる単層である。自然堆積なのか人為堆積なのかは不明にある。
＜床面・壁＞底面は平坦である。水が流れていたと仮定した場合、溝底の標高値からは流れの方向を推定できない。周辺地形の標高から推定すると、南→北の可能性がある。壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは５～８㎝である。
＜遺物＞なし。
＜時期＞上記のとおり、近世～現代と推定されるが、明確には不明である。

（5）柱　穴　群

調査区南部柱穴群（第15図）
＜位置・検出状況＞調査区南部のＣⅢｇ14～ｋ12グリッドに位置する。検出面はⅣ層地山粘土層であるが、現況は水田造成時に地山自体削平されている。当初は、柱穴状土坑の規模などの観点から現代の馳穴ではなく、古い時代の遺構と捉えた経緯がある。ただし、個々の埋土は水田耕作土に類似することも記述しておく。
＜柱穴番号＞１～５号柱穴状土坑で５個である。
＜規模＞柱穴状土坑の規模については、開口部径50㎝前後、深さは10～18㎝の数値内に収まる。柱穴群①や柱穴群②に所在する柱穴状土坑と比較すると、規模的には開口部径が大きく、深さが浅いものが主体にある。
＜埋土＞黒褐色シルト・暗褐色シルトを主体とし、単層のものが多い。埋土は全般に粘性が強く、やや湿っぽい。上記の様相は、水田耕作土に類似する。なお、柱痕は確認できない。
＜柱穴配置＞柱穴の配置について、１・４・５号柱穴状土坑の３個は同一軸線上に並ぶが、２・３号柱穴状土坑がずれる。ただし、各柱穴間の距離は、約4.7ｍの間隔を持って分布していることでは規則性がややある。

＜出土遺物＞なし。
＜時期＞時期について、調査区の幅が狭く、建物跡などの推定ができないことから、古代～現代までの時間幅としか言及できない。埋土の様相からは現代の可能性も考えられる。

調査区中央部柱穴群①（第16図）
＜位置・検出状況＞調査区中央部のＢⅢｆ３～１８グリッド付近に位置する。表土を除去した段階で35個の柱穴状土坑を検出した。検出面は、層地山粘土層を中心にⅡ層黒褐色シルト層である。
＜柱穴番号＞６～40号柱穴状土坑で35個である。
＜重複関係＞４号旧河道より新しく、３号旧河道より古いと捉えられるものが多い。
＜規模＞柱穴状土坑の規模については、開口部径23～64㎝、深さ12～45㎝の数値内にある。
＜埋土＞黒褐色シルトを主体とする単層である。
＜柱穴配置＞柱穴群２としたものは、大きく捉えると１号溝跡の南西側付近にまとまりを持って位置する。直線的に配列するされるものとしては、①23・24・39号柱穴状土坑、②21・22・25・26・28・29号柱穴状土坑が挙げられる。これらは、何れも南西－北東方向に延びる。ただし、これらの柱穴配列からは掘立柱建物跡は復元できない。
＜出土遺物＞（第21・22図12・36、写真図版10・11）６・32号柱穴状土坑から出土遺物があり、総量で土器類44.56ｇが出土した。６号柱穴状土坑より36の弥生時代後期の土器が、32号柱穴状土坑より12の須恵器が出土している。
＜時期＞３号旧河道と４号旧河道との新旧関係から、古代若しくは古代より新しいと捉えられるものが多い。ただし、詳細な時期は掴めない。埋土の様相から古代と考えたい。

調査区中央部柱穴群②（第17図）
＜位置・検出状況＞調査区中央部のＢⅢｃ21～ｆ21グリッドに位置する。表土を除去した段階で６個の柱穴状土坑を検出した。検出面はⅣ層地山粘土層である。
＜柱穴番号＞41～46号柱穴状土坑で６個である。
＜規模＞柱穴状土坑の規模については、開口部径16～73㎝、深さ10～37㎝である。規模的にはバラツキがある。
＜埋土＞黒褐色シルトを主体とする単層のものが多い。
＜柱穴配置＞これらの柱穴配列からは掘立柱建物跡は復元できない。
＜出土遺物＞なし。
＜時期＞時期について、古代～現代までの時間幅としか言及できない。埋土の様相からは現代の可能性も考えられる。

（６）旧　河　道

今回の調査では大きく捉えて４条の旧河道を検出した。これらの旧河道は現在の地図などからは読み取れない情報であることと、遺物などから概ねの埋没時期を想定できることから、人為により構築された遺構ではないが、図化・明示することとした。

１号旧河道（第18図、写真図版９）
＜位置・検出状況＞調査区南部のＤ「ｆ10～ｄ17グリッド付近に位置する。検出状況は、表土を除去

した段階で、北東～南西方向に延びる幅３～４ｍの暗褐色シルトの帯状のプランを検出し、堀、大溝、近現代の堰跡などを想定した経緯がある。調査方法は、先にプランの短軸方向に平行するように４本の試掘トレンチを設定し、土層の堆積状況や壁形や底面の様相把握に努めた。その結果、プラン把握の一つのキー層であった埋土上位にみられる暗褐色シルトの堆積が掴めない地点が多く、人為的に掘られた施設とするには躊躇する状況であった。従って、旧河道として登録することとした。
＜平面形・規模＞平面形は、やや蛇行気味に捉えられる。調査区内で把握される長さは約38ｍ、幅は３～４ｍ、深さ35～70㎝である。
＜埋土＞埋土は１～４ｂ層までの５つに分層した。最上位の１層は暗褐色シルトを主体に黄褐色粘土質土（地山土）が混じる。層厚は３～12㎝で薄い。堆積が自然なのか人為なのか判断ができなかった。２層は黒褐色シルトで層厚10～25㎝、径５～30㎝の円礫が多く含まれる。この２層は、主に南西方向より入り込んで堆積した自然堆積層と判断される。なお、12世紀の常滑の破片が、この２層から出土している。３層は黄褐色粘土を中心に褐色砂質土が多量に含まれる。層厚は10～40㎝である。この３層についても、２層と同様に主に南西方向から流入した自然堆積層で、合わせて水性堆積に由来すると推定される。４層は黄褐色粘土層であるが、円礫がほとんど含まれない部分を４ａ層に、円礫を多量に含む部分を４ｂ層として区分した。全体的には４ａ層が４ｂ層より上位に堆積する。自然堆積層である。
＜出土遺物＞（第21・23図13・40・41、写真図版10・11）埋土中から須恵器１点、常滑２点、合わせて85.98ｇの遺物が出土している。
＜時期＞遺物は平安時代の須恵器と12世紀の常滑片である。12世紀段階では埋没していた可能性で推定しておきたい。

２号旧河道（第19図、写真図版９）
＜位置・検出状況＞調査区北西部のＢⅡｎ２～ｐ10グリッドに位置する。耕作土などの表土を除去後、黒褐色や青灰色の粘土層と褐色砂質土層が入り混じった低湿地的な様相の土層が表れた。調査区の幅が狭く、プランの平面的な広がりは掴めないことから、各所にトレンチを設定し、掘り下げた。その結果、１ｍ程掘り下げた段階で、一升瓶の破片など現代と推定される遺物が出土した。掘削途中からは湧水が多く、調査区西部全体が水没したりなどした関係で、調査の安全を優先し、土層セクションの作成は割愛した。
＜平面形・規模＞調査区内での平面形は西～東に延びる。ただし、地元の方からは、昭和27年より以前には南西方向から北東方向に蛇行して流れる川があったことをご教示頂いた。
＜埋土＞上記のとおり、粘土や砂質土が混じった土層である。堆積様相からは自然堆積と思われたが、伝え聞いた内容によれば人為により埋められたものである。
＜出土遺物＞ビンの破片や何かの部材など出土した。昭和の産物であるが、昭和20年代後半よりは新しいように思われた。
＜時期＞地元の方から伝え聞いた内容からは、河が埋められたのは昭和27年のようである。出土遺物ともほぼ整合することから現代と捉えられる。

３号旧河道（第20、写真図版９）
＜位置・検出状況＞調査区中央部のＢⅡｙ３グリッド～ＢⅢｄ５グリッドに位置する。表土除去後、Ⅳ層中で検出した。

＜重複関係・建替え＞４号旧河道より新しい。
＜平面形・規模＞平面形や規模は窺い知れない。流れの方向について、現況の地形からは読み取れないが、調査所見としては北西から南東に延びた後、曲流して北東に向かう（※北東方向が下流と考えられる）。河幅については、北壁が調査区外に所在することが確実なのでわからない。調査部分からは、10m以上である。深さは35～120㎝である。
＜埋土＞第20図の断面図Ａ－Ａ´では、１層系が現代の耕作土、２層系が本旧河道に伴う堆積土、３層系・４層系・５層は４号旧河道に伴う埋土、６層は地山、11層は１号溝跡の埋土である。２層系は、色調と土質の違いで２～２１層に細分した。色調は、大別するとにぶい黄褐色系と黒褐色系がある。土質はシルト系、砂質土系、粘土系、泥土系、礫系に分かれ、さらにそれらが混ざるものもある。土質で区分すると以下のような様相である。①シルト系は埋土上位の２層が該当する。②砂質土系は２ａ層・２ｉ層・２１層で、埋土の上位～下位に至るまで各所に堆積する。２ａ層はにぶい黄褐色を呈し、埋土上位から下位に向かって下るように堆積する。２ｉ層と２１層は、埋土の下位付近において、泥土に混ざる様相で堆積がみられる。色調も泥土と同様に黒色を呈する。③粘土系は２ｅ層で、埋土最下位にみられ、色調は暗オリーブ褐色である。土層断面を見る限り比較的平坦気味に堆積している。④泥土系は２ｂ層・２ｃ層・２ｄ層・２ｆ層・２ｇ層・２ｊ層・２ｋ層である。色調は何れも黒色である。実施した分層からはこの泥土系が埋土の主体を占め、傾向としては粘土系や砂質土系の上下に堆積する様相で捉えられようか。その中で２ｆ層と２ｇ層はやや粘土に近い土質、２ｋ層は砂質に近い土質である。⑤礫系としたのは２ｈ層で、泥土系と粘土系に挟まれるように確認された。断面図を作成した地点の土層堆積としては、人為により埋められた様相ではなく、自然に埋没したように思われた。
＜出土遺物＞（第21・23図14・15・42～46、写真図版10・11）出土遺物は須恵器２点（84.89ｇ）と、17世紀後半～現代までの17点が出土した。14・15の須恵器２点は９世紀～10世紀と推定される。陶磁器類は、17世紀後半～18世紀の時期幅で推定される肥前産３点以外は、年代や産地が推定できないものがほとんどの状況であることから、42～46の５点を掲載した。
＜時期＞出土遺物は年代の幅が大きく時期の推定は難しいが、時期の上限は江戸時代中期、下限は昭和初期くらいと考えられる。そして、２号旧河道としたものの旧流路が、本旧河道と考えられよう。従って、４号旧河道が最も古期の流路の可能性があり、本旧河道の北側に２号旧河道（昭和27年まで存在したと考えられる）の続きの河道跡が存在する可能性が高い。

４号旧河道（第20、写真図版９）
＜位置・検出状況＞調査区中央部のＢⅢｃ３～ｊ10グリッドに位置する。表土除去後、Ⅳ層中で検出した。
＜重複関係・建替え＞３号旧河道及び１号溝跡より古い。
＜平面形・規模＞平面形は、北西から流れる２つの流路が、ＢⅢｆ６グリッド付近で合流し、南東に延びる。その後どちらに流れが続くのかは現況地形からは判断できない。推測を記述すると、プレハブ進入路下であったＢⅢｌ18グリッド付近では検出できないことから、それより南側か、若しくは大きく曲流して北東方向に流れの方向が変わるのか、２つの可能性を提示しておきたい。規模は、河幅８～14m、深さは、浅いところで約20㎝である。最深部については、調査の安全性を優先し完全な底までの掘削を行っていないため不明であるが、125㎝以上を測る。また、ＢⅢｅ３・ｅ４・ｆ３・ｆ４グリッド付近に中洲的な空間を持つことが合わせて判明した。

＜埋土＞第20図の断面図Ａ－Ａ´・Ｂ－Ｂ´３～５ａ層が本旧河道に伴う堆積土である。全て自然堆積層である。①３層系は出土遺物と重複する１号溝から、弥生時代後期以降平安時代10世紀前半までの時間幅で埋没した土層と捉えられる。色調と土質の違いで新しい堆積層順に３～３ｅ層に細分した。②４層系は、４層と４ａ層の２つに大別した。遺物は出土していない。４層は、土質や色調は３層や３ｅ層と類似するが、Ｂ－Ｂ´断面の観察からは３ｅ層より古いので、弥生時代後期以前の堆積層と判断したい。４ａ層は、下位の５ａ層に類似する土質・色調なので、４層が水成的な作用を受けた土層の可能性が示唆されるが、断定できない。③５層系は湿地土と判断される土質である。土質を見る限り、河に伴う堆積土とした場合は基本的に流れが緩やかなのか、若しくは緩やかになった時分の河底下位の堆積土なのか。何れ沼地的な低湿地的な堆積土の可能性で考えられようか。
＜出土遺物＞（第21～24図16～33・37～39・47・51、写真図版10～12）出土遺物は、土器類3,277.2ｇ、近代と推定される陶磁器類５点、石器１点が出土した。土器類は、弥生時代後期の土器片が９号ビニール袋で１袋分、古代の土器数点である。弥生土器は地文のみのものが多く、明確には時期の特定が難しい。ただ、地文の施文の様子や土器胎土の様相から、弥生時代後期と推定される。土師器は、９世紀後半～10世紀前半と推定されるものが含まれるものの、磨滅が激しく、時期の特定が難しいものが大部分である。また、異時期の流れ込みの可能性もある。陶磁器類は、17世紀後半～18世紀と推定される肥前１点、18世紀代の大堀相馬１点、近代１点、現代１点、不明１点である。51の近代と推定される摺り鉢を掲載した。これらの陶磁器類は３号旧河道との遺物取り上げの際に混在した可能性もあり、本旧河道とは異時期と捉えられる。
＜時期＞出土遺物から、弥生時代後期～古代と考えられる。埋土の色調や土質などの様相についても、明らかに近代～現代とは異質である。また、埋土の項で上記したとおり、埋土の堆積様相からは、弥生時代後期には埋没が始まっていた可能性がある。

4　出　土　遺　物

今回の調査では、大コンテナ（40㎝×30㎝×30㎝）で1.5箱分の遺物が出土した。土器類は土師器・須恵器合わせて約１箱分、弥生土器は９号袋で約１袋分、陶磁器57点、石器７点、チップ・フレークが少量である。

（1）古代の土器

土師器と須恵器合わせて総重量4421.04ｇが出土した。遺構内が3,979.32ｇ、遺構外出土分が437.13ｇである。出土地は４号旧河道を中心とする。接合作業を行った結果、完形や略完形に復元された個体はなく、全て破片資料である。掲載基準は、３㎝以上の破片、若しくは口縁部資料を中心とし、土師器と須恵器合わせて１～35を掲載した。

土師器は、坏、高台坏、甕の３器種がみられた。坏は７・16の２点を図化したが何れもロクロ成形による。18は高坏の脚部と推定される。今回の調査で最も多く出土したのが甕で、１～４・６・８・９・19～26の15点を掲載した。長胴甕と推定されるものがほとんどで球胴甕は認められない。ロクロ成形のものと非ロクロ成形の２種がある。

土師器は、全体の器形を窺い知れるものがないことから詳細についてはわからない。９世紀後半から10世紀前半の時間幅で捉えられようか。

須恵器は、坏、甕、壺の３器種で、器種判別できないものもある。坏は５・10・17の３点で、14・33は坏の可能性が高いものの、器種は不明にある。甕は11・13・15・27・28・29・34・35の８点で、

他に12と32にその可能性がある。

（2）弥生時代の土器

弥生時代後期と推定される土器片が、調査区中央部で検出した4号旧河道より比較的まとまりを持って出土した。全て小片で総量は9号袋1つ分である（約3kg）。36～39の4点を掲載した。36以外は地文のみで、文様を確認できるものがほとんどなく、詳細な時期の特定は困難な資料である。

36は、RL横回転を施文後、細めの沈線によりモチーフされる。このモチーフがどのように展開するのか判断できない。

37～39は、何れもRLが横回転及び斜回転されるもので、原体の回転方向に規則性が感じられない様相で捉えられる。

文様のある36と地文のみの37～39を比較した場合、原体にRLを用いていることと、節や条の様子が類似することから、同時期のものと推定しておきたい。

（3）陶　磁　器　類

総数で57点の陶磁器類が出土した。時期毎の内訳は、12世紀2点（常滑）、17世紀後半～18世紀2点（肥前）、18世紀代5点（肥前3点、大堀相馬2点）、18世紀後半～19世紀1点（肥前？）、19世紀代7点（何れも産地不明）、19世紀以降10点（何れも産地不明）、近代5点（何れも産地不明）、近代？1点（産地不明）、現代19点（産地不明）、その他時期不明5点である。その内、40～48の9点を掲載した。

40・41は12世紀と推定される常滑産甕の破片である。何れも1号旧河道から出土した。

42は18世紀代と推定される肥前産の皿である。42以外に肥前産と推定されるものが5点出土しているが、何れも17世紀後半～18世紀と捉えられる。出土地は1号旧河道と3・4号旧河道及びその周辺に設定・掘削した試掘トレンチである。

43～48は、産地不明であるものの、近世の時間幅で推定される。

（4）石　　器

石器は総数で7点出土した。剥片石器が5点、礫石器が2点である。その内、49～55の7点を掲載した。剥片石器5点の器種の内訳は、スクレイパー4点と石錐1点である。49のスクレイパーは、表面の左側縁と裏面右側縁に二次剥離が施されるものである。50のスクレイパーは、石匙の未成品の可能性を有するものである。51のスクレイパーは黒曜石製で、先端と両端の表裏面に二次剥離が施される。主要な刃部は、右辺若しくは先端と推定される。52の石錐は、黒曜石製である。53のスクレイパーは、平面形が五角形気味を呈し、3辺の表面に二次剥離が施される。礫石器2点は磨石である。54と55は磨石で、2点ともに表裏面に磨面が形成される。出土地から帰属時期を推定すると、54は平安時代、55は弥生時代の可能性が考えられる。

5　総　　括

今回の調査で検出した遺構は、竪穴住居跡2棟、竪穴状遺構1基、土坑4基、溝跡4条、柱穴状土坑32基、旧河道4条である。

（1）遺　　構

竪穴住居跡は２棟、竪穴状遺構は１基検出した。何れも古代と推定される。１号竪穴住居跡は、水田造成や整備など耕地整理に伴い削平が著しく、検出面から数cmで床面が現われるなど、遺存状況が悪く、遺構の詳細な情報は得られなかった。ただし、出土遺物から９世紀後半～10世紀前半と推定され、合わせて十和田ａ火山灰との関係から10世紀前半より古い時期である可能性が導かれた。２号竪穴住居跡と１号竪穴状遺構についても、１号竪穴住居跡と同様に遺存状態が悪く、尚且つ出土遺物や十和田ａ火山灰との関係もないことから、埋土の様相から古代と推定したに留まる。

土坑は４基検出し全て古代と捉えられる。その内１・２・４号土坑の３基は、１号竪穴住居跡と重複関係にあり、尚且つ１・２号土坑の埋土には十和田ａ火山灰が認められる。１号竪穴住居跡の廃絶期は、出土土器からは９世紀後半～10世紀前半の時期幅で捉えられる。従って、十和田ａ火山灰降下時期より古い可能性があるこれらの土坑は、１号竪穴住居跡廃絶期と大差ない時期に構築された可能性がある。調査歴で記述した岩手県教育委員会が調査した地点においても、同様に竪穴住居跡を切る土坑が検出されている。このことは、これらの土坑が竪穴住居跡の廃絶時の何らかの行為に関係する遺構である可能性も示唆される。

溝跡は４条検出した。調査区の幅が狭く、平面的な繋がりなどはわからない。１号溝跡は出土遺物などから９世紀後半～10世紀前半の可能性がある。合わせて、４号旧河道と重複関係にあることから、本遺構を構築した段階においては、４号旧河道の流路は埋没していたことがわかった。２・３号溝跡は、埋土の様相からは古代の可能性があるものの、時期を特定できない。４号溝跡については近世～現代の可能性で推定されるが、特定はできない。

柱穴状土坑は、柱穴群②とした調査区中央部付近から顕著に検出された。柱配置の規則性などが窺えなかったことから、掘立柱建物跡の復元はできなかったが、この周辺において古代に何らかの建物が存在したことが示唆される。

旧河道は４条を検出した。調査区西部で検出した１号旧河道からは、土師器と12世紀の常滑２点が出土した。この常滑が旧河道の時期推定に直結させ結び付けられるのかは検討を要する。しかしながら、この遺跡からも奥州藤原氏に関連する可能性がある遺物が出土したことは特記事項の一つと捉えられよう。２・３・４号旧河道については、この近辺に南西から北東方向に向かう比較的大きな河があったことが明らかとなり、合わせて牡丹野遺跡を一部横切り、北側外縁部に流れるが続いていることもわかった。これらの旧河道は、一連の変遷化にあると捉えられ、少なくても弥生時代後期から昭和27年までの長い間存在したことがわかった。

（２）遺　　物

今回の調査で出土した土師器や須恵器は、完形や略完形にまで復元された資料はなく、ほとんどが小破片である。土師器は、坏は少なく、甕が最も多い。甕類の中では、長胴甕と推定される破片が多く、球胴甕は認められない。また、これらの甕はロクロ成形のものと非ロクロ成形の２種がある。坏類や甕類の年代観からは９世紀後半～10世紀前半の時間幅で捉えられる。須恵器は、圧倒的に甕類の破片が多く、坏や壺は少ない。今回の調査において層位的に良好と判断される資料としては、１号竪穴住居跡出土の１～５が挙げられる。これらの帰属時期は、十和田ａ火山灰の降下時期より古い可能性が極めて高いことを指摘できよう。

弥生土器は、中～後期と推定される。地文のみで詳細な時期などは特定できない。なお、今回出土した土器は、地文にRL横回転を多用する特徴が見受けられる。

陶磁器類は、12世紀から現代まで総数で57点の陶磁器類が出土した。12世紀の常滑の破片２点が出

土したことは特記事項である。出土数が多いのは、19世紀以降～現代までのもので、産地の特定ができない。また、近世においては、肥前産が一定量出土している。

石器はスクレイパーを中心とする。特記事項としては、52の黒曜石製の石錐の出土が挙げられる。

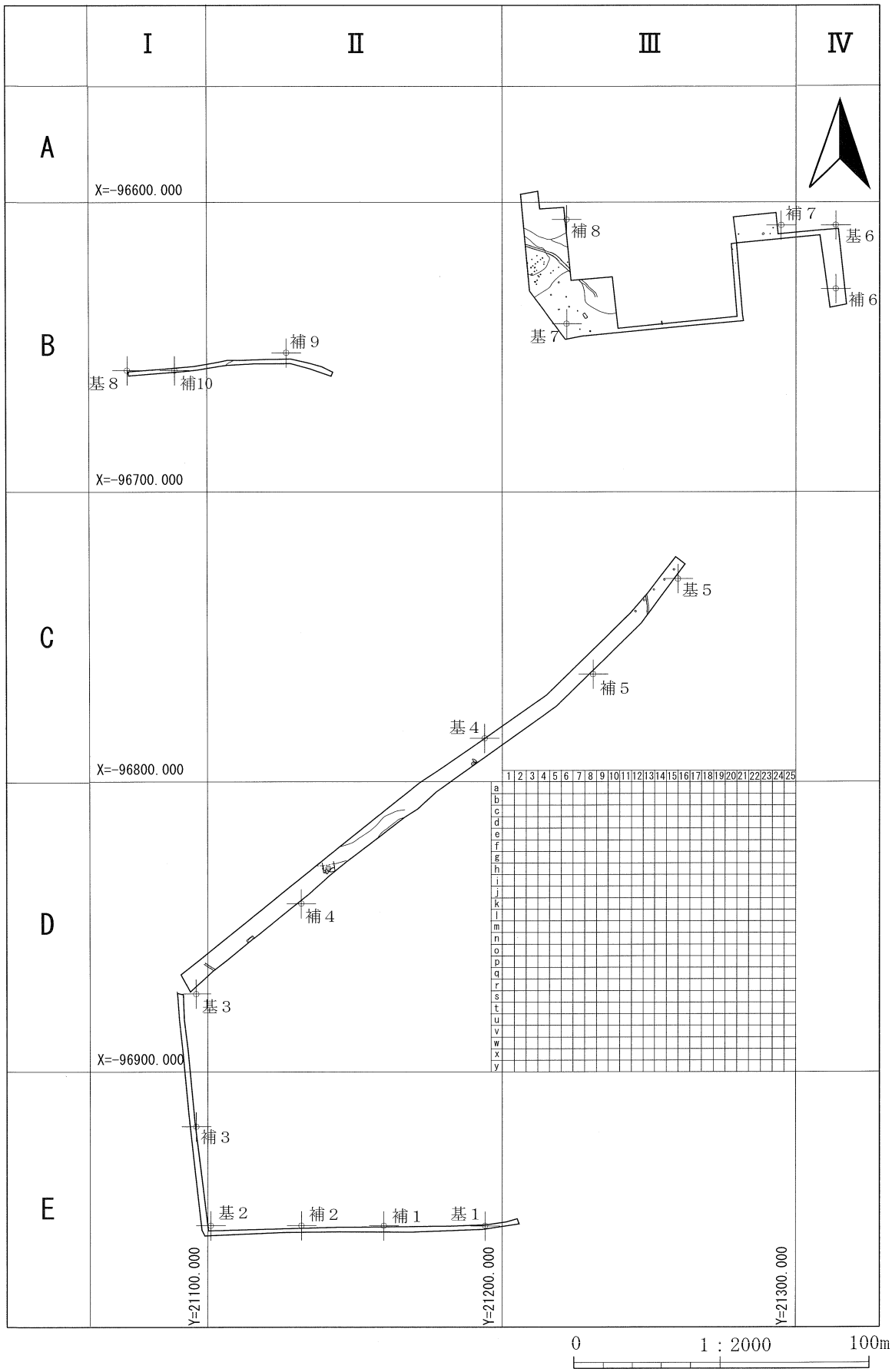
（3）ま　と　め

ここでは、調査区毎に調査成果についてまとめてみる。

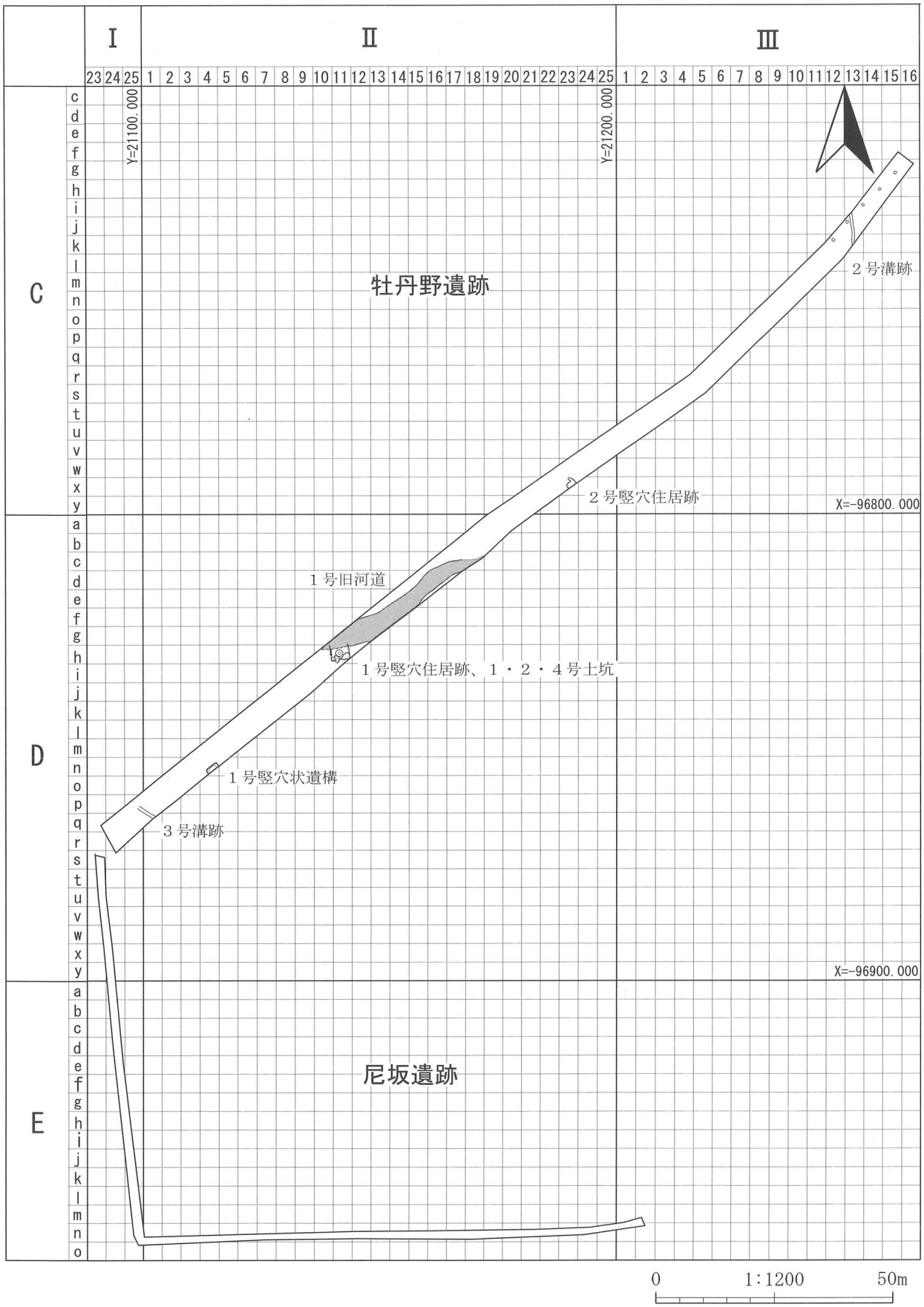
調査区南部では、２棟と数は少ないが竪穴住居跡が検出されたことから、周知されていたとおり牡丹野遺跡が古代の集落跡であることが検証されたことにおいて、一つの成果と評価できよう。

調査区中央部については、竪穴住居跡は未検出でその他の遺構についても希少な状況にあったが、３・４号旧河道を中心に弥生時代後期の土器、平安時代、近世～近代の陶磁器などが出土したことで、各時期においての人的活動の一端が明らかとなった。

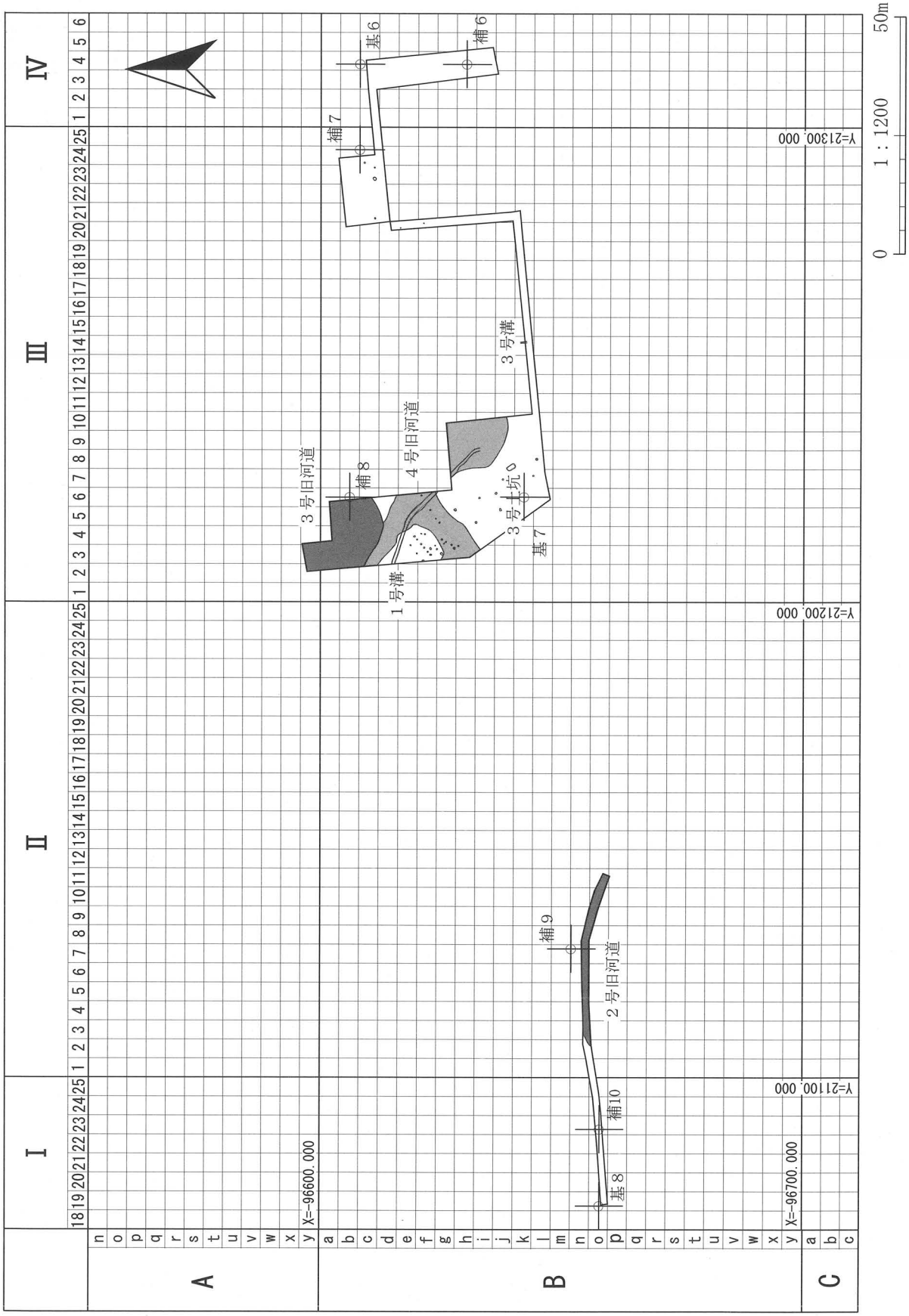
調査区北西部においては、２号旧河道を検出したものの、遺構・遺物などの人的活動の痕跡は検出されなかった。ただし、隣接する付近の水田からは、岩手県教育委員会の試掘調査では遺物が確認されている。また、調査区北西部からみて100m程南西側の畑部分では、須恵器片が確認されていることから、２号旧河道の周辺においても、古代の集落跡が広がる可能性は高い。また、所見的な内容になるが、今回の調査内容から牡丹野遺跡の集落の中心域は、調査区南部より北側に広がることが予想される。そして、現在遺跡の標柱が立てられている調査区中央部に接する畑部分や宅地部分及びその西側、更には調査区北西部からみて南東側の範囲が想定されよう。上記した集落の中心域と推定される部分は、現水田部分と比べて標高がやや高い微高地にあることも補足しておきたい。


Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
A
B
C
D
E
X=-96600.000
X=-96700.000
X=-96800.000
X=-96900.000
補8
補7
基6
補6
基7
補9
基8
補10
基5
補5
基4
補4
基3
補3
基2
補2
補1
基1
Y=21100.000
Y=21200.000
Y=21300.000
0
1：2000
100m

第8図　遺構配置図

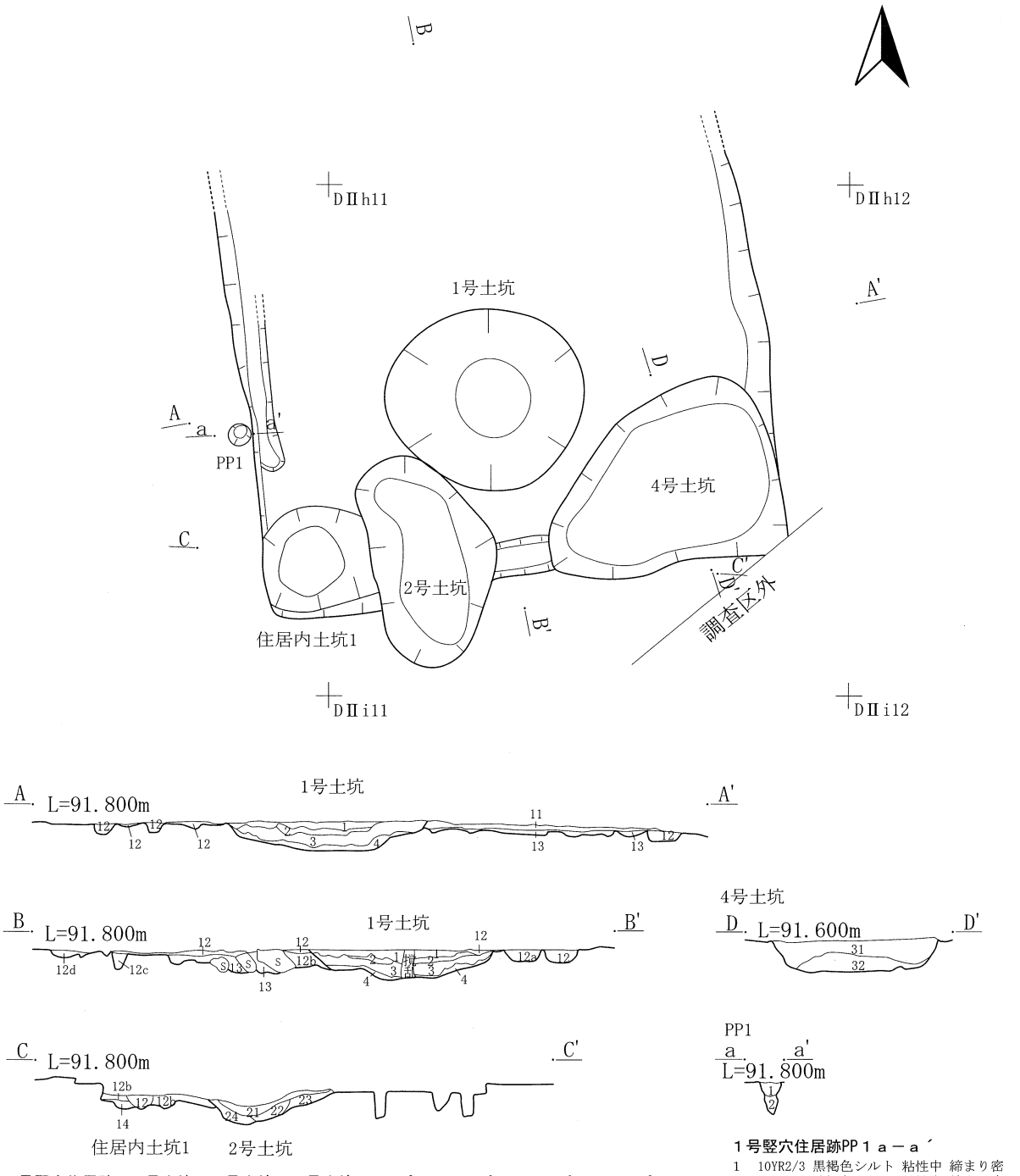


第9図　調査区南部遺構配置図



第10図　調査区中央部・西部遺構配置図

1号竪穴住居跡、1号土坑・2号土坑・4号土坑



1号竪穴住居跡・1号土坑・2号土坑・4号土坑A－A´・B－B´・C－C´・D－D´

1　10YR1.7/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎（1号土坑）
2　10YR7/3 にぶい黄橙テフラ 粘性弱 締まりやや疎 黒色シルトブロック30%混入（1号土坑※To－a層）
3　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性中 締まりやや疎 小礫径1～2cm1%混入（1号土坑）
4　10YR3/4 暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 φ1～3cmの円礫少量混入（1号土坑）
11　10YR3/4 暗褐色シルト 粘性弱 締まり密 酸化鉄の集積（1号竪穴住居跡）
12　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性弱 締まりやや弱（1号竪穴住居跡貼床）
12a 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 締まりやや密 黄褐色粘土ブロック10%混入（1号竪穴住居跡貼床）
12b 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや密 φ1～10cm礫多量に混入（1号竪穴住居跡貼床）
12c 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 締まりやや密 φ1～3cmの礫小量混入（1号竪穴住居跡貼床）
12d 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性やや弱　締まりやや密 φ3cmの礫・褐色粘土粒15%含む（1号竪穴住居跡貼床）
13　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性中 締まり中 黄褐色粘土5%　（1号竪穴住居跡貼床埋土）
14　10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 締まりやや疎　（※1号竪穴住居跡貼床若しくは地山）
21　10YR2/2 黒褐色シルト 粘性中 締まり中 黄褐色粘土1%（2号土坑）
22　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性中 締まり中　（2号土坑）
23　10YR3/4 暗褐色シルト　粘性中 締まり密（2号土坑）
24　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性中 締まり中　To－a2%混入（2号土坑）
31　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性中 締まり密（4号土坑）
32　10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 締まり密（4号土坑）

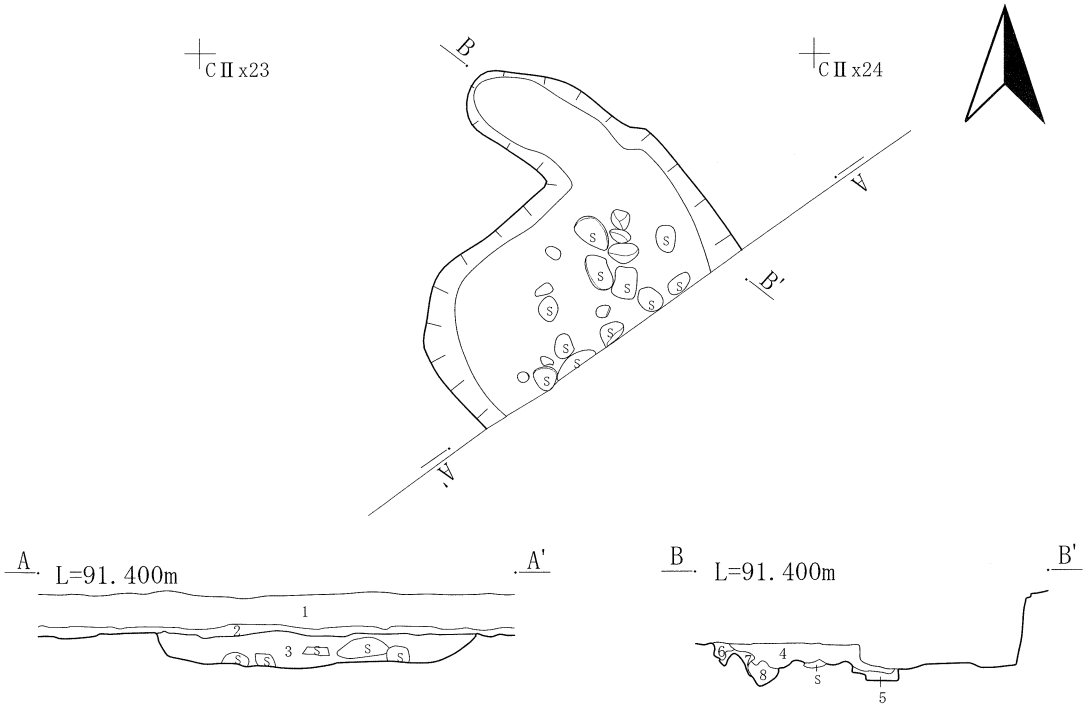
1号竪穴住居跡PP1 a－a´

1　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性中 締まり密
2　10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 締まり密

0　1：50　2m

第11図　1号竪穴住居跡、1・2・4号土坑

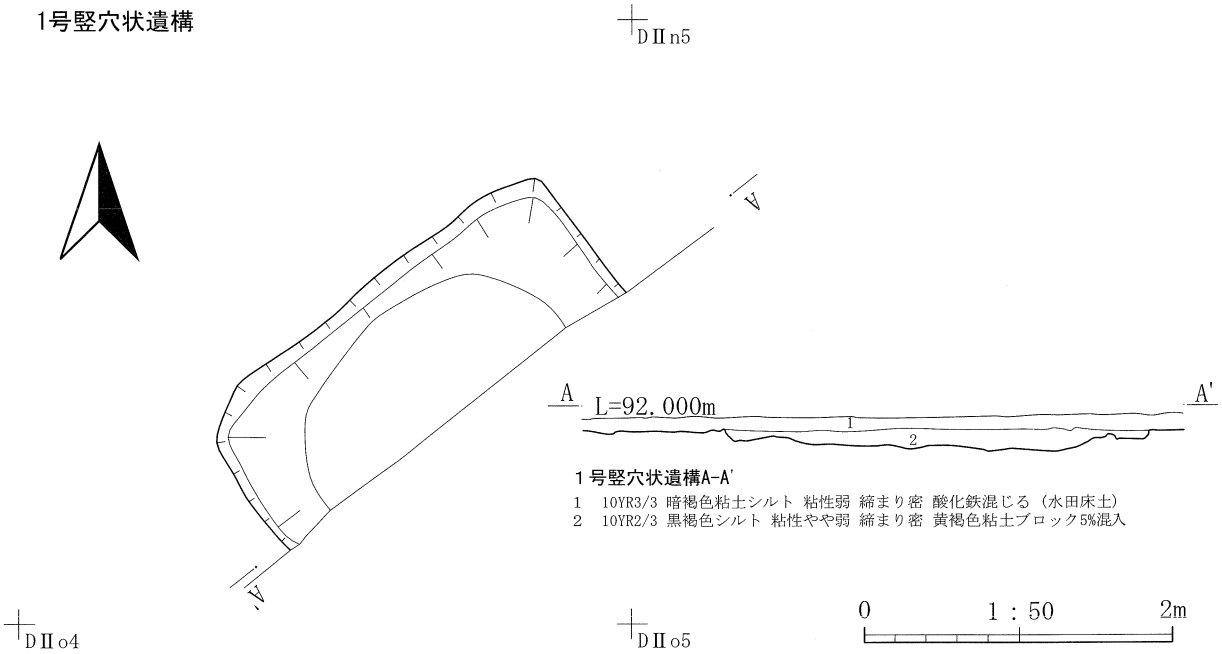
2号竪穴住居跡



２号竪穴住居跡A-A'・B-B'

1　10YR3/2 黒褐色シルト 粘性やや強 締まり密 （現水田土）
2　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性やや強 締まり密 （旧水田土※昭和28年以降）
3　10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや強 締まり中
4　10YR2/2 黒褐色シルト 粘性中 締まり中 黄褐色粘土質砂質土7%混入
5　10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 締まりやや疎
6　10YR3/4 暗褐色シルト 粘性弱 締まりやや密
7　10YR4/6 褐色粘土質土 粘性やや強 締まり中 ※地山
8　10YR4/4 褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 黄褐色粘土7%混入

1号竪穴状遺構

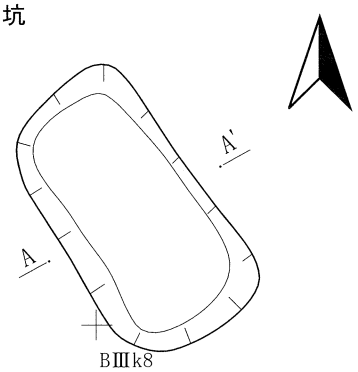


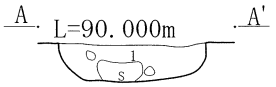
１号竪穴状遺構A-A'

1　10YR3/3 暗褐色粘土シルト 粘性弱 締まり密 酸化鉄混じる（水田床土）
2　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり密 黄褐色粘土ブロック5%混入

第12図　２号竪穴住居跡、１号竪穴状遺構

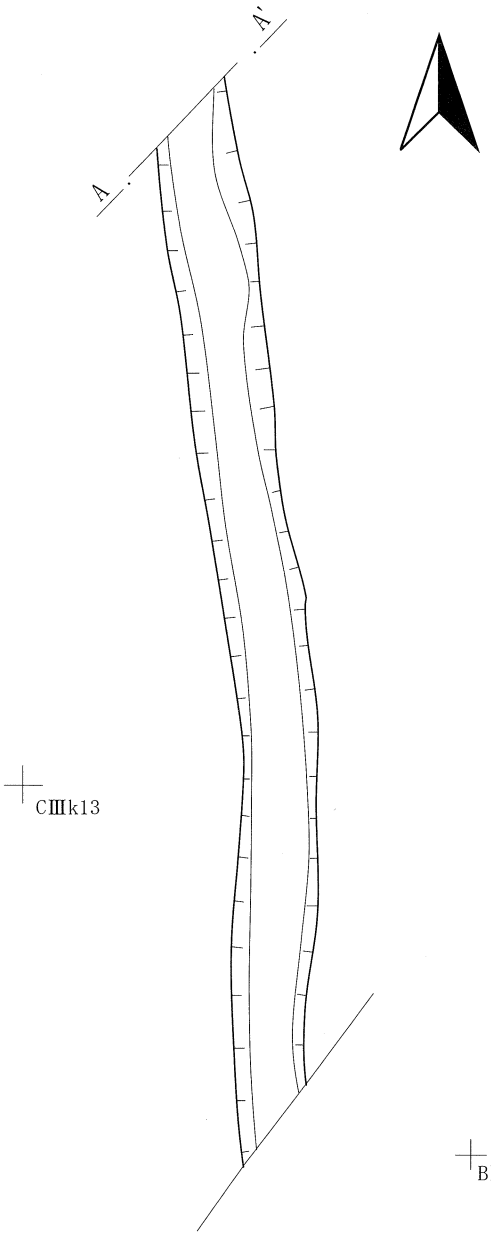
3号土坑

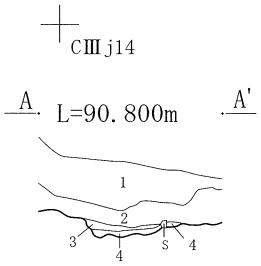




３号土坑A-A'
1　10YR2/2 黒褐色シルト 粘性中 締まりやや密 黄褐色粘土ブロック20%混入

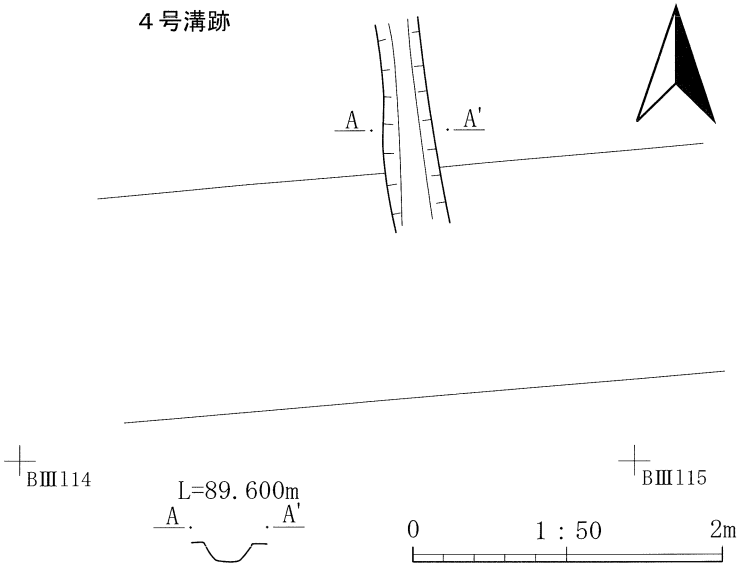
2号溝跡





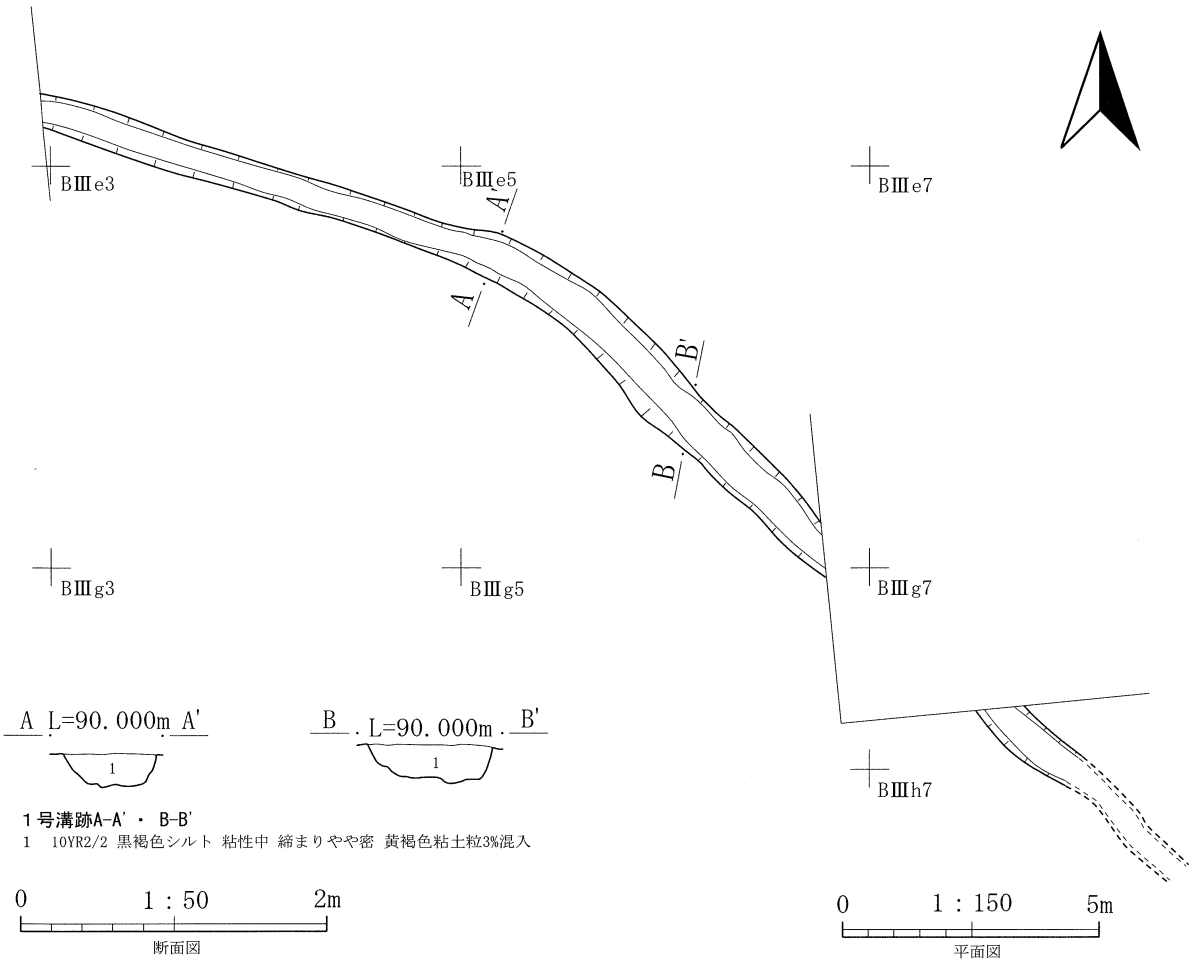
２号溝跡A-A'
1　10YR2/2 黒褐色シルト 粘性中 締まりやや密・黄褐色粘土粒3%含む　(耕作土)
2　10YR2/2 黒褐色シルト 粘性中 締まり密 酸化鉄5%含む　(旧耕作土)
3　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや密
4　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性中 締まりやや密

４号溝跡



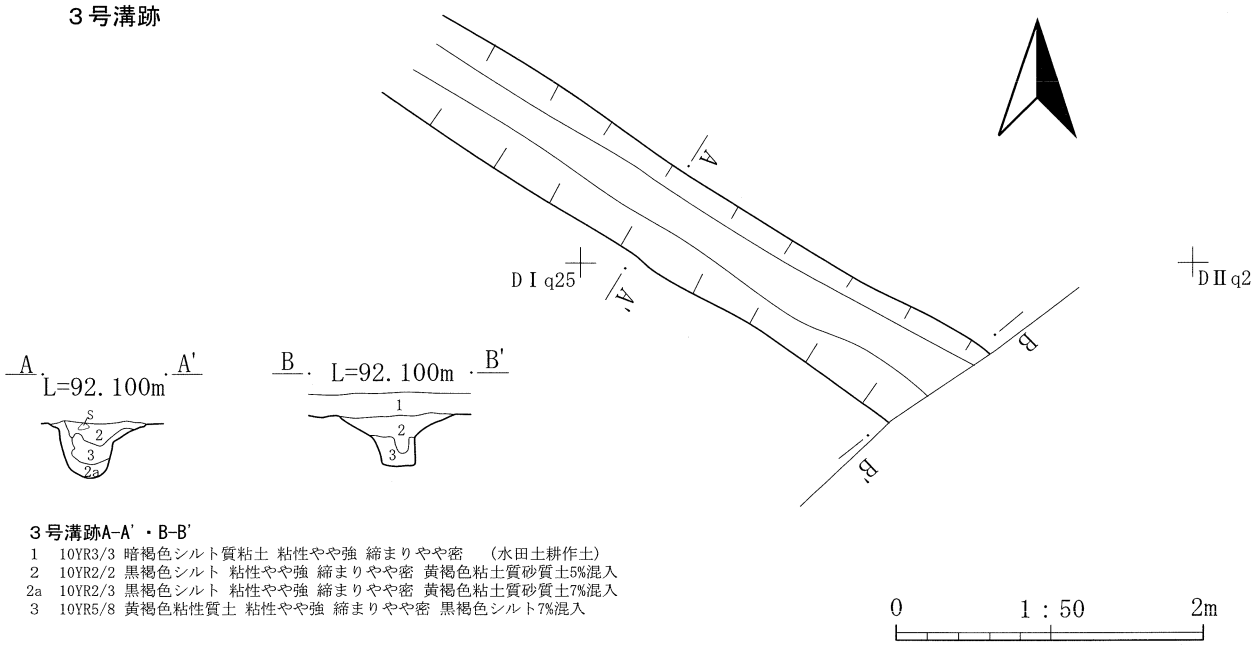
第13図　３号土坑、２・４号溝跡

1号溝跡



1号溝跡A-A'・B-B'
1　10YR2/2 黒褐色シルト 粘性中 締まりやや密 黄褐色粘土粒3%混入

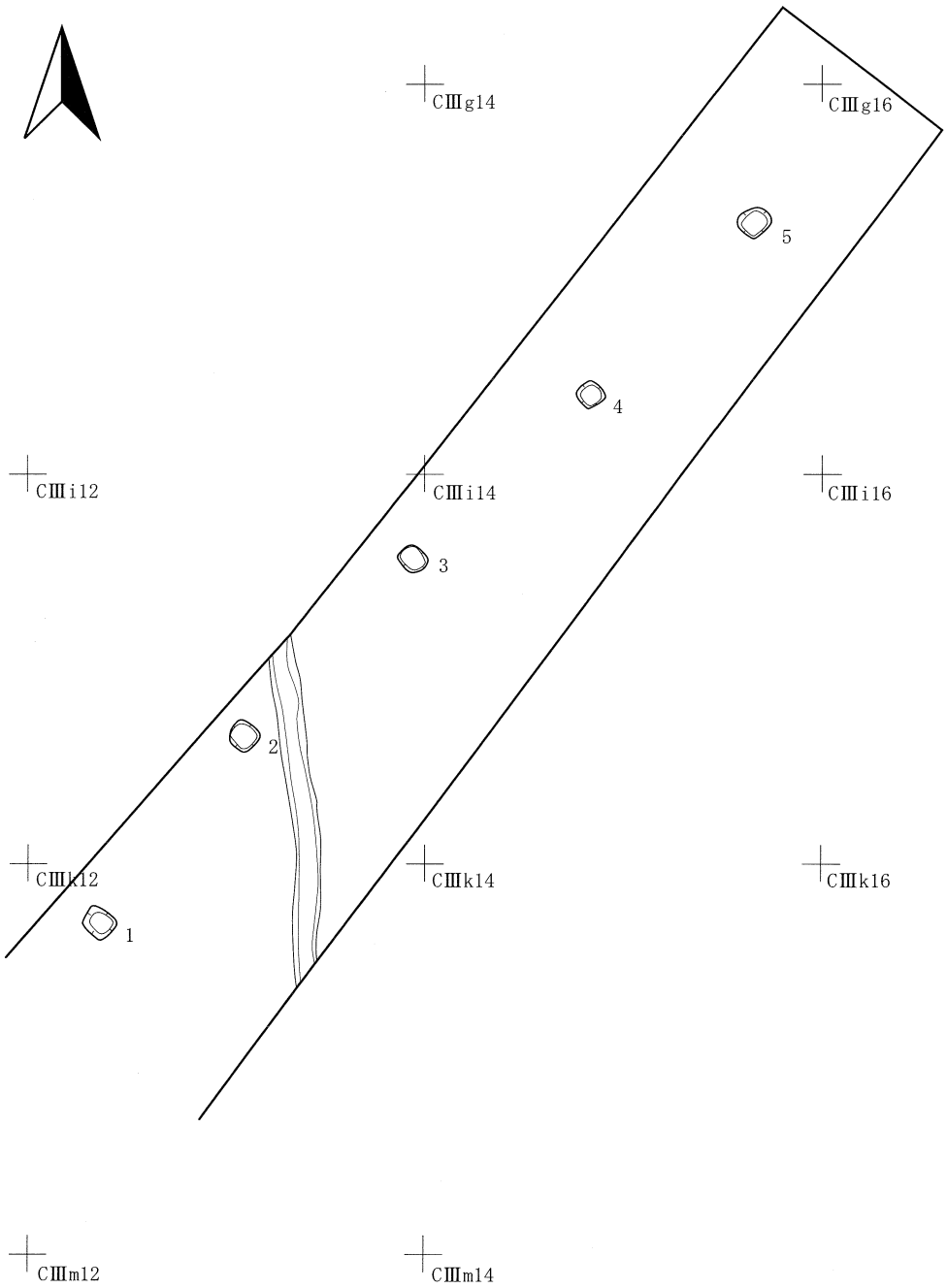
3号溝跡



3号溝跡A-A'・B-B'
1　10YR3/3 暗褐色シルト質粘土 粘性やや強 締まりやや密　（水田土耕作土）
2　10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや強 締まりやや密 黄褐色粘土質砂質土5%混入
2a　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性やや強 締まりやや密 黄褐色粘土質砂質土7%混入
3　10YR5/8 黄褐色粘性質土 粘性やや強 締まりやや密 黒褐色シルト7%混入

第14図　1・3号溝跡

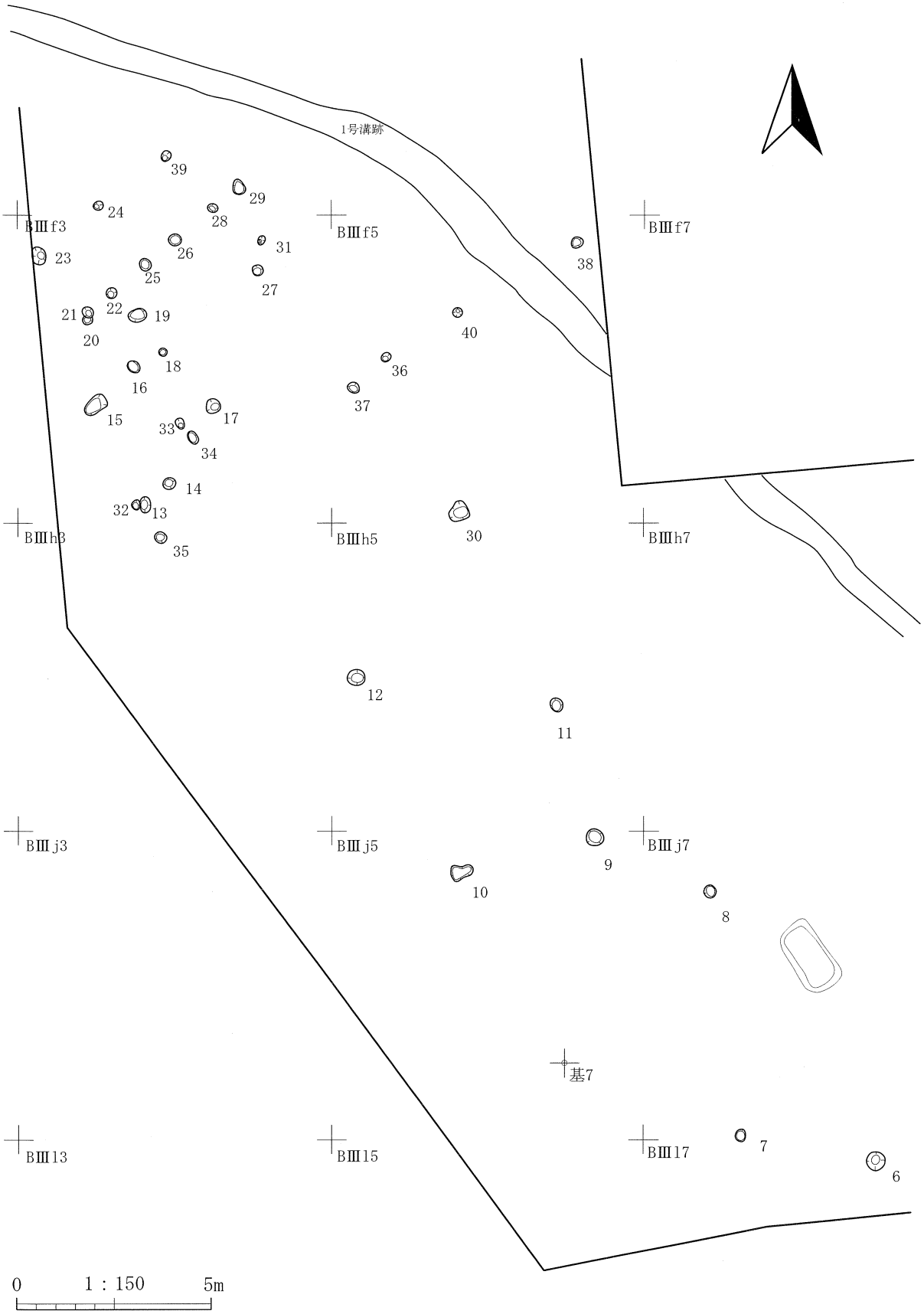
調査区南部柱穴群



0　1：150　5m

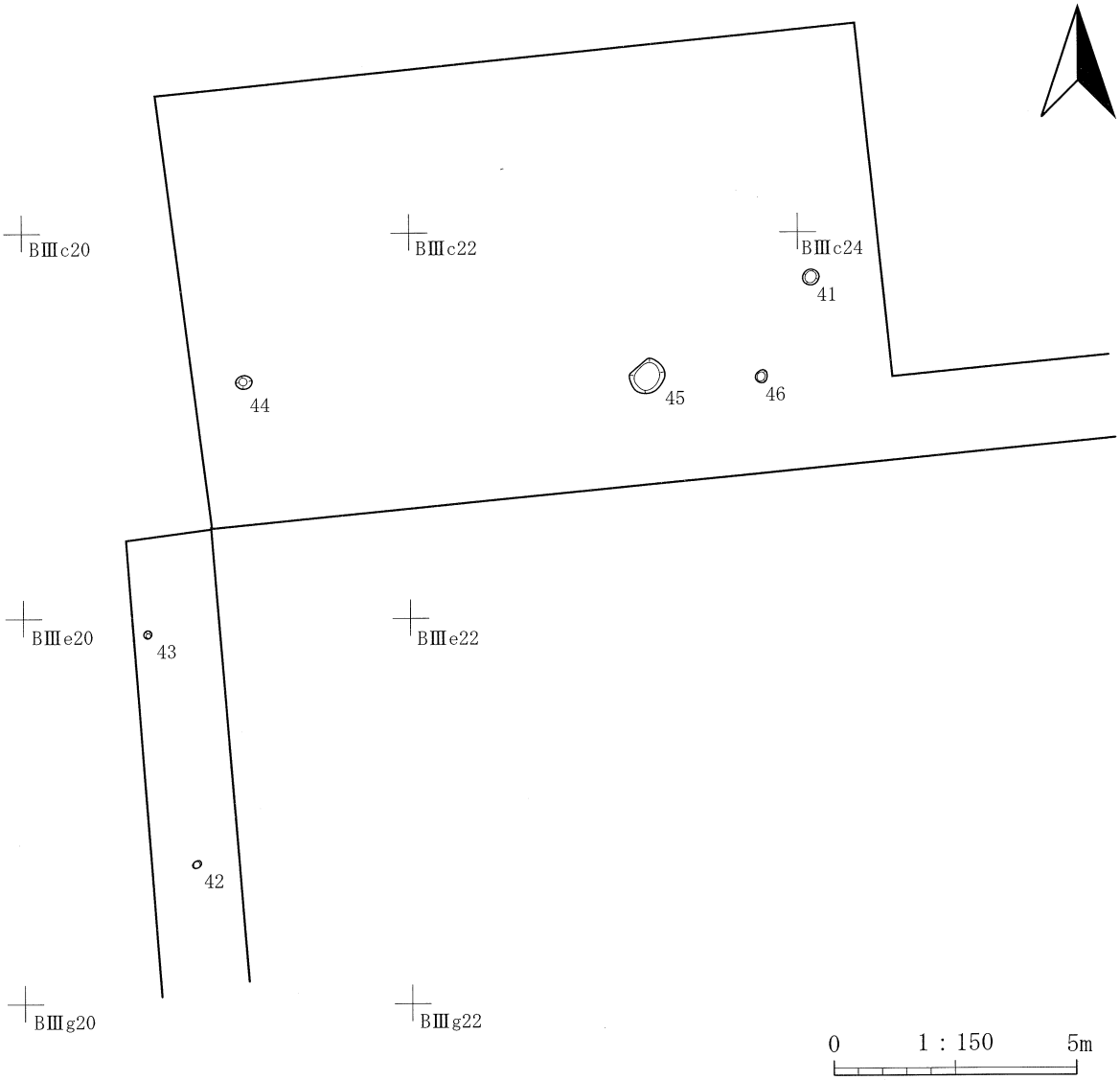
第15図　調査区南部柱穴群

調査区中央部柱穴群①



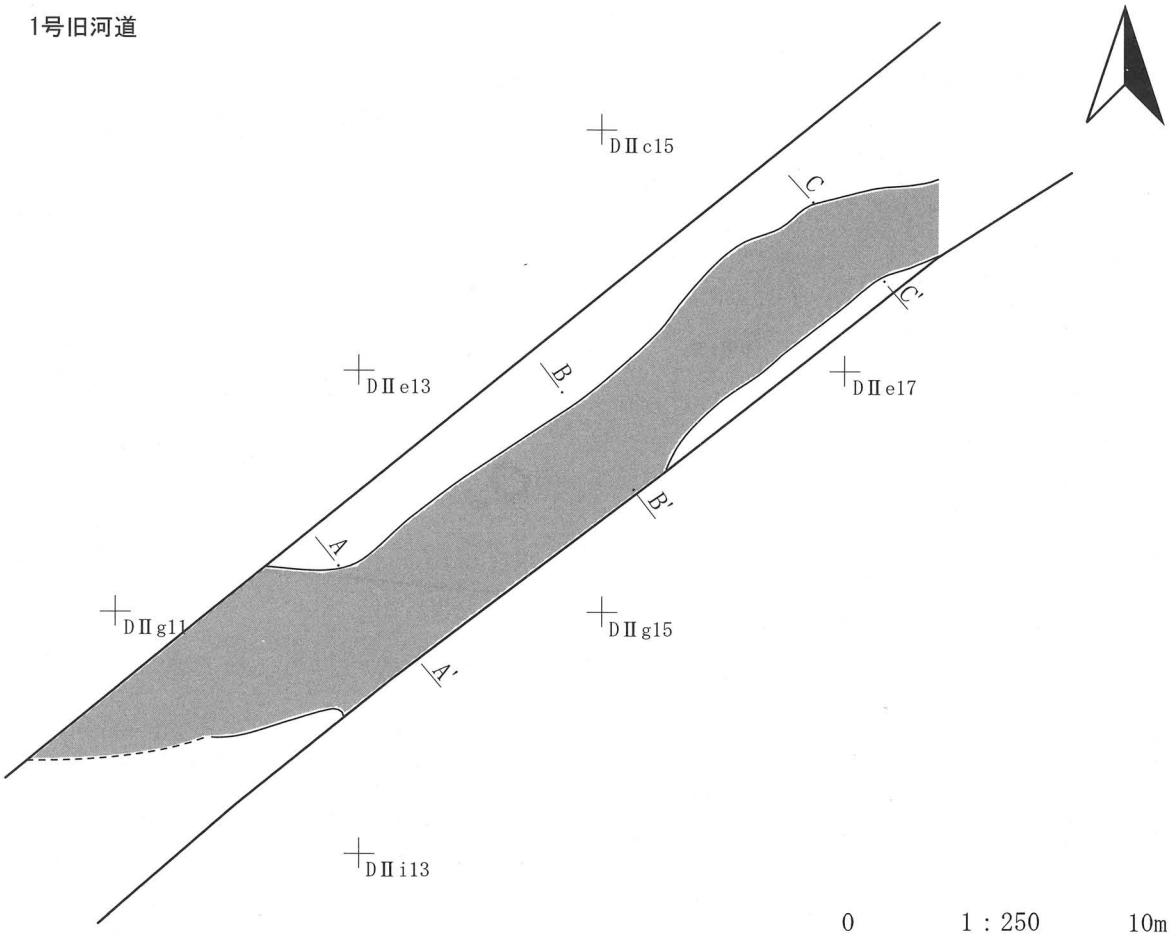
第16図　調査区中央部柱穴群①

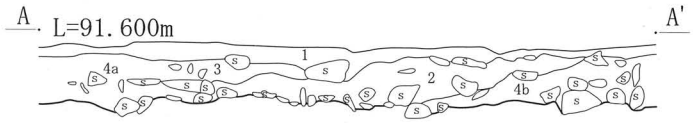
調査区中央部柱穴群②

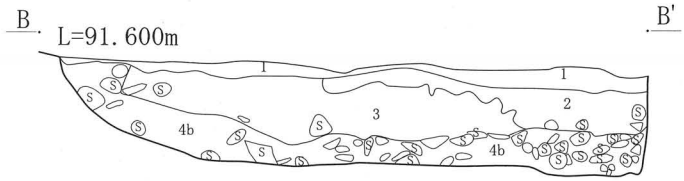


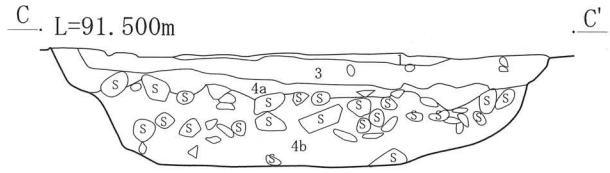
第17図　調査区中央部柱穴群②

1号旧河道









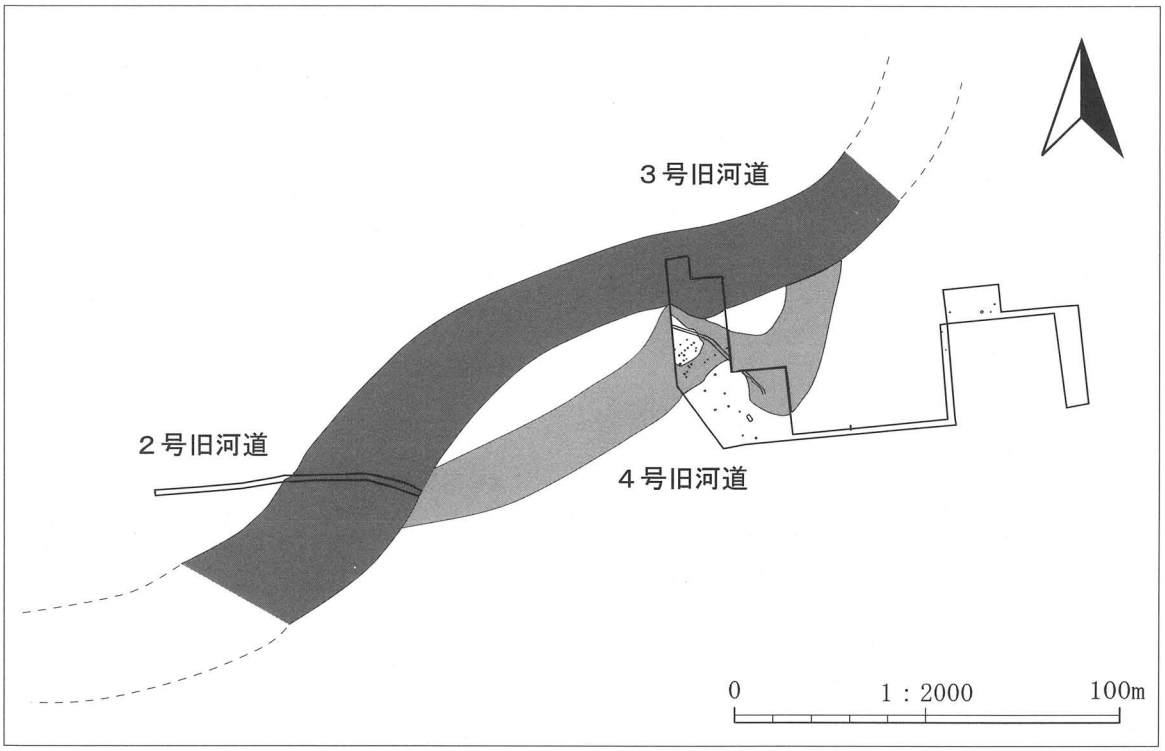
1号旧河道A-A'・B-B'・C-C'

1　10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 締まりやや密
　　黄褐色粘土質土(地山土)20%混入
2　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性中 締まりやや疎
　　径5～30cmの円礫20%混入
3　10YR5/8 黄褐色粘土 粘性中 締まり中
　　褐色砂質土30%混入
4a　10YR4/6～5/8 褐～黄褐色砂質粘土 粘性弱
　　締まりやや疎
4b　10YR5/8 黄褐色粘土 粘性やや弱 締まりやや疎
　　円礫（径5～40cm）40%混入

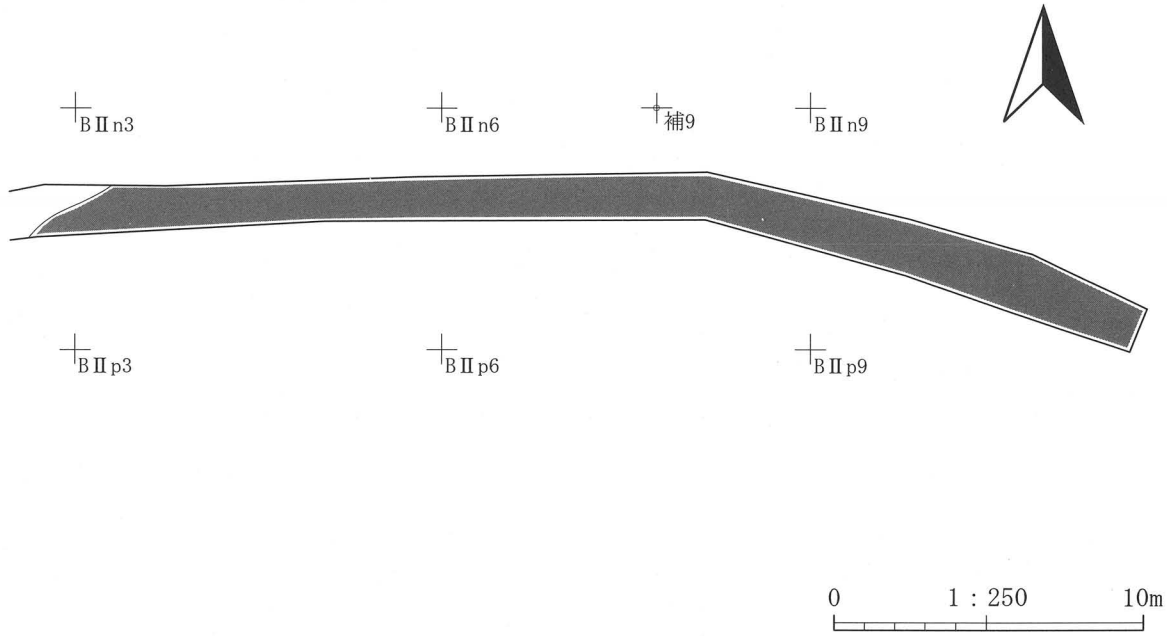
0　1：50　2m

第18図　1号旧河道

旧河道流路推定図

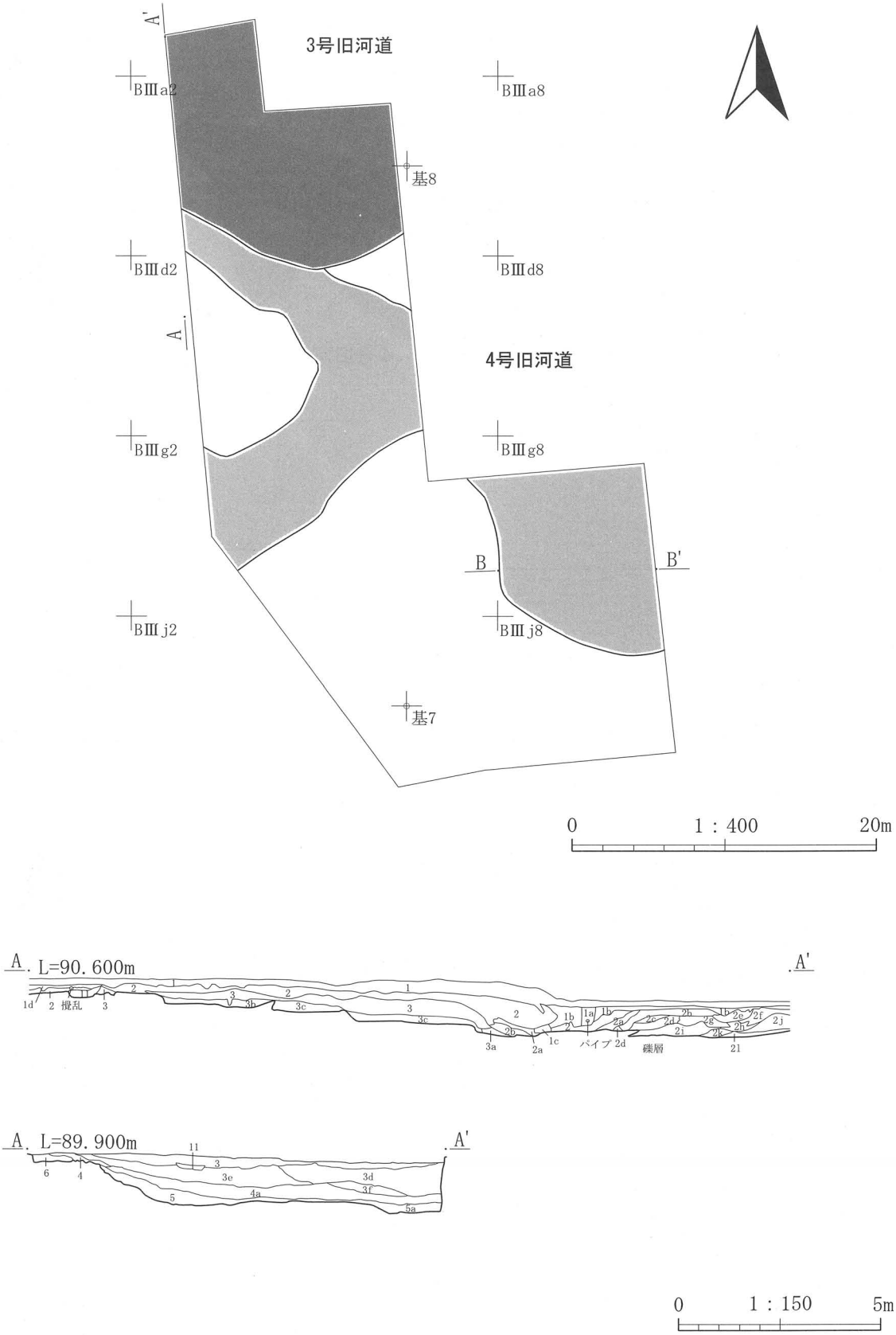


2号旧河道



第19図　旧河道流路推定図、2号旧河道

3・4号旧河道



第20図　3・4号旧河道

３・４号旧河道A-A'・ B-B'

1　10YR3/3 暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 表土　(現代盛土)
1a　10YR2/1 黒褐色シルト 粘性やや強 締まり中 黄褐色粘土3%混入 表土　(現代土)
1b　10YR2/8 黒褐色シルト 粘性やや強 締まりやや密　(現代の耕作土)
1c　5Y3/1 オリーブ黒色泥質土 粘性やや強 締まりやや疎　(現代の耕作土)
1d　10YR3/2 黒褐色シルト 粘性やや強 締まり中　(旧表土)
2　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性中 締まりやや疎 砂質土20%混入　(３号旧河道埋土※昭和27年以前の埋土)
2a　10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土　粘性弱 締まり疎　(３号旧河道埋土※昭和27年以前の埋土)
2b　5Y3/2 オリーブ黒色泥質土 粘性やや強 締まりやや疎 酸化鉄の集積各所にみられる　(３号旧河道埋土※昭和27年以前の埋土)
2c　5Y3/2 オリーブ黒色泥質土 粘性やや強 締まりやや疎 砂質 10%混入　(３号旧河道埋土※昭和27年以前の埋土)
2d　2.5Y3/2 黒褐色泥質砂質土 粘性やや強 締まり中 酸化鉄の集積7%みられる　(３号旧河道埋土※昭和27年以前の埋土)
2e　2Y3/3 暗オリーブ褐色粘土質砂質土 粘性やや強 締まりやや密 有機物(木根・木片)7%混入　(３号旧河道埋土※昭和27年以前の埋土)
2f　2.5Y3/2 黒色泥質粘土質土 粘性やや強 締まり密 酸化鉄の集積5%みられる　(３号旧河道埋土※昭和27年以前の埋土)
2g　2.5Y3/2 黒色泥質粘土質土 粘性強 締まりやや密 酸化鉄の集積5%みられる　(３号旧河道埋土※昭和27年以前の埋土)
2h　2.5Y6/2 灰黄色砂礫土 粘性中 締まりやや疎 径0.5～2cmの礫30%混入　(３号旧河道埋土※昭和27年以前の埋土)
2i　5Y3/2 オリーブ黒色砂質土 粘性弱 締まりやや疎 有機物(木片・炭化物片)5%・砂礫 10%混入　(３号旧河道埋土※昭和27年以前の埋土)
2j　2.5Y2/1 黒色泥質土 粘性やや強 締まりやや密 酸化鉄の集積3%みられる　(３号旧河道埋土※昭和27年以前の埋土)
2k　5Y2/1 黒色泥質砂質土 粘性やや強　締まりやや疎 有機物(木片・草根)7%混入　(３号旧河道埋土※昭和27年以前の埋土)
2l　2.5Y3/2 黒褐色砂質泥質土 粘性中 締まり疎　(３号旧河道埋土※昭和27年以前の埋土)
3　10YR2/1 黒色シルト 粘性中 締まり中 土器(古代)少量含む　(４号旧河道埋土※古代黒色土層)
3a　5Y3/2 オリーブ黒色泥質砂質土 粘性やや強 締まりやや疎 酸化鉄の集積各所にみられる　(４号旧河道埋土※古代黒色土層)
3b　10YR4/4 褐色シルト質粘土 粘性中 締まり密 (４号旧河道埋土※古代？)
3c　10YR3/3 暗褐色シルト　粘性中　締まり密　径5～20cmの礫30%・砂質土10%混入　(４号旧河道埋土)
3d　10YR2/1 黒褐色シルト質粘土質土 粘性やや強 締まりやや密
3e　10YR2/1 黒色シルト 粘性中 締まり中 土器(弥生)少量含む　(４号旧河道埋土)
3f　10YR1.7/1 黒色泥質粘土質土 粘性強 締まりやや疎 酸化鉄の集積一部にみられる
4　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性中　締まり密
4a　10YR2/2 黒褐泥質粘土質土 粘性強　締まりやや密 黄褐色土粒1%混入
5　10YR3/4 暗褐色粘土 粘性強 締まり密
5a　2.5Y3/2 黒褐色砂質泥質土 粘性中 締まり密
6　10YR7/8 黄橙色粘土　粘性中　締まり密　(※地山)
11　10YR2/2 黒褐色シルト　粘性やや強　締まりやや疎　黄褐色粘土ブロック3～5%混入 (１号溝跡埋土)

３・４号旧河道土層注記

第６表　竪穴住居跡観察表

図版番号	写図番号	遺　構　名	時　期	グリッド	規模(長辺)m	規模(短辺)m	壁高(cm)	埋土の堆積状況	カマド	柱穴数(個)	付属施設	重複・その他
11	5	1号竪穴住居跡	9世紀後半～10世紀前半	DⅡh10	4以上	4.1	6以下	自　然	―	1	土坑1	1・2・4号土坑に切られる
12	6	2号竪穴住居跡	古代	CⅡx23	1.1以上	2.1以上	20	自　然	北壁東隅	なし	なし	埋土中に人頭大の礫多量

第７表　竪穴状遺構観察表

図版番号	写図番号	遺　構　名	時　期	グリッド	平面形	規模(長辺)m	壁高(cm)	埋土の堆積状況
12	6	1号竪穴状遺構	古　代	DⅡn4	方形	2.8	6～10	人為？

第８表　土坑観察表

図版番号	写図番号	遺　構　名	時期	グリッド	平面形	開口部径(cm)	深さ(cm)	埋土の堆積状況	重複・その他
11	7	1号土坑	9世紀後半～10世紀前半	DⅡh11	円形	160×140	18～30	自　然	1号竪穴住居跡を切る、十和田ａ火山灰
11	7	2号土坑	9世紀後半～10世紀前半	DⅡh11	長楕円形	165×98	30	自然？	1号竪穴住居跡を切る、十和田ａ火山灰
13	7	3号土坑	古　代	BⅢj7	隅丸長方形	188×98	24	人　為	
11	7	4号土坑	9世紀後半～10世紀前半	DⅡh11	不整楕円形	185×140	34	自然？	1号竪穴住居跡を切る

第９表　溝跡観察表

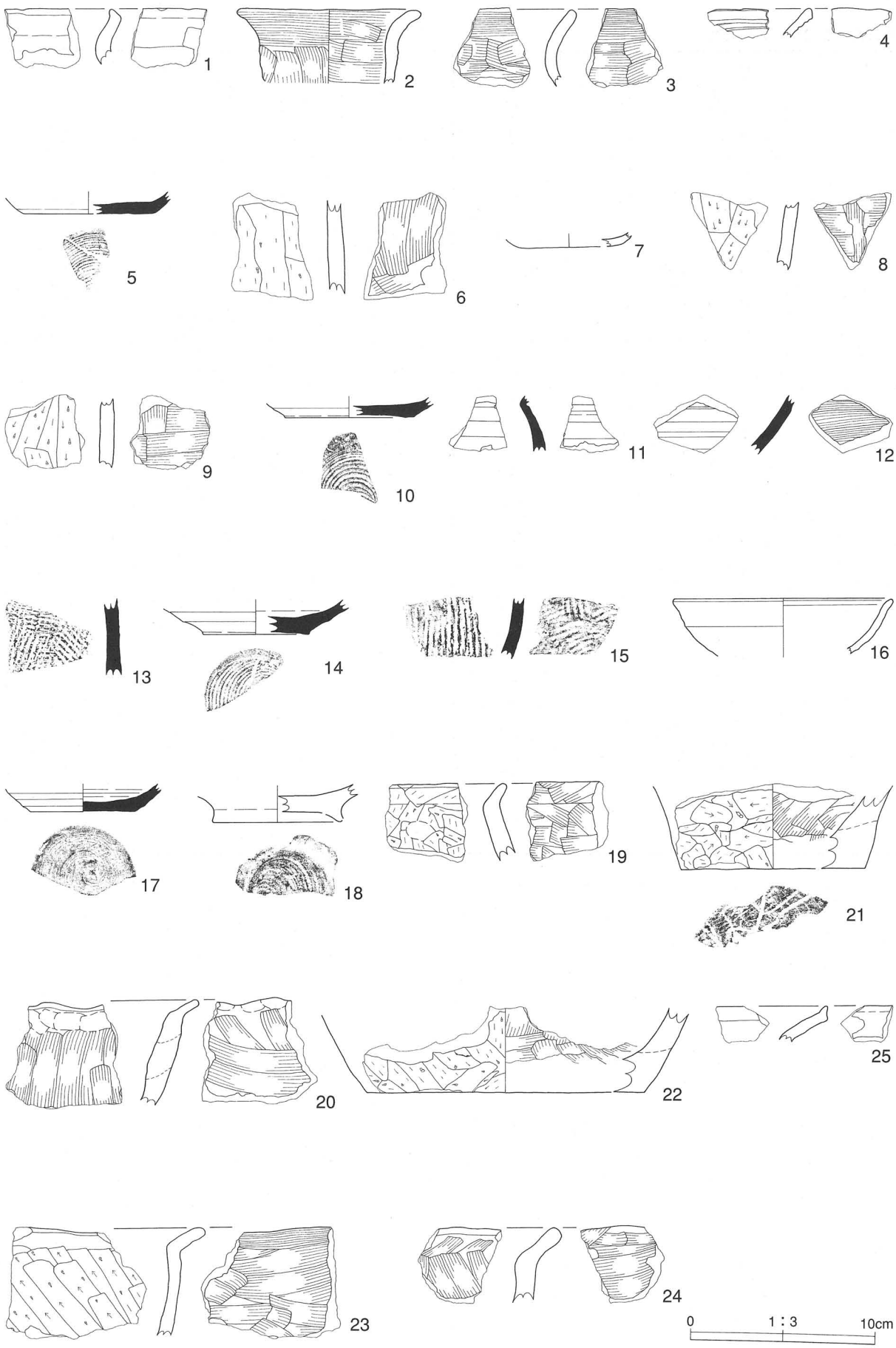
図版番号	写図番号	遺　構　名	時期	位置	グリッド	方　向	長さ(m)	幅(cm)	深さ(cm)	埋土の堆積状況
14	8	1号溝跡	9世紀後半～10世紀前半	中央	BⅢd2	西－東	30	60～90	10～40	自然
13	8	2号溝跡	不　明	西	CⅢj13	北－南	6.8	60	3～12	自然
14	8	3号溝跡	古代？	中央	CⅠp24	北西－南東	4.0以上	70	35～40	人為？
13	8	4号溝跡	近世～現代？	西	BⅢi14	南－北	1.5	30	10	不明

第10表　旧河道観察表

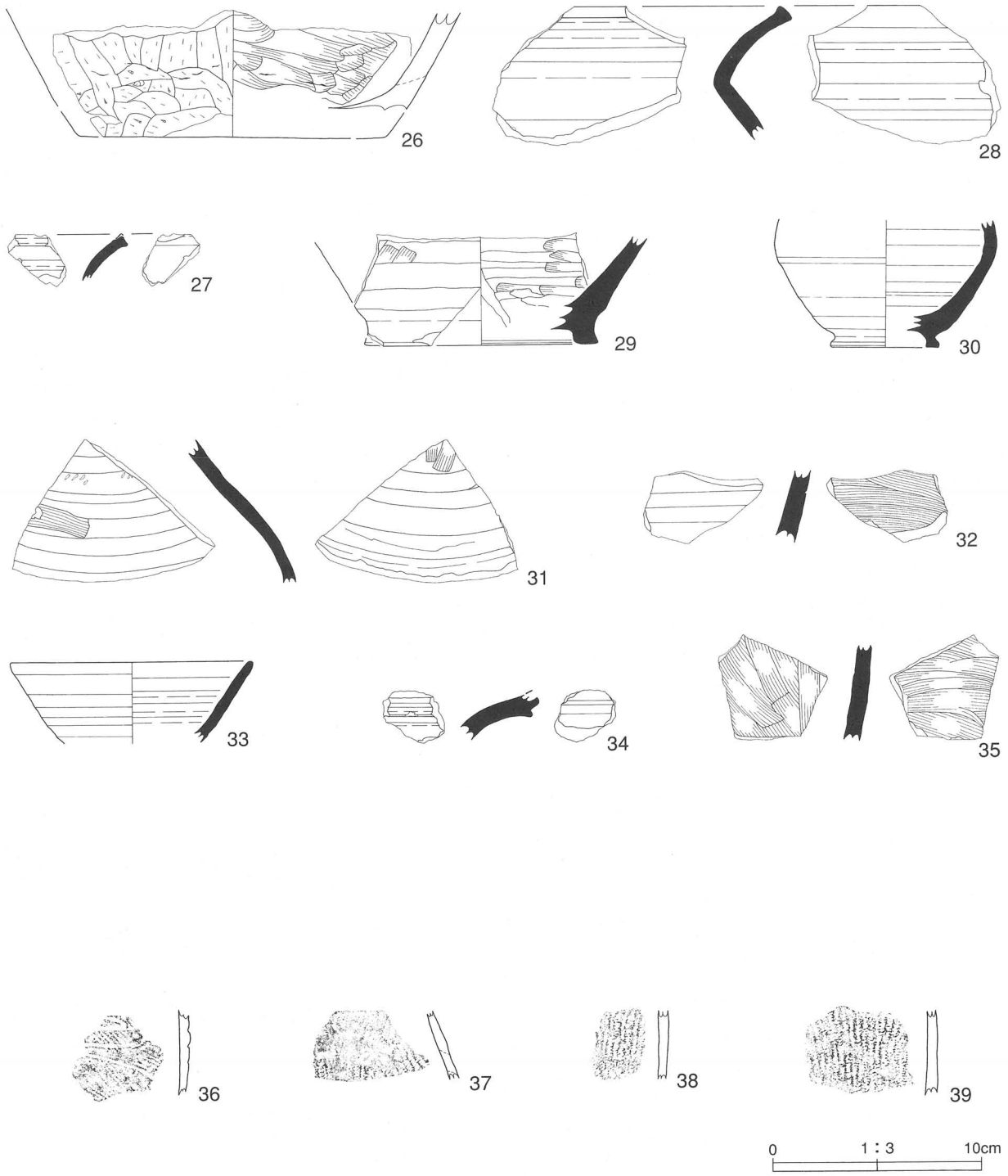
図版番号	写図番号	遺　構　名	時　期	位置	グリッド	方　向	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)	埋土の堆積状況
18	9	1号旧河道	12世紀？	西	DⅡf10	北東－南西	38	3～4	35～70	1層不明、2～4ｂ層自然
19	9	2号旧河道	現　代	北西	BⅡn2	西－東	不明	不明	不明	人　為
19・20・21	9	3号旧河道	近世～現代	中央	BⅡy3	北西－南東	10以上	不明	35～120	自然？
19・20・21	9	4号旧河道	弥生後期～古代	中央	BⅢc3	北西－南東	不明	8～14	20～125以上	自　然

第11表　柱穴状土坑観察表

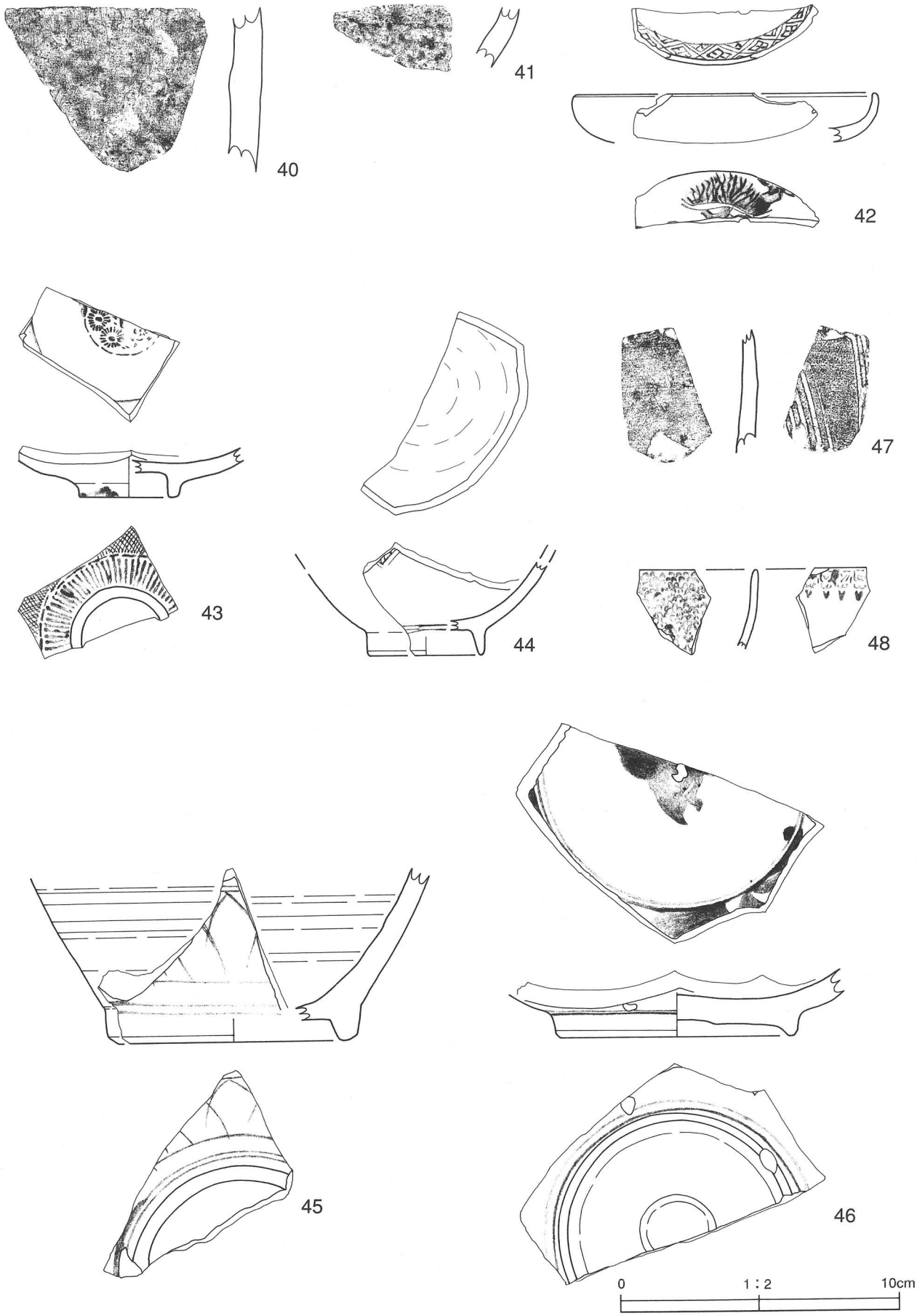
柱穴No	径(cm)	深さ(cm)	調査区	柱穴No	径(cm)	深さ(cm)	調査区
1	54×48	11	南部	24	29×25	20	中央部①
2	55×51	18	南部	25	32×30	22	中央部①
3	52×43	10	南部	26	31×31	20	中央部①
4	48×45	13	南部	27	29×25	29	中央部①
5	54×52	13	南部	28	26×25	36	中央部①
6	50×50	26	中央部①	29	42×30	23	中央部①
7	33×26	23	中央部①	30	51×50	29	中央部①
8	37×33	15	中央部①	31	25×18	21	中央部①
9	45×44	22	中央部①	32	23×23	20	中央部①
10	59×34	16	中央部①	33	29×23	30	中央部①
11	37×31	26	中央部①	34	33×20	14	中央部①
12	44×41	28	中央部①	35	27×26	19	中央部①
13	42×27	27	中央部①	36	24×24	23	中央部①
14	32×30	36	中央部①	37	30×26	21	中央部①
15	64×36	23	中央部①	38	33×32	12	中央部①
16	37×30	21	中央部①	39	24×23	29	中央部①
17	40×39	42	中央部①	40	24×24	35	中央部①
18	27×20	45	中央部①	41	36×35	37	中央部②
19	48×32	17	中央部①	42	20×15	22	中央部②
20	26×20	32	中央部①	43	16×16	10	中央部②
21	27×23	24	中央部①	44	36×29	21	中央部②
22	30×28	42	中央部①	45	73×64	17	中央部②
23	31×31	24	中央部①	46	30×25	15	中央部②



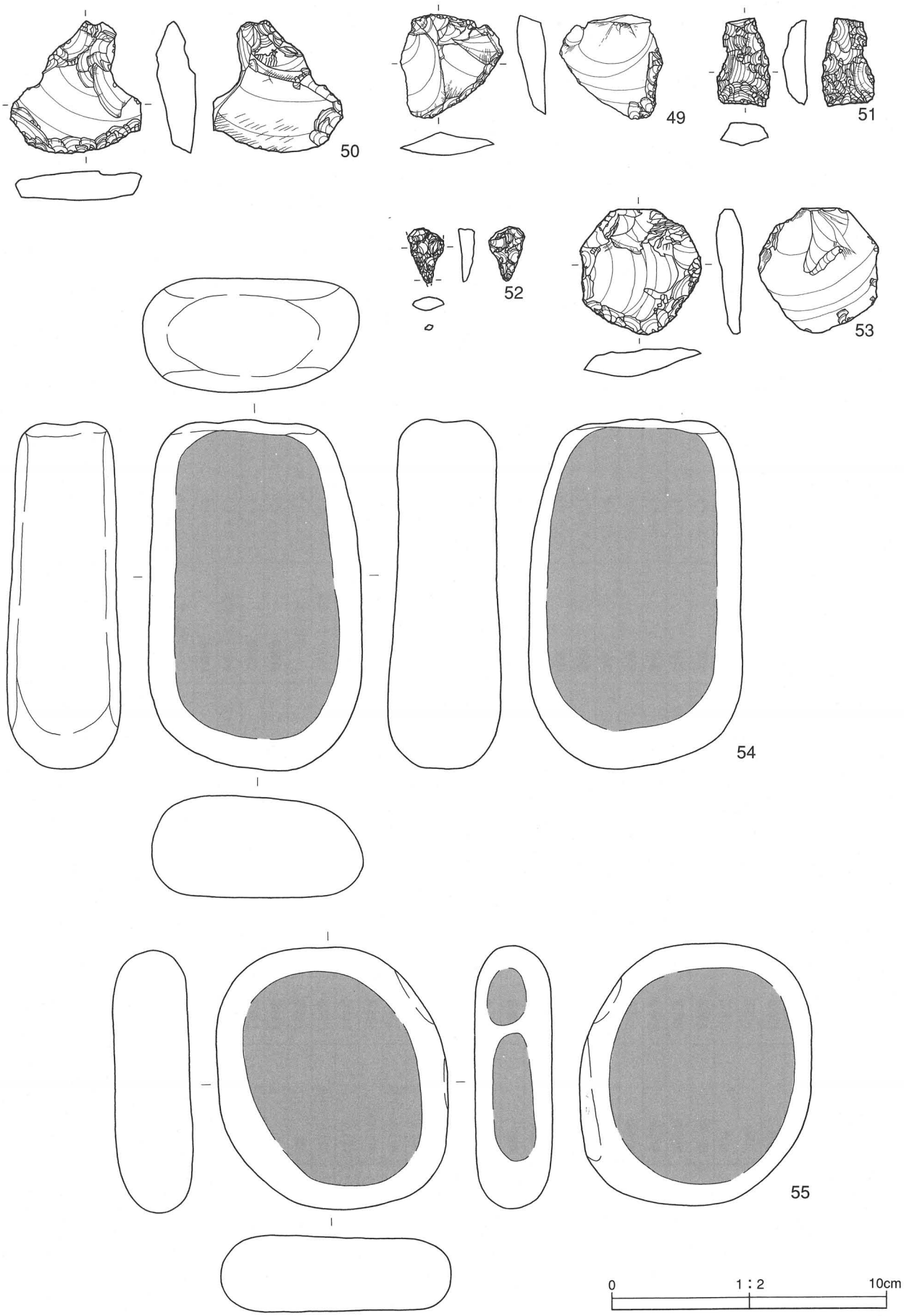
第21図　古代の土器（1）



第22図　古代の土器（２）・弥生土器



第23図　陶磁器



第24図　石器

第12表　古代の土器観察表

NO	出土地点	層　位	種　別	器　種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存状況	外面調整	内面調整	底部調整	備　考
1	1号住	焼土	土師器	甕	-	-	-	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	-	
2	1号住Q2	11層	土師器	小型甕	(10.0)	-	(4.0)	口縁部	口:ヨコナデ、体:ヘラケズリ	ヘラナデ	-	
3	1号住Q2	11層	土師器	甕	-	-	-	口縁部	口:ヨコナデ、体:ヘラケズリ	ヘラナデ	-	
4	1号住Q2	11層	土師器	甕	-	-	-	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	-	
5	1号住Q1	11層	須恵器	坏	-	(7.0)	(1.2)	体部下半～底部	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
6	4号土坑	埋土中	土師器	甕	-	-	-	体部	ヘラケズリ	ヘラナデ	-	
7	1号溝	検出面	土師器	坏	-	(5.5)	(0.7)	体部	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラケズリ？	
8	1号溝	検出面	土師器	甕	-	-	-	体部	ヘラケズリ	ヘラナデ	-	
9	1号溝	検出面	土師器	甕	-	-	-	体部	ヘラケズリ	ヘラナデ	-	
10	1号溝	埋土中位	須恵器	坏	-	(7.0)	(1.1)	底部	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
11	1号溝	埋土中位	須恵器	小型壺？	-	-	-	頸部	ロクロナデ	ロクロナデ	-	
12	32号柱穴	埋土中	須恵器	壺	-	-	-	体部	ロクロナデ	ロクロナデ	-	
13	1号旧河道	埋土中	須恵器	甕	-	-	-	体部	ロクロナデ→平行タタキ	ロクロナデ	-	
14	3号旧河道	礫層	須恵器	坏	-	(5.6)	(1.9)	体部下半～底部	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
15	3号旧河道	礫層	須恵器	甕	-	-	-	体部	ロクロナデ→平行タタキ	同心円文当て具痕？	-	
16	4号旧河道	3層	土師器	坏	(12.0)	-	(3.1)	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	-	
17	4号旧河道	埋土中～下位	須恵器	坏	-	(5.8)	(1.5)	体部下半～底部	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	
18	4号旧河道	埋土中	土師器	高台坏	-	(7.0)	(2.0)	脚部	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
19	4号旧河道	埋土中～下位	土師器	甕	-	-	-	口縁部	ロクロナデ→ヘラケズリ	ヘラナデ	-	
20	4号旧河道	埋土中位	土師器	甕	-	-	-	口～体部	口:指頭圧痕、体:ヘラケズリ	ヘラナデ	-	
21	4号旧河道	埋土中	土師器	甕	-	(10.0)	(4.5)	体部下半～底部	ヘラケズリ	ヘラナデ	木葉痕	
22	4号旧河道	埋土中～下位	土師器	甕	-	(15.0)	(4.5)	体部下半～底部	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラケズリ	
23	4号旧河道	3層	土師器	甕	-	-	-	口～体部上半	口:ヨコナデ、体:ヘラケズリ	ヘラナデ	-	外面煤付着
24	4号旧河道	3層	土師器	甕	-	-	-	口縁部	ヘラケズリ	ヘラナデ	-	
25	4号旧河道	埋土中位	土師器	甕	-	-	-	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	-	
26	4号旧河道	埋土中～下位	土師器	甕	-	(15.0)	(6.2)	体部下半～底部	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラケズリ	
27	4号旧河道	埋土下位	須恵器	壺	-	-	-	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	-	
28	4号旧河道	埋土中	須恵器	甕	-	-	-	口～体部上半	ロクロナデ	ロクロナデ	-	
29	4号旧河道	3層	須恵器	壺	-	(11.2)	(5.3)	体部下半	ロクロナデ→ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラケズリ	
30	4号旧河道	埋土	須恵器	小型壺	-	(5.2)	(6.3)	体～底部	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラケズリ	
31	4号旧河道	埋土中位	須恵器	甕	-	-	-	体部上半	ロクロナデ→タタキ	ロクロナデ	-	
32	4号旧河道	埋土中	須恵器	甕	-	-	-	体部	ロクロナデ	ヘラナデ	-	
33	4号旧河道	埋土中位	須恵器	坏	(11.7)	-	(4.0)	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	-	
34	1トレンチ	黒色土中	須恵器	甕	-	-	-	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	-	
35	1トレンチ	耕作土中	須恵器	甕	-	-	-	体部	ロクロナデ→ヘラケズリ	ヘラナデ	-	写真掲載なし

第13表　弥生土器観察表

NO	出土地点	層　位	器　種	部　位	文様・原体・その他	内　　面	時　　期	備　　考
36	6号柱穴	埋土中	鉢	胴部	RL横位→沈線	ナデ	弥生後期？	沈線文様後日要検討
37	4号旧河道	埋土中位	鉢	胴部	RL横・縦位	ナデ	弥生後期	
38	4号旧河道	埋土中位	鉢	胴部	RL横・斜位		弥生後期	
39	4号旧河道	埋土中位	鉢	胴部	RL斜・縦位	ナデ	弥生後期	

第14表　陶磁器観察表

NO	出土地点	層　位	器　種	産　地	時　代
40	1号旧河道	埋土中	甕	常滑	12世紀
41	1号旧河道	砂層の下・黒土中	甕	常滑	12世紀
42	3号旧河道	砂質土	皿	肥前	18世紀
43	3号旧河道	砂質土	染付碗	不明	19世紀
44	3号旧河道	砂質土	染付碗	不明	19世紀以降
45	3号旧河道	砂質土	壺類	不明	19世紀
46	3号旧河道	砂質土	染付皿	不明	19世紀
47	4号旧河道	埋土中位	摺鉢	不明	近代
48	4トレンチ	耕作土中	染付碗	不明	19世紀

第15表　剥片石器観察表

NO	出土地点	層　位	器　種	石　質	産　地	時　代	長さ	幅	厚さ	重量
							cm	cm	cm	g
49	1号溝	埋土中	スクレイパー	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	3.7	3.7	0.7	11.00
50	1号溝	検出面付近	スクレイパー	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	4.6	4.8	1.0	27.02
51	4号旧河道	埋土中位	スクレイパー	黒曜石	産地不明	不明	3.2	1.9	0.7	5.25
52	6トレンチ	黒色土中	石錐	黒曜石	産地不明	不明	2.1	1.4	0.5	1.16
53	7トレンチ	黒色土下位	スクレイパー	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	4.5	4.4	0.8	21.24

第16表　礫石器観察表

NO	出土地点	層　位	器　種	石　質	産　地	時　代	長さ	幅	厚さ	重量
							cm	cm	cm	g
54	2号住	黒褐色土	磨石	安山岩	奥羽山脈	新生代第三紀	12.7	7.5	3.5	734.66
55	7トレンチ	黒色土上位	磨石	安山岩	奥羽山脈	新生代第三紀	9.5	8.4	2.8	396.49

Ⅵ　作屋敷遺跡

1　遺跡の位置・概要

作屋敷遺跡は奥州市胆沢区南都田字作屋敷487ほかに所在する。現況は水田、水路、農道で、調査地の標高は92～96mである。地形図で現道などの標高値を見ると、西から東へ、そして南から北へ、少しずつ標高が下がる。従って基本地形は南西→北東へ向かって緩やかに傾斜することがわかる。耕地整理などの影響もあり現況は平坦な地形に見受けられ、また周辺には残丘や微高地的な地形は見当たらない。ただし、地元の方や地権者によると、作屋敷遺跡のある水田周辺は、隣接する周囲の土地に比べて微妙に高い場にあるらしく、大雨時においても洪水の被害を受けにくい土地であるらしい。上記の情報を裏付ける内容として、調査区中央部の南端付近（現道からプレハブの現場事務所への進入路付近など）の現道は、北から南へ幾分標高が下がることから、この周辺の地形の中ではイレギュラーな方向に低い。このことは、作屋敷遺跡が微高地に立地していることを物語り、作屋敷遺跡に古代集落が営まれた背景には、このような微地形的要因も関係する可能性が考えられよう。

2　これまでの調査歴

作屋敷遺跡は、具体的な出土地は不明であるが合口甕棺が出土し、また地元では以前より畑を耕した際に土器が出ることでも知られていた遺跡である。発掘調査は、平成５年に胆沢町教育員会により実施され、住居跡１棟と多数の土師器、須恵器が出土している。現時点で発掘調査報告書が未発刊であることから、過去の調査地点や調査結果の詳細はわからないものの、今回の調査区北部の西端と接する宅地部分と考えられる。

3　検　出　遺　構

今回の調査で検出した遺構は、縄文時代は陥し穴２基、平安時代が竪穴住居跡８棟・竪穴状遺構１棟・掘立柱建物跡１棟・土坑21基・溝跡19条・焼土遺構２基、古代を中心と考えられる柱穴状土坑265基、近世の溝跡１条、近世～現代の溝跡１条、現代の土坑１基である。

本節の記述に際して、位置の項では、調査区が細長いことから、調査区を便宜的に調査区西部・北部・中央部・東部の４つに分け呼称し、記述に用いることとする。

（1）竪穴住居跡

１号竪穴住居跡（第28・29図、写真図版14）

＜位置・検出状況＞調査区西部のＢＩｆ13～ｈ14グリッドに位置する。検出状況は、Ⅱ層及びⅣ層において黒褐色シルトによる南北に長い広がりとして把握した。

＜重複関係・建替え＞１号土坑に切られる。

＜平面形・規模・長軸方向＞遺構プランは調査区外東と西に続くことから、平面形・規模ともに不明である。調査部分からは、南北の一辺は約６ｍで、深さは約30㎝を測る。

＜埋土＞最上位の１層は、黒褐色シルトで酸化鉄の集積がややみられる。明確には判別できなかったが、現代より古い時代の水田耕作土、若しくは古代以降の何れの時代かの旧表土の可能性もある。２層系としたものが本遺構の主たる埋土である。埋土上～中位の２ａ層は、厚さ３～８㎝の十和田ａ火

山灰層である。埋土中位に堆積する２ｂ層は暗褐色粘土質土である。埋土下位には２ｃ・２ｄ層暗褐色シルト質粘土と４ａ層灰黄褐色粘土が堆積する。これらは、自然堆積層と推定される。３層と４層は貼り床と考えられる。

第28図には、調査区境東側の土層断面Ａ－Ａ´と調査区境西側の土層断面Ｂ－Ｂ´を図化・掲載しているが、１・２ａ・２ｃ・２ｄ・４・４ａなどはＢ－Ｂ´土層断面にのみ認められる。従って、西側と東側では堆積土層に若干の差異が看取される。併せて、２ａ層と命名した十和田ａ火山灰層については、遺構全面に分布するではなく、西側にのみ局所的に広がりが認められる。

＜床面・壁＞床面はⅣ層黄褐色粘土や灰黄褐色砂質粘土層を中心に、一部貼り床が施される。硬化面は認められない。壁の残存する北壁と南壁の一部分は、Ⅳ層を壁とし、ほぼ直立気味に立ち上がる。

＜カマド＞検出されていない。今回の調査で検出された該期竪穴住居跡の中で、カマドが検出されたものは全て東壁に構築されている。本遺構についても調査地外東側にカマドが存在する可能性は高い。

＜柱穴・付属施設＞柱穴は８個、住居内土坑は７基を検出した。

主柱穴は、開口部の規模や深さからPP５・PP８などが想定されるが、推定の域を出ない。

住居内土坑について、それらの埋土は全て人為堆積である。開口部の規模に反して深度が浅いものや、断面形が浅皿状のもの、底が平坦でないものがみられる。住居内土坑３・４と住居内土坑５・７は重複関係にあり、住居内土坑３と住居内土坑５が新しい。

柱穴No	径（cm）	深さ（cm）	柱穴No	径（cm）	深さ（cm）
１号住ＰＰ１	22×22	57	1号住ＰＰ5	49×44	31
１号住ＰＰ２	(35×20)	25	1号住ＰＰ6	20×20	7
１号住ＰＰ３	20×18	10	1号住ＰＰ7	16×16	11
１号住ＰＰ４	30×28	15	1号住ＰＰ8	56×55	68

＜遺物＞（第61図１～９、写真図版39・44）出土遺物は土器類が10,329.77ｇ、焼成粘土塊24ｇが出土した。土器類は、１～６の土師器と７～９の須恵器を掲載した。土師器は坏と甕で、ロクロ成形による。これらの土器類は全て十和田ａ火山灰降下時期より古いと考えられる。焼成粘土塊は掲載番号88として写真・表掲載した。

＜時期＞出土土器から９～10世紀と推定される。また、十和田ａ火山灰が埋土中に確認されることからも10世紀前半より古いと捉えられ、土器の年代と矛盾しない。

２号竪穴住居跡（第29図、写真図版15）

＜位置・検出状況＞調査区北部のＡⅡｘ23グリッド付近に位置する。検出面はⅣ層中で、炭化材を含む黒褐色シルト質粘土による南北に長い方形プランとして把握した。本遺構プランは西側と東側は調査区外に延びる。検出状況から焼失住居と推定された。

＜平面形・規模・長軸方向＞南壁・北壁・西壁の一部を検出したが、全体の平面形は不明にある。検出部からは方形基調と推定される。把握できた規模は、南北の一辺が4.9ｍを測る。

＜埋土＞黒褐色シルト質粘土による単層である。焼失に伴う黄褐色粘土ブロック・炭化物・焼土を含むが、埋土自体は自然堆積と考えられる。

＜床面・壁＞Ⅳ層地山を床面とし、ほぼ平坦である。貼り床は認められない。壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは約15cmである。

＜カマド＞なし。

＜柱穴・付属施設＞柱穴５個検出した。柱配列は明確には掴めないが、PP２・PP３・PP４などに主柱の可能性が窺える。

柱穴No	径（cm）	深さ（cm）
２号住ＰＰ１	(24×22)	4
２号住ＰＰ２	40×36	12
２号住ＰＰ３	32×30	74
２号住ＰＰ４	38×32	78
２号住ＰＰ５	38×26	11

＜遺物＞（第61・69図10・103～105、写真図版39・45）出土遺物は、土器類476.55ｇと鉄製品４点が出土した。10は須恵器甕である。鉄製品は４点中３点を掲載した。103は刀子、104と105は釘？である。
＜時期＞出土土器は９世紀後半～10世紀と推定される。
＜その他＞焼失家屋の可能性が高い。

３号竪穴住居跡（第30図、写真図版16・17）
＜位置・検出状況＞調査区東部のＢⅣｅ16グリッド付近に位置する。検出面はⅣ層中で、黒色シルトによる方形プランとして把握した。プランは調査区外西側に延びる。
＜重複関係・建替え＞４号溝が本遺構を切る。
＜平面形・規模・長軸方向＞平面形は方形を基調とするが、上述のとおり遺構の西側は調査区外に続くことから不明にある。竪穴全体の半分程を調査したと考えられる。把握できた規模は、南北の一辺が3.1ｍである。深さは約35cmである。カマドが東壁に構築されていることから、長軸方向は東西と推定される。
＜埋土＞第30図Ａ－Ａ´・Ｂ－Ｂ´・Ｃ－Ｃ´土層断面では11～15層に分層した。なお、１層と２層は、４号溝跡に伴う埋土である（※土層注記は第30図を参照いただきたい）。11・12・12ａ・13層は自然堆積層である。12ｂ層は貼り床土、14・15層は整地を意図した人為層と推定される。
＜床面・壁＞床面はほぼ平坦で、貼り床（※12ｂ層）が施され全体的に非常に硬い。この貼り床は、厚さ約10cmで全面にわたり施されている。壁は直立気味に立ち上がる。
＜カマド＞東壁際よりカマド煙道部を検出した。煙道の天井部は、第30図ａ－ａ´断面で１層とした暗褐色粘土質シルトに黄褐色粘土を混ぜたものを構築土として使用している。そして、カマド本体の構築土としてはａ－ａ´断面２層にその可能性がある。３層は煙道天井部の崩落土と考えられ、炭化物や焼土粒が微量含まれる。煙道の長さは約80cm、煙道幅は約12cm、煙出し部の底が煙道部底面と比較して極端に深い構造を呈する。燃焼部が想定できるような焼土層は認められなかったが、住居内土坑２の北側付近と考えられよう。袖部は未検出である。
＜柱穴・付属施設＞床面で２個の柱穴と、貼り床を除去した段階で土坑３基を検出した。
　土坑は、北東隅、南東隅、及びカマド前付近の３箇所に設けられており、断面形は何れも浅皿状で床面から約18cmの深さにある。何れのものも貼り床土の下位に15層とした整地層が確認されることから、貼床を施す前に埋め戻していると判断される。

柱穴No	径（cm）	深さ（cm）
３号住ＰＰ１	40×38	32
３号住ＰＰ２	20×17	18

＜遺物＞（第61図11～16、写真図版39）出土遺物は、土器類1,646.47ｇが出土した。11～13が土師器で、11が坏、12・13が甕で、何れもロクロ成形による。14～16が須恵器で、14が坏、15は甕？、16が壺の胴部である。これらの内、カマドの構築土や貼り床より下から出土したのが12で、貼り床上と貼り床下出土の部位同士が接合関係を示したのが、13・14などである。
＜時期＞出土土器から９世紀後半～10世紀前半と推定される。

４号竪穴住居跡（第31図、写真図版17）
＜位置・検出状況＞調査区西部のＡＩｔ22グリッド付近に位置する。検出面はⅣ層で、黒褐色シルトによる不整形のプランとして把握した。
＜重複関係・建替え＞２号溝跡、１号焼土遺構、５号土坑に切られる。
＜平面形・規模＞平面形・規模ともに不明である。
＜埋土＞第31図Ｅ－Ｅ´断面の２層・４層が本遺構に伴う堆積土である。埋土上位の２層は黒褐色シルト質粘土を主体とする。埋土下位にみられる４層は、暗褐色シルト質粘土で、焼土粒などを少量含む。２層・４層ともに混入物の在り方からは、人為が介在した土層と判断されるが、堆積様相は自然堆積と考えられる。
＜床面・壁＞Ⅳ層を床面とし、やや凹凸が見られる。貼り床は認められない。壁は直立気味に立ち上がる。壁高は15～22cmである。
＜カマド＞なし。
＜柱穴・付属施設＞柱穴は１個検出した。
＜遺物＞（第62図17、写真図版39）出土遺物は土器類89.76ｇが出土した。17の土師器坏を掲載した。ロクロ成形で、底部は回転糸切りによる。
＜時期＞出土土器から９世紀後半～10世紀前半と推定される。

５号竪穴住居跡（第32・33図、写真図版18）
＜位置・検出状況＞調査区北部のＡⅡｊ17グリッド付近に位置する。検出面はⅣ層中で、黒褐色シルトによる方形プランとして把握した。南側は調査区外に延びる。
＜平面形・規模・長軸方向＞平面形は隅丸方形を基調とするが、遺構プランは調査地外南に続くことから、明確にはわからない。規模は、調査部分からは東西の一辺は約4.6ｍを測る。壁高は22～28cmである。カマドが東壁に構築されていることから、長軸方向は東－西と捉えられる。
＜埋土＞１～８層に細分した。１層は現代の水田耕作土などである。埋土の主体を占める２層黒褐色粘土質土は、少量ではあるが炭化物や焼土粒を含むことから、人為の介在が推定される土層であるが、堆積様相自体は自然堆積と判断された。３～６層はカマド構築に関わる土層と判断した。その中で、５層・５ａ層・６層は煙道構築土の崩壊土と推定した。７層は煙出し部の堆積土層で、自然堆積と推定される。８層は床下土坑１・２を覆う貼り床土である。
＜床面・壁＞床面はⅣ層地山中で、上記した床下土坑部分以外貼り床は施されていない。ほぼ平坦である。床面には比較的多くの土器片が散らばるような様子で見つかり、また床面のわずか上で鉄製の鋤先が出土した。

＜カマド＞東壁に構築されている。調査区境の断面で検出された。平面的には調査ができなかったが、礫が集中的にみられる部分が土層断面から見て取れる。この礫の集中する部分が、袖部～カマド天井部付近であった可能性が高い。煙道部の長さは約２ｍで、刳り抜き式なのかどうかはわかない。燃焼部は未検出にある。
＜柱穴・付属施設＞柱穴５個と住居内土坑３基を検出した。
　柱穴は、規模的な観点からPP３とPP４は主柱穴の可能性が考えられよう。住居内土坑は３基検出したが、その内住居内土坑１・２は上記のとおり貼り床で覆われている。住居内土坑３は、位置的にみてカマド燃焼部の掘り方の可能性もある。

柱穴No	径（cm）	深さ（cm）
５号住ＰＰ１	22×17	16
５号住ＰＰ２	(18×10)	18
５号住ＰＰ３	40×38	77
５号住ＰＰ４	36×32	75
５号住ＰＰ５	20×18	20

＜遺物＞（第62～64図18～31・98・106、写真図版40・44・45）出土遺物は土器類5,551.25ｇ、焼成粘土塊7.1ｇ、陶磁器類１点、鉄製品１点が出土した。土器類は、18～25の土師器と26～31の須恵器を掲載した。21～24と26は、カマド煙道部に伴う５層より出土した。この５層は、カマド煙道部の天井の構築土が崩落した土層若しくはカマド廃絶後に埋め戻した廃棄土層の何れかと捉えられ、自然堆積なのか人為堆積なのか明確には判断できない。しかしながら、土器類自体は意図的に廃棄したものと捉えられる。89は焼成粘土塊で掲載番号89として写真・表掲載した。98は青磁椀の破片である。外面に蓮弁文がみられる。時期は明確ではないが15世紀前半の可能性がある。異時期の混入であろうか。106は床面直上出土の鋤先である。
＜時期＞出土土器から９世紀後半～10世紀前半と推定される。

６号竪穴住居跡（第33～35図、写真図版19・20）
＜位置・検出状況＞調査区中央部のＢⅣｂ11～ｄ13グリッドに位置する。検出面はⅣ層で、十和田ａ火山灰を少量含む黒褐色シルトによる方形気味のプランとして把握した。プランの西側は調査区外西側に続く。
＜重複関係・建替え＞13号溝と14号溝に切られている。
＜平面形・規模・長軸方向＞平面形は隅丸方形と判断される。規模は、南－北で約5.4ｍである。東－西は半分以上が調査区外西側に続くことから不明にある。壁高は10～16cmである。カマドが東壁に構築されていることから、長軸方向は東－西と推定される。
＜埋土＞埋土は１～４層に区分した。竪穴本体は、１層黒褐色シルトによるほぼ単層で、十和田ａ火山灰が少量混入する。この１層は自然堆積層である。１ａ層は調査区境で検出したPP３の堆積層で、１層を切る関係にある。しかしながら、土色や土質は１層と類似する。１ｂ層は、住居内土坑５にみられる褐色粘土の地山ブロック土である。１ｃ層は住居内土坑５に伴う黒褐色シルトに黄褐色粘土が多量に入るブロック層である。この１ｂ層・１ｃ層はともに人為層で、自然堆積層である１層中に覆われ、住居内土坑１・５に伴うが、これら１ｂ層・１ｃ層の下位には３層とした人為の整地層がある。２層・３層・４層は人為層で、その内２層・２ａ層は貼り床と捉えられる。３層・４層はそれぞれ土坑の中～下位付近を中心にみられる整地層である。土坑の中～下位のみの整地を意図しているのか、

若しくは土坑底面の嵩上げ的な行為なのか、判断が難しい。
上記の土層堆積様相から考えて、土坑１・５と命名したものは、土坑５が柱穴、土坑１が柱の建て替えに伴う柱抜き取り痕の可能性が示唆されようか。なお、この両土坑からは、須恵器や土師器が一定量出土している。
＜床面・壁＞Ⅳ層地山を床面とする部分と、２層や２ａ層の貼り床が施されている部分とがある。全般に硬く、やや凹凸がある。壁は、やや外傾気味にわずかに立ち上がる。
＜カマド＞燃焼部に関連すると思われる焼土層がみられる。この焼土層は、東壁中央付近のPP12とPP13の間付近から、西にある住居内土坑２付近にかけて広がり、この部分付近はやや凹む（床面より標高が下がる）。焼土層の厚さは最大10㎝で発達がみられる。また、周辺には焼土粒も顕著にみられる。煙道部や袖部の残存はないが、13号溝跡や14号溝跡に破壊された可能性が高い。
＜柱穴・付属施設＞柱穴16個と住居内土坑を５基検出した。床面の上で検出されたものと貼り床の下から検出されたものがあり、本竪穴住居跡は柱穴や床面施設の作り替えが行われていることが窺える。従って、少なくても新旧２時期の変遷が考えられる。古段階を第33図に、新段階を第34図に明示した。
貼り床の下から見つかった古い段階の柱穴・施設としては、PP10・11・12・13・15、住居内土坑４がある。
貼り床上で見つかった新しい段階の施設は、PP１・２・３・４・５・６・７・８・９・14・16、住居内土坑１・２・３・５がある。

柱穴No	径（㎝）	深さ（㎝）	柱穴No.	径（㎝）	深さ（㎝）
６号住ＰＰ１	46×32	32	6号住ＰＰ９	46×40	57
６号住ＰＰ２	32×26	27	6号住ＰＰ10	31×28	21
６号住ＰＰ３	(15×8)	17	6号住ＰＰ11	24×21	33
６号住ＰＰ４	(20×20)	27	6号住ＰＰ12	38×30	57
６号住ＰＰ５	42×38	63	6号住ＰＰ13	44×28	36
６号住ＰＰ６	50×37	56	6号住ＰＰ14	24×20	33
６号住ＰＰ７	19×17	24	6号住ＰＰ15	26×24	15
６号住ＰＰ８	(21×10)	20	6号住ＰＰ16	56×45	24

＜遺物＞（第64・69図32～39・90・107、写真図版40・41・44・45）出土遺物は、土器類10,780.46ｇ、土製品１点、焼成粘土塊18.8ｇ、鉄製品１点である。土器類は32～36の土師器と37～39の須恵器を掲載した。29の須恵器は、本遺構の埋土と約150ｍ離れた20号土坑の埋土出土の破片同士が遺構間接合を示した資料である。38は住居内土坑３から一括出土した須恵器大甕の破片である。90は土錘、焼成粘土塊は掲載番号91として写真・表掲載した。107は刀子の破片である。
＜時期＞出土土器から９世紀後半～10世紀前半と推定される。合せて、十和田ａ火山灰の降下時期より古いと判断される。

７号竪穴住居跡（第35図、写真図版21）
＜位置・検出状況＞調査区中央部のＢⅣｈ10～ｉ12グリッド付近に位置する。検出面はⅣ層で、暗褐色シルトによる方形プランとして把握した。本遺構の北側と南側は調査区外に続く。
＜重複関係・建替え＞本遺構下位から８号竪穴住居跡を検出した。
＜平面形・規模・長軸方向＞平面形は方形基調と考えられるが、上述のとおり北側と南側が調査区外

に続くことから、詳細はわからない。規模は東－西の一辺は約6.3mで、深さは10～15cmである。カマドが東壁に構築されていることから、長軸方向は東－西と推定される。
＜埋土＞埋土は１層暗褐色シルトによる単層である。硬く締まり、また黄褐色粘土小ブロックや炭化物を少量含む。人為堆積と推定されるが明確ではない。２・３層は貼り床である。
＜床面・壁＞床面は、下位の８号竪穴住居跡を覆う部分については貼り床が施され硬い。それ以外は地山Ⅳ層を床面とする。全体的にはやや凹凸がある。壁は緩く外傾して立ち上がる。
＜カマド＞東壁際で南調査区境の土層断面において、煙道部を検出した。袖部や燃焼部は検出されていない。住居内土坑３としたものからは、略完形の土師器坏が出土しているが、位置から推定してカマドに関係する施設である可能性もある。
＜柱穴・付属施設＞柱穴４個、住居内土坑３基、壁溝１条を検出した。何れの柱穴も、竪穴の規模に反して開口部径20cm以下の小形のものである。住居内土坑は、３基検出した。埋土の様相から、住居内土坑１・３は、竪穴廃絶時に開口していたと考えられ、住居内土坑２は貼り床されている。壁溝は、東壁～北壁の一部に認められた。幅約25cm、深さ５～10cmである。

柱穴No	径（cm）	深さ（cm）
７号住ＰＰ１	24×19	15
７号住ＰＰ２	(18×8)	10
７号住ＰＰ３	22×20	14
７号住ＰＰ４	20×20	14

＜遺物＞（第65図40～45、写真図版41・44）出土遺物は土器類1,393.54ｇと焼成粘土塊22ｇである。土器類は傾向として須恵器坏の破片が多く出土している。40の土師器坏と41の須恵器坏は、埋土中より出土した部位とカマド付近の貼床下から出土した部位が接合関係を示したものである。44の須恵器坏や掲載番号92として写真・表掲載した焼成粘土塊も同様にカマド付近の貼床下から出土していている。
＜時期＞出土遺物から９世紀後半～10世紀と推定される。

８号竪穴住居跡（第36図、写真図版22）
＜位置・検出状況＞調査区中央部のＢⅣｉ10～ｉ12グリッド付近に位置する。検出状況は、７号竪穴住居跡の床下（貼り床下）より検出した。大部分が調査区外南側に続く。７号竪穴住居跡と軸方向が同じで、規模的には一回り小形にある。状況から、本遺構を建て直したのが７号竪穴住居跡と考えられる。
＜重複関係・建替え＞７号竪穴住居跡より古い。
＜平面形・規模・長軸方向＞平面形は方形基調と考えられるが、上述のとおり南側が調査区外に続くことから、詳細はわからない。規模は東－西の一辺が約５m強と推定される。深さは５～10cmである。長軸方向は東－西方向と推定される。
＜埋土＞褐色粘土質シルトを主体に黄褐色粘土が多量に混入する。人為堆積で、合わせて７号住居跡を構築する際に本遺構を覆った貼り床と判断される。
＜床面・壁＞Ⅳ層地山を床面とする。貼り床は認められない。やや凹凸がある。７号竪穴住居跡との床面の高低差は、本遺構の床面が約10cm低い。
＜カマド＞未検出にある。
＜柱穴・付属施設＞柱穴４個、住居内土坑１基、壁溝１条を検出した。柱穴の規模は、PP１が開口

部径約40㎝とやや大きく、他の３個20㎝以下である。住居内土坑１は断面形が浅皿状を呈するもので、深度の観点から土坑と判断した。しかしながら、位置的にみて柱穴である可能性もある。壁溝は、北西隅の一端のみ検出された。

柱穴No	径（㎝）	深さ（㎝）
８号住ＰＰ１	44×44	8
８号住ＰＰ２	24×20	7
８号住ＰＰ３	20×18	21
８号住ＰＰ４	24×21	17

＜遺物＞なし。
＜時期＞重複遺構との関係から９世紀後半～10世紀若しくはそれよりやや古い可能性がある。

（２）竪穴状遺構

１号竪穴状遺構（第36図、写真図版22）
＜位置・検出状況＞調査区中央部やや北のＡⅣｉ10～ｊ11グリッド付近に位置する。表土除去後、Ⅳ層中で黒褐色シルトによる長方形気味の広がりとして把握した。西側と東側は調査区外に延びる。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は長方形と判断される。規模は、長軸３ｍ以上、短軸2.2ｍである。深さは12～30㎝である。主軸方向は東－西方向である。
＜埋土＞１層黒褐色シルトによる単層である。自然堆積と判断されたが、明確ではない。
＜床面・壁＞底面は凹凸が顕著で、特に東側では中央が丸底状をみる。壁は外傾して立ち上がる。
＜遺物＞なし。
＜時期＞不明にある。埋土の様相からは、今回の調査で顕著に検出されている９世紀後半～10世紀前半の遺構に類似する。古代と推定しておきたい。

（３）掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は１棟認知した。それ以外に今回の調査では265個の柱穴状土坑を検出した。それら柱穴状土坑は、３個以上が等間隔で並ぶグループを抽出するなどして掘立柱建物跡の復元に努めたが、調査区の幅が狭いこともあり、建物のは復元できなかった。従って、柱穴状土坑については、柱穴状土坑群として、（８）の柱穴状土坑に調査区毎に記述し、その中で掘立柱建物跡を構成する可能性があるグループについて、若干取り上げることとする。

１号掘立柱建物跡（第37・38図、写真図版23・24）
＜位置・検出状況＞調査区中央部のＡⅣｙ11～ＢⅣｂ13グリッド付近に位置する。検出状況はⅣ層において、先に黒褐色シルトによる方形基調のプランを確認した。この方形基調のプランは、結果として付属土坑としたもので、当初は単独の土坑として精査に着手した経緯がある。この付属土坑を少し掘り下げた段階で多量の遺物が包含されていることがわかり、合わせて付属土坑プランの北西隅と北東隅より大形の柱穴を検出した。検出時は付属土坑が新しと判断されたが、新旧関係を把握するため、付属土坑とPP１を通した土層断面を設定した（第37図Ｂ－Ｂ´）。土層観察の結果、付属土坑の１層とPP１の１層は同じ土層と判断され、また出土土器も付属土坑出土と柱穴出土で接合するものがある。従って、両者は同時に埋め戻されていることが判明した。その後、周辺からPP１やPP２に類似する深度を持ったPP３・PP４・PP５・PP６の柱穴が検出されたことから、その配列を鑑みて、付属

土坑を持つ掘立柱建物跡と判断した。
＜重複関係・建替え＞13号溝跡と21号土坑に切られている。
＜柱穴＞６個の柱穴を検出、確知した。
＜埋土＞柱穴の埋土は、人為堆積なのがPP１・PP３の埋土上位にみられる１層黒褐色シルトと、PP１の５層、PP２の１層・２層、PP４の１層・２層、PP５の１層・３層がそれぞれ挙げられる。総じて、中位や下位に暗褐色シルト質粘土が堆積し、所々に黄褐色粘土ブロックと炭化材が少量混入する。やや不明確なのが、PP５の２層であるが、あるいは柱痕跡（アタリ）かもしれない。
＜建物方位＞調査から推定される主軸（桁行）は、ほぼ南－北方向である。
＜平面形式＞掘立柱建物である。規模は、桁行530（16尺）㎝、梁間210㎝（6.3尺）である。ただし、調査区の関係で梁間と捉えた東西方向については、調査区外に延びる可能性は残る。
＜柱間寸法＞桁行の柱間寸法は、PP１とPP３では180㎝（約６尺）、PP３とPP５では340㎝（112.6尺）、PP２とPP４では220㎝（約7.3尺）、PP４とPP６では290㎝（9.6尺）である。梁間の柱間寸法はPP１とPP２では200㎝（6.6尺）、PP３とPP４では220㎝（7.3尺）、PP５とPP６では210㎝（７尺）で、基準寸法は７尺と推定しておきたい。
＜付属土坑＞建物の北端で方形基調の土坑を検出した。規模は、長径200㎝強、短径140㎝、深さ約20㎝である。埋土は全て人為堆積層である。１層は埋め戻し的な行為に伴う堆積層と判断される。併せてこの１層からは多量の土師器・須恵器片が出土したが、これらについても廃棄されたものと推定される。２層と３層は、土坑底面より下で検出された２個の副穴を覆う整地層である。やや硬い。
＜出土遺物＞（第65・66図46～62、写真図版41・42・44）出土遺物は、土器類5,615.21ｇ、焼成粘土塊7.2が出土した。出土遺物のほとんどは付属土坑からで、柱穴からは土器類が少量出土した。46～48は土師器坏、49は土師器小型甕、50は耳皿、51・52は須恵器坏、53～55は須恵器大甕、56は須恵器甕、57～62は須恵器壺である。傾向としては、土師器より須恵器が多いことが看取される。93の焼成粘土塊は写真・表掲載のみ行った。
＜時期＞出土土器から９世紀後半～10世紀前半と考えられる。

（4）土　　坑

土坑は21基検出した。その中で13号土坑としたものは炭窯と考えられる。また、２～５・10号土坑は、何らかの作業に伴う下部構造の痕跡である可能性もある。時期的には現代の可能性がある17号土坑を除けば、概ね古代（大半は平安時代）と捉えられる。

１号土坑（第38図、写真図版24）
＜位置・検出状況＞調査区西部のＢＩｆ13グリッドに位置する。検出状況は、東側調査区境に入れたサブトレンチの土層断面において、１号竪穴住居跡を切るプランを検出し、確知した。
＜重複関係・建替え＞１号竪穴住居跡を切る。
＜平面形・規模＞平面形は不整円形を呈する。規模は、調査区境東側においては、100～225㎝、深さは最大で約60㎝である。
＜埋土＞１～５層に分層した。埋土上位が１層黒褐色シルト、埋土中～下位が２・３層黒褐色シルト質粘土で、色調はほとんど同じにあるものの、土質が異なる特徴が看取される。最下位の４層は黒色泥質粘土質土でやや湿り気がある。北壁際にみられる５層褐色粘土は壁の崩壊土と考えられる。全て自然堆積層と考えられる。

＜底面・壁＞底面は平坦ではなく、凹凸が顕著である。壁は外傾気味に立ち上がる。
＜遺物＞（第66図63・64、写真図版42・43）遺物は土器類2,128.04ｇが出土した。63が土師器甕、64が須恵器大甕である。
＜時期＞出土遺物は９世紀後半～10世紀である。ただし、重複遺構である１号竪穴住居跡の埋土には十和田ａ火山灰を含むが、本遺構はそれを切っている。従って、10世紀前半より新しい可能性もある。

２号土坑（第39図、写真図版24・25）
＜位置・検出状況＞調査区西部のＡＩｔ22グリッド付近に位置する。Ⅳ層中で黒褐色シルトの楕円形の広がりとして、10号土坑と共に検出した。
＜重複関係・建替え＞本遺構の東側で重複する10号土坑を切っていると捉えた。
＜平面形・規模＞平面形は楕円形を呈する。開口部径は265×84㎝、深さは35～40㎝である。
＜埋土＞黒褐色シルトを主体とする。自然堆積と判断したが明確ではない。
＜底面・壁＞底面は平坦基調であるが、緩く波打つ。壁は外傾して立ち上がる。
＜遺物＞（第66図65、写真図版42・44）出土遺物は、土器類264.55ｇ、焼成粘土塊9.6ｇである。65は土師器甕の口縁部片である。焼成粘土塊は掲載番号94として写真・表掲載した。
＜時期＞出土遺物からは９世紀後半～10世紀前半と推定される。

３号土坑（第31図、写真図版25）
＜位置・検出状況＞調査区西部のＡＩｔ23グリッド付近に位置する。Ⅳ層中で、焼土を含む暗褐色シルトの半円形のプランを検出した。調査区外東側に続く。
＜重複関係・建替え＞１号柱穴状土坑に切られる。
＜平面形・規模＞平面形は楕円形と推定される。開口部径は南北の一辺が約100㎝、深さは約18㎝である。
＜埋土＞埋土上位に１層明褐色焼土みられ、炭化物を顕著に含む。この焼土は、現地性と判断されることから、１層上面で火が焚かれたと判断できよう。埋土中～下位に２層暗褐色シルト粘土が堆積するが各所に黄褐色粘土ブロックが混入する。１・２層共に整地を意図した人為堆積と考えられる。従って、１層上面は、火を焚く行為に関係した作業面であることが想起できる。
＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。壁は緩く外傾若しくは外反気味に立ち上がる。
＜遺物＞（写真図版45）出土遺物は、土器類129.28ｇと焼成粘土塊36.5ｇが出土した。土器類は土師器小片で不掲載とした。焼成粘土塊は掲載番号95として写真・表掲載した。
＜時期＞出土遺物からは９世紀後半～10世紀前半と推定される。

４号土坑（第31図、写真図版25）
＜位置・検出状況＞調査区西部のＡＩｔ23グリッド付近に位置する。Ⅳ層中で、黒褐色シルトの広がりとして５号土坑や１号焼土遺構と共に検出した。調査区外東側に続く。
＜重複関係・建替え＞５号土坑を切る。しかしながら、セットの関係にある遺構の可能性が高い。
＜平面形・規模＞平面形は楕円形と推定されるが、プランの大部分が調査区外東側に続くことから、明確にはわからない。規模は、南北の一辺が約100㎝、深さは約25㎝である。
＜埋土＞11～13層の３つに細分した。黒褐色シルトを主体とし、焼土粒・炭化物・黄褐色粘土粒が少

量混入する。人為の行為が窺われる土層ではあるが、堆積様相としては自然堆積層である。
＜底面・壁＞底面は平坦で、壁は外反して立ち上がる。深さは約28㎝である。
＜遺物＞なし。
＜時期＞重複遺構との関係から９世紀後半～10世紀前半より新しい可能性が考えられる。しかしながら、５号土坑や１号焼土遺構、及び３号土坑などとはセット関係にある施設と考えられる。従って、それらと同時期の遺構としておきたい。

５号土坑（第31図、写真図版25）
＜位置・検出状況＞調査区西部のＡＩｔ23グリッド付近に位置する。Ⅳ層中で、黒褐色シルトの広がりとして４号土坑や１号焼土遺構と共に検出した。
＜重複関係・建替え＞４号土坑に切られる。また、１号焼土遺構との関係については同時性の遺構と判断される。
＜平面形・規模＞平面形は楕円形を呈する。規模は、南北の一辺が92㎝である。東側が４号土坑に破壊されている？ため、東西は不明とした。深さは32㎝である。
＜埋土＞第31図Ｃ－Ｃ´の１・２・６層が本遺構の埋土である。埋土上位に堆積する１層黒色シルトと２層暗褐色シルト質粘土層は、黄褐色粘土粒を多量に含み、炭化物粒・焼土粒・土器片を少量含む。なお、この１・２層は１号焼土遺構も覆うことから、本遺構と１号焼土遺構は同時性の遺構の可能性が高く、合わせて何らかの作業面であった可能性もある。６層は黒褐色シルト質粘土で、黄褐色粘土ブロックを15%含む。これらは、全て人為による整地層と考えられ、全般に硬い。特に１層は非常に硬い（硬化面的である）。
＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がる。
＜遺物＞（第66～68図66～77・99、写真図版42・43）出土遺物は、土器類4,517.06ｇ、陶磁器類１点が出土した。土器類は須恵器が圧倒的に多い。66が土師器坏、67・68が土師器甕、69～71が須恵器坏、72～74が須恵器大甕、75・76が須恵器壺、77が須恵器甕である。99は東美濃産の緑釉陶器稜椀で、10世紀前半黒笹90式である。
＜時期＞出土遺物から９世紀後半～10世紀前半と考えられる。
＜その他＞４号土坑や１号焼土遺構、及び３号土坑などとは、セット関係にある施設と考えたい。

６号土坑（第39図、写真図版26）
＜位置・検出状況＞調査区東部のＢⅣｆ16グリッドに位置する。検出状況は、Ⅳ層中において、１号陥し穴と共に検出した。
＜重複関係・建替え＞１号陥し穴状遺構を切る。
＜平面形・規模＞平面形は長楕円形を呈する。規模は、開口部径145×65㎝、深さ16㎝である。
＜埋土＞黒褐色シルトに単層である。堆積様相から自然堆積ではないかと考えられる。
＜底面・壁＞底面は、一部分は重複関係にある１号陥し穴の埋土が底面となる。その他はⅣ層黄褐色粘土層でほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がる。
＜遺物＞（第68図78、写真図版43）出土遺物は78の須恵器坏１点（212.35ｇ）が出土した。
＜時期＞出土遺物から９世紀後半～10世紀と考えられる。

７号土坑（第39図）

＜位置・検出状況＞調査区中央部のＢⅥａ12グリッド付近に位置する。検出状況は、Ⅵ層中で黒褐色シルトの円形の広がりとして検出した。

＜重複関係・建替え＞本遺構の西側は、13号溝跡に切られている。

＜平面形・規模＞平面形は楕円形を呈する。規模は、開口部径で長軸長82㎝である。短軸長は上記のとおり、西側が13号溝跡に破壊され不明である。深さは約10㎝である。

＜埋土＞黒褐色シルトによる単層である。堆積様相から自然堆積ではないかと考えられる。

＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。壁は外傾気味に立ち上がる。

＜遺物＞出土遺物は、土器類14.28ｇが出土した。小片であることから全て不掲載とした。

＜時期＞詳細な時期は不明であるが、出土遺物から９世紀後半～10世紀と考えられる。

８号土坑（第44・45図、写真図版26）

＜位置・検出状況＞調査区北部のＡＩｌ25グリッド付近に位置する。Ⅳ層中で、黒褐色シルト質粘土や黒色シルトの広がりとして認知した。遺構プランは調査区外南側に延びる。

＜重複関係・建替え＞14号土坑に切られる。

＜平面形・規模＞平面形は楕円形を呈する。規模は、開口部径165㎝以上×140㎝、深さは約25㎝である。

＜埋土＞第44図Ａ－Ａ´断面の１層は、本遺構の他に14号土坑、６・８号溝跡も覆う。本遺構の埋土と認知されるのは、21～23層である。21層黒褐色シルト質粘土が埋土上位に、22・23層の黒色シルトが中位～下位に堆積する。堆積様相からは自然堆積と判断されたが明確ではない。

＜底面・壁＞床面はほぼ平坦である。壁は直立気味～やや外傾に立ち上がる。

＜遺物＞（第68～70図79・100・108、写真図版44～46）出土遺物は、土器類834.86ｇ、焼成粘土塊13.9ｇ、緑釉陶器１点、石器１点が出土した。79は小形の土師器甕である。ロクロ成形で、底部は回転糸切りによる。焼成粘土塊は掲載番号96として写真・表掲載した。100の緑釉陶器は、猿投産の綾椀で、内面に陰刻花文が描かれる。９世紀後半と考えられる。108は磨り石で、表面と裏面の両面に磨り痕がある。

＜時期＞出土遺物から９世紀後半～10世紀と考えられる。

９号土坑（第39図、写真図版26）

＜位置・検出状況＞調査区西部のＡＩｎ22グリッド付近に位置する。Ⅳ層中で黒褐色シルト質粘土の広がりとして検出した。プランの半分以上は調査区外西側に延びる。

＜平面形・規模＞平面形は長楕円形と想定を呈する。規模は、開口部径200㎝以上×60㎝で、深さは約26㎝である。

＜埋土＞黒褐色シルト質粘土による単層で、黄褐色粘土粒が５％程混入する。自然堆積と考えられる。

＜底面・壁＞底面は北西方向に向かってやや傾斜する。壁は、南壁や東壁は直立気味に外傾し、北壁や西壁では緩く外傾して立ち上がる。

＜遺物＞出土遺物は土器類44.42ｇである。何れも小片のため不掲載とした。

＜時期＞出土遺物から９世紀後半～10世紀と考えられる。

10号土坑（第39図、写真図版24・25）
＜位置・検出状況＞調査区西部のＡＩｔ23グリッド付近に位置する。Ⅳ層中で黄褐色粘土を含む黒色シルトの広がりとして、２号土坑と共に検出した。
＜重複関係・建替え＞２号土坑に切られると捉えた。ただし、セット関係にある土坑の可能性も考えられることを付記しておきたい。
＜平面形・規模＞大部分が調査区外東側に延びることから、全の形状は不明にある。ただ、楕円形若しくは円形の可能性はある。規模は南北の一辺が約190㎝である。深さは、30～38㎝である。
＜埋土＞最上位の11層黒褐色シルトは、黄褐色粘土が少量含まれる。自然堆積層の可能性もあるが、明確にはわからない。12層は人為による整地層で、明黄褐色粘土粒や焼土粒が多く混入し、非常に硬い。13・14層は明確には判別できないが、人為堆積層の可能性が高い。
＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がるが、北壁が南壁と比較して急傾を呈する特徴が看取される。
＜遺物＞出土遺物は土器類7.22ｇが出土した。小片のため不掲載とした。
＜時期＞出土遺物から９世紀後半～10世紀前半と考えられる。

11号土坑（第40図、写真図版26）
＜位置・検出状況＞調査区西部ＡＩｐ23グリッド付近に位置する。Ⅳ層中で黒褐色シルト質粘土の広がりとして検出した。本遺構の東側は調査区外東側に続く。
＜平面形・規模＞平面形は方形基調である。規模は、南北の開口部径が65㎝であるが東西方向では不明にある。深さは北側の最深部で17㎝、南側の最深部で13㎝である。
＜埋土＞北側が黒褐色シルト、南側で黄褐色シルトが堆積する。人為堆積の可能性が考えられる。
＜底面・壁＞底面は中央部が約22㎝マウンド状に盛り上がり、そこから壁際にかけて凹凸が激しい。壁は、外傾気味に立ち上がる。
＜遺物＞なし。
＜時期＞詳細な時期は不明である。埋土の様相からは古代の可能性がある。

12号土坑（第40図、写真図版26）
＜位置・検出状況＞調査区北部のＡⅡｋ４グリッド付近に位置する。検出状況はⅣ層で黒褐色シルトの広がりとして認知した。大部分は調査区外南側に延びる。
＜平面形・規模＞平面形は不整形である。規模は、東西の開口部径270㎝以上、深さは37㎝である。
＜埋土＞黄褐色粘土ブロックが10％混入する黒褐色シルト質粘土を主体にする。暗褐色砂質土が東壁側に堆積する。人為堆積と判断されたが、明確ではない。
＜底面・壁＞底面はやや丸底気味である。壁は緩く外傾しながら立ち上がる。
＜遺物＞出土遺物は、土器類25.67ｇである。小片のため不掲載とした。
＜時期＞詳細な時期は不明であるが、出土遺物から９世紀後半～10世紀前半と考えられる。

13号土坑（第40図、写真図版27）
＜位置・検出状況＞調査区北部のＡⅡｋ９グリッド付近に位置する。Ⅳ層中で焼土粒や炭化物を含む黒色シルトによる方形プランとして把握した。
＜平面形・規模＞平面形は長方形を呈する。規模は、開口部径は172×90㎝、深さ50㎝を測る。

＜埋土＞１～４層に分層した。全般的に焼土粒と炭化物が顕著にみられる人為層であるが、堆積様相としては、自然埋没したものと捉えられる。埋土上～中位にかけて厚く堆積する１層黒色シルトは、焼土粒と炭化物を少量含む。埋土中位の２層は焼土層で炭化材を多量に含む。2ａ層黒褐色シルト層は、主に壁際にみられ、焼土粒を多量に含む。埋土下位の主体を占める３層は、黒色シルト層で１層と類似する。４層は褐色粘土質シルトで、壁の地山崩壊土と判断される。
＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。壁は急傾斜で立ち上がる。
＜遺物＞（第68図80・81、写真図版44）出土遺物は、土器類550.51ｇと鉄滓１点が出土した。
＜時期＞出土遺物から９世紀後半～10世紀前半と考えられる。
＜性格・用途＞２層を中心にみられる多量の炭化材の在り方から、本遺構は炭窯と推定される。

14号土坑（第44・45図、写真図版27）
＜位置・検出状況＞調査区北部のＡＩ１23グリッド付近に位置する。Ⅳ層中で暗褐色シルトの楕円形の広がりとして検出した。本遺構の南側プランは、調査区外南側に延びる。
＜重複関係・建替え＞本遺構の西側で重複する８号土坑を切る。また、東側で重複する８号溝跡との新旧関係は、第44図Ａ－Ａ´断面においては本遺構が８号溝跡を切って（新しく）図示している。ただ、本遺構と８号溝跡は同時期存在で、併せて本遺構が８号溝跡の何らかの付属施設である可能性もある。
＜平面形・規模＞平面形は楕円形である。規模は、長軸長92㎝以上、短軸長80㎝、深さは最深で42㎝である。
＜埋土＞第44図断面Ａ－Ａ´の１層は、本遺構の他に８号土坑・６号溝跡・８号溝跡も覆う。本遺構の埋土と認知されるのは31～33層である。埋土上位に薄く堆積する31層は暗褐色シルト層である。埋土上～中位には32層黒色シルトが堆積する。埋土下位には、黒色シルトが少量混入する33層褐色粘土質土が堆積する。何れの土層もレンズ状の堆積を示し、混入物も少ないことから、自然堆積と捉えられる。
＜底面・壁＞底面はすり鉢状に丸底である。壁は外傾して立ち上がるが、西壁が東壁と比較してより急傾にある。
＜遺物＞なし。
＜時期＞出土遺物はないが、重複遺構との関係から９世紀後半～10世紀前半若しくはそれより若干新しい時期の可能性が考えられる。また、調査区境の土層断面の観察結果からは、十和田ａ火山灰降下時期より新しい可能性が高い。

15号土坑（第40図、写真図版27）
＜位置・検出状況＞調査区西部のＡＩ１22グリッドに位置する。検出状況は、Ⅳ層で黒褐色シルトの広がりとして検出した。本遺構の西側は、調査区外西側に延びる。
＜平面形・規模＞平面形は不整形で、ランダムに掘られた様相である。規模は、検出部においては南北長280㎝以上、東西長75㎝以上で、深さは北側で20㎝、南側で25㎝である。
＜埋土＞１層黒褐色シルトを主体とし、黄褐色粘土ブロックや焼土粒を含む。この１層は、比較的多くの土器を包含するが、土器は人為により投棄されたと判断される。ただ、埋土自体は自然堆積と捉えた。２層は底面付近において所々にみられ、黄褐色粘土（地山土）に黒褐色シルトが少量混入する。地山の再堆積土と考えられるが、地山そのもので掘り過ぎの可能性もある。

＜底面・壁＞底面はⅣ層地山中まで掘り込まれており、凹凸が激しい。本遺構付近の地山は、基本的には黄褐色粘土層であるが、底面は礫混じりの粘土層が顕著にみられる。従って、凹凸が激しいことは、地山の土質にも起因するものかもしれない。壁は緩く外傾する。
＜付属施設＞副穴１個を検出した。径約17㎝の円形である。深さは約20㎝である。
＜遺物＞（第68図82～84、写真図版44）出土遺物は土器類1,785.00ｇである。82・83は須恵器坏で、84は須恵器大甕の胴部である。接合作業の結果、何れも完形にはならないことから、壊れた状態のものを廃棄したと考えられる。
＜時期＞出土遺物から９世紀後半～10世紀前半と考えられる。

16号土坑（第40図、写真図版28）
＜位置・検出状況＞調査区北部のＡⅡｊ15グリッド付近に位置する。Ⅳ層中で黒褐色粘土質土の長楕円形気味の広がりとして検出した。
＜平面形・規模＞平面形は長楕円形を呈する。規模は、開口部径は200×98㎝、深さ48㎝を測る。
＜埋土＞１層黒褐色粘土質土を主体とする。この１層中には黄褐色粘土粒が５％程含まれ、また酸化鉄の集積がみられる。自然堆積と考えられる。西底面付近にみられる２層は、地山壁の崩壊土と判断される。
＜底面・壁＞底面は平坦を基調とする。壁は外傾して立ち上がるが、西壁が東壁と比較してより急傾にある。
＜付属施設＞北側に溝状の張り出しが伴う。幅は約60㎝、深さ約25㎝である。当初は重複遺構と捉えたが、土層断面の観察の結果からは同じ埋土（１層）が堆積することから、付属施設と判断した。
＜遺物＞なし。
＜時期＞詳細な時期は不明である。埋土の様相からは古代の可能性が高い。

17号土坑（第46図、写真図版28）
＜位置・検出状況＞調査区北部のＡⅡｉ22グリッド付近に位置する。Ⅳ層で黒褐色粘土質土による溝跡と推定されるプラン（10号溝跡）と、不整円形気味のプラン（本遺構）を確認した。調査区境にサブトレンチを入れ、土層断面の観察から、10号溝跡を切る本遺構を認知した。南側は調査区外南側へ延びる。
＜重複関係・建替え＞10号溝跡を切る。
＜平面形・規模＞平面形は不整形である。規模は、検出部において東西では355㎝以上であることがわかる。深さは最深部で約40㎝である。
＜埋土＞第46図Ｂ－Ｂ′断面の１層が本遺構に伴う。黒褐色シルト質粘土を主体とする。南東方向から斜めに１層を切る撹乱層がみられる。当初この撹乱層は、人為による古代層の可能性で捉えたが、調査区境の土層断面の再観察を行った結果、現代の撹乱層の可能性が高いと判断された。明確ではないものの、本遺構は現代の可能性もある。
＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がる。
＜遺物＞出土遺物は土器類９ｇである。磨滅した土師器小片１点である。
＜時期＞重複遺構との関係から古代より新しい。また、撹乱層と捉えた土層が現代であれば、本遺構も現代となる。出土遺物は、上記のとおり磨滅した土師器小片１点が出土しているが、異時期の混入の可能性が高い。

18号土坑（第41図、写真図版28）
＜位置・検出状況＞調査区中央部のＢⅣｅ12グリッド付近に位置する。Ⅳ層で黒色シルトによる楕円形のプランとして把握した。
＜重複関係・建替え＞179号柱穴状土坑に切られる。また、180号柱穴状土坑との新旧関係は明確には掴めなかったが、本遺構が新しいと捉えた。
＜平面形・規模＞平面形は楕円形である。規模は、開口部径148×120㎝、深さ28㎝を測る。
＜埋土＞１層黒色シルトを主体とする。この１層には炭化物が微量含まれる。２層褐色粘土は地山ブロック層で、壁の地山崩壊土と判断される。自然堆積と考えられる。
＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。壁は外傾気味に立ち上がる。
＜遺物＞出土遺物は土器類29.76ｇである。古代の土師器小片である。
＜時期＞出土遺物から９世紀後半～10世紀前半と考えられる。

19号土坑（第41図、写真図版28）
＜位置・検出状況＞調査区北部のＡⅡｊ16グリッド付近に位置する。Ⅳ層で黒褐色シルトの楕円形のプランとして把握した。
＜平面形・規模＞平面形は楕円形である。規模は、開口部径70×55㎝、深さ30㎝である。
＜埋土＞黒褐色シルトによる単層である。自然堆積と判断される。
＜底面・壁＞底面は凹凸が激しく、平坦ではない。壁は、外傾した後、一部内傾気味となり、さらに外傾に立ち上がる。
＜遺物＞出土遺物は土器類52.86ｇ出土している。古代の土師器小片である。
＜時期＞出土遺物から９世紀後半～10世紀前半と考えられる。

20号土坑（第41図、写真図版29）
＜位置・検出状況＞調査区中央部のＡⅣｙ12グリッド付近に位置する。Ⅳ層で黒褐色粘土質シルトの広がりとして検出した。西側は調査区外西側へ延びる。
＜平面形・規模＞平面形は検出部からは楕円形と推定される。規模は、南北長が146㎝、深さは32㎝である。
＜埋土＞黒褐色粘土質シルトを主体とし、底面や底面壁際においてにぶい黄橙色粘土がみられる。自然堆積層と考えられるが、明確には判断できない。
＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がる。
＜遺物＞（第68図85、写真図版44）出土遺物は土器類859.53ｇである。85の須恵器甕を掲載した。
＜時期＞出土遺物から９世紀後半～10世紀前半と考えられる。

21号土坑（第41図、写真図版28）
＜位置・検出状況＞調査区中央部のＢⅣａ12グリッド付近に位置する。Ⅳ層で黒褐色シルトの楕円形の広がりとして検出した。半裁した結果、柱穴状土坑とするには掘削深度が浅いと判断し、土坑として遺構登録した。
＜平面形・規模＞平面形は楕円形を呈する。規模は、開口部径は88×54㎝、深さ約10㎝を測る。
＜埋土＞褐灰色シルトによる単層である。黄褐色粘土ブロック、焼土粒、炭化物の混入具合から人為

堆積層と判断した。
＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。壁は、外傾気味にわずかに立ち上がる。
＜遺物＞出土遺物は土器類16.05ｇである。土師器小片である。
＜時期＞出土遺物から９世紀後半～10世紀前半と考えられる。

22号土坑（第41図）
＜位置・検出状況＞調査区中央部のＡⅣｗ12グリッド付近に位置する。Ⅳ層で黒色シルトの広がりとして検出した。大部分は調査区外東側に延びる。
＜平面形・規模＞平面形は不明にある。規模は、検出部で南北が82㎝、深さは最深で13㎝を測る。
＜埋土＞黒褐色シルトの単層である。人為堆積なのか自然堆積なのか判断できなかった。
＜底面・壁＞底面は北から南へ向かって傾斜する。壁は南側では外傾するが、北側ではほとんど立たない。
＜遺物＞出土遺物は土器類16.05ｇである。土師器小片で不掲載とした。
＜時期＞出土遺物から９世紀後半～10世紀前半と考えられる。

（５）溝　　跡

溝跡は21条検出した。古代18条、中世～近世１条、近代～現代１条、現代１条である。底面・壁の項においては、溝底の標高値を参考に水が流れる方向について推定し記述した。本遺跡の地形は平坦を基調とし、微地形的には西から東へ、そして南から北に向かって高度を減じる。底面の標高値からも、基本的には、上記の方向に水が流れると推定されるものが多い。しかしながら、１節の遺跡の位置で記述したとおり、作屋敷遺跡は周囲よりやや高い微高地に立地していることで、上記に反する方向に流れる可能性があるものも散見された。

１号溝跡（第42、写真図版29）
＜位置・検出状況＞調査区西部のＢＩｈ13～ｉ14グリッド付近に位置する。Ⅳ層中で黒色シルトによる溝状のプランとして検出した。
＜平面形・規模・主軸方向＞溝跡の両端が調査区外に続くことから長さは不明にある。検出部での長さは315㎝である。溝幅が24～36㎝、深さ最深で20㎝を測る。主軸方向は北東－南西方向に延びる。
＜埋土＞黒色シルトと黒褐色シルトに大別される。自然堆積と考えられるが、明確ではない。
＜底面・壁＞底面は、全体的には平坦を基調とするが、やや凹凸がある。水が流れていたと仮定すると、溝底の標高からは南西→北東に緩く下る。壁はやや外傾しながら立ち上がる。
＜遺物＞出土遺物は土器類3.92ｇである。土師器小片である。
＜時期＞出土遺物から９世紀後半～10世紀前半と考えられる。また、埋土の様相からも古代の遺構と推定される。

２号溝跡（第42図、写真図版29）
＜位置・検出状況＞調査区西部のＡＩｒ23グリッド付近に位置する。Ⅳ層中で黒褐色シルトの楕円形の広がりとして検出した。溝の両端は調査区外に延びる。
＜重複関係・建替え＞４号竪穴住居跡を切る。
＜平面形・規模・主軸方向＞溝跡の両端が調査区外に続くことから長さは不明にある。検出部での長

さは約６ｍである。溝幅30～44㎝、深さ12～18㎝を測る。主軸方向は北東－南西方向に直線的に延びた後、やや西側に曲がる。
＜埋土＞黒褐色シルトによる単層である。自然堆積と判断される。
＜底面・壁＞底面はやや丸底気味を呈する。水が流れていたと仮定すると、溝底の標高からは南西→北東に緩く下る。壁は外傾して立ち上がる。
＜遺物＞出土遺物は土器類465.03ｇである。
＜時期＞出土遺物は９世紀後半～10世紀前半である。周辺の遺構変遷からは、それよりやや新しい時期の可能性もある。

３号溝跡（第43図、写真図版29）
＜位置・検出状況＞調査区東部のＡⅣｐ15グリッド付近に位置する。Ⅳ層で黒褐色砂質シルトの溝状プランとして検出した。
＜平面形・規模・主軸方向＞溝跡の両端が調査区外に続くことから長さは不明にある。溝幅70～88㎝、深さ16～25㎝を測る。主軸方向は東－西方向に延びる。
＜埋土＞黒褐色砂質シルトによる単層である。明確ではないが自然堆積と考えられる。
＜底面・壁＞底面は凹凸が激しく、平坦ではない。水が流れていたと仮定すると、溝底の標高からは西→東に下る可能性がある。壁は外傾しながら立ち上がる。
＜遺物＞出土遺物は土器類62.92ｇである。磨滅した小片で不掲載とした。
＜時期＞出土遺物から９世紀後半～10世紀前半と考えられる。また、本遺構の連続性として、現道を挟み西側に直線的に辿っていくと、調査区中央部で検出された18号溝跡若しくは19号溝跡のどちらかに繋がる可能性が高い。

４号溝跡（第43図、写真図版30）
＜位置・検出状況＞調査区東部のＢⅣｂ16～ｅ17グリッドに位置する。Ⅳ層中で黒褐色シルトの広がりを検出した。調査区境にサブトレンチを入れ、土層断面の観察を行った結果、南北の長さが14ｍ以上であることがわかった。厳密には溝跡であるものか不明確にあるが、後述する14号溝跡の関係などを考慮し、溝跡として遺構登録した。
＜重複関係・建替え＞３号竪穴住居跡を切る。
＜平面形・規模・主軸方向＞面的な調査ができなかったことから溝の長さや溝幅は不明である。検出部での長さは約14ｍ、深さは最深で12～25㎝を測る。主軸方向は北－南に延びる。
＜埋土＞黒褐色シルトを主体とするが、黄褐色粘土の混入の割合比で含有率の高い方を１層、低い方を２層とした。１層が埋土上位に、２層が埋土下位に堆積する。両層ともに自然堆積と判断されたが、明確ではない。
＜底面・壁＞平面的な検出部がほとんどなく、底面や壁の状況は不明にある。水が流れていたと仮定すると、調査区境の土層観察から溝底を判断すると、緩く南→北に下る可能性もある。
＜遺物＞出土遺物は土器類52.31ｇである。磨滅した土師器小片で、併せて酸化鉄の集積が付着しているものもある。土器の残存率を鑑みて、全て不掲載とした。
＜時期＞出土遺物は９世紀後半～10世紀前半と考えられる。しかしながら、遺構の重複関係からは３号竪穴住居跡より新しいことが確実であり、９世紀後半～10世紀前半の年代よりやや新しい可能性もある。また、本遺構の連続性として、現道を挟み西側に延びると想定した場合、調査区中央部で検出

された14号溝跡に繋がる可能性が高い。この14号溝跡についても、十和田ａ火山灰を埋土に含む６号竪穴住居跡より新しいことを確認できる。従って、上述した９世紀後半～10世紀前半より新しい可能性については整合性がある。

５号溝跡（第44図、写真図版30）

＜位置・検出状況＞調査区北部のＡⅡｋ１グリッド付近に位置する。Ⅳ層中で黒褐色シルトや黄灰色粘土質砂質土の非常に大きな広がりを検出した。調査区北境に幅50㎝程のサブトレンチを設定し掘削したところ、幅が10ｍ前後、深さ１ｍ以上の溝跡であることが判明した。

＜平面形・規模・主軸方向＞溝跡の両端が調査区外に続くことから長さは不明にある。溝幅が、開口部径約9.9ｍ、底部径約7.7ｍ、深さ最深で約1.3ｍである。主軸方向は北－南方向に延びる。

＜埋土＞１～15層に分け、さらに２層系は２層と２ａ層に、５層系は５層と５ａ層に細分した。埋土上～下位にいたるまで黄褐色や褐灰色の砂質土若しくは砂質粘土を主体とする。全て自然堆積層であり、合わせて水成堆積と判断される。その中で、壁際に近い埋土中位の８層が十和田ａ火山灰層である。この８層は、プライマリな火山灰層ではなく、水成作用による二次堆積と判断される。十和田ａ火山灰は、８層以外には８層の直下に堆積する13層にぶい黄褐色砂質粘土中に、小ブロックが少量混入するものの、他層には認められない。遺物は、埋土最下位～底面直上に厚く堆積する15層灰褐色砂質粘土から土師器小片と須恵器片が少量出土しているが、他の層から認められない。なお、15層出土の土器類は流れ込みによるものと判断される。また、３層と14層は、他とは土色・土質が異なる黒色泥炭土がみられるが、近接する同時期・同種の遺構と考えられる６号溝跡などには認められない。従って、水成作用が強い溝底などに形成されている（溜まりやすい？）と考えたい。上記の内容に土層堆積様相を加味して拡大解釈すると、本溝跡は概ね３単位（時期？）の堆積土により構成されている可能性もある。具体的には古い方から、①第１段階の堆積土が15層、②第２段階の堆積土が４・５・５ａ・６・７・８・８ａ・９・10・11・12・13・14層、③第３段階の堆積土が１・２・３層の、３つの単位が想定される。また、第２段階とした堆積土はさらに、細分可能性かもしれない。なお、上記した内容が流路の変遷に結び付けられるかは検討を要する。

＜底面・壁＞底面はほぼ平坦と思われたが、精査時は湧水が顕著で底面の状況把握はやや不明確にある。水が流れていたと仮定すると、周辺地形の標高からは南→北に下る可能性が高い。壁は外傾しながら立ち上がる。

＜遺物＞（第68図86、写真図版44）出土遺物は土器類187.97ｇである。86の須恵器甕を掲載した。遺物は全て、埋土下位～底面に堆積する15層から出土した。この15層は、埋土の項で上記した第１段階の堆積土である。従って、これら15層出土の土器類は、第２段階の堆積土にみられる８層十和田ａ火山灰降下時期より古い可能性が極めて高い資料と言えよう。

＜時期＞出土遺物から９世紀後半～10世紀前半と考えられる。また、本溝跡にみられる十和田ａ火山灰は二次堆積ではあるが、出土土器類の年代から考えて降下時期と大差ない時期と判断される。したがって、十和田ａ火山灰降下時には埋没が始まっていたと捉えられるが、完全には埋まりきっていなかったと判断できよう。

６号溝跡（第44・45図、写真図版31）

＜位置・検出状況＞調査区北部のＡＩｋ24グリッドに位置する。Ⅳ層中で黒褐色シルトの大きな広がりを検出した。精査当初は竪穴住居跡なのか溝跡なのか判別できなかったことから、調査区北境に幅

50㎝程のサブトレンチを設定し掘削したところ、幅４ｍを超える溝跡と判明した。
＜重複関係・建替え＞14号土坑や８号溝跡と重複する。新旧関係は、土層断面の観察から本遺構が14号土坑に切られ（古く）、８号土坑を覆う（新しい）と捉えた。しかしながら、本遺構と14号土坑・８号溝は、新旧関係にある遺構ではなく、セットの関係にある同時期遺構の可能性もある。
＜平面形・規模・主軸方向＞溝跡の両端が調査区外に続くことから長さは不明にある。溝幅が、開口部径約4.2m、底部径約0.28m、深さ最深で約0.96mである。主軸方向は北－南方向に延びる。
＜埋土＞第44・45図Ａ－Ａ´・Ｂ－Ｂ´土層断面では、本遺構の埋土を１～８層、８号溝跡の埋土を11層、８号土坑の埋土を21～23層、14号土坑を31～33層に命名し示した。本遺構の埋土は、上記のとおり１～８層に分層し、さらに２層系は２・２ａ・２ｂ層に、３層系は３・３ａ・３ｂ層に、４層系は４・４ａ・４ｂ・４ｃ層に、５層系は５・５ａ・５ｂ層に細分した。埋土上位は、１層黒色シルトを主体とし、その直下に２層系とした十和田ａ火山灰が混入する土層がみられる。埋土中位付近には、３層系～５層系とした褐色や暗褐色を基調とした砂質土が主体的にみられる。壁際にのみ６層黒褐色泥質粘土質土がみられる。埋土下位～底面付近には７層黒褐色粘土質土を中心とし、北側調査区境では７層直下でさらに８層黄褐色粘土がみられる。全て自然堆積層である。合わせて基本的には水成堆積と判断される。ただし、５号溝跡の埋土と比較した場合、６号溝跡の埋土は全体的に水に長時間浸った土質とは捉え難く、水成作用が弱かった可能性が窺える。
＜底面・壁＞底面は調査区北境ではＵ字状にやや丸底に、調査区南境では平坦気味にある。水が流れていたと仮定すると、溝底や周辺地形の標高からは南→北に下る可能性が高い。壁は外傾しながら立ち上がる。全体の断面形は逆台形に近い形状で、いわゆる薬研堀と判断される。
＜遺物＞出土遺物は土器類111.7ｇが出土している。９世紀後半～10世紀前半の土師器で、３層・３ａ層から出土している。小破片なため不掲載とした。
＜時期＞出土遺物から９世紀後半～10世紀前半と考えられる。また、本溝跡にみられる十和田ａ火山灰は二次堆積ではあるが、出土土器類の年代から考えて降下時期と大差ない時期と判断される。また、十和田ａ火山灰降下時には既に埋没に近い状態であったことが想定される。

７号溝跡（第45図、写真図版31）
＜位置・検出状況＞調査区北部のＡⅡｋ６～ｋ９グリッドに位置する。Ⅳ層で黒褐色シルトの溝状プランとして検出した。
＜重複関係・建替え＞57・59・60・61・62・65・70号柱穴状土坑に切られている。
＜平面形・規模・主軸方向＞溝跡の両端が調査区外に続くことから長さは不明にある。検出部での長さ約11mである。溝幅が15～55㎝、深さは４～６㎝である。深さから判断して、溝の上部は削平され、底付近が残存していたと考えられる。主軸方向は南西－北東方向に、ほぼ直線的に延びる。なお、南西端では真南方向に変わる。
＜埋土＞黒褐色シルト質粘土による単層である。自然堆積と考えられるが明確には判断できない。
＜底面・壁＞底面はやや凹凸がある。水が流れていたと仮定すると、溝底や周辺地形の標高からは南西→北東に下る可能性が高い。壁は外傾気味にあるが、非常に浅く判断できない。
＜遺物＞出土遺物は土器類181.39ｇである。９世紀後半～10世紀前半の土師器である。小破片なため不掲載とした。
＜時期＞出土遺物は９世紀後半～10世紀前半である。

8号溝跡（第44・45図、写真図版31）

＜位置・検出状況＞調査区北部のＡＩｋ24グリッドに位置する。６号溝跡の中場付近の下位から検出した。

＜重複関係・建替え＞６号溝跡より古いと判断した。しかしながら、埋土の類似性などから判断して、大差ない時期か若しくは６号溝跡に付属する遺構である可能性がある。

＜平面形・規模・主軸方向＞溝跡の両端が調査区外に続くことから長さは不明にある。溝幅が、開口部径約80㎝、底部径約45㎝、深さは最深で約20㎝である。主軸方向は北－南方向に延びる。

＜埋土＞第44・45図Ａ－Ａ´・Ｂ－Ｂ´土層断面で11層としたのが、本遺構に伴う埋土である。灰黄褐色砂質土による単層である。この11層は、色調や土質が６号溝跡の２ａ・３ａ・５層などに類似する。自然堆積である。

＜底面・壁＞底面は平坦気味にある。水が流れていたと仮定すると、溝底や周辺地形の標高からは南→北に下る可能性が高い。壁は外傾して立ち上がる。

＜遺物＞なし。

＜時期＞重複遺構との関係からは、時期の下限は９世紀後半～10世紀前半より古い。併せて、相対的に十和田ａ火山灰降下期より古い。出土遺物がなく、時期の上限は推定できないが、埋土の類似性などの観点から６号溝跡と同時期の遺構か若しくは６号溝跡に付属する遺構である可能性が高い。

9号溝跡（第46図、写真図版31）

＜位置・検出状況＞調査区北部のＡⅡｉ21～ｊ22グリッドに位置する。Ⅳ層中で黒褐色シルト質粘土の溝状プランとして検出した。

＜平面形・規模・主軸方向＞溝跡の両端が調査区外に続くことから長さは不明にある。検出部での長さ270㎝以上である。溝幅が18～34㎝、深さ８～12㎝を測る。主軸方向は南東－北西方向に直線的に延びる。

＜埋土＞黒色シルト質粘土の単層である。自然堆積と考えられるが明確には判断できない。

＜底面・壁＞底面は凹凸が激しく、南から北に向かって階段状に下がる様子にもみえる。水が流れていたと仮定すると、溝底や周辺地形の標高からは南東→北西に下る可能性が高い。壁は外傾しながら立ち上がる。

＜遺物＞出土遺物は土器類10.88ｇである。９世紀後半～10世紀前半の土師器で、小破片なため不掲載とした。

＜時期＞出土遺物から９世紀後半～10世紀前半と考えられる。

10号溝跡（第46図、写真図版31）

＜位置・検出状況＞調査区北部のＡⅡｉ21～ｊ22グリッドに位置する。Ⅳ層で黒褐色粘土質土による溝跡と推定されるプランと、不整円形気味のプランを確認した。調査区境に入れたサブトレンチの土層断面において、不整円形気味（17号土坑）のプランに切られる本溝跡を認知した。

＜重複関係・建替え＞17号土坑に切られる。

＜平面形・規模・主軸方向＞溝跡の両端が調査区外に続くことから長さは不明にある。溝幅が、開口部径約1.0ｍ、底部径約0.25～0.35ｍ、深さは最深で約0.25ｍである。主軸方向は南東－北西方向に延びる。

＜埋土＞埋土上位に11層黒褐色シルト、中～下位に12・12ａ層の黄褐色粘土ブロックが混入する黒褐

色粘土質土が堆積する。明確には判断できないが、自然堆積の可能性がある。
＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。水が流れていたと仮定すると、溝底や周辺地形の標高からは南東→北西に下る可能性が高い。壁は外傾気味に立ち上がる。検出部からの長さ2.2m以上である。
＜遺物＞出土遺物は土器類10.51ｇである。９世紀後半～10世紀前半の土師器で、小破片なため不掲載とした。
＜時期＞出土遺物から９世紀後半～10世紀前半と考えられる。

11号溝跡（第46図、写真図版32）
＜位置・検出状況＞調査区北部のＡⅡｉ24グリッドに位置する。Ⅳ層で黒褐色シルト質粘土の溝状プランとして検出した。
＜平面形・規模・主軸方向＞溝跡の両端が調査区外に続くことから長さは不明にある。溝幅が64～75㎝、深さ15㎝である。主軸方向は南東－北西方向に直線的に延びる。
＜埋土＞黒褐色シルト質粘土による単層である。自然堆積なのか人為堆積なのか判断が難しいが、前者と捉えたい。
＜底面・壁＞底面はほぼ平坦で、南側はやや丸底気味を呈する。水が流れていたと仮定すると、溝底や周辺地形の標高からは南東→北西に下る可能性が高い。壁は外傾しながら立ち上がる。
＜遺物＞なし。
＜時期＞出土遺物がなく時期は特定できない。埋土の様相からは、古代と推定しておきたい。

12号溝跡（第47図、写真図版32）
＜位置・検出状況＞調査区中央部のＡⅣｗ11～ｘ12グリッド付近に位置する。Ⅳ層中で黒色粘土質シルトの溝状プランとして検出した。溝跡の両端が調査区外に続く
＜平面形・規模・主軸方向＞検出部での長さ250㎝以上である。溝幅が46～60㎝、深さ３～12㎝を測る。主軸方向は西－東方向に直線的に延びる。
＜埋土＞黒色粘土質シルトによる単層である。自然堆積と判断したが明確ではない。
＜底面・壁＞底面は凹凸がある。水が流れていたと仮定すると、溝底や周辺地形の標高からは西→東に下る可能性が高い。溝上部は削平されていると思われ、壁はわずかに立ち上がるだけで壁形はわからない。
＜遺物＞（第69図101、写真図版45）出土遺物は101の陶磁器類１点（22.78ｇ）である。中世～近世と推定される瀬戸・美濃産碗の破片である。
＜時期＞出土遺物から中世～近世と考えられる。

13号溝跡（第47図、写真図版32）
＜位置・検出状況＞調査区中央部のＡⅣｘ12～ＢⅣｄ13グリッド付近に位置する。Ⅳ層で黒褐色シルト質粘土による溝状のプランとして検出した。溝跡の両端が調査区外に続く。
＜重複関係・建替え＞６号竪穴住居跡、14号溝跡を切る。
＜平面形・規模・主軸方向＞長さは不明にある。溝幅は、開口部径30～40㎝、底部径20～35㎝、深さは５～12㎝である。主軸方向は南－北方向にかけて、弧状に延びる。
＜埋土＞黒褐色シルト質粘土による単層である。自然堆積と推定される。
＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。水が流れていたと仮定すると、溝底の標高はわずかではあるが

北が高く南が低い。また、周辺地形の標高はほぼ平らにある。従って、北→南に下る可能性が考えられものの、明確にはわからない。壁は緩く外傾して立ち上がるが、溝上部は削平されていることから、本来の壁形はわからない。
＜遺物＞出土遺物は土器類781.27ｇが出土した。９世紀後半～10世紀前半の土師器で、小破片なため不掲載とした。
＜時期＞出土遺物は９世紀後半～10世紀前半と考えられる。しかしながら、遺構の重複関係からは、十和田ａ火山灰降下時期より確実に新しい。埋土の様相からは、中世～近世と捉えられる12号溝跡に類似する。総括すると時期の上限は10世紀前半より新しいが、時期の下限は不明にある。

14号溝跡（第48図、写真図版32）
＜位置・検出状況＞調査区中央部のＢⅣａ12～ｄ13グリッド付近に位置する。Ⅳ層中で黒褐色シルトや褐灰色砂質土の不整形の広がりとして検出したが、平面プランは明瞭にはなく、また本遺構西側に位置する６号竪穴住居跡と重複関係にあることは想定されたが、新旧関係は不明確にあった。従って、調査区東境にサブトレンチを入れ、また本遺構と６号竪穴住居跡を網羅するように東西方向に土層ベルトを設定した上でベルト沿いにサブトレンチを入れ、土層断面から遺構検出に努めた。
＜重複関係・建替え＞13号溝跡に切られ、６号竪穴住居跡を切る。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は馬蹄形気味を呈するが、平面的な検出部が少なく詳細はわからない。溝幅が、開口部径約２ｍ、底部径約1.2ｍ、深さは最深で約１ｍである。主軸方向は北から南に延びた後、北西から南東方向に曲がる。
＜埋土＞１～３層に分層した。埋土上位の１層黒褐色シルトは約６㎝の厚さで堆積し、硬く締まる。２層黒褐色シルトは、色調や土質は１層に類似するが、やや柔らかい特徴がある。３層褐灰色砂質土は２層よりさらに柔らかく、各所に黒色泥炭土が多く混じり、底面付近では人頭大の角礫が多く出土した。これらの角礫は、角がやや自然摩耗されている。１～３層は明確ではないが、全て自然堆積と判断しておきたい。ただし、埋土上位の１層は人為により踏み固められている可能性もある。また、３層に混入する黒色泥炭土の在り方からは、水成作用があった土層と判断できようか。
＜底面・壁＞底面は凹凸があり、全体的には西から東若しくは北から南にやや下る。水が流れていたと仮定すると、溝底の標高からは北西側が高く南東側が低いことから、北西→南東に曲流し下る可能性が考えられる。しかしながら、周辺地形はほぼ平らにあり、調査地外東側の情報がない現状において、言及は難しい。
＜遺物＞出土遺物は土器類388.52ｇである。９世紀後半～10世紀前半の土師器で、小破片なため不掲載とした。
＜時期＞出土遺物は９世紀後半～10世紀前半と考えられる。しかしながら、遺構の重複関係からは、十和田ａ火山灰降下時期より確実に新しい。従って、10世紀前半以降の遺構と考えられる。

15号溝跡（第48図、写真図版33）
＜位置・検出状況＞調査区北部のＡⅣｆ１～ｇ１グリッドに位置する。Ⅳ層で黒褐色シルト質粘土による溝状プランとして検出した。
＜平面形・規模・主軸方向＞溝跡の両端が調査区外に続くことから長さは不明にある。溝幅が約50㎝、深さは最深で12㎝である。主軸方向は南－北方向にほぼ直線的に延びる。
＜埋土＞黒褐色シルト質粘土による単層である。自然堆積と考えられるが明確には判断できない。

＜底面・壁＞底面はやや凹凸があるものの、平坦を基調とする。水が流れていたと仮定すると、溝底や周辺地形の標高からは南→北に下る可能性が高い。壁は直立気味に立ち上がる。
＜遺物＞なし。
＜時期＞出土遺物がなく時期は特定できない。埋土の様相からは、古代と推定しておきたい。

16号溝跡（第49図、写真図版33）
＜位置・検出状況＞調査区中央部西部のＡⅣｖ11グリッドで検出した溝跡と、現道を挟んで東側に位置する調査区東部のＡⅣｖ15～ｖ19グリッド付近で検出した溝跡が同じ溝跡と特定された。検出状況は、表土を除去した段階で、調査区中央部ではオリーブ黒色シルト質粘土の、調査区東部では黄灰色粘土質土による溝状のプランを検出した。
＜平面形・規模・主軸方向＞溝跡の両端が調査区外に続くことから長さは不明にあるものの、今回の調査では全長35ｍ以上であることがわかる。溝幅が、開口部径0.9～２ｍ、底部径0.5～0.8ｍ、深さ最深で約0.35ｍである。主軸方向は西－東の方向に直線的に延びる。
＜埋土＞埋土は調査区中央部側（※第49図Ａ－Ａ´断面）と調査区東部側（※Ｂ－Ｂ´断面）とで埋土の色調や土質が若干異なる。調査区中央部側は、埋土上位に１ａ層オリーブ黒色シルト質粘土、埋土下位に２層黒褐色シルトが堆積する。２層からは現代遺物の他、自然木や何らかの部材と思われる木片が出土している。１ａ・２層ともに酸化鉄の集積が顕著で、湿っぽい土層なことから、随時水の流れがあった可能性は言及できないまでも、水の作用があったことは想定できる。対して、調査区東部側は、埋土上位に１層黄灰色粘土質土、埋土下位に３層暗灰黄色砂質粘土質土が堆積する。３層からは現代遺物、土師器片、何らかの部材と思われる木片が出土している。１・３層ともに、酸化鉄の集積が顕著なことと、全てではないが泥っぽい土が各所に認められることから、調査区中央部側と同様に水の作用が想定できる。調査区中央部側において埋土下位にみられる２層と、調査区東部側の埋土下位３層は、色調や土質には若干の差異が看取されるものの、出土遺物などの類似性からは同時期の堆積層と判断される。１層と１ａ層についても酸化鉄の集積具合などから同様に、同時期の堆積層の可能性は考えられる。これらが、自然堆積なのか人為堆積なのか明確には判断はできなかった。ただ、地山粘土ブロックなどの混入はほとんど認められないことと、埋土上位も下位も層を成して堆積している様相であることから、自然堆積の可能性がある。
＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。水が流れていたと仮定すると、溝底や周辺地形の標高からは西→東に下ると捉えられる。壁は外傾気味に立ち上がる。
＜遺物＞（第68図87、写真図版44）出土遺物は土器類1,822.95ｇである。その他に自然木や何らかの木片、一升瓶の破片などの近代～現代と考えられる遺物が出土している。87の須恵器大甕の口縁部片を掲載したが、この須恵器は異時期の流れ込みである。
＜時期＞出土遺物から近代～現代に廃絶されたと考えられる。また、埋土から出た木片などの遺存状態からもそれを支持できよう。ただ、出土遺物には明らかに昭和の年代を推定できるものが含まれない。いつの時代まで遡れるのか不明にある。調査区東部の地権者の方にこの溝についてご教示いただいたが、地権者の方が生まれた昭和20年代中頃には、既にこのような溝はなかったらしい。また、地元でさらに高齢の方にもお話をうかがってみたが、子供の頃溝があった記憶はないとの情報を得た。従って、廃絶時期は、遺物から判断して古くても明治と推定しておきたい。合わせて時期の下限は昭和20年代よりは確実に古いことも言及できよう。

17号溝跡（第50図、写真図版33）

＜位置・検出状況＞調査区中央部のＢⅣｉ１～ｊ４グリッド付近に位置する。Ⅳ層中で黒褐色シルトの溝状プランを検出した。

＜平面形・規模・主軸方向＞溝跡の両端が調査区外に続くことから長さは不明にある。溝幅が、開口部径約3.7ｍ、底部径約3.1ｍ、深さ最深で約1.1ｍである。主軸方向は北西－南東の方向に直線的に延びる。

＜埋土＞埋土上位に１層黒褐色シルトが10～40㎝で堆積する。この１層は乾いた土質で、水成的な作用は窺えない。埋土中～下位に２層暗オリーブ褐色粘土質砂質土、埋土の最下位に３層・３ａ層褐色灰砂質土が薄く堆積する。この２・３・３ａ層は、ややグライ化した様相の土で、水成作用が関係した土層と推定される。４層黄褐色砂礫土は、地山なのか地山土の再堆積土なのか明確には判断できなかったことから図化した。地山の可能性が極めて高いと思われる。これらは自然堆積か人為堆積なのか明確には判断できなかったが、状況から人為堆積の可能性が高い。

＜底面・壁＞底面は凹凸がある。水が流れていたと仮定すると、溝底や周辺地形の標高からはどちらに流れていたのかわからない。推測としては北西→南東の可能性が高いと思われる。壁は外傾しながら立ち上がる。検出面からの深さは約50㎝である。

＜遺物＞出土遺物は、ビンや肥料袋などの現代遺物と土器類29.65ｇである。

＜時期＞出土遺物から現代と考えられる。正確にはわからなかったが、地元の方の話によると、昭和後半頃まで使われていた用水路跡である可能性がある。

18号溝跡（第51図、写真図版34）

＜位置・検出状況＞調査区中央部のＡⅣｐ10～ｐ11グリッドに位置する。Ⅳ層中で黒褐色砂質粘土の溝状プランを検出した。

＜平面形・規模・主軸方向＞溝跡の両端が調査区外に続くことから長さは不明にある。溝幅が、開口部径60～85㎝、底部径18～30㎝、深さは最深で約20㎝である。主軸方向は西－東に直線的に延びる。

＜埋土＞黒褐色砂質シルトによる単層である。自然堆積と判断した。

＜底面・壁＞底面は均一ではなく、やや凹凸がある。水が流れていたと仮定すると、溝底や周辺地形の標高からは西→東に下る可能性が高い。壁は外傾に立ち上がる壁形を基本とするが、所々崩落している。また、所々杭穴が認められるが、溝使用当時の痕跡なのか、現代の水田耕作に伴う馳穴なのかわからなかったことから、図化・明示することとした。

＜遺物＞出土遺物は土器類56.91ｇである。９世紀後半～10世紀前半の土師器で、小破片なため不掲載とした。

＜時期＞出土遺物から９世紀後半～10世紀前半と考えられる。また、本遺構の連続性として、現道を挟み東側に直線的に辿っていくと、調査区東部で検出された３号溝跡に繋がる可能性がある。

19号溝跡（第51図、写真図版34）

＜位置・検出状況＞調査区中央部のＡⅣｐ10～ｐ11グリッドに位置する。Ⅳ層中で黒褐色砂質粘土の溝状プランを検出した。

＜平面形・規模・主軸方向＞溝跡の両端が調査区外に続くことから長さは不明にある。溝幅が、開口部径48～60㎝、底部径25～35㎝、深さは最深で約10㎝である。主軸方向は西－東に直線的に延びる。

＜埋土＞黒褐色砂質シルトによる単層である。自然堆積と判断した。

＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。水が流れていたと仮定すると、溝底や周辺地形の標高からは西→東に下る可能性が高い。壁は緩く外傾して立ち上がる。
＜遺物＞なし。
＜時期＞出土遺物がなく、重複遺構もないことから時期は不明にある。埋土の様相からは近接する18号溝跡に類似することから、9世紀後半～10世紀前半の可能性がある。また、本遺構の連続性として、現道を挟み東側に直線的に辿っていくと、調査区東部で検出された3号溝跡に繋がる可能性がある。

20号溝跡（第51図、写真図版34）
＜位置・検出状況＞調査区東部のＡⅣｄ24～ｄ25グリッドに位置する。Ⅲ～Ⅳ層中で黒褐色シルト質粘土の溝状プランを検出した。
＜平面形・規模・主軸方向＞溝跡の両端が調査区外に続くことから長さは不明にある。幅が35～48㎝、深さ最深で38㎝である。主軸方向は南東－北西方向に直線的に延びる。
＜埋土＞埋土上位に1層黒褐色シルト質粘土、埋土下位に2層黒褐色粘土質土が堆積する。基本層序Ⅲ層に由来する可能性がある。自然堆積と考えられる。また、水成の作用が窺えない。
＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。水が流れていたと仮定すると、溝底や周辺地形の標高からは南東→北西に下る可能性が高い。壁は外傾して立ち上がる。
＜遺物＞なし。
＜時期＞出土遺物がなく、重複遺構もないことから時期は不明にある。埋土の様相からは古代と推定しておきたい。

21号溝跡（第51図、写真図版34）
＜位置・検出状況＞調査区東部のＡⅣｄ１グリッドに位置する。Ⅳ層中で黒褐色シルト質粘土の溝状プランを検出した。
＜平面形・規模・主軸方向＞溝跡の両端が調査区外に続くことから長さは不明にある。幅が60～70㎝、深さ最深で約40㎝である。主軸方向は南東－北西方向に直線的に延びる。
＜埋土＞黒褐色粘土質土による単層である。基本層序Ⅲ層に由来する可能性がある。自然堆積と考えられる。
＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。水が流れていたと仮定すると、溝底や周辺地形の標高からは南東→北西に下る可能性が高い。壁は外傾して立ち上がる。
＜遺物＞なし。
＜時期＞出土遺物がなく、重複遺構もないことから時期は不明にある。埋土の様相からは古代と推定しておきたい。

（6）　焼　土　遺　構

1号焼土遺構（第31図、写真図版25・35）
＜位置・検出状況＞調査区西部のＡＩｔ23グリッドに位置する。表土を除去した段階で、幾つかの黒～黒褐色シルトのシミを検出したが、その黒色シルトの上に焼土粒が顕著に認められたことから、焼土遺構として認知することとした。
＜重複関係・建替え＞4号竪穴住居跡を切る。5号土坑とは、新旧関係ではなく、一連のセット関係にある遺構と捉えられる。

＜平面形・規模＞平面形は楕円形で、北西から南東に広がる。焼土粒の広がる範囲は92×54㎝、焼土粒の混じる土層の厚さは５㎝前後である。また、全面ではないが一部焼土層として認められる部分もある。
＜焼土の様相＞検出面付近は、１層黒色シルトに焼土粒として混じる様相で、一部黒色シルトが焼土化している部分がある。炭化物も多量に混入する。焼土の色調は明赤褐色で、現地性焼土で焼成状態はやや良好である。なお、この１層黒色シルトは人為による整地層と判断され、非常に硬い。
＜地下構造＞精査結果から下部土坑が検出された。規模は、開口部径88×66㎝、深さ44㎝である。精査の手順を記述すると、１層を掘り下げると、２層暗褐色シルト層が覆う。この２層は炭化物・焼土粒・土器片を少量含み、また重複する５号土坑も覆う。２層下位には厚さ約25㎝の焼土層が表れ、最下位には褐色粘土質土がみられる。これらは、全て人為による整地層と判断される。
＜出土遺物＞（写真図版44）出土遺物は土器類500.21ｇ、焼成粘土塊9.8ｇが出土した。土器類は、９世紀後半～10世紀前半の土師器片と須恵器片で、割合としては須恵器片が多い。ただ、取り上げ時に５号土坑の出土土器類と多少混在した可能性があり、本遺構出土としては不掲載とした。焼成粘土塊は３層中から出土したもので、掲載番号91として写真・表掲載した。
＜時期＞出土遺物から９世紀後半～10世紀前半と考えられる。なお、各所で記述してきたとおり、本遺構と３・４・５号土坑はセット関係にある遺構の可能性が高い。これについては、まとめで取り上げることとする。

２号焼土遺構（第52図、写真図版35）
＜位置・検出状況＞調査区中央部のＢⅣｄ12グリッドに位置する。Ⅳ層でドーナツ状に広がる焼土を検出した。
＜重複関係・建替え＞264号柱穴状土坑に切られる。
＜平面形・規模＞焼土の広がりは上記のとおりドーナツ状にみられる。焼土範囲は75×65㎝で、厚さは10㎝平均である。
＜焼土の様相＞明赤褐色の色調を呈する焼土である。現地性で、焼成具合は非常に良好にある。
＜地下構造＞焼土層を掘り下げたところ、下部から暗褐色シルトに黄褐色粘土が多量に混入する人為層がみられ、さらにその下位より焼土層を検出した。この焼土層を下げると、炭化材が敷き詰められたような層が表れる。状況からカマドの煙出部と、煙道部の一部と判断される。
＜付属施設＞焼土層の東側に円形の小穴が伴う。
＜出土遺物＞出土遺物は土器類0.24ｇである。古代の土器と推定されるが細片でわからない。
＜時期＞古代のカマドと推定される。今回の調査では南壁にカマドを持つ竪穴住居跡が認められないことから、竪穴住居跡に伴うものではない、単独のカマド状遺構の可能性もある。

（７）陥し穴状遺構

１号陥し穴状遺構（第52図、写真図版36）
＜位置・検出状況＞調査区東部のＢⅣｆ17～ｇ17グリッドに位置する。Ⅳ層上面で黒色シルトの溝状のプランとそれを切る楕円形のプラン（６号土坑）を検出した。
＜重複関係・建替え＞６号土坑に切られる。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は溝状を呈する。規模は、開口部径は270×30㎝、底部径は255×10㎝、深さは最深で85㎝を測る。主軸方向は北西－南東をみる。

＜埋土＞埋土上～中位にかけて、１層黒色シルトが40～60㎝で厚く堆積する。この１層は基本層序Ⅲ層に由来する土層と判断される。埋土下位には地山土の再堆積層である２層黄褐色粘土層が堆積する。この２層は壁などの崩壊土と推定される。全て自然堆積である。
＜底面・壁＞底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。
＜遺物＞なし。
＜時期＞６号土坑より新しいことから、９世紀後半～10世紀前半より古いことは確実である。詳細な時期は不明であるが縄文時代と推定される。

２号陥し穴状遺構（第52図、写真図版36）
＜位置・検出状況＞調査区中央部のＡⅣｏ11グリッド付近に位置する。Ⅳ層中で黒色シルトの溝状のプランとして検出した。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は溝状を呈する。規模は、開口部径は320×75㎝、底部径290×10～20㎝、深さは最深で約130㎝を測る。主軸方向は南－北である。
＜埋土＞埋土上位には１層黒色シルトが40～50㎝で堆積する。この１層は基本層序Ⅲ層に由来する土層と判断される。埋土中位には２層明黄褐色粘土と、明黄褐色粘土が多量に混入する３層黒色シルトが堆積する。２層は壁の地山崩壊土で、３層は１層と地山土の混合土である。埋土下位には地山土の再堆積層である４層明黄褐色粘土層が堆積する。この４層は壁などの崩壊土と推定される。全て自然堆積である。
＜底面・壁＞底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。深さは約18㎝である。
＜遺物＞なし。
＜時期＞詳細な時期は不明である。埋土の様相から縄文時代と考えられる。

（８）柱　穴　群

柱穴状土坑は265個検出した。本来は掘立柱建物跡を構成する柱穴も含まれていると思われるが、掘立柱建物跡として認知できなかったことから、ここで一括して扱うこととする。柱穴番号は、通し番号になっているが、調査区の総延長が750ｍにも及ぶことから、調査区を西部・北部・中央部・東部の４つに分け、その調査区毎の柱穴群として明示する。

調査区西部柱穴群（第53図）
＜位置・検出状況＞調査区西部で検出した柱穴状土坑を一括する。第53図には以下の①・②の２つのエリアに分割して示した。おおよそＡＩｎ22～ｙ24グリッドに位置する。全てⅣ層中で検出した。
①ＡＩｎ22～ｑ22グリッドに位置するもの。
②ＡＩｔ23～ｙ23グリッドに位置するもの。
＜柱穴番号＞１～７・40～44号柱穴状土坑で12個である。①と②のエリア毎に示す。
①１～７・40～42号柱穴状土坑で10個である。
②43・44号柱穴状土坑で２個である。
＜重複関係＞重複関係にある遺構は、３号土坑を１号柱穴状土坑が切る。
＜規模＞規模は20～40㎝の範囲にある。
＜埋土＞黒褐色シルトによる単層のものが多い。
＜柱穴配置＞比較的まとまりがあるのが、南端で検出された２～７号柱穴状土坑の６個である。ただ

し、配置に明確な規則性は看取されない。
＜出土遺物＞出土遺物は、１号柱穴状土坑より土器類20.41ｇ、２号柱穴状土坑より土器類10.2ｇ、５号柱穴状土坑より土器類12.05ｇ、44号柱穴状土坑より土器類33.25ｇが出土した。全て小破片なことから、不掲載としたが、古代の土師器を中心とする。
＜時期＞詳細な時期は不明であるが、埋土の様相から古代と推定しておきたい。

調査区北部柱穴群（第54・55図）
＜位置・検出状況＞調査区北部で検出した柱穴状土坑を一括する。第54・55図には以下の①～④の４つのエリアに分割して示した。おおよそＡⅡｋ３～ｊ13グリッドに位置する。全てⅥ層中で検出した。
①ＡⅡｋ３～ｌ７グリッドに位置するもの。
②ＡⅡｊ８～ｊ13グリッドに位置するもの。
③ＡⅡｊ14～ｊ19グリッドに位置するもの。
④ＡⅡｉ21～ｉ24グリッドに位置するもの。
＜柱穴番号＞調査区北部では91個である。①～④のエリア毎に示す。
①45～62・64～70号柱穴状土坑で25個である。
②63・71～100号柱穴状土坑で31個である。
③101～120・127～135号柱穴状土坑で29個である。
④121～126号柱穴状土坑で６個である。
＜重複関係＞重複関係にある遺構は、12号土坑を53号柱穴状土坑が、７号溝跡を57・59・60・61・62・65・70号柱穴状土坑が、13号土坑を63号柱穴状土坑がそれぞれ切る。
＜規模＞柱穴状土坑の規模については、18～70㎝の範囲にある。
＜埋土＞黒褐色シルトによる単層のものが多い。
＜柱穴配置＞比較的まとまりがあるのが、ＡⅡｋ３グリッド付近、ＡⅡｋ５グリッド付近、ＡⅡｋ７グリッド付近、ＡⅡｊ10グリッド付近、ＡⅡｊ12～ｊ13グリッド付近である。比較的等間隔で並び掘立柱建物跡を構成する可能性があるグループとして、ＡⅡｊ12グリッド付近に位置する83・87・88・90号柱穴状土坑を挙げておく。他は配置に明確な規則性は看取されない。
＜出土遺物＞出土遺物は30個の柱穴状土坑より土器類が総量で535.43ｇ出土した。全て小破片なことから、不掲載としたが、古代の土師器を中心とする。最も多くの土器類が出土したのが②のエリアに所在する95号柱穴状土坑で203.07ｇである。
＜時期＞詳細な時期は不明であるが、埋土の様相から古代と推定しておきたい。

調査区中央部柱穴群（第56・57図）
＜位置・検出状況＞調査区中央部で検出した柱穴状土坑を一括する。第56・57図には以下の①～⑤の５つのエリアに分割して示した。
①ＡⅣｆ４～ｆ５グリッドに位置するもの。
②ＡⅣｆ10～ｇ10グリッドに位置するもの。
③ＢⅣｈ７～ｉ10グリッドに位置するもの。
④ＡⅣｗ11～ＢⅣｂ12グリッドに位置するもの。
⑤ＢⅣｃ12～ｇ13グリッドに位置するもの。

検出状況は、①は一部Ⅲ層で検出したものも含まれるが、他は全てⅣ層中で検出した。
＜柱穴番号＞調査区中央部では105個ある。①～⑤のエリア毎に示す。
①137・138号柱穴状土坑で２個である。
②139・223・224・226～229・234～237号柱穴状土坑で11個である。
③175・190・225・254～257・259～263・265号柱穴状土坑で13個である。
④136・142～156・230～233・240～253・258号柱穴状土坑で35個である。
⑤140・141・157～174・176～189・191～199・264号柱穴状土坑で44個である。
＜重複関係＞重複関係にある遺構は、④・⑤のエリアで18号土坑、14号溝跡、２号焼土遺構などをそれぞれ切る柱穴状土坑がある。
＜規模＞各柱穴状土坑の規模については、第23・24表を参照戴きたい。
＜埋土＞黒褐色シルトによる単層のものが多い。
＜柱穴配置＞比較的等間隔で並び掘立柱建物跡を構成する可能性があるグループとして、②のエリアにある226・227・236・237号柱穴状土坑、⑤のエリアにある159・179・189・196号柱穴状土坑の２つのグループを挙げておく。他は配置に明確な規則性は看取されない。
＜出土遺物＞（第69図102、写真図版45）出土遺物は17個の柱穴状土坑より、土器類が総量で304.02ｇ出土した。全て小破片なことから不掲載としたが、古代の土師器を中心とする。最も多くの土器類が出土したのが④のエリアに所在する242号柱穴状土坑で88.28ｇ、次いで157号柱穴状土坑の80.73ｇである。土器類以外では、167号柱穴状土坑より102の近世と推定される鉢の破片１点出土した。
＜時期＞詳細な時期は不明であるが、埋土の様相から古代と推定しておきたい。

調査区東部柱穴群（第58～60図）
＜位置・検出状況＞調査区中央部で検出した柱穴状土坑を一括する。第58～60図には以下の①～⑥の６つのエリアに分割して示した。
①ＡⅣｈ14～ｌ14グリッドに位置するもの。
②ＡⅣｎ14～ｐ15グリッドに位置するもの。
③ＡⅣｗ15～Ｂ、ａ16グリッドに位置するもの。
④ＢⅣｂ16～ｆ16グリッドに位置するもの。
⑤ＡＶｕ19～ｔ24グリッドに位置するもの。
⑥ＡＶｓ３～ｓ４グリッドに位置するもの。
検出状況は全てⅣ層中で検出した。
＜柱穴番号＞調査区東部では57個ある。①～⑥のエリア毎に示す。
①８～20・238・239号柱穴状土坑で15個である。
②21～24号柱穴状土坑で４個である。
③25～32・38号柱穴状土坑で９個である。
④33～37・39号柱穴状土坑で６個である。
⑤200～218号柱穴状土坑で19個である。
⑥219～222号柱穴状土坑で４個である。
＜重複関係＞重複関係にある遺構は、④のエリアで３号竪穴住居跡を36号柱穴状土坑が、６号土坑を39号柱穴状土坑がそれぞれ切る。
＜規模＞各柱穴状土坑の規模については、第23・24表を参照戴きたい。

＜埋土＞黒褐色シルトによる単層のものが多い。
＜柱穴配置＞３個以上の柱穴状土坑が比較的等間隔で並び、掘立柱建物跡を構成する可能性があるものを模索したが、明確な規則性は看取されない。
＜出土遺物＞出土遺物は５個の柱穴状土坑より、土器類が総量で77.4ｇ出土した。全て小破片なことから、不掲載としたが、古代の土師器を中心とする。最も多くの土器類が出土したのが④のエリアに所在する34号柱穴状土坑で57.35ｇである。
＜時期＞詳細な時期は不明であるが、埋土の様相から古代と推定しておきたい。

4　出　土　遺　物

今回の調査では、大コンテナ（40㎝×30㎝×30㎝）で約５箱分の遺物が出土した。土器類は土師器・須恵器合わせて約3.5箱分、土製品１点、焼成粘土塊９サンプル、陶磁器類12点、鉄製品７点、石器35点、チップ・フレークが少量である。

（1）古代の土器

土器類（土師器・須恵器）は、総重量で56,615.02ｇが出土した。遺構内が52,983.82ｇ、遺構外出土分が3,631.2ｇである。また、今回の調査で出土した土器類は、全て古代であり、縄文時代や弥生時代などは含まれない。土師器と須恵器に分け、記述することとする。なお、酸化炎焼成で内面無調整の土器は、ここでは土師器に一括して考えている。
＜土師器＞
坏、高台坏、耳皿、甕、小型甕がある。製作方法は基本的にロクロ成形であるが、土師器の甕においては、ロクロ成形と非ロクロ成形のものがある。
坏：16点掲載した。①底部から内湾気味に立ちあがり体部は外傾してそのまま口縁部にいたるもの、②底部から内湾気味に立ちあがり体部は外傾して口縁部が軽く外反するもの、③底部から外傾して立ち上がりそのまま口縁部にいたるもの、の３種類に分けることができる。また、内面または内外面に黒色処理を施すものと施さないものがある。底部調整は、回転糸切り無調整のものと、回転糸切り後ヘラケズリ再調整をするものがある。
①３・11・18・32・40・47・48・66・80の９点ある。
内外面黒色処理（47・66・80）：47は体部下端と底部の一部に手持ちヘラケズリ調整が施されている。66・80は底部が欠損している。80は口径に対する器高の割合が大きいやや深めの坏である。
内面黒色処理（11・18・32・40・48）：11・40は体部（もしくは体部下端）から底部にかけて手持ちヘラケズリ調整が施されている。18・32・48には調整はみられない。18は、底部脇がやや屈曲する。48は底部が欠損している。
非黒色処理（３）：３は、体部下端に手持ちヘラケズリ調整が施されている。やや深めの坏である。
②19・33・34・46の3点ある。内外面ともに黒色処理は施されていない。底部調整は、19は底部が欠損しているため不明である。33・34は、回転糸切りであるが、33は一部ヘラケズリ調整をしていると思われる。46は体部外面から底部の一部にかけて、手持ちヘラケズリ調整をしている。
③１・２・17の３点ある。内外面ともに黒色処理は施されていない。底部調整は、３点すべて回転糸切り無調整である。１・２は底径が推定７㎝以上と大きめで、２は底径に対して器高の割合が小さい低めの坏である。
高台坏：１点掲載した。底部から高台部分までの破片である。内面は放射状のヘラミガキが施され、

黒色処理されている。体部外面下端は、手持ちヘラケズリ調整をしている。高台はやや高めでハの字形に開く（20）。

耳皿：１点出土し掲載した。両面に黒色処理を施している。外面は、体部から底部にかけて手持ちヘラケズリ調整で整えた後ヘラミガキ調整をしており、内面も丁寧に磨かれた後、黒色処理されている（50）。

甕：15点掲載した。完形の個体がほとんどないため、口径が15㎝以上のものを甕とした。すべてロクロ成形の長胴甕である。

口縁部が外反するもの（６）、口縁部が外反し端部を上方にひきあげるもので外面に調整のあるもの（５・22・23・24・35・36・63・67）とないもの（10・12・13・68）、口縁部が外反し端部が上下に肥厚するもの（25・65）がある。外面に施される調整は、ほとんどがヘラケズリ調整であるが、５はロクロの下地にタタキ目がみられ、外面に粘土を貼りつけている。

小型甕：５点ある。口径が15㎝以下のものを小型甕とした。ロクロ成形のものと非ロクロ成形のものがある。

ロクロ成形のものは、79・81の2点である。79は、口縁部が外反し軽く上方にひきあげられ、体部下半に回転ヘラケズリ再調整が施されている。81は、口縁部が外反している。

非ロクロ成形のものは、４・21・49の３点である。４は体部下半から底部までしか残っていないが、底径と器形から小型甕とした。21・49は口縁部が軽く外反し、外面にヘラケズリ調整が施されている。

＜須恵器＞

坏、壺・瓶類、鉢、甕がある。坏以外は破片のものが多く、全容をうかがい知れるものは少ないが、残された器形や調整技法などから器種を特定した。

坏：16点掲載した。底部から内湾気味に立ちあがるもので口縁部が外反するもの（14・43・51）とそのまま口縁部にいたるもの（26・27・42・52・69・70・82）、底部から外傾して立ちあがりそのまま口縁部にいたるもの（41・78・83）、口縁部が残存していないが内湾気味のもの（７・44）と外傾しているもの（71）がある。そのなかに、底部下端に手持ちヘラケズリ調整を施すもの（7・44・70・78）、墨書のあるもの（42）もある。

壺・瓶類：９点掲載した。16・61・75はいずれも体部の破片である。29・31は内外面ともにロクロナデ、76は外面にヘラケズリ調整が施されている。57は小壺の口縁部片と思われる。60・62は壺の破片で、62の外面には黒色付着物がみられる。

鉢：2点ある。８・30ともに、外面にヘラケズリ調整が施されている。８は、底部から内湾して立ち上がり、口縁部が軽く外反する。

甕・大甕：21点掲載した。すべて口縁部片や体部破片で全容が分かるものは皆無である。ここでは便宜的に口径の大きさや調整技法で甕と大甕に分けた。甕としたもののうち、15は外面に平行タタキの木目圧痕が残る薄手のものである。45・59は頸部にタタキ目を残す。内面または内外面にカキメがみられるもの（39・58）、内外面ともにロクロナデのもの（55・77・87）があり、87は頸部に波状文がみられる。大甕の口縁部片は、９・37・38（37・38は同一個体）の２点でいずれも外面に平行のタタキの痕跡がみられる。さらに９は、内面に同心円文当て具痕を残す。大甕の体部破片と思われるものは、11点あり外面に平行タタキ、内面に同心円文当て具痕を残すもの（28・72・84）、内外面平行のタタキのもの（53・64・73）、外面にのみ平行タタキを残すもの（54・56・74・85・86）がある。

（2）土　製　品

土錘１点が出土した。また、土器焼成時の失敗品の可能性がある焼成粘土塊148.9ｇが出土したが、これらについても、土製品としてここで扱うこととする。

90の土錘は、６号竪穴住居跡PP９から出土した。長径4.6㎝、短径2.1㎝、孔の規模約0.4㎝である。出土状況としては、土師器片と共に出土したが、特殊性は看取できない。帰属時期は、９世紀後半～10世紀前半と考えられる。

焼成粘土塊は、写真と表掲載のみ行った。出土遺構は、何れも平安時代で、１・５・６・７号竪穴住居跡、１号掘立柱建物跡付属土坑、２・３・８号土坑、１号焼土遺構から出土している。各塊は１～４㎝ほどで、出土地点毎に１サンプルとし、88・89・91～97の掲載番号付した。

（3）陶磁器類（緑釉、灰釉陶器、中・近世陶磁器）

陶磁器類は12点出土した。その中で、近代より古いと捉えられた98～102の５点を掲載したが、これら掲載した５点は全て遺構内出土である。

98は５号竪穴住居跡の埋土中から出土した青磁椀である。外面に蓮弁文がみられる。年代は、中世前半15世紀と推定される。従って、５号竪穴住居跡とは異時期であり、後世における流れ込みと考えられる。

99と100は緑釉陶器である。99は５号土坑の埋土上位から出土した東美濃産の稜椀で、内面の屈曲部に沈線がみられる。10世紀前半黒笹90式と考えられる。100は８号土坑の埋土中から出土した猿投産の稜椀で、内面に陰刻花文がみられる。９世紀後半と考えられる。101は12号溝跡から出土した瀬戸・美濃産の碗で、中世～近世の時期幅で捉えられる。102は167号柱穴状土坑から出土した産地不明の鉢である。近世と考えられる。

（4）鉄　製　品

鉄製品は７点出土した。出土地は２号竪穴住居跡より４点、５号竪穴住居跡から１点、６号竪穴住居跡から２点で、全て平安時代の竪穴住居跡からの出土である。このことから、帰属時期は平安時代９世紀後半～10世紀前半と推定される。器種の内訳は、刀子２点、釘？２点、鋤先１点、器種不明２点である。器種不明２点を除く103～107の５点を掲載した。なお、掲載した５点は、整理期間の関係もあり保存処理前の段階で実測・遺物写真撮影を行っていること補足しておく。

（5）石　　器

石器は35点出土した。内訳は、磨石31点、砥石２点、機種不明２点である。

108は、８号土坑から出土した磨石で、石材は安山岩である。全面にわたり被熱を受けている。また、胴部の途中から破損している。全面に磨面が形成されているが、表面は緩くマウンド状に盛り上がり、裏面は平坦な状態にあり、また磨面は裏面が明瞭である。この状況からは、作業面が裏面の可能性と、若しくは台石のように設置に関係して平坦な作りに仕上げられている可能性で考えられる。この土坑からは他に磨石５点と器種不明の石器２点が一括出土している。また75の土師器甕が共伴出土していることから、帰属時期は平安時代と考えられる。109は遺構外出土で、平面の形状は斧状を呈し、全面に砥痕がみられる。石材は砂岩である。胴部から先端にかけて、断面形状がやや先細にある。用途は砥石と推定される。所見的であるが、かなり使い込んでいる様子が窺える。

なお、磨石として登録したものは、108の１点を除き不掲載としたが、何れも平安時代若しくは古代と推定される遺構から出土している。ここで不掲載としたものについて補足すると、自然磨耗なの

か人為による磨痕なのか判断できなかったものが大部分を占める。形状や大きさは様々であるが、①扁平な形状を呈し裏面にのみ磨面が形成されているもの、②多面体に平坦面がありその内の３複数面に磨面（自然磨耗？）がみられるもの、③全体が球状を呈するもの、④細長い台石状の形状を呈し複数面に磨面があるもの、⑤磨痕は明瞭ではないが板状を呈するもの、などの５種類に大別される。これらは、完形品は少なく、多くは破損している。そして、被熱を受けていると思われるものも幾つか含まれる。

5　総　　括

今回の調査で検出した遺構は、縄文時代の陥し穴２基、平安時代の竪穴住居跡８棟・竪穴状遺構１棟・掘立柱建物跡１棟・土坑21基・溝跡19条・焼土遺構２基、古代中心と考えられる柱穴状土坑265基、近世の溝跡１条、近世～現代の溝跡１条、現代の土坑１基である。ここでは、遺構と遺物に分け総括してみる。

（1）遺　　構

ここでは、古代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝跡・焼土遺構と縄文時代の陥し穴状遺構を取り上げる。

竪穴住居跡は８棟を検出した。出土土器から、平安時代９世紀後半～10世紀前半の時期幅で推定される。また、十和田ａ火山灰を伴うものが２棟ある。ここでは、調査で判明した内容の中から、規模、カマド、付属土坑についてまとめてみる。規模について、調査区の幅などに起因して竪穴住居跡全体を検出・調査できたものがなく、従って平面形や床面積などの全てを把握できていない。しかしながら、８棟中７棟において一辺の長さを把握できた。それをみると、3.1～6.3ｍの範疇にあり、平均的には５ｍ前後を基本とする様相で捉えられる。カマドを検出した竪穴住居跡は４棟である。それらは、煙道天井部が削平されているため、刳り貫き式なのか掘り込み式なのかはわからない。燃焼部は６号竪穴住居跡以外に明瞭ではなく、また袖部を検出したものはない。４棟何れも東壁際に煙道が構築されている共通点が看取される。本遺跡は南西～北東方向に緩く下る地形にあるが、勾配を感じるほどの傾斜地ではなく、カマド構築に際して地形的な制約は受けないものと捉えられる。風向は西風が多く、煙道とは逆方向となるため、煙を屋外に排出することを鑑みればカマド煙道が東に付くのは有意にあると考えられる。ただし、本遺跡周辺の平安期の竪穴住居跡を検出した小十文字遺跡や牡丹野遺跡（※岩手県教育員会：2008）を見る限り、該期竪穴住居跡は本遺跡同様に東カマドであることから、地形や気象などの要因ではなく、政治的な制約と考えられようか。付属土坑は６棟で認められた。傾向としては、貼り床を除去した段階で検出されたものが多い。また、埋め戻されているものが多く、非常に硬く整地が施されているものもある。このことから、所見を述べると、付属土坑全てではないにしても、鍛冶など何らかの作業に関連した施設が含まれている可能性がある。

掘立柱建物跡は、平安時代１棟を検出した。６本の柱で構成され、規模は桁行530㎝（16尺）、梁間210㎝（6.3尺）を測る。柱間寸法は、桁行に多少のバラツキがあるものの、梁間はおおよそ210㎝（７尺）を測る。建物の面積は約50㎡である。ただし、調査区外東側に建物跡が延びる可能性もある。特記事項として、この掘立柱建物跡からは200㎝強×140㎝の付属土坑を伴う。この土坑は人為堆積されており、土師器や須恵器の破片が多量に出土した。

土坑は22基検出した。時期別の内訳は21基が古代、１基が現代と考えられる。ここでは古代の土坑について取り上げてまとめてみる。古代の土坑は21基検出され、その内19基が９世紀後半～10世紀前

半と推定される。全体的な傾向としては、平面形は楕円形が多い。規模は、最も小さい11号土坑で65㎝（※開口部径）、最も大きい15号土坑で280㎝である。深さは最も浅いもので10㎝、最も深いもので60㎝である。埋土は自然堆積と人為堆積がほぼ同じ割合でみられる。規模などの観点から何らかの傾向を導くのは難しいが、７・11・14・21・22号土坑などは、最大長80～90㎝で、深さ10㎝前後と、浅い共通点がある。

溝跡は21条検出した。時期毎の内訳は、古代18条、中世～近世１条、近代～現代１条、現代１条である。古代と判断した溝跡14条については、出土遺物、十和田ａ火山灰、遺構同士の重複関係などから９世紀後半～10世紀前半の可能性がある。これらの溝跡は全て自然堆積と推定された。ここでは、溝幅が突出して大きい５・６号溝跡と、平面形が特異な14号溝跡を取り上げる。５・６号溝跡は、長軸方向は南－北で、位置的にも調査区北部で近接した関係にある。規模は、５号溝跡が開口部径990㎝で深さ130㎝、６号溝跡は開口部径420㎝で深さ96㎝を測る。埋土には十和田ａ火山灰が認められるが、５号溝跡は埋土中位に、６号溝跡は埋土上位に堆積する。５号溝跡は埋没途中で、６号溝跡は埋まりきる直前段階で、それぞれ十和田ａ火山灰が降下した可能性を有する。これら十和田ａ火山灰は水成作用による二次堆積と考えられるものの、異時期の再堆積ではなく、ある程度降下時期を反映していると推定される。14号溝跡は、全容は明らかではないが平面形が方形基調あるいは馬蹄形を呈する可能性を有する。現道を挟んで東側で検出された４号溝跡に繋がる可能性が考えられるが、何れ直線的な形状の溝ではないことが窺える。

焼土遺構は２基検出した。１号焼土遺構の周りからは、それを取り囲むように３・４号土坑が検出され、また１号焼土遺構と５号土坑は重複関係にある。合わせて、１号焼土遺構と４・５号土坑は同時に埋められていることもわかった。このことから、３号土坑を含め、これらはセットの関係にあると考えられる。この１号焼土遺構と３～５号土坑の配置関係について、類例を模索してみると、前沢区白山の川前遺跡で検出された「鍛冶炉状遺構」と類似性が高い。ただ、１号焼土遺構や３～５号土坑を、鉄に関係する遺構とするには、鉄滓などの出土がなく、推定の域を出ない。ただ、今回の調査で鉄に関係する可能性が窺える遺構として、木炭を焼いた炭窯と考えられる13号土坑が検出されている。この炭窯（13号土坑）は、１号焼土遺構や３～５号土坑から約100ｍ離れた地点にある。この13号土坑からは、多量の炭化材と共に、土師器の破片数点と鉄滓１点が出土している。２号焼土遺構は、焼土層がドーナツ状を呈する産状で検出され、調査区外東側に続く。調査の結果、いわゆるカマドの煙出部と沿道部と考えられる。ただ、本遺跡にみられる竪穴住居跡のカマドは各所で記述してきたとおり、東向きに作られているのに対して、本遺構は西向きをみる相違点が看取される。従って、本遺構は竪穴住居跡に伴うカマドではなく、屋外に作られた単独のカマド状遺構である可能性も考えられる。

１号陥し穴状遺構は２基検出した。何れも溝状の形態を呈する。１号陥し穴状遺構は規模が270×30㎝で深さ85㎝、２号陥し穴状遺構は320×75㎝で深さ130㎝である。この形態を有する陥し穴状遺構は、従来から縄文時代中期や後期と推定されてきている。近年胆沢区では、中位段丘を中心に縄文時代の陥し穴の検出例が急増していることは注目され、大清水遺跡（佐藤：2001）や宮沢原下遺跡（戸根：2007、濱田・吉田・菊池：2008ほか）の報告書中において平面形・断面形の形態や、火山灰混入の有無などから精力的な考察が試みられている。これらの中には、十和田ａ火山灰や十和田中掫火山灰などを含むものも見られ、前期前半より古期や、古代に帰属する陥し穴の存在が明らかになりつつあり、本県における陥し穴研究に一石を投じるものと期待される。

（2）遺　　物

土器類は土師器・須恵器合わせて約3.5箱分、土製品１点、焼成粘土塊９サンプル、陶磁器類12点、鉄製品７点、石器35点、チップ・フレークが少量である。

土器は、土師器坏・高台坏・耳皿・甕・小型甕と須恵器坏・壺・瓶類・鉢・甕が出土している。はじめに、年代を考える上で指標となっている土師器坏を中心に検討し、補足的に須恵器坏についても考えていきたい。

土師器坏の製作技法は、すべてロクロ成形である。内湾嗜好のものが多くみられ、底径が５～６㎝前後のものが主体を占める。ロクロ成形の坏の器形は、逆台形から椀形へと変化し、それが顕著にみられるようになるのは９世紀中葉以降であり、そのころから底形の縮小化もみられるようになる（村田：1995）。また、体部が内湾するもので口縁部が短く外反するものがあるが、このような特徴は9世紀後半にみられるようである（八木：1993）。さらに、椀形のものから、椀形で口縁部が外反するもの、底部脇が屈曲するものへと器形が変化すると考えられており（西澤：2005）、今回出土した土器にも、若干ではあるがこのような器形がみられた。底部調整については、回転糸切り無調整のものが多く、再調整が施されている場合は手持ちヘラケズリによるものがほとんどである。内面調整は、放射状のヘラミガキが施されるものが多い。また、９世紀後半からみられるようになる高台坏や耳皿も少量ではあるがみられる。

次に、須恵器坏についてみていくと、土師器坏と同様に内湾する器形のものがほとんどである。底部調整は回転糸切り無調整のものが主体を占め、外面調整もあまりみられない。底径は５～６㎝前後のものが多い。須恵器坏も時代が下るにつれ底径の縮小化がみられ、また底部調整に関してはヘラ切りから糸切りへと変化する傾向がある。

これらのことから土器の年代を考えると、非黒色処理の土師器のなかにも黒色処理が施されている土師器や須恵器が一定量あること、土師器・須恵器ともに器形が内湾気味で口縁部が外反するものがみられ、底部調整が回転糸切り無調整のものが多いことなどから、９世紀後半から10世紀前半にみられる特徴であると考えられる。

また、一定量の土器が出土した遺構についてみてみると、１号竪穴住居跡と６号竪穴住居跡は、埋土に十和田ａ火山灰が堆積しており、その下層から土器が出土している。さらに１号竪穴住居跡においては、黒色処理の施された土師器を含まない。６号竪穴住居跡では、内面黒色処理の土師器坏と酸化炎焼成で内面無調整の土師器坏が共存する。これらの遺構は、土器の特徴と十和田ａ火山灰との関係から９世紀後半から10世紀前半の年代幅でとらえることができる。５号竪穴住居跡や１号掘立柱建物跡では、十和田ａ火山灰は検出されなかったものの、内面黒色処理の土師器高台坏や両面黒色処理が施された耳皿が出土しており、９世紀後半以降の様相をうかがわせる。５号土坑と８号土坑については、年代の指標となる緑釉陶器が出土している。５号土坑からは東濃産の稜椀で大原２窯式（10世紀前半）とされるもの、８号土坑からは猿投産の稜椀で陰刻花文が施された黒笹90号窯式期（９世紀後半）と考えられている緑釉陶器がみつかっている。以上のことから、本遺跡から出土した土器の傾向から、年代は概ね９世紀後半から10世紀前半の範疇でおさまるものとした。しかし、９世紀代の土器はバラエティーに富んでおり、９世紀初頭以外の時期、特に９世紀中頃から後半にかけての土器は細分しがたいというのが現状ではないかと思われる。今回の調査では、土器の出土点数が決して多くなかったため詳細な検討は行わなかったが、9世紀中頃までのぼる土器もあるのかもしれない。

土製品は土錘１点が出土した。帰属時期は、６号竪穴住居跡PP9から出土していることから、９世紀後半～10世紀前半の時期幅で推定される。

焼成粘土塊は取り上げ単位で９サンプル、合わせて148.9g出土した。出土遺構は、１・５・６・７号竪穴住居跡、１号掘立柱建物跡付属土坑、２・３・８号土坑、１号焼土遺構である。個々の焼成粘土塊をみると、土器などの失敗品と判断される薄手のものは無く、またロクロ成形の痕跡が認められるものも無い。

陶磁器類は９世紀後半～現代まで12点の陶磁器類が出土した。99・100の平安時代の緑釉陶器が出土しているが、岩手県内における緑釉陶器の搬入拠点として、村田淳は胆沢城跡を挙げているが（村田：2004)、この内容を鑑みれば本遺跡についても胆沢城と何らかの関係が示唆できようか。中世については、98・101の中世陶磁器２点の出土に留まり、また遺構についても12号溝跡以外確実なものはない。ただし、本遺跡においてもなんらかの人的活動があったことは指摘できよう。102などの近世と推定される産地不明の陶器は、牡丹野遺跡などからも多数出土しているが、その供給地（窯元）の解明が課題と考えられる。

鉄製品は７点出土した。刀子２点、釘？２点、鋤先１点、器種不明２点である。全て竪穴住居跡からの出土であることから、帰属時期は９世紀後半～10世紀前半と推定される。

石器は35点出土した。内訳は磨石31点、砥石２点、機種不明２点である。使用痕分析などを実施していないことから、肉眼観察からの所見となるが、これらは鉄製品に関連した研磨具の可能性が窺える。

（３）緑釉陶器について若干の考察

ここでは、緑釉陶器について取り上げ、若干の考察を試みたい。緑釉陶器は、鉛ガラスを主成分とする釉が施された焼き物で、銅を呈色剤とするため緑色に発色するようである。７世紀後半代に朝鮮半島の影響を受けて生産され始めたものの、一般的に生産されるようになるのは８世紀後半からで11世紀代には終焉を迎える。官衙や城柵、寺院、集落跡などで発見されており、岩手県では志波城跡や胆沢城跡、国見山廃寺跡、北上川沿いの集落跡などから出土している。

器種には、椀・皿・耳皿・鉢・水注・瓶・花瓶などがあり、時代あるいは各窯によって多様な器種が作られていたようである。緑釉陶器は、はじめ金属器を模倣して作られていたが、平安時代にはいると、越州窯系青磁を主体とする中国陶磁を志向した椀・皿類を主体とする新たな生産に大きく転換した（齊藤：2000）ようである。

また、緑釉陶器が生産される窯はどこにでもあるわけではなく、現在確認されている場所として、愛知県、岐阜県、滋賀県、京都府、山口県がある。なかでも、９世紀前半から緑釉陶器の生産が開始された愛知県の猿投窯は最大の生産地であったこともあり、緑釉陶器が出土している遺跡では、猿投窯産の製品がよくみられる。猿投窯の他に同じ愛知県の美濃（東濃）窯・二川窯・尾北窯、京都府の洛北窯・洛西窯などが生産の拠点であった。

岩手県内の緑釉陶器の出土状況をみてみると、その数は決して多くなく、完形で出土することは稀である。本遺跡から出土した緑釉陶器２点も体部破片と、体部から底部の破片である。先述したように、１点は猿投窯産の稜椀で陰刻花文が施された黒笹90号窯式期（９世紀後半）のもの、もう１点は東濃窯産の稜椀で大原２窯式期（10世紀前半）とされるものである。

個々に特徴をみてみると、猿投窯産と考えられる稜椀は、体部中程の内外面で屈曲して稜を作りだし、外傾して立ち上がるもので、口縁部は軽く外反する。胎土は青灰色で、硬質である。また、猿投窯製品の特徴として、印刻文様が挙げられる。特に、稜椀には陰刻花文が施されるものが比較的多く見受けられるようであり、本遺跡から出土したものもこれに相当する。

東濃窯産と考えられる稜椀は、体部下半がやや内湾し、体部中程の内外面で屈曲し、外傾して立ち上がる。口縁部は軽く外反し、屈曲部の内面には沈線がみられる。胎土は灰白色である。

近隣で緑釉陶器が出土した遺跡をみてみると、本遺跡から最も近い出土地は奥州市中半入遺跡である。中半入遺跡からは、托・壺・椀などが出土しており、特に托は全国的にも出土数が少なく、貴重なものである。この托は、猿投窯産で黒笹90窯式前後と考えられている。そして、県内で最も多く緑釉陶器が出土している胆沢城跡では、椀・皿・蓋・手付瓶・香炉などがあり、猿投窯産（黒笹14窯式～黒笹90窯式）の他にも畿内産の製品もみつかっている。

このほかの緑釉陶器出土遺跡の分布傾向をみてみると、出土遺跡は県中・南部の令制六郡内にのみ分布し、いずれも北上川流域あるいは古代東山道付近に位置しており、県北部・沿岸地域には皆無であるという（村田：2004）。城柵や官衙と関連している可能性も考えられるであろうか。

緑釉陶器の用途については、祭祀や儀礼に使用されていた可能性と、日常什器として使用されていた可能性が考えられている。本遺跡で出土した緑釉陶器は、土坑と竪穴住居跡からみつかっているが、用途についての判断材料は少なくどちらともいえない。ただ、当時の人々にとって緑釉陶器が貴重品であったことは確かであろう。そして、緑釉陶器が出土している遺跡は決して多くなく、地域が限られていることも何か意味していると思われる。

以上、緑釉陶器について雑駁ではあるが述べてきた。本遺跡において僅かではあるが緑釉陶器が出土したということは意味のあることだと考える。遺跡の位置からして本遺跡に暮らした人々と胆沢城との関係を考えずにはいられないが、推測の域を出ない。今後の調査と、資料の増加に期待したい。

（4）調査区毎の遺構分布

ここでは、調査区毎に遺構分布についてまとめてみる。

①　調査区西部では、竪穴住居跡３棟、土坑９基、溝跡２条、焼土遺構１基、柱穴状土坑12個を検出した。全て古代に帰属する遺構と考えられ、合わせて平安時代と推定される。１号竪穴住居跡より一定量の土器を得られたが、これらは９世紀後半を中心とすることが窺え、合わせて十和田ａ火山灰との関係から同テフラ降下時期より古い。次に、１号焼土遺構と３・４・５号土坑について、その配置関係からは鍛冶に関連した作業が行われていた可能性が導かれる。

本遺跡における平安時代の集落域について、１号竪穴住居跡は南北方向に走る現道直下に続くことが把握できるが、この内容から拡大解釈するならば、本遺跡の平安時代集落の西端は今回の調査区よりさらに西に広がる可能性も考えられる。

②　調査区北部では、竪穴住居跡１棟、土坑７基、溝跡７条、柱穴状土坑91個を検出した。全て古代の遺構である。特記事項としては、突出して大形の溝跡である５号溝跡と６号溝跡と、炭窯と考えられる13号土坑の検出が挙げられる。５号溝跡と６号溝跡は、長軸方向はほぼ同じ（南－北）で、何れも十和田ａ火山灰が埋土中に認められる。十和田ａ火山灰の堆積様相としては両者ともに自然堆積であるが、５号溝跡は壁際の埋土中位に堆積するのに対して、６号溝跡は埋土上位に水平気味に堆積することで相違が看取される。この堆積の違いは、若干の時期差を反映していることも考えられる。これら大形の溝跡の性格については、平面的な連続性を把握できないことから不明と言わざるおえないが、区画などを意図した溝跡ではなく、水路的な用途の可能性が高いと推定しておきたい。炭窯と推定される13号土坑は、埋土中より多量の炭化材と、土器片と鉄滓が出土している。

本遺跡における平安時代の集落域について、５号竪穴住居跡の検出からは、本遺跡の平安時代集落は、今回の調査区よりさらに北に広がる可能性も考えられる。

③　調査区中央部では、竪穴住居跡３棟、竪穴状遺構１基、掘立柱建物跡１棟、土坑４基、溝跡７条、焼土遺構１基、陥し穴状遺構１基、柱穴状土坑105個を検出した。古代以外の時期の遺構として、縄文時代の陥し穴状遺構、中世と推定される12号溝跡、近代～現代の16号溝跡、現代と推定される17号溝跡を検出した。特記事項としては、土坑がセット関係にある１号掘立柱建物跡や屋外カマドと考えられる２号焼土遺構の検出が挙げられる。

本遺跡における平安時代の集落域について、６・７・８号竪穴住居跡の検出から、本遺跡における平安時代の集落域の南端付近である可能性も窺える。

④　調査区東部では、竪穴住居跡１棟、土坑１基、溝跡６条、陥し穴状遺構１基、柱穴状土坑57個を検出した。古代以外の遺構としては、調査区中央部から続く近代～現代の16号溝跡がある。

本遺跡における平安時代の集落域について、３号竪穴住居跡を検出したことから、本遺跡における平安時代の集落域の東端は、本調査区にまで確実に広がることが分かった。しかしながら、本調査区は全体的に遺構密度が低く、特に北東端付近は皆無に近い状況にある。このことから、本遺跡において平安の集落域は、東には大きく広がらないことも推定できようか。また、縄文時代の陥し穴状遺構については、本調査区と調査区中央部から各１基検出している状況からは、この周辺が当時の狩猟場であったと理解できよう。

（５）全体の総括と課題など

今回の調査の結果、本遺跡は縄文時代には狩り場、平安時代には集落として営まれた場であることがわかった。また、断片的な状況ではあるものの、中世～現代の溝跡が検出された。

①　縄文時代の狩り場については、調査区中央部～東部において、溝状の形状を呈する陥し穴状遺構を検出した。胆沢区の過去の調査事例では、このような陥し穴状遺構は中位段丘を中心に発見例が多い現状にあり、低位段丘にある本遺跡にまで縄文時代の狩猟域が広がることがわかったことは評価できよう。

②　平安時代の集落については、出土した土師器・須恵器の年代や十和田ａ火山灰のあり方から、９世紀後半を中心に10世紀前半までの時間幅で捉えられよう。その集落範囲は、今回の調査成果から300ｍ四方以上に広がる可能性が考えられる。具体的には、今回の調査で用いた大グリッドでＡⅠ・ＡⅡ・ＢⅠ・ＢⅡ・ＢⅢ・ＢⅣ区に相当する範囲が集落域と捉えられ、また集落の中心は今回の調査地の内側付近と想定される。

最後に、今回の調査における課題などについて、③～⑥の内容を指摘しておきたい。

③　陥し穴状遺構の時期について、今回検出された溝状の形態を呈する陥し穴は過去の調査事例から縄文時代と推定されるが、土器などの出土遺物がなく詳細な時期は掴めない。また、調査区範囲にも関連して、分布に関わる内容についても言及が難しい。

④　竪穴住居跡の床下から土坑が顕著に発見されたが、これらは何のために作られたのか。今回の調査で見つかった炭窯や焼土遺構の存在から仮説を述べるなら、遺跡内で鉄に関連する作業が行われていたことが考えられようか。また、床下土坑が見つかる竪穴住居跡についても、居住のためだけの住居ではなく、鉄に関連する工房も兼ねていた可能性を視野に入れる必要があると思われる。作屋敷遺跡から南に１kmの距離にある小十文字遺跡では、野鍛冶遺構と報告されている鉄の工房跡が見つかっていることから（※この遺構からは十和田ａ火山灰も確認されている）、本地域には鍛冶の技術を持った工人が存在したことは想像に難くなく、今後の調査事例の増加に期待する。

⑤　集落の生業に関わる内容が今回の調査からは不明にある。具体的には、750mにわたり調査したにも関わらず、当時の水田や畑（畝間状遺構などを含め）などの生産遺構が未発見にある。水の供給の在り方など、様々な側面から検討を行う必要があると考えられる。

⑥　５号土坑出土の炭化材について、放射性炭素年代測定を実施したが、14C年代は1,200±30yrBP、暦年較正年代（1σ）は、687～781AD（60.8%）・791～806AD（7.4%）という結果が得られた。この５号土坑は、各所で上述したとおり、鍛冶に関連する遺構の可能性が考えられる。年代測定で得られた年代は古墳時代～平安時代前半で、出土土器とは整合しない。

Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ参考・引用文献

（※Ⅱと重複するものは割愛した）

【市町村史・論文・報告書・研究会発表資料など】

白鳥　良一　1980「多賀城出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所

伊藤　博幸ほか　1981『西光田遺跡』水沢市文化財報告書第５集水沢市教育委員会

伊藤　博幸・佐久間　賢ほか　1981『胆沢城－昭和55年度発掘調査概報－』水沢市教育委員会

八木　光則　1993「古代斯波郡と爾薩体の土器様相」『第18回古代城柵官衙遺跡検討会　特集シンポジウム北日本における律令期の土器様相』古代城柵官衙遺跡検討会

村田　晃一　1995「宮城郡における10世紀前後の土器」『福島考古』第36号

高橋　千晶　2004「胆沢城と蝦夷社会」『古代蝦夷と律令国家』奥羽史研究叢書７　蝦夷研究会

村田　　淳　2004「岩手県内出土の緑釉陶器－出土事例の集成と若干の検討『岩手考古学』第16号　岩手考古学会

伊藤　博幸　2006「陸奥型甕・出羽型甕・北奥型甕」『吉岡康暢先生古希記念論集　陶磁器の社会史』同刊行会

岩手県教育員会　2008『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成18年度）』岩手県文化財調査報告書第126集

村田　　淳　2009「近世」『岩手考古学』第20号岩手考古学会設立20周年記念岩手考古学・回顧と展望　岩手考古学会

【(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター報告書など（発刊年順）】（※岩埋文第00集と表記する）

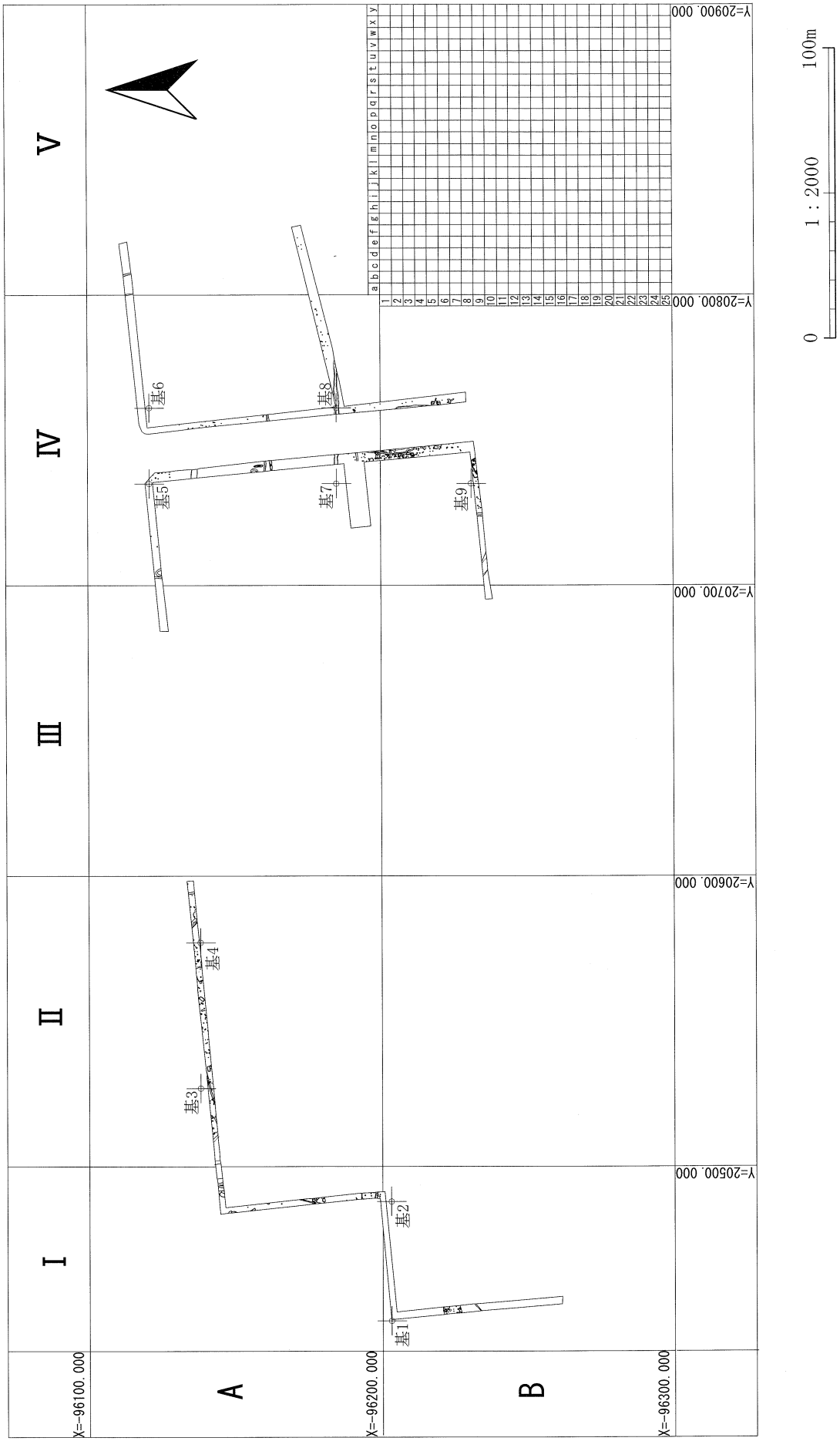
西澤　正晴ほか　2005『西川目・堰向「遺跡発掘調査報告書』岩埋文第464集

村上　　拓・川又　　進　2006『平成16年度発掘調査報告書』「川前遺跡」岩埋文第469集

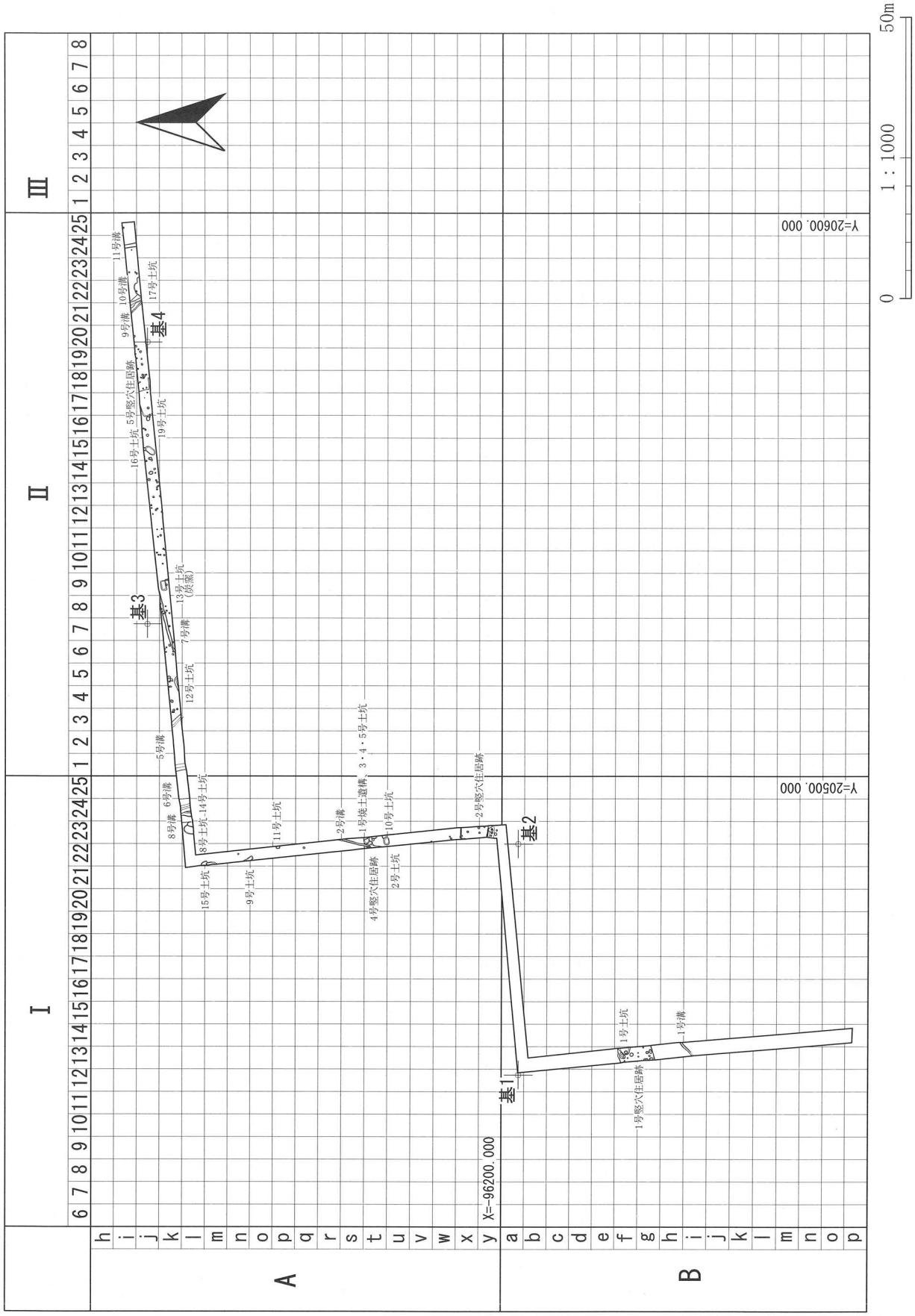
佐藤　淳一・中村　絵美　2006『大清水上遺跡発掘調査報告書』岩埋文第475集

戸根　貴之ほか　2007『宮沢原下遺跡発掘調査報告書』岩埋文第495集

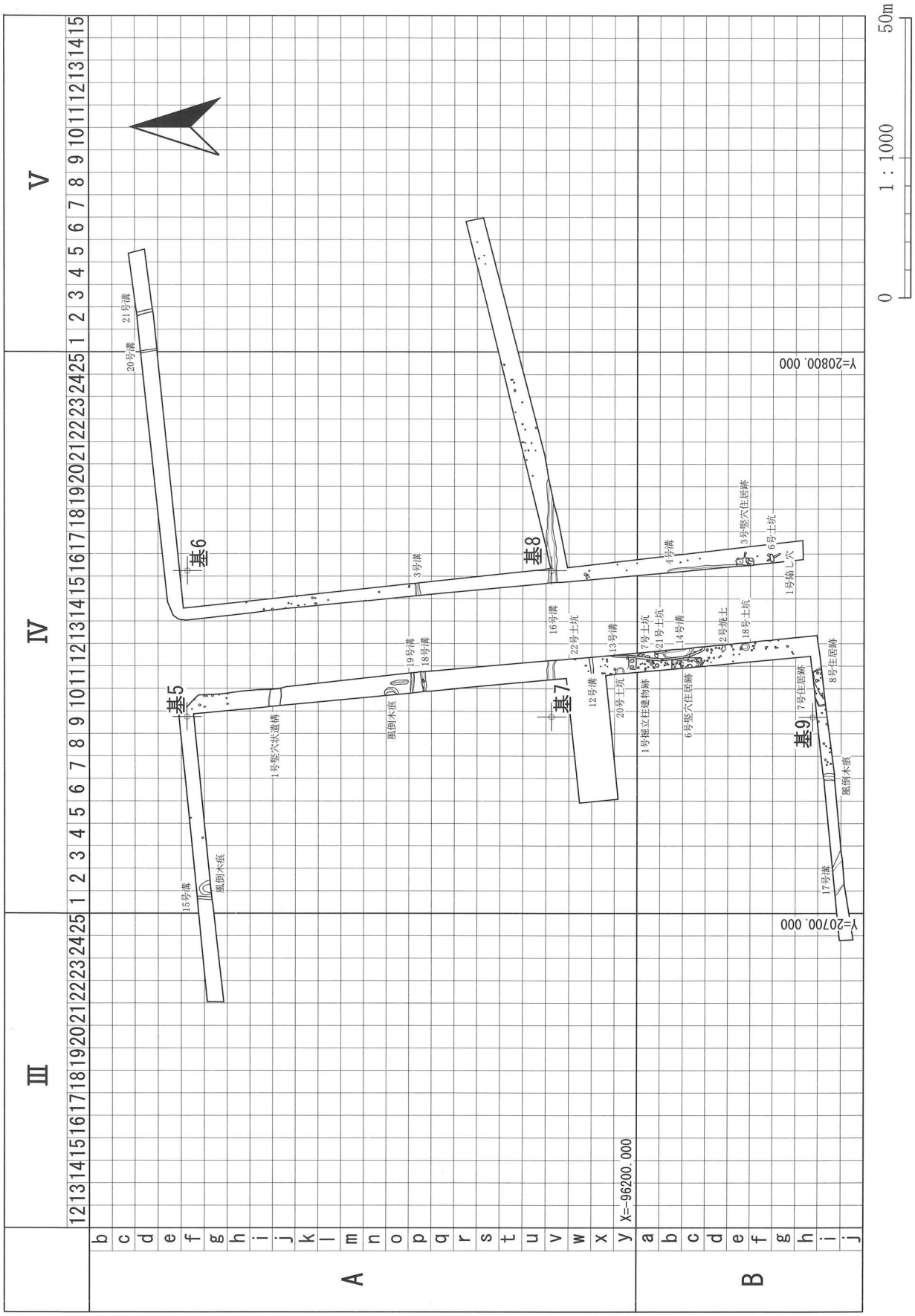
濱田　　宏・吉田　泰治・菊池　昌彦　2008『山の神遺跡・宮沢原下遺跡第２次発掘調査報告書』岩埋文第512集


V
IV
III
II
I
A
B
X=-96100.000
X=-96200.000
X=-96300.000
Y=-20900.000
Y=-20800.000
Y=-20700.000
Y=-20600.000
Y=-20500.000
a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25
基1
基2
基3
基4
基5
基6
基7
基8
基9
0
1：2000
100m

第25図　遺構配置図

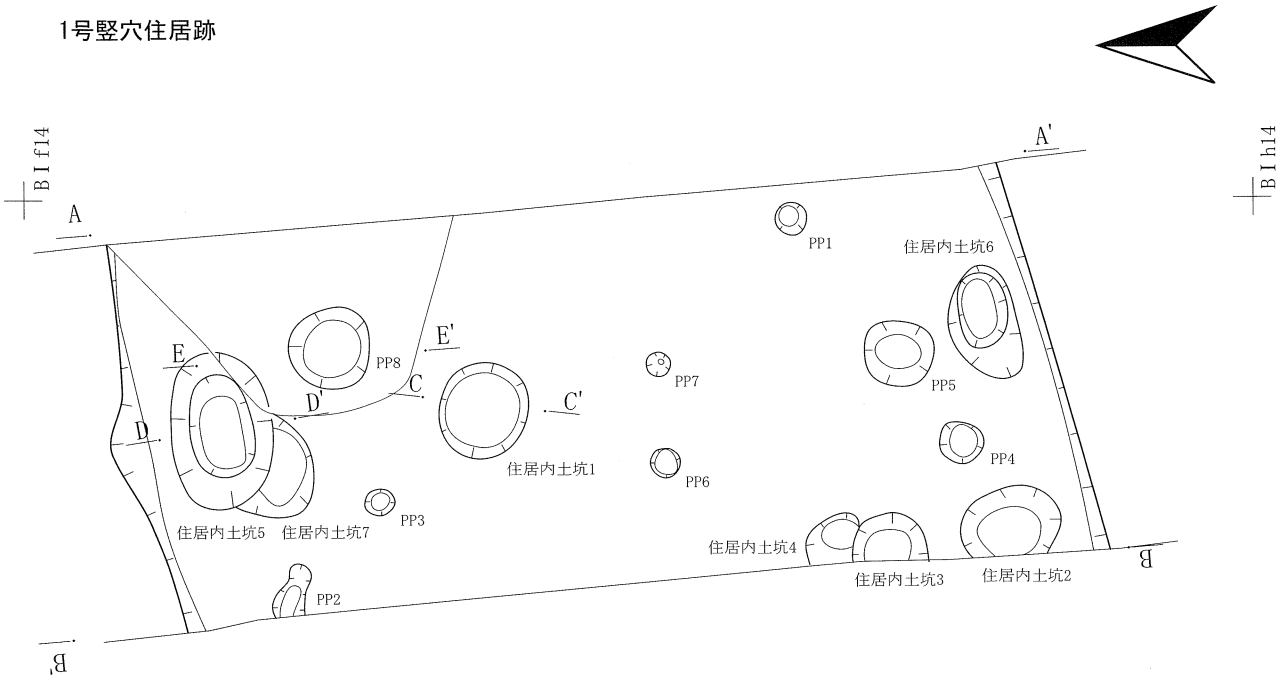


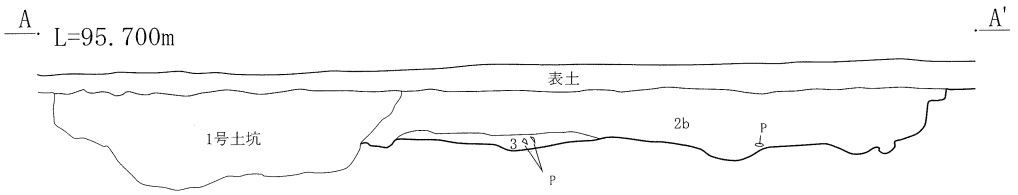
第26図　調査区西部・北部遺構配置図

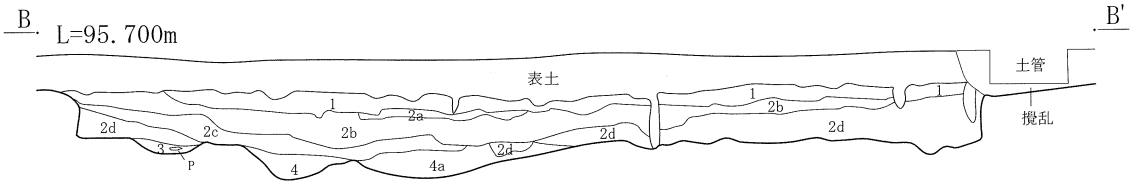


第27図　調査区中央部・東部遺構配置図

1号竪穴住居跡





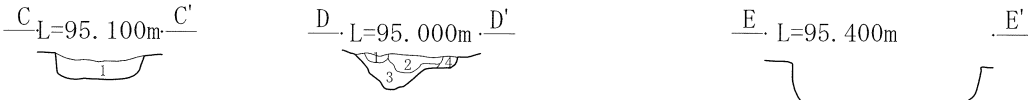


1号竪穴住居跡Ａ－Ａ´・Ｂ－Ｂ´

1　10YR2/2 黒褐色シルト 粘性中 締まり密 酸化鉄1%含む
2a　2.5Y7/2 灰黄色砂質土 粘性弱 締まりやや密 黒褐色シルトブロック5%含む(To-a層)
2b　10YR3/4 暗褐色シルト質粘土質土 粘性やや強　締まりやや密 黄褐色粘土ブロック(径1～10mm)2%混入
2c　10YR3/3 暗褐色シルト質粘土質土 粘性やや強 締まりやや密 黄褐色粘土ブロック(径1～8cm)3%混入
2d　10YR3/3 暗褐色シルト質粘土質土 粘性やや強 締まりやや密 黄褐色粘土ブロック(径1～10mm)5%混入
3　10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質砂質土 粘性やや強 締まり中 焼土小ブロック20%・土器片少量混入
4　10YR4/6 褐色砂質粘土質土粘性　やや強 締まり中　酸化鉄10%・炭化物2%混入
4a　10YR4/2 灰黄褐色砂質粘土質土 粘性中 締まりやや疎　酸化鉄7%含む　(※自然堆積)

0　1：50　2m

第28図　1号竪穴住居跡①



１号竪穴住居跡内土坑１Ｃ－Ｃ´

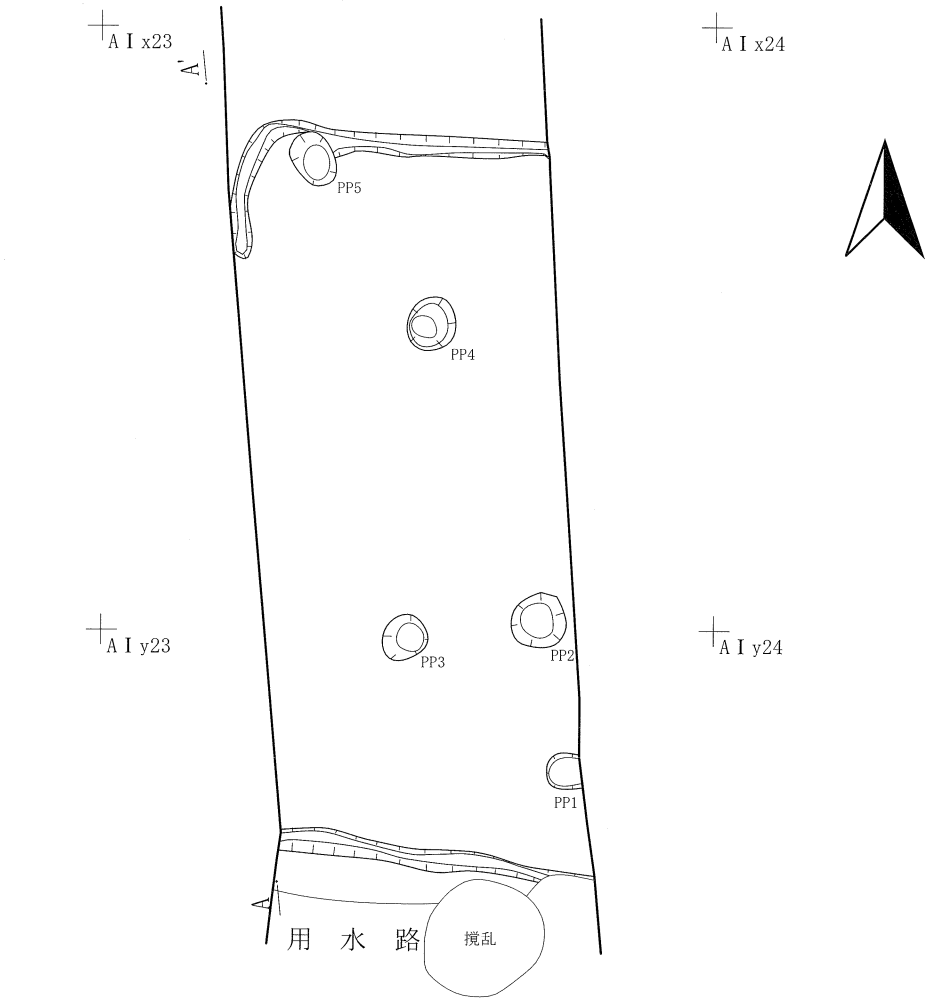
1　7.5YR4/4 褐色シルト質粘土 粘性やや強 締まりやや疎 酸化鉄のブロック7%混入(※人為堆積)

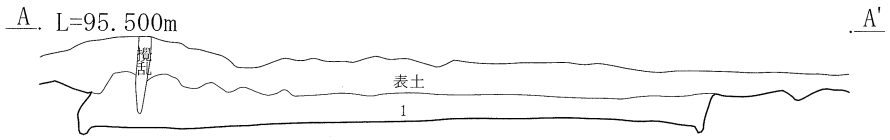
１号竪穴住居跡内土坑５Ｄ－Ｄ´

1　10YR2/2 黒褐色シルト質粘土 粘性中 締まりやや密 黄褐色粘土粒2%混入
2　10YR3/4 暗褐色シルト質粘土 粘性中 締まり密 酸化鉄10%混入
3　10YR3/3 暗褐色粘土質土 粘性強 締まり中 酸化鉄3%・炭化物少量混入
4　10YR6/4 にぶい黄橙色粘土 粘性強 締まりやや密 酸化鉄5%混入

0　1：50　2m

2号竪穴住居跡





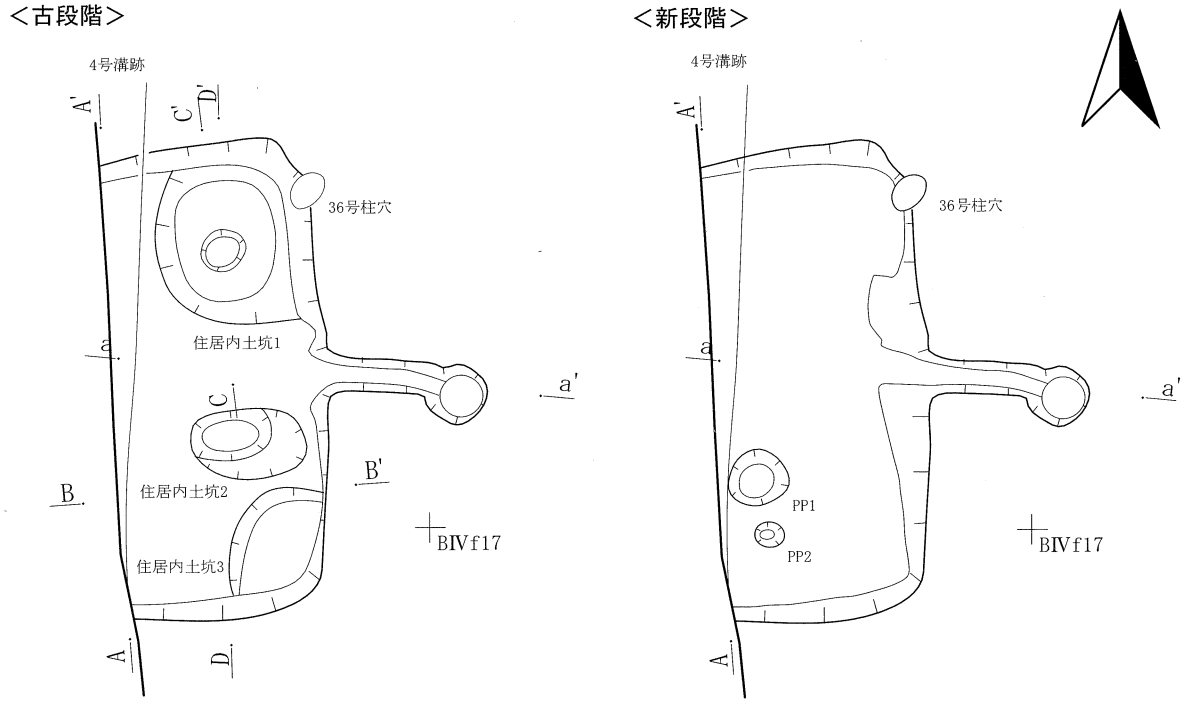
２号竪穴住居跡Ａ－Ａ´

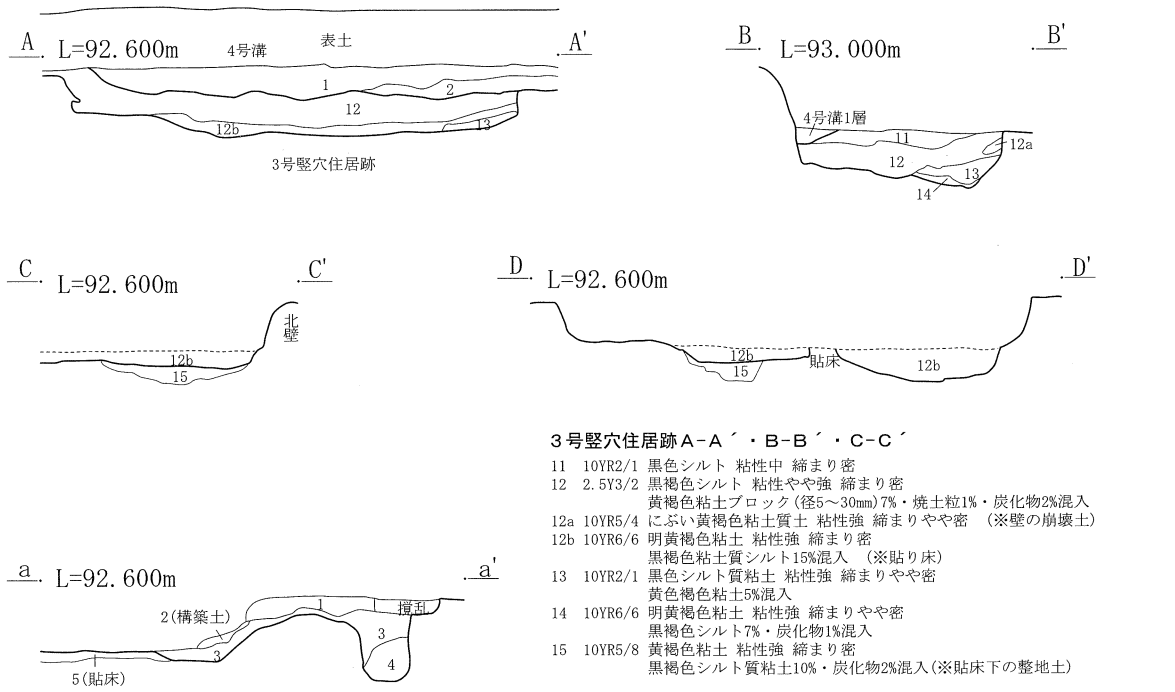
1　10YR2/3　黒褐色シルト質粘土 粘性中 締まりやや密
　　黄褐色粘土ブロック(1～80mm)7%・炭化物5%・焼土3%混入

0　1：50　2m

第29図　１号竪穴住居跡②、２号竪穴住居跡

3号竪穴住居跡





3号竪穴住居跡A－A´・B－B´・C－C´

11　10YR2/1　黒色シルト　粘性中　締まり密
12　2.5Y3/2　黒褐色シルト　粘性やや強　締まり密
　　黄褐色粘土ブロック(径5～30mm)7%・焼土粒1%・炭化物2%混入
12a　10YR5/4　にぶい黄褐色粘土質土　粘性強　締まりやや密　(※壁の崩壊土)
12b　10YR6/6　明黄褐色粘土　粘性強　締まり密
　　黒褐色粘土質シルト15%混入　(※貼り床)
13　10YR2/1　黒色シルト質粘土　粘性強　締まりやや密
　　黄色褐色粘土5%混入
14　10YR6/6　明黄褐色粘土　粘性強　締まりやや密
　　黒褐色シルト7%・炭化物1%混入
15　10YR5/8　黄褐色粘土　粘性強　締まり密
　　黒褐色シルト質粘土10%・炭化物2%混入(※貼床下の整地土)

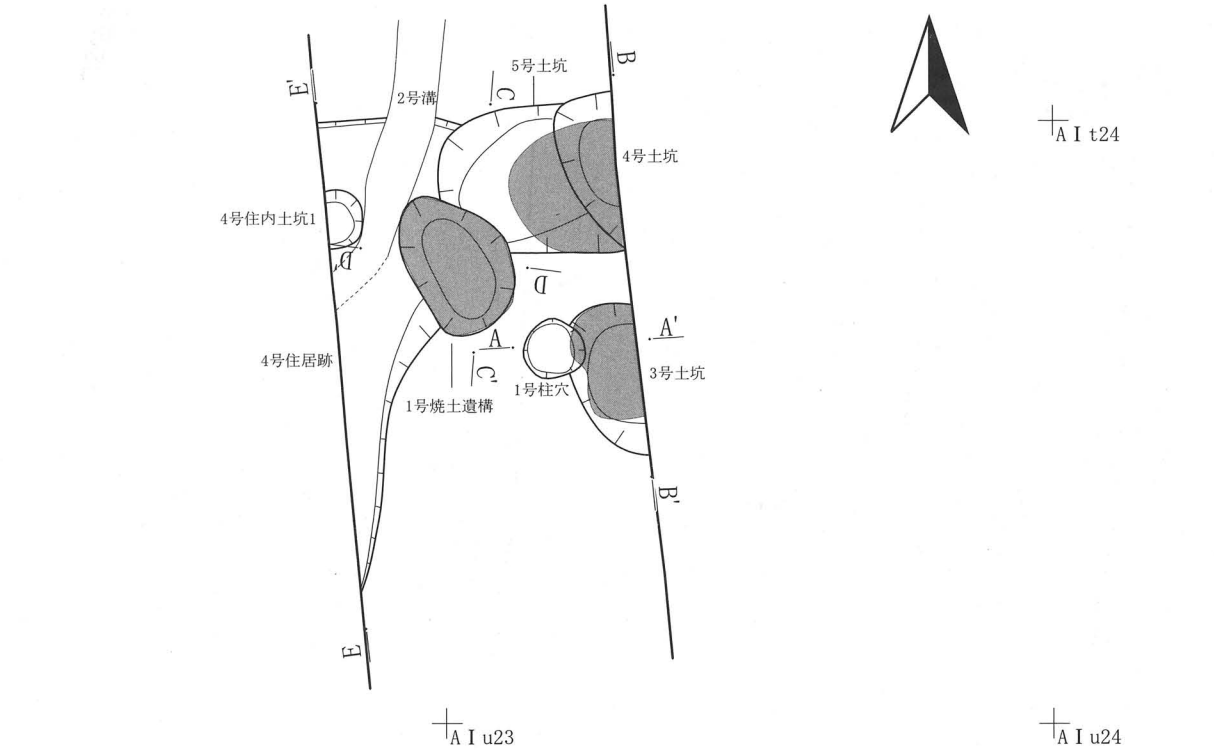
3号竪穴住居跡カマドa－a´

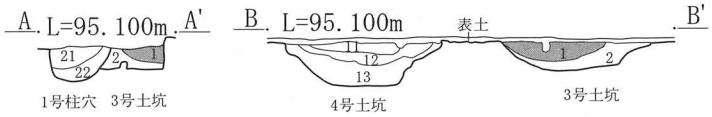
1　10YR3/3　暗褐色粘土質シルト　粘性やや強　締まり密
　　にぶい黄褐色粘土20%混入　(※カマド天井構築土)
2　10YR5/4　にぶい黄褐色粘土質土　粘性強　締まりやや密
　　黒褐色シルト10%・焼土粒1%混入
3　10YR2/2　黒褐色粘土質シルト　粘性やや強　締まり中
　　黄褐色粘土10%・炭化物1%・焼土粒1%混入
4　10YR2/3　黒褐色粘土質シルト　粘性やや強　締まりやや疎
5　10YR4/6　褐色粘土質土　粘性強　締まり密
　　黒褐色シルト20%混入　(※貼り床)

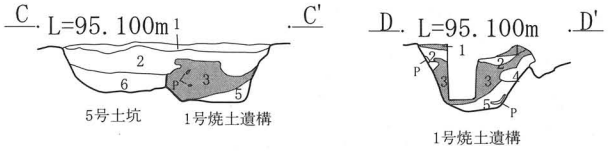
0　1：50　2m

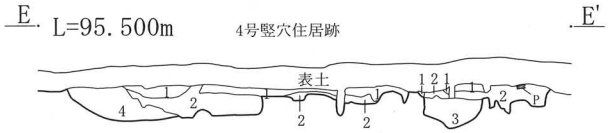
第30図　3号竪穴住居跡

４号竪穴住居跡、３・４・５号土坑、１号焼土遺構









３号土坑・４号土坑・１号柱穴状土坑Ａ－Ａ´・Ｂ－Ｂ´

1　7.5YR5/8 明褐色焼土　粘性弱 締まり密
（３号土坑※主に焼土粒・炭化粒で層を構成）
2　10YR3/3　暗褐色シルト質粘土 粘性中 締まり密
黄褐色ブロック5%混入（３号土坑）
11　10YR2/1 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり密
炭化粒(径1～20mm)５％・焼土粒3%・
黄褐色粘土粒5%混入（４号土坑）
12　10YR2/2 黒褐色 粘性やや弱 締まり密
炭化粒(径1～20mm)15%・焼土粒2%・
黄褐色粘土粒3%混入（４号土坑）
13　10YR2/2 黒褐色シルト質粘土 粘性中 締まりやや密
炭化粒(径1～20mm)3%・焼土粒1%・
黄褐色粘土粒2%混入（４号土坑）
21　10YR2/2 黒褐色シルト 粘性中 締まり密
焼土粒(径1～10mm)3%・炭化粒5%混入
（１号柱穴状土坑）
22　10YR4/4 褐色シルト質粘土 粘性中 締まりやや密
焼土粒(径1～10mm)1%・炭化粒2%混入
（１号柱穴状土坑）

５号土坑・１号焼土遺構　Ｃ－Ｃ´・Ｄ－Ｄ´

1　10YR2/1 黒色シルト 粘性弱 締まり密
炭化粒15%・焼土粒10%混入
2　10YR3/3 暗褐色シルト質粘土 粘性中 締まり密
炭化粒1%・焼土粒1%・土器片少量・
黄褐色粘土粒ブロック15%混入
（１号焼土下部土坑・５号土坑）
3　7.5YR5/8 明褐色土焼土 粘性やや弱 締まりやや密
焼土粒15%・土器片少量・
黄褐色粘土粒(径10～30mm)10%混入
（１号焼土下部土坑）
4　10YR2/2 黒褐色粘土質土 粘性やや強 締まりやや密
焼土粒5%・黄褐色粘土ブロック3%混入
（１号焼土下部土坑）
5　10YR4/4 褐色粘土質土 粘性やや強 締まりやや密
焼土粒3%・土器片少量混入（１号焼土下部土坑）
6　10YR2/2 黒褐色シルト質粘土 粘性やや強 締まりやや密
黄褐色粘土ブロック15%混入（５号土坑）

４号竪穴住居跡Ｅ－Ｅ´

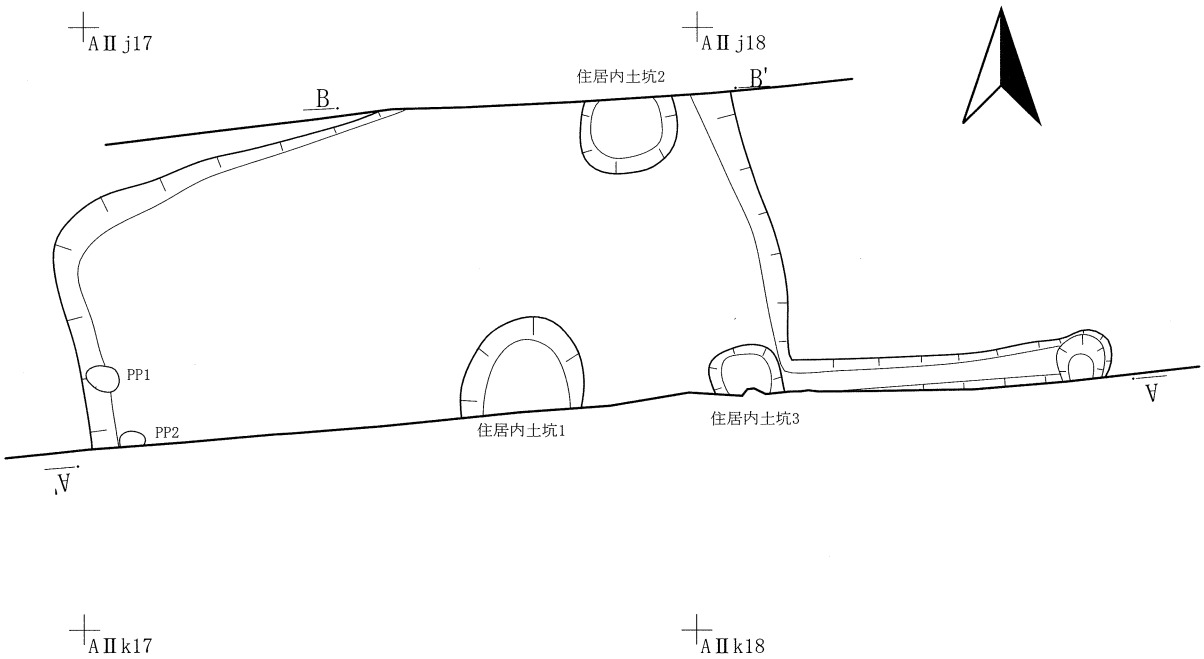
1　10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや密 焼土粒２%・炭化粒10%混入
2　10YR2/3 黒褐色シルト質粘土 粘性中 締まりやや密 黄褐色粘土(径1～5mm)5%混入
3　10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや弱　締まりやや密 黄褐色粘土ブロック15%混入
4　10YR3/3　暗褐色シルト質粘土 粘性中 締まり密 黄褐色粘土(径1～30mm)10%・焼土粒5%混入

0　1：50　2m

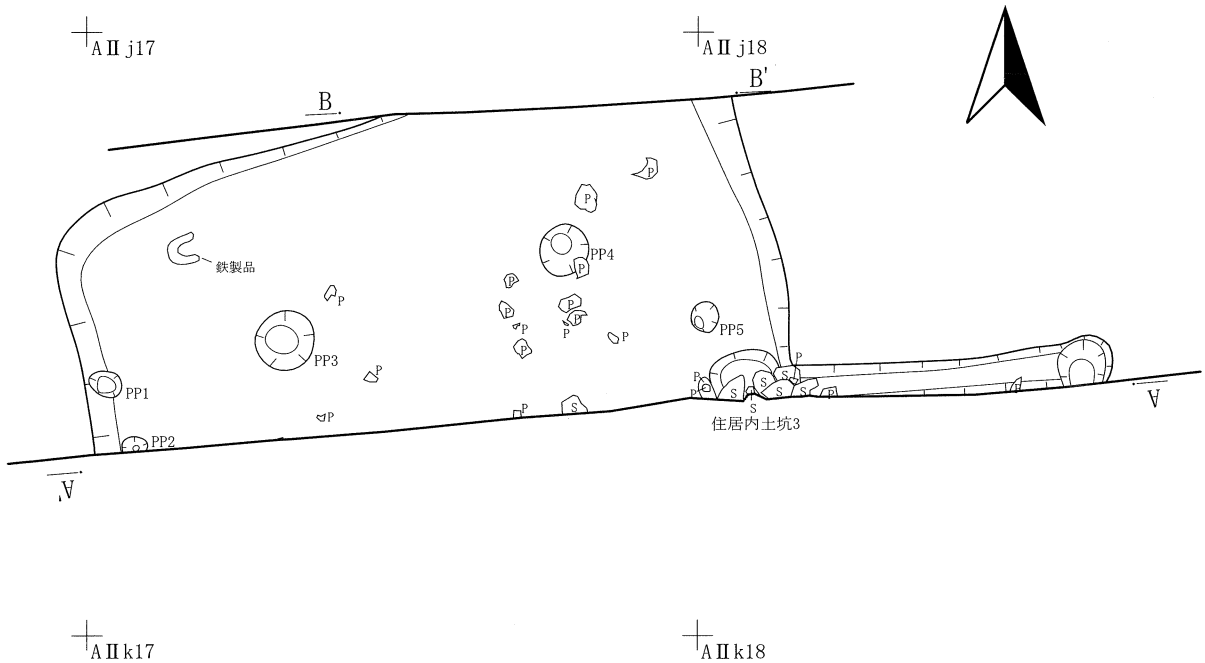
第31図　４号竪穴住居跡、３～５号土坑、１号焼土遺構

５号竪穴住居跡

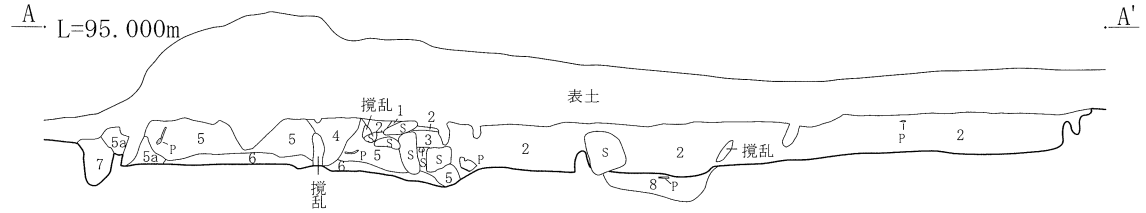
＜古段階＞

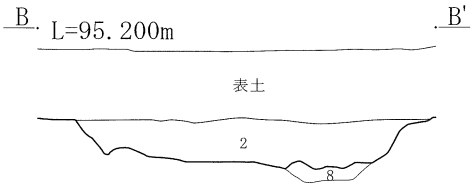


＜新段階＞



第32図　５号竪穴住居跡①





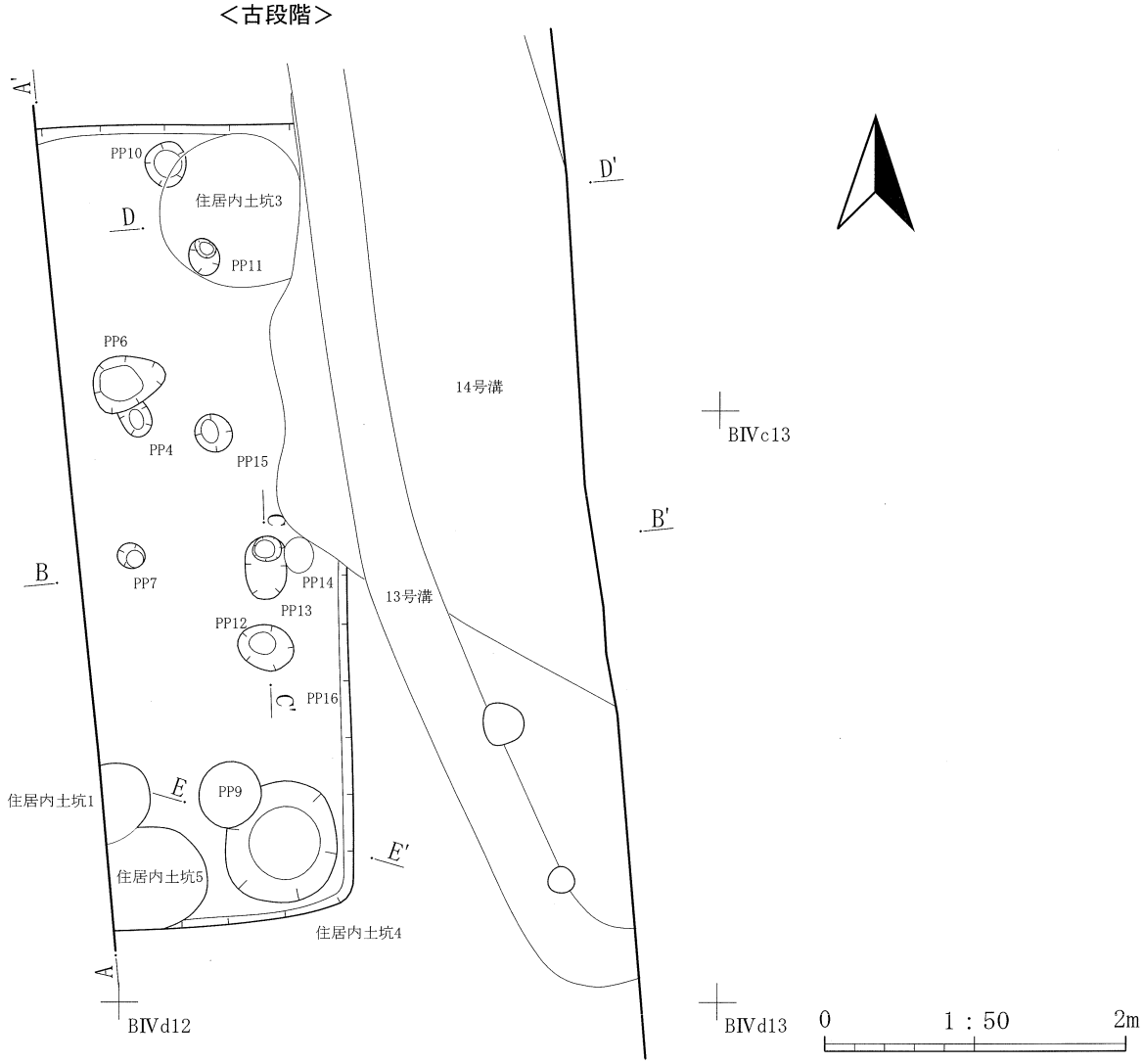
5号竪穴住居跡A－A´・B－B´

1　10YR2/3 黒褐色シルト質粘土 粘性中 締まり密 黄褐色粘土粒2%混入
2　10YR2/3 黒褐色粘土質土 粘性やや強 締まりやや密
　　黄褐色粘土粒5%・炭化粒3%・焼土粒1%混入（※自然堆積）
3　10YR4/6 褐色粘土質土 粘性やや強　締まりやや密
　　黒褐色シルト質粘土2%・土器片少量混入（※カマド構築土）
4　10YR2/3 黒褐色シルト質粘土 粘性中 締まり密
　　黄褐色粘土粒7%混入（※煙道部構築土）
5　10YR3/3 暗褐色シルト質粘土 粘性中 締まりやや密
　　黄褐色粘土粒5%・炭化粒3%・焼土粒7%混入　（※煙道構築土の崩落土）
5a　10YR3/3 暗褐色シルト質粘土 粘性中 締まりやや密
　　黄褐色粘土粒5%・炭化粒1%・焼土粒2%混入（※煙道構築土の崩落土）
6　10YR4/6 褐色粘土質土 粘性やや強　締まりやや密
　　黄褐色粘土粒7%・炭化粒2%・焼土粒1%混入　（※煙道構築土の崩落土）
7　10YR3/4 暗褐色粘土質土 粘性やや強 締まり中
　　黄褐色粘土粒7%・焼土粒1%混入（※煙出部堆積土、自然堆積）
8　10YR2/3 黒褐色粘土質土 粘性やや強 締まりやや密
　　黄褐色粘土ブロック15%混入（※人為堆積）

0　1：50　2m

6号竪穴住居跡

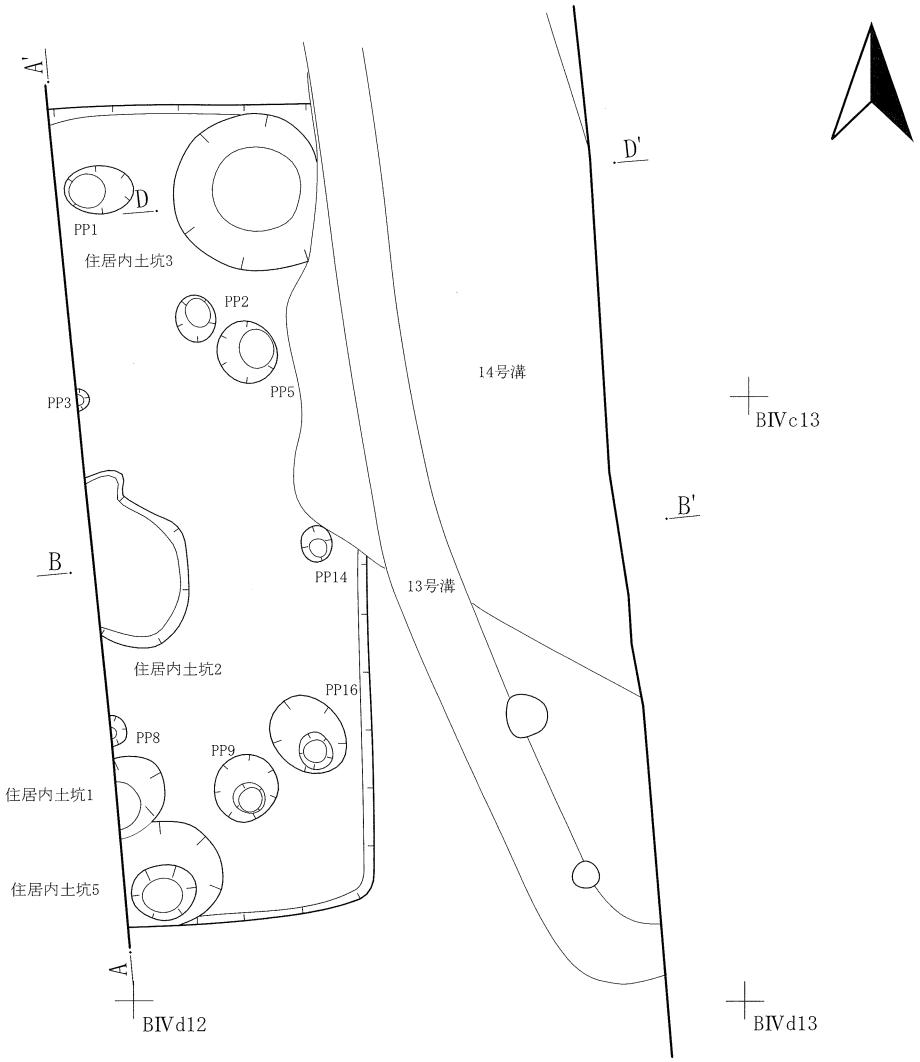
＜古段階＞

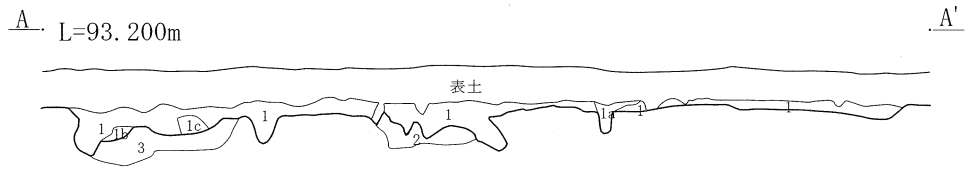


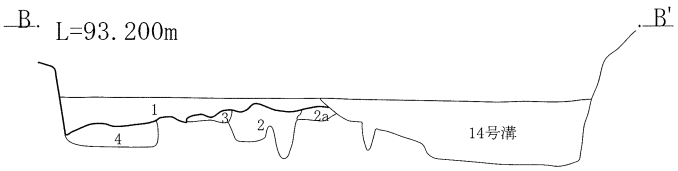
第33図　5号竪穴住居跡②、6号竪穴住居跡①

6号竪穴住居跡

＜新段階＞





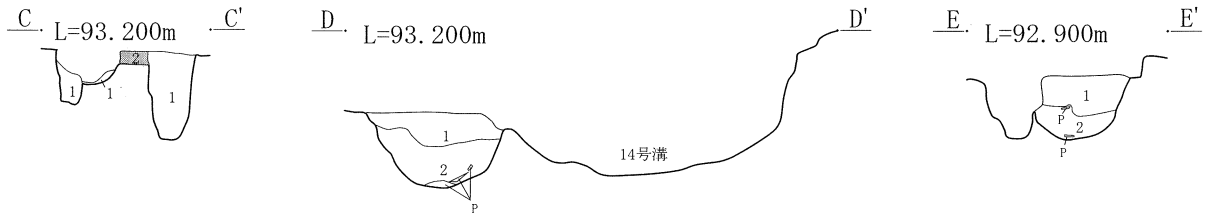


６号竪穴住居跡Ａ－Ａ'・Ｂ－Ｂ´

1　7.5YR3/1 黒褐色シルト 粘性やや強 締まり中　To-a1%混入(※6号住の埋土、自然堆積)
1a　10YR2/2　黒褐色シルト 粘性やや強 締まりやや密　(6号住PP３の埋土)
1b　10YR4/4 褐色粘土 粘性やや強 締まりやや密
1c　10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや強 締まりやや密 黄褐色粘土ブロック20%混入
2　10YR2/3 黒褐色シルト質粘土 粘性やや強 締まりやや密 焼土ブロック1%未満混入　(※貼り床)
2a 10YR2/3 黒褐色シルト質粘土 粘性やや強 締まりやや密 焼土ブロック1%混入　(※床面下位の人為層)
3　10YR3/4 暗褐色シルト質粘土 粘性やや強 締まりやや疎 焼土ブロック3%・炭化物7%混入(※6号住土坑1・5の下位の人為堆積層)
4　10YR2/3 黒褐色シルト質粘土 粘性やや強 締まりやや密 黄褐色粘土ブロック10%混入(6号住土坑2下位の人為層)

0　1：50　2m

第34図　６号竪穴住居跡②



６号竪穴住居跡PP12Ｃ－Ｃ´

1　10YR3/2　黒褐色シルト質粘土　粘性やや強　締まり密　炭化物1%・焼土粒1%・黄褐色粘土粒5%混入
2　10YR4/6 褐色シルト質粘土 粘性やや強　締まり密 炭化物1%・焼土粒20%混入　(焼土層)

６号竪穴住居跡内土坑３Ｄ－Ｄ´

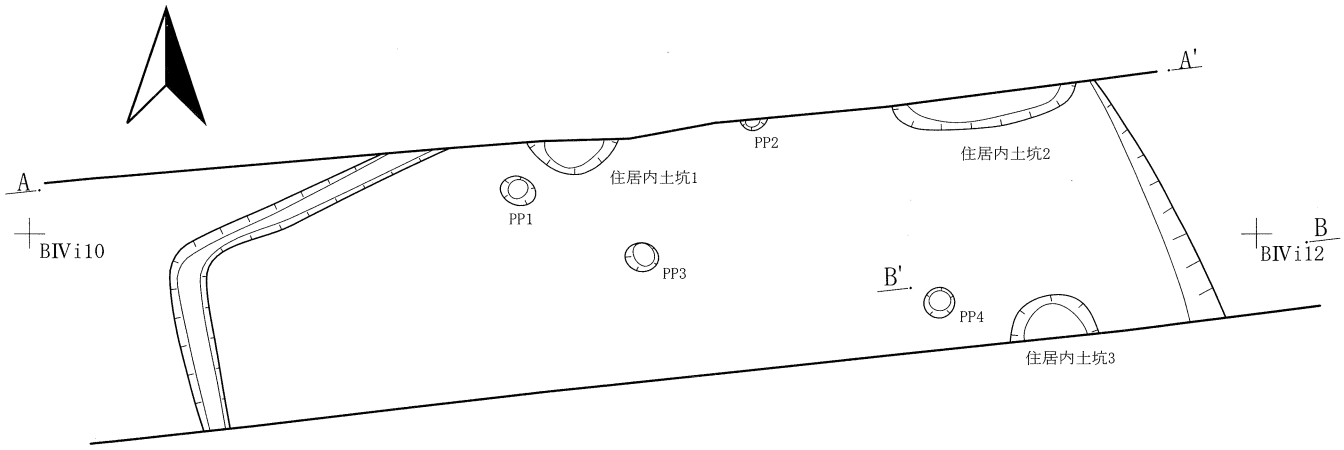
1　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性中 締まりやや密 黄褐色粘土ブロック5%・To－aブロック　1%・炭化物3%混入
2　10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや強 締まり中 炭化物1%・須恵器片多量混入

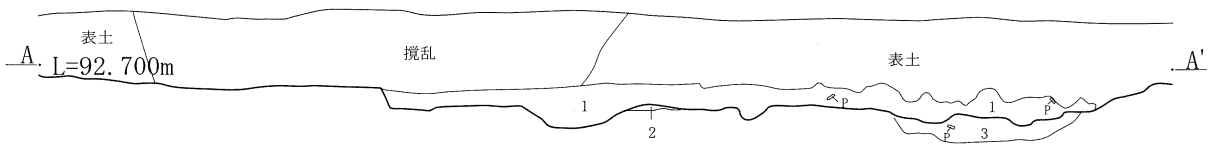
６号竪穴住居跡内土坑４Ｅ－Ｅ´

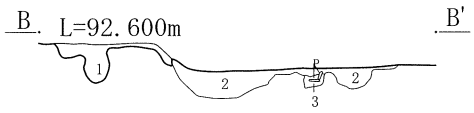
1　10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 締まりやや密 黄褐色粘性ブロック5%・土器少量混入　(※人為層)
2　10YR3/3 暗褐色シルト 粘性やや強　締まり中 炭化物1%・土器少量混入

0　1：50　2m

７号竪穴住居跡







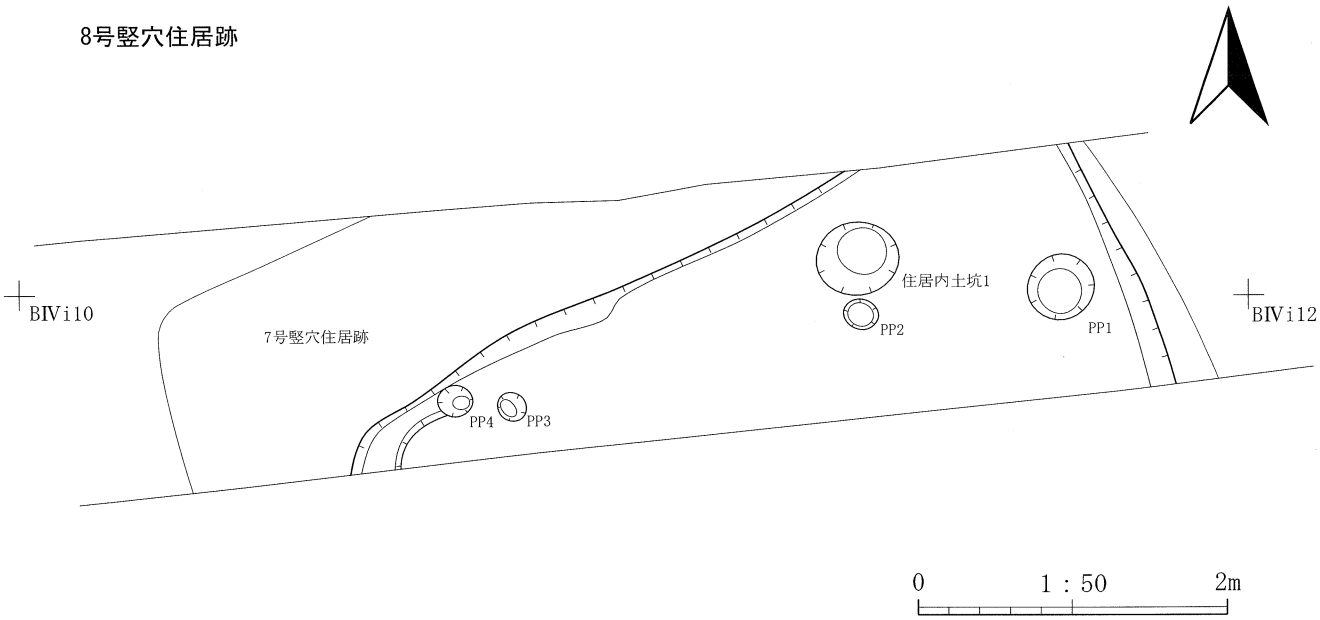
７号竪穴住居跡　Ａ－Ａ´・Ｂ－Ｂ´

1　10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 締まり密 黄褐色粘土ブロック(径2～20mm)5%・炭化物1%混入
2　10YR5/6 黄褐色粘土 粘性強 締まり密 暗褐色シルト20%混入　(※貼床)
3　10YR4/6 褐色シルト質粘土 粘性強 締まり密 黄褐色粘土ブロック30%混入　(※貼り床)

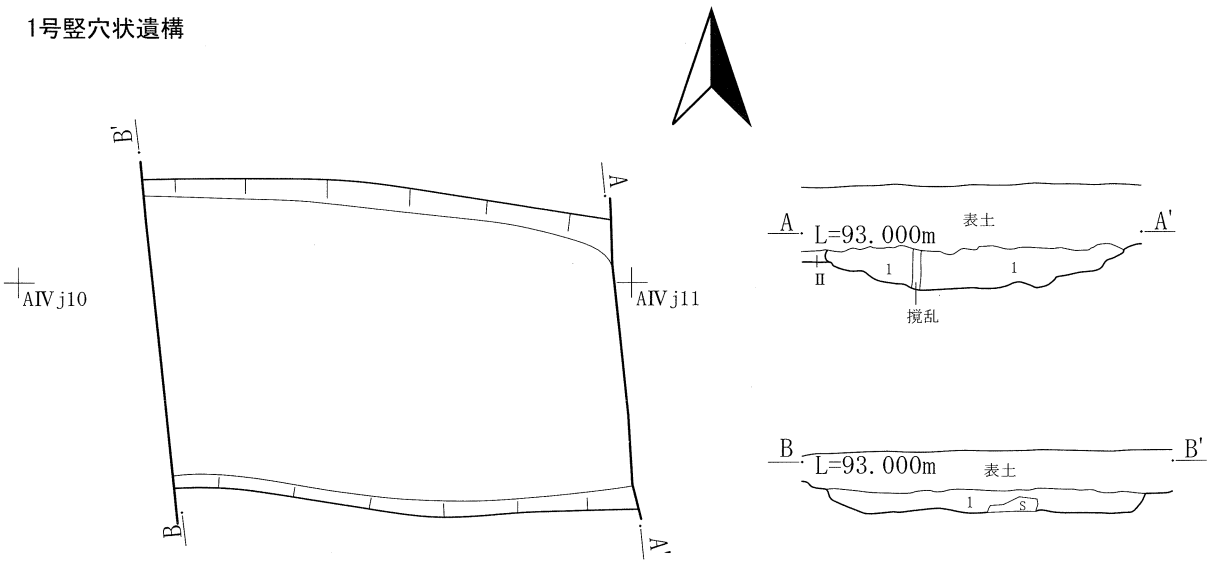
0　1：50　2m

第35図　６号竪穴住居跡③、７号竪穴住居跡

8号竪穴住居跡

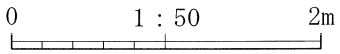


1号竪穴状遺構



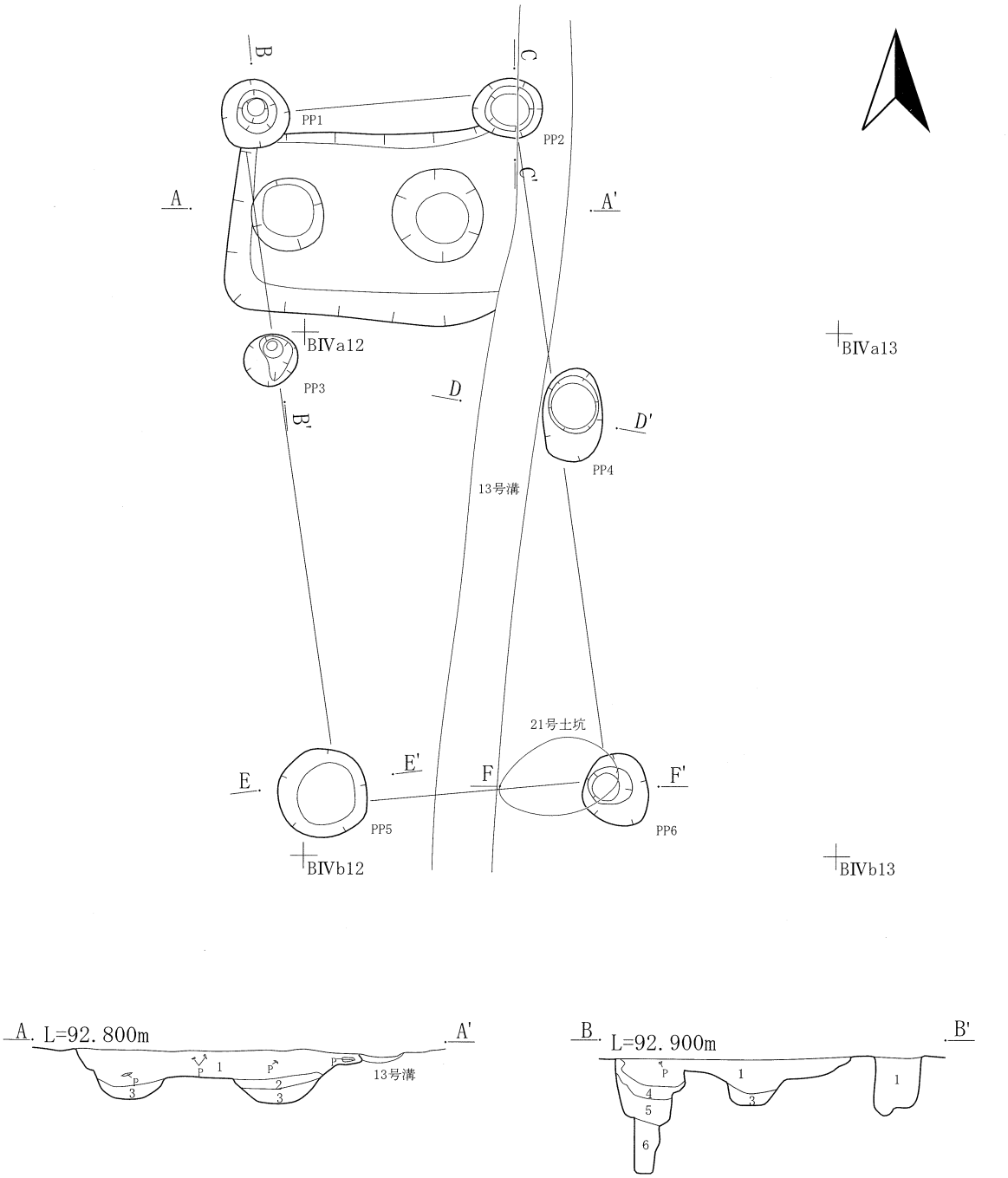
1号竪穴状遺構Ａ－Ａ´

1　10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや強 締まりやや密 黄褐色粘土10%混入



第36図　8号竪穴住居跡、1号竪穴状遺構

1号掘立柱建物跡

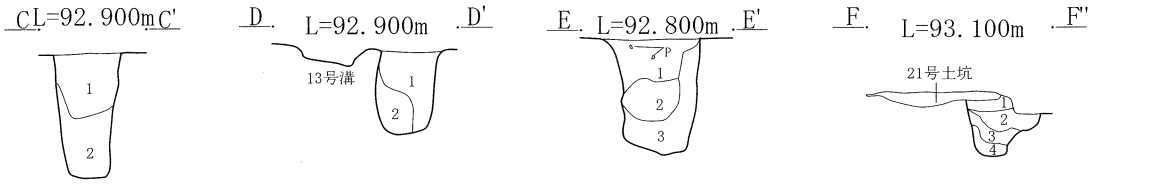


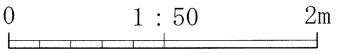
1号掘立柱建物跡付属土坑・PP1・PP3 A－A′・B－B′

1　10YR2/1 黒色シルト 粘性やや強 締まり中 炭化材10%・焼土ブロック3%混入
2　10YR5/8 黄褐色粘土 粘性強 締まりやや密 （※整地層）
3　10YR3/3 暗褐色シルト質粘土 粘性やや強 締まりやや密 炭化物1%混入（※人為による整地層）
4　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性やや強 締まり密
5　10YR3/4 暗褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まり密 暗褐色シルト10%混入
6　10YR3/3 暗褐色シルト質粘土 粘性やや強 締まり疎

0　1：50　2m

第37図　1号掘立柱建物跡①





１号掘立柱建物跡PP2Ｃ－Ｃ´

1　10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや強 締まりやや密 黄褐色粘土7%・炭化物1%混入
2　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性やや強 締まりやや疎 黄褐色粘土10%混入

１号掘立柱建物跡PP4Ｄ－Ｄ´

1　10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや強 締まりやや密 炭化物1%混入
2　10YR3/3 暗褐色シルト質粘土 粘性やや強 締まり中 黄褐色粘土ブロック5%混入

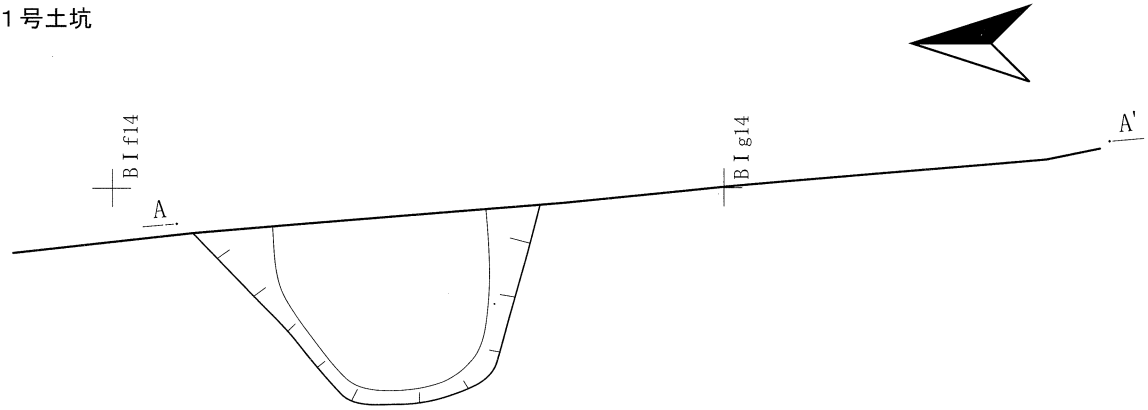
１号掘立柱建物跡PP5Ｅ－Ｅ´

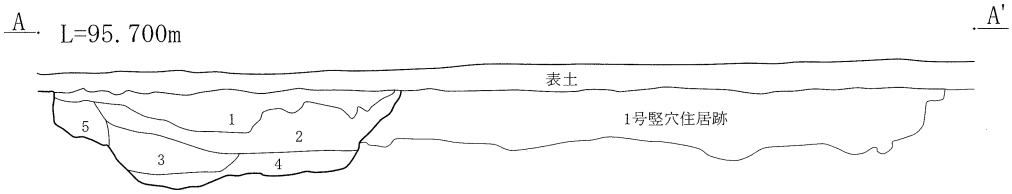
1　10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや強 締まりやや密 炭化物5%・黄褐色粘土ブロック(径5mmほど)5%混入
2　10YR1.7/1 黒色シルト 粘性やや強 締まりやや疎
3　10YR3/3 暗褐色シルト 粘性やや強 締まりやや密 黄褐色粘土20%混入
※柱穴状土坑か？1、2層がアタリ、3層が据え方土

１号掘立柱建物跡PP6F－F´

1　10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 締まり密 黄褐色粘土ブロック1%・焼土ブロック2%混入　(※人為堆積)
2　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性中 締まりやや密 黄褐色粘土ブロック5%混入
3　10YR5/6 黄褐色粘土 粘性強 締まりやや密 暗褐色シルト10%混入
4　10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや強 締まり中

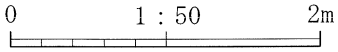
１号土坑





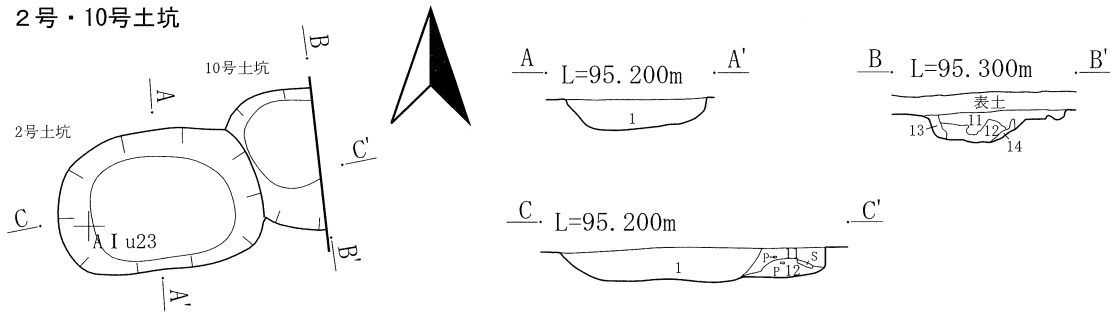
１号土坑Ａ－Ａ´

1　10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや強 締まりやや密 黄褐色粘土ブロック(径2～10mm)2%混入　(※自然堆積)
2　10YR2/3 黒褐色シルト質粘土 粘性やや強 締まり中 黄褐色粘土ブロック(径5～150mm)30%混入　(※人為堆積)
3　10YR2/2 黒褐色シルト質粘土 粘性やや強 締まり中 黄褐色粘性ブロック(径5～20mm)15%混入　(※人為堆積)
4　10YR2/1 黒色泥質粘土質土 粘性強 締まり中　(※自然堆積)
5　10YR4/6 褐色粘土 粘性強　締まり密　黒褐色シルト10%混入



第38図　１号掘立柱建物跡②、１号土坑

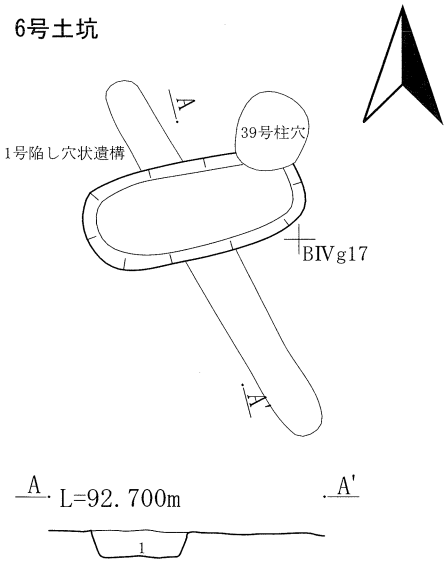
２号・10号土坑



２号土坑・10号土坑　A−A´・B−B´・C−C´

1　10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや強 締まりやや密 黄褐色粘土ブロック(径5～10mm)10%混入
11　10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり密 黄褐色粘土粒(径1～10mm)3%混入
12　10YR3/2 黒褐色シル 粘性やや弱 締まり密 明黄褐色土粘土粒(径1～10mm)10%・赤褐色焼土７％混入　(※整地層)
13　10YR3/4 暗褐色シルト質粘土 粘性中 締まり密 黒褐色シルト7%混入
14　10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり密 黄褐色粘土粒(径1～10mm)3%混入

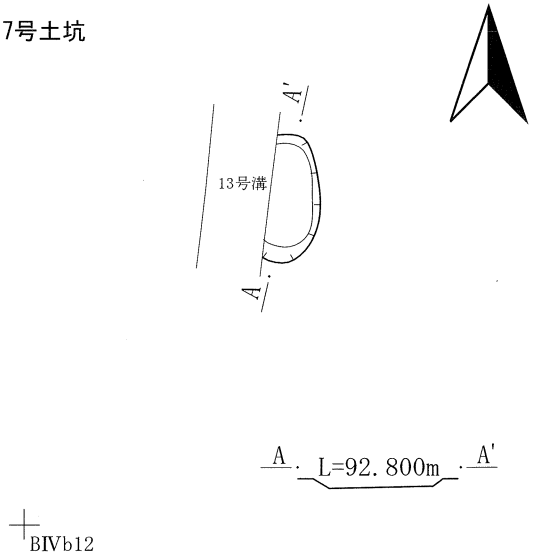
6号土坑



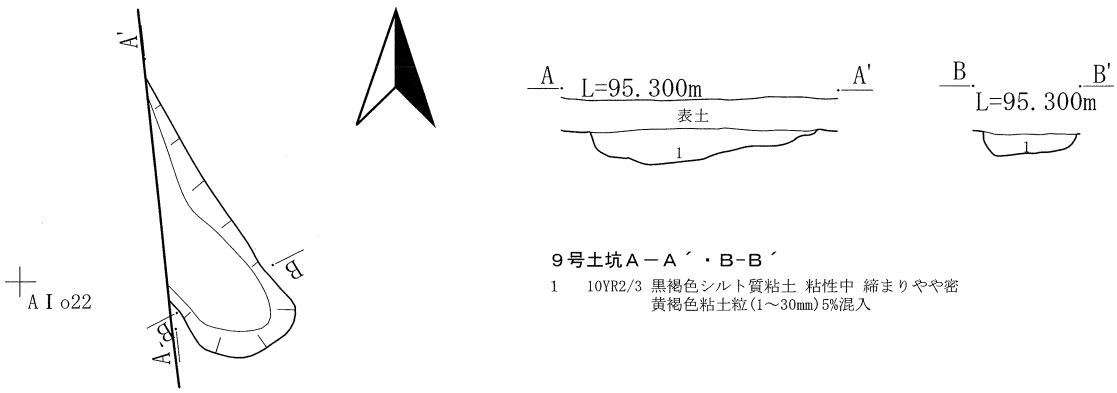
６号土坑Ａ−Ａ´

1　10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや強 締まりやや密
黄褐色粘土ブロック3%混入

7号土坑



9号土坑



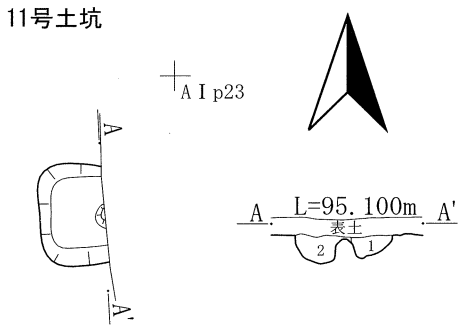
９号土坑Ａ−Ａ´・B−B´

1　10YR2/3 黒褐色シルト質粘土 粘性中 締まりやや密
黄褐色粘土粒(1～30mm)5%混入

0　1：50　2m

第39図　２・６・７・９・10号土坑

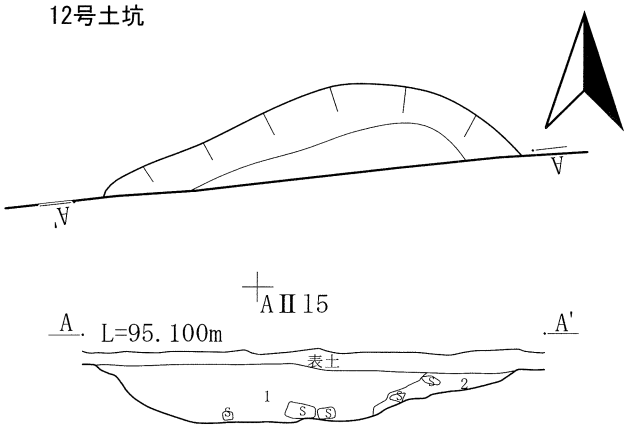
11号土坑



11号土坑Ａ－Ａ´

1　10YR2/3 黒褐色シルト質粘土 粘性中 締まり密 黄褐色粘土粒3%混入
2　10YR5/8 黄褐色シルト 粘性やや弱 締まり密 （※地山か？）

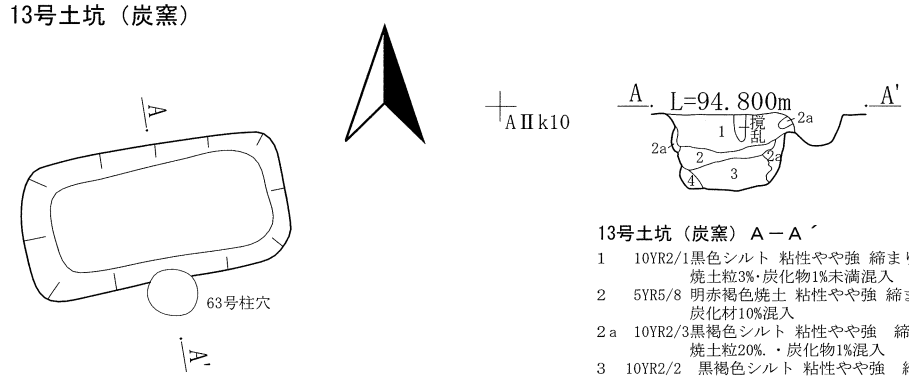
12号土坑



12号土坑Ａ－Ａ´

1　10YR3/2 黒褐色シルト質粘土 粘性やや強 締まり密
　　黄褐色粘土10%混入
2　10YR3/4 暗褐色砂質土 粘性弱 締まりやや疎

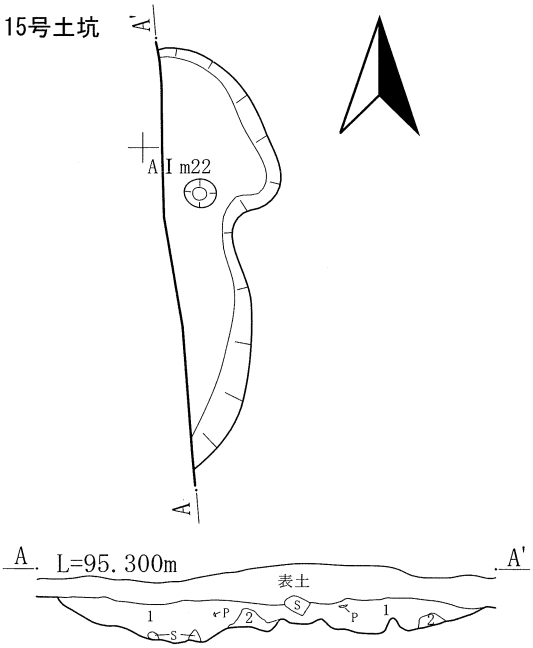
13号土坑（炭窯）



13号土坑（炭窯）Ａ－Ａ´

1　10YR2/1黒色シルト 粘性やや強 締まりやや密
　　焼土粒3%･炭化物1%未満混入
2　5YR5/8 明赤褐色焼土 粘性やや強 締まり中
　　炭化材10%混入
2ａ　10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや強　締まりやや密
　　焼土粒20%.・炭化物1%混入
3　10YR2/2　黒褐色シルト 粘性やや強　締まりやや疎
　　焼土粒2%混入
4　10YR4/4 褐色粘土性シルト 粘性やや強　締まり中
　　焼土粒3%・黄褐色粘土ブロック10%・黒褐色シルト10%混入

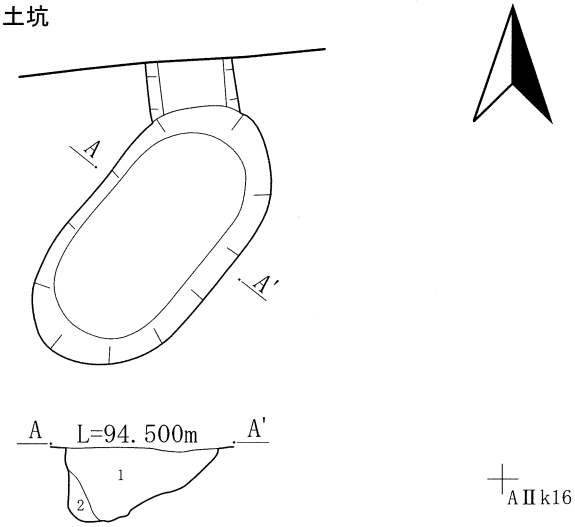
15号土坑



15号土坑Ａ－Ａ´

1　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性やや強 締まりやや密
　　焼土粒1%・黄褐色粘土ブロック7%混入
2　10YR5/8 黄褐色粘土質土 粘性強 締まり密 黒褐色シルト10%混入

16号土坑



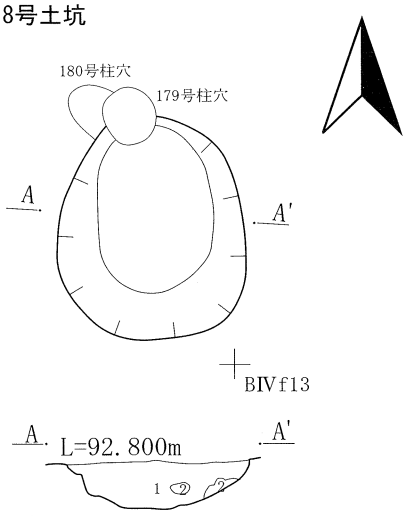
16号土坑Ａ－Ａ´

1　10YR2/1 黒褐色粘土質土 粘性やや強 締まりやや密
　　黄褐色粘土粒5%・酸化鉄7%混入
2　10YR6/2 明黄褐色粘土 粘性強 締まりやや密 締まりやや密
　　黒褐色粘土質土ブロック2%・酸化鉄3%混入

0　1：50　2m

第40図　11～13・15・16号土坑

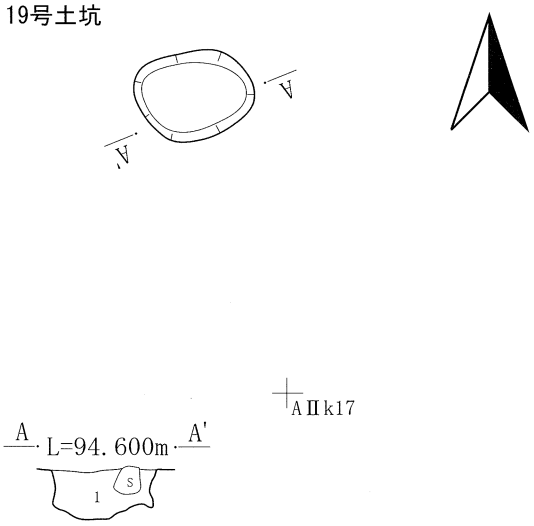
18号土坑



18号土坑Ａ－Ａ´

1　10YR2/1 黒色シルト 粘性やや強 締まり中 炭化物1%混入
2　10YR4/6 褐色粘土 粘性強 締まり密 黒色シルト10%混入

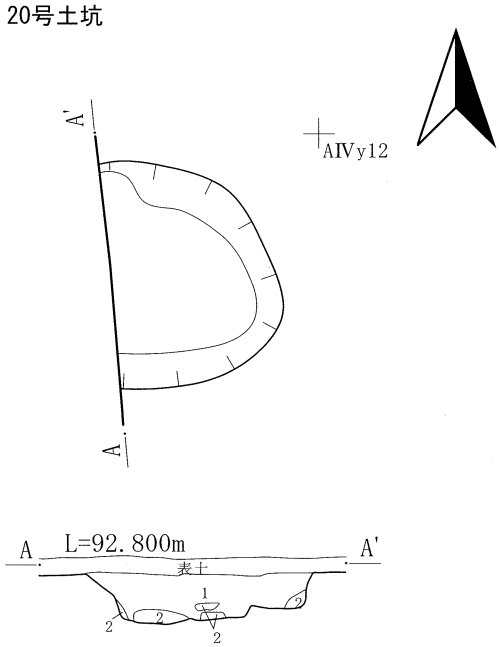
19号土坑



19号土坑Ａ－Ａ´

1　10YR2/2 黒褐色シルト質粘土 粘性中 締まりやや密
黄褐色粘土粒7%・炭化粒1%混入

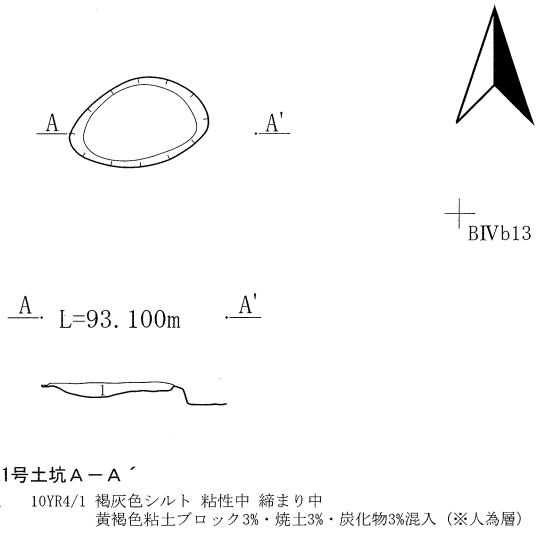
20号土坑



20号土坑Ａ－Ａ´

1　10YR3/1 黒褐色粘土質シルト　粘性やや強　締まりやや密
炭化物3%・黄褐色粘土ブロック2%混入
2　10YR6/4 にぶい黄橙色粘土　粘性強　締まりやや密
黒褐色粘土質シルト5%混入

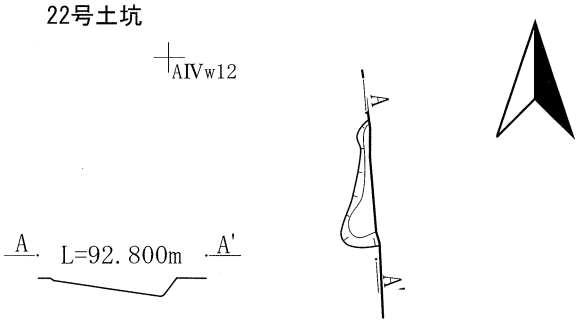
21号土坑



21号土坑Ａ－Ａ´

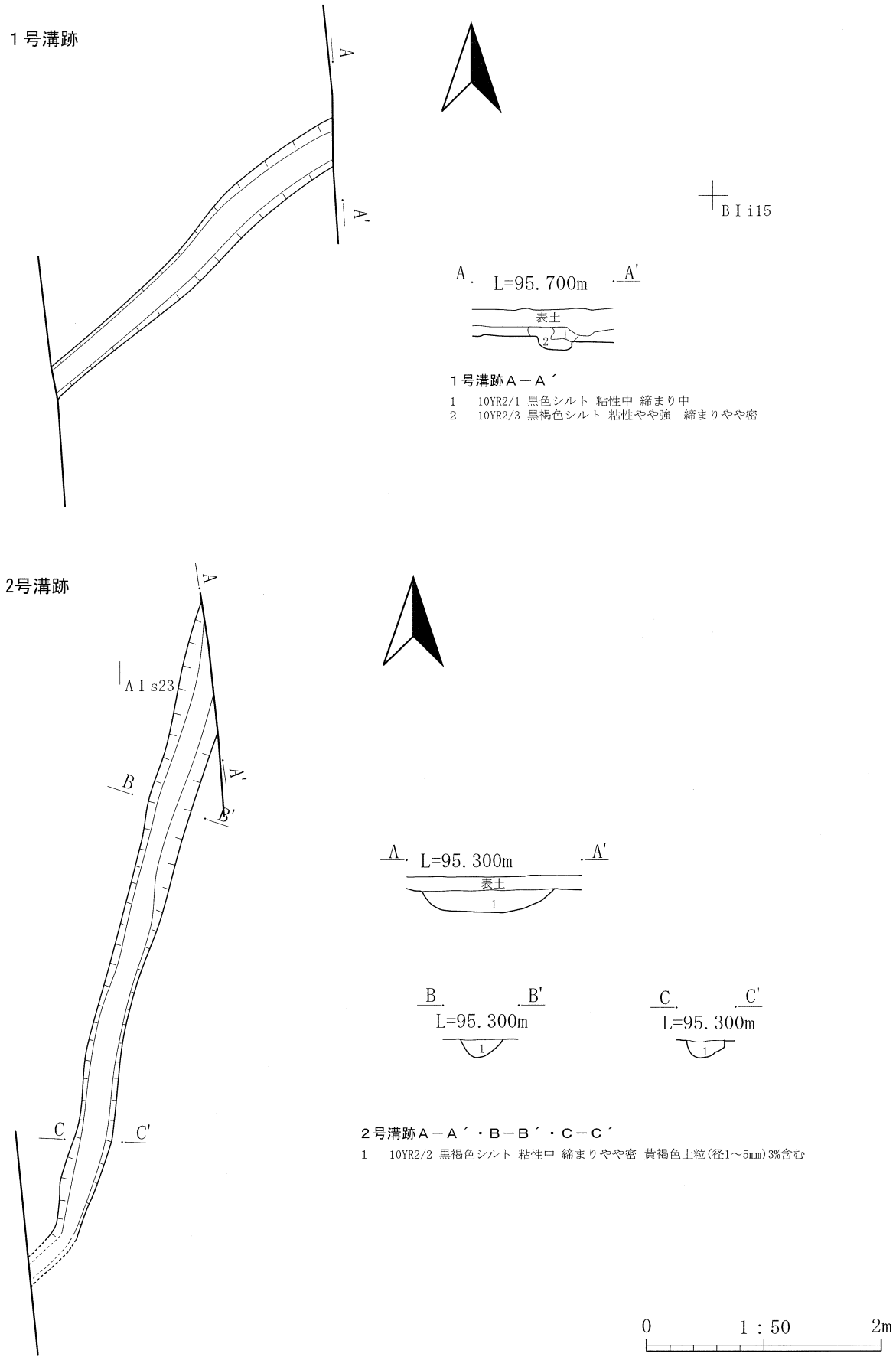
1　10YR4/1 褐灰色シルト 粘性中 締まり中
黄褐色粘土ブロック3%・焼土3%・炭化物3%混入（※人為層）

22号土坑

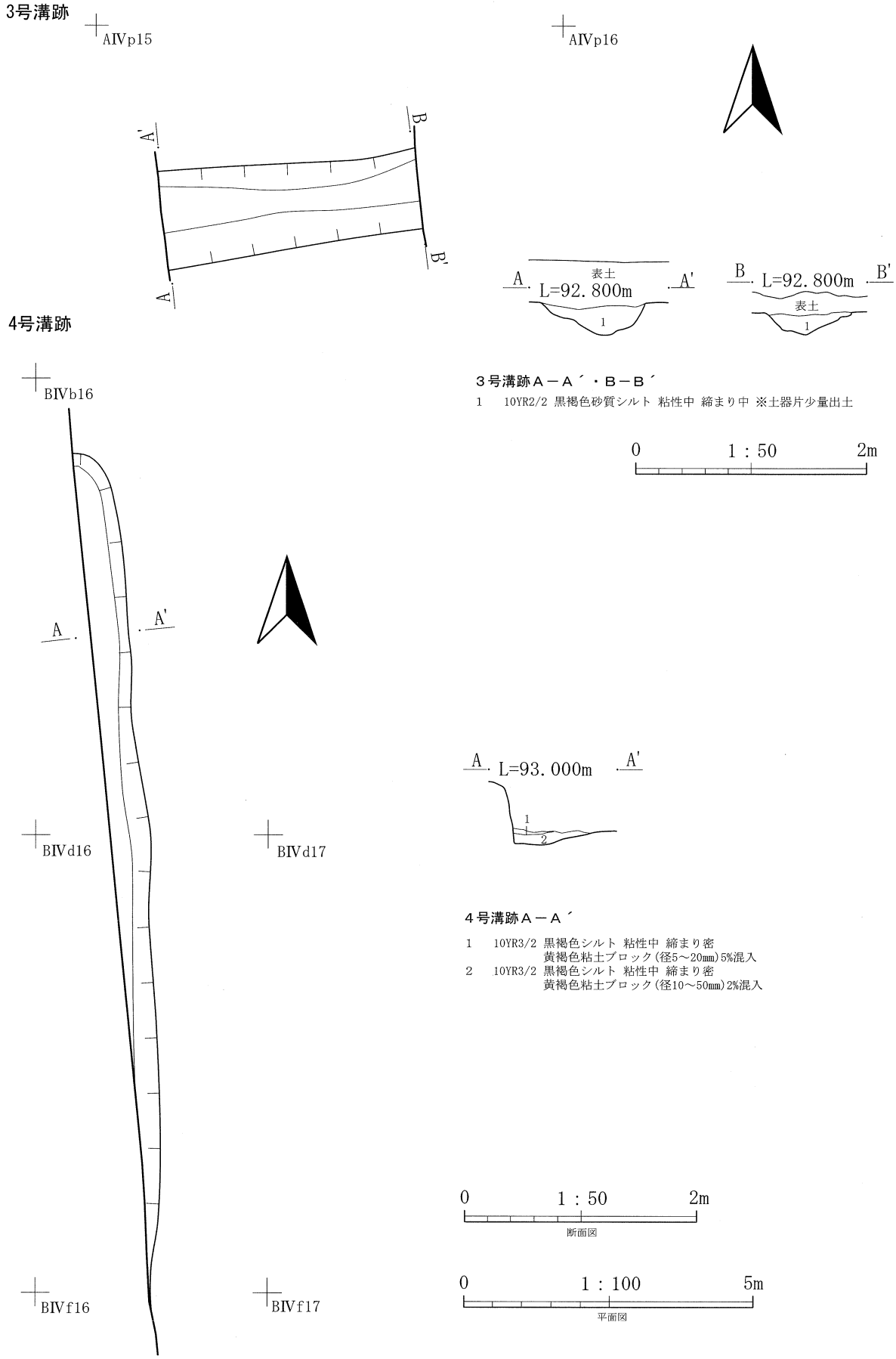


0　1：50　2m

第41図　18～22号土坑

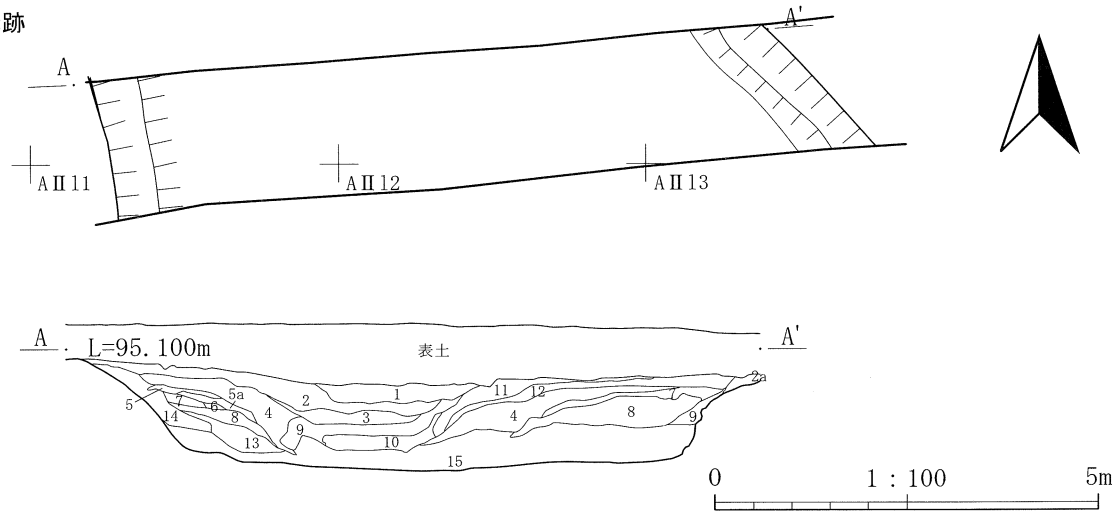

1号溝跡
A
A'
B I i15
A
L=95.700m
A'
表土
2
1
1号溝跡Ａ－Ａ´
1　10YR2/1 黒色シルト 粘性中 締まり中
2　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性やや強　締まりやや密
2号溝跡
A
A I s23
B
A'
B'
A
L=95.300m
A'
表土
1
B
B'
L=95.300m
1
C
C'
L=95.300m
1
C
C'
2号溝跡Ａ－Ａ´・Ｂ－Ｂ´・Ｃ－Ｃ´
1　10YR2/2 黒褐色シルト 粘性中 締まりやや密 黄褐色土粒(径1～5mm)3%含む
0
1：50
2m

第42図　1・2号溝跡


3号溝跡
AIVp15
AIVp16
A'
B
B'
A
表土
A
L=92.800m
A'
1
B
L=92.800m
B'
表土
1
3号溝跡A－A′・B－B′
1　10YR2/2 黒褐色砂質シルト 粘性中 締まり中 ※土器片少量出土
0
1：50
2m
4号溝跡
BIVb16
A
A'
A
L=93.000m
A'
1
2
BIVd16
BIVd17
4号溝跡A－A′
1　10YR3/2 黒褐色シルト 粘性中 締まり密
黄褐色粘土ブロック(径5～20mm)5%混入
2　10YR3/2 黒褐色シルト 粘性中 締まり密
黄褐色粘土ブロック(径10～50mm)2%混入
0
1：50
2m
断面図
BIVf16
BIVf17
0
1：100
5m
平面図

第43図　3・4号溝跡

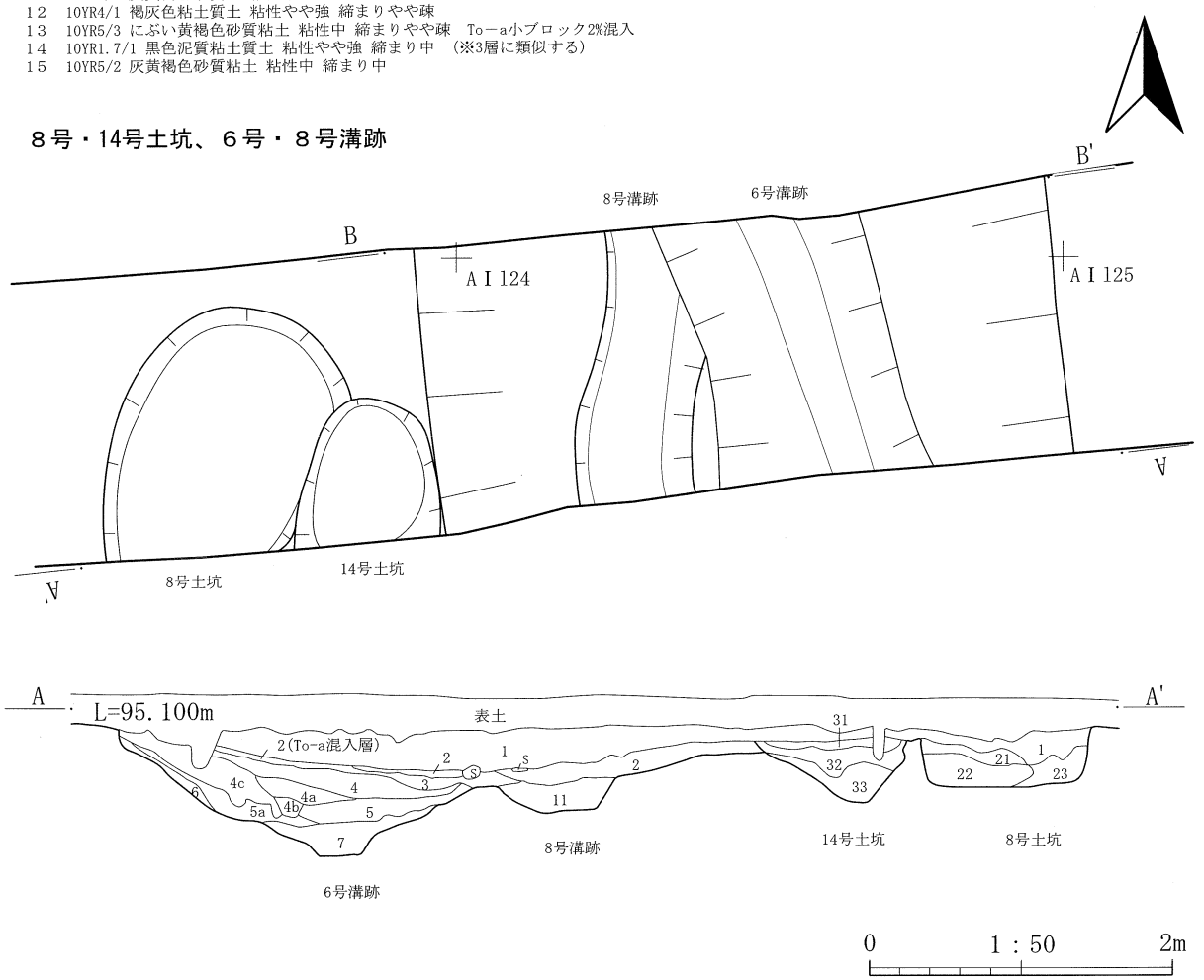
５号溝跡



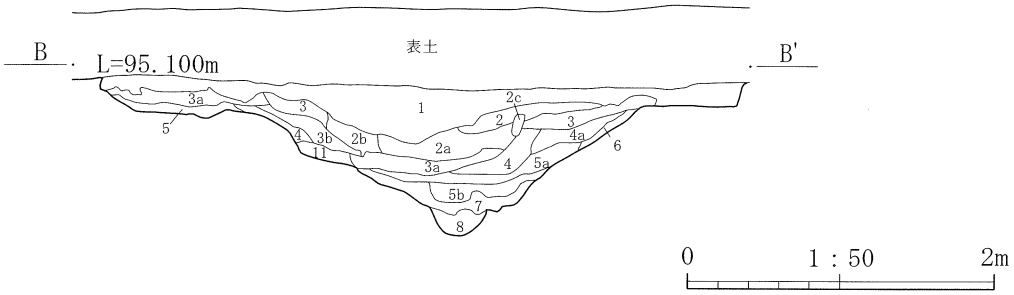
５号溝跡Ａ－Ａ´

1　10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや強 締まり中
2　2.5Y4/1 黄灰色粘土質砂質土 粘性やや強 締まり中 にぶい黄橙色砂質土15%・黄褐色粘土ブロック(径10～50mm) 10%・酸化鉄の集積15%混入
2a　10YR3/3 暗褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや密 黄褐色粘土10%混入
3　10YR1.7/1 黒色泥質粘土質土 粘性やや強 締まりやや疎 黄褐色粘土ブロック(径10～50mm)10%混入
4　10YR5/2 灰黄褐色砂質粘土 粘性やや強 締まりやや疎
5　10YR5/3 にぶい黄橙褐色砂質粘土 粘性やや強 締まりやや疎
5a　10YR5/3 にぶい黄橙褐色粘土 粘性強 締まりやや疎
6　10YR6/3 にぶい黄橙色砂質粘土 粘性中 締まりやや疎
7　10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質土 粘性中 締まり中
8　10YR7/2～7/3 にぶい黄橙色テフラ 粘性やや弱 締まりやや疎(※パウダー状のTo－a)
9　10YR4/1 褐灰色粘土質砂質土 粘性やや強 締まりやや疎 黒色泥炭土層20%混入
10　10YR4/1褐灰砂質土 粘性弱 締まりやや疎 黒色泥炭土層状に7%混入
11　10YR5/2 灰黄褐色砂質土 粘性中 締まりやや疎
12　10YR4/1 褐灰色粘土質土 粘性やや強 締まりやや疎
13　10YR5/3 にぶい黄褐色砂質粘土 粘性中 締まりやや疎　To－a小ブロック2%混入
14　10YR1.7/1 黒色泥質粘土質土 粘性やや強 締まり中　(※3層に類似する)
15　10YR5/2 灰黄褐色砂質粘土 粘性中 締まり中

８号・14号土坑、６号・８号溝跡



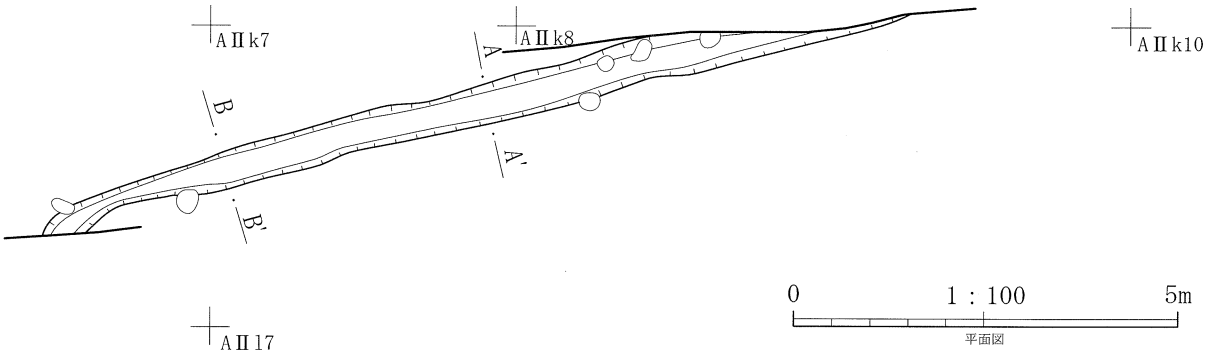
第44図　５号溝跡、８・14号土坑①、６・８号溝跡①

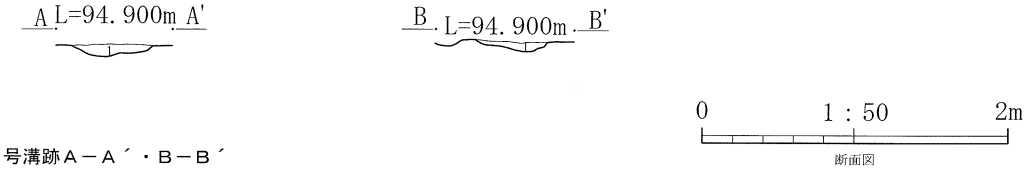


８号土坑・14号土坑・６号溝跡・８号溝跡Ａ－Ａ´・Ｂ－Ｂ´

1　10YR2/1 黒色シルト 粘性やや強 締まりやや密
2　10YR4/4 褐色粘土質シルト 粘性中 締まり中 にぶい黄橙色To－a10%混入
2a　10YR6/2 灰黄褐色砂質土 粘性やや弱 締まりやや疎　To－a1%以上・黒褐色シルト質粘土3%混入
2b　10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土 粘性やや弱 締まりやや疎　To－a1%未満混入
2c　10YR6/2 灰黄褐色砂質土 粘性やや弱 締まりやや疎　To－a1%未満混入
3　10YR3/3 暗褐色砂質シルト 粘性中 締まり中
3a　10YR4/1 褐灰色泥質砂質土 粘性やや強 締まり中
3b　10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4　10YR4/4 褐色砂質土 粘性やや弱 締まりやや疎 にぶい黄褐色砂質土15%混入
4a　10YR4/4 褐色砂質土 粘性やや弱 締まりやや疎
4b　10YR3/4 暗褐色粘土質土　粘性やや強　締まり中　(※やや湿っぽい)
4c　10YR4/4 褐色粘土質砂質土　粘性やや強　締まり中
5　10YR4/2 灰黄褐色砂質土 粘性中 締まりやや疎　(※31層とした8号溝跡埋土に類似する)
5a　10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土 粘性やや強 締まりやや疎
5b　10YR5/2 灰黄褐色砂質土 粘性やや強 締まりやや疎
6　10YR3/2 黒褐色泥質粘土質土 粘性やや強 締まりやや疎
7　10YR2/3 黒褐色粘土質土 粘性やや強 締まり中 黄褐色粘土30%混入
8　10YR5/8 黄褐色粘土　粘性強 締まりやや密 にぶい黄褐色砂質土10%混入
11　10YR4/2 灰黄褐色砂質土 粘性中 締まりやや疎　(８号溝跡埋土)
21　10YR2/2 黒褐色シルト質粘土 粘性強 締まりやや密 黄褐色粘土10%混入　(8号土坑埋土)
22　10YR2/1 黒色シルト 粘性やや強 締まり中　(8号土坑埋土)
23　10YR1.7/1 黒色シルト 粘性やや強 締まりやや密 黄褐色粘土7%混入　(8号土坑埋土)
31　10YR3/4　暗褐色シルト 粘性強 締まりやや密　(14号土坑埋土)
32　10YR2/1 黒色シルト質粘土 粘性やや強 締まり中　(14号土坑埋土)
33　10YR4/6 褐色粘土質土 粘性強 締まりやや密 黒褐色シルト5%混入　(14号土坑埋土)

7号溝跡



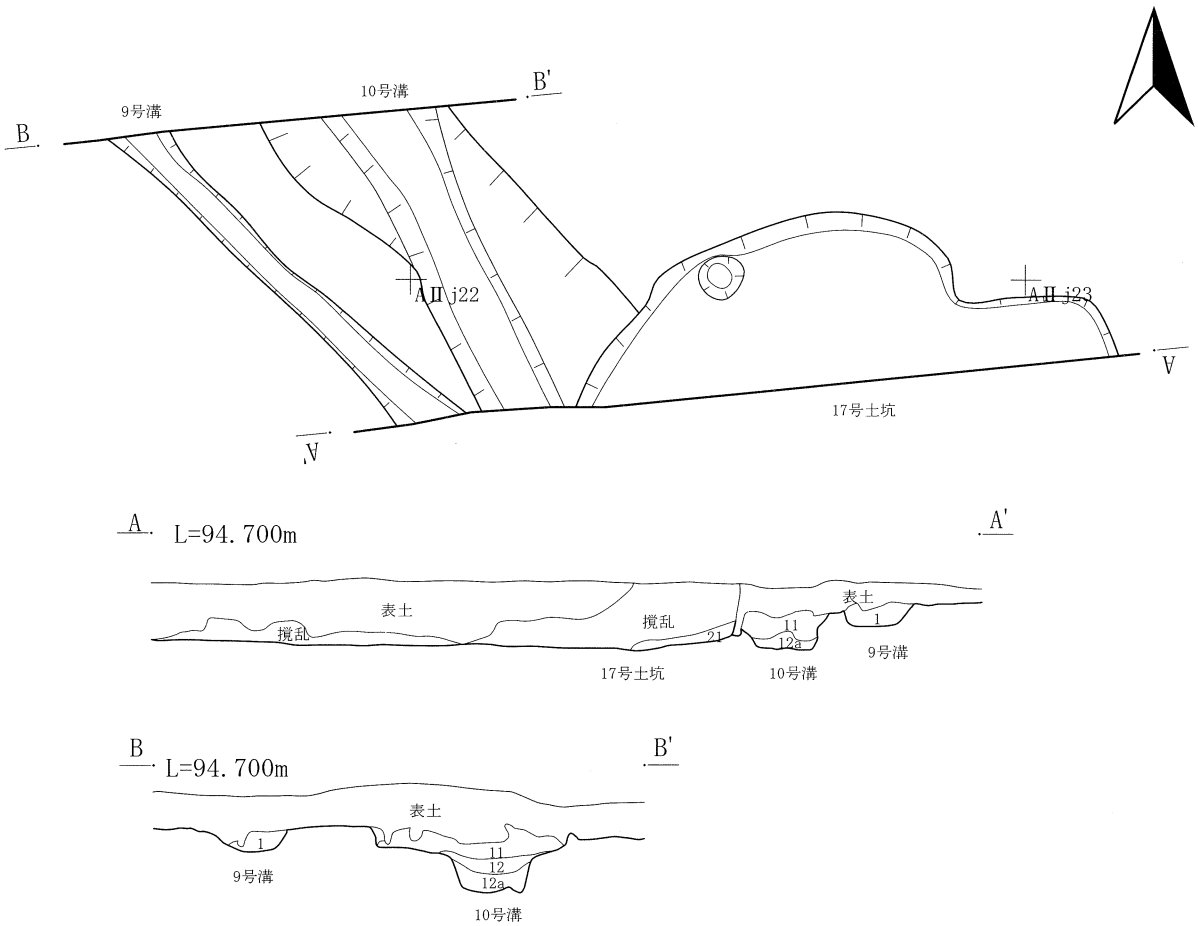


７号溝跡Ａ－Ａ´・Ｂ－Ｂ´

1　10YR3/2 黒褐色シルト質粘土 粘性やや強 締まりやや密 黄褐色粘土粒3%混入

第45図　８・14号土坑②、６・８号溝跡②、７号溝跡

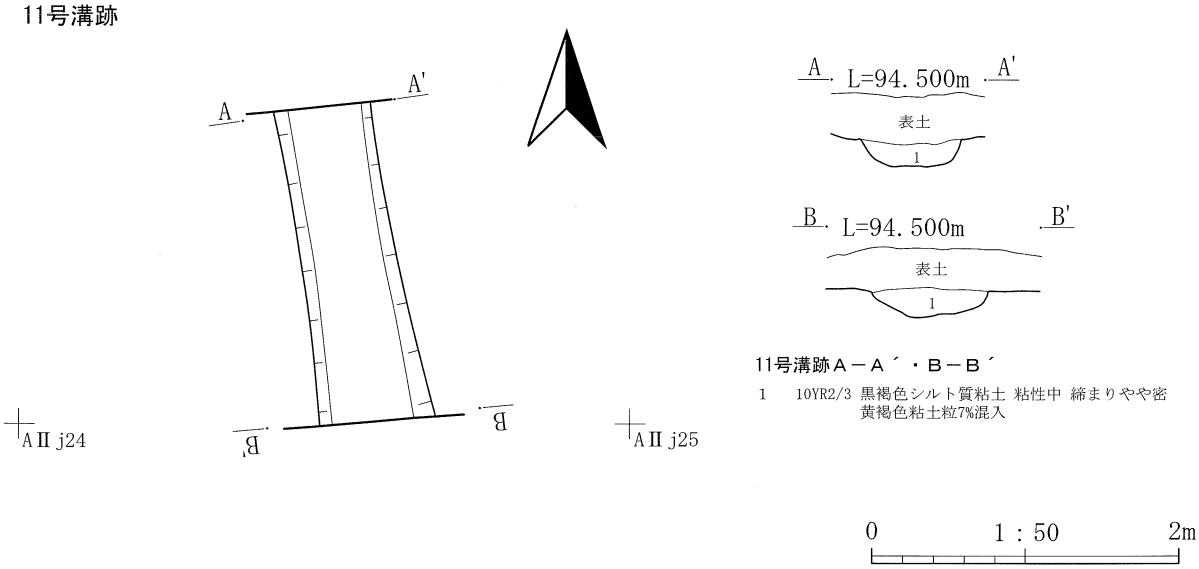
17号土坑、9・10号溝跡



17号土坑・９号溝跡・10号溝跡Ａ－Ａ´・Ｂ－Ｂ´

1	10YR3/2	黒褐色シルト質粘土 粘性中 締まり密 黄褐色粘土粒3%混入（９号溝）
11	10YR2/2	黒褐色シルト質粘土 粘性中 締まりやや密 黄褐色粘土粒5%混入（10号溝）
12	10YR2/2	黒褐色粘土質土 粘性やや強 締まり中 黄褐色粘土ブロック10%混入（10号溝）
12a	10YR2/3	黒褐色粘土質土 粘性やや強 締まり中 黄褐色粘土ブロック5%混入（10号溝）
21	10YR2/2	黒褐色粘土質土 粘性やや強 締まり中 黄褐色粘土粒5%混入（17号土坑）

11号溝跡

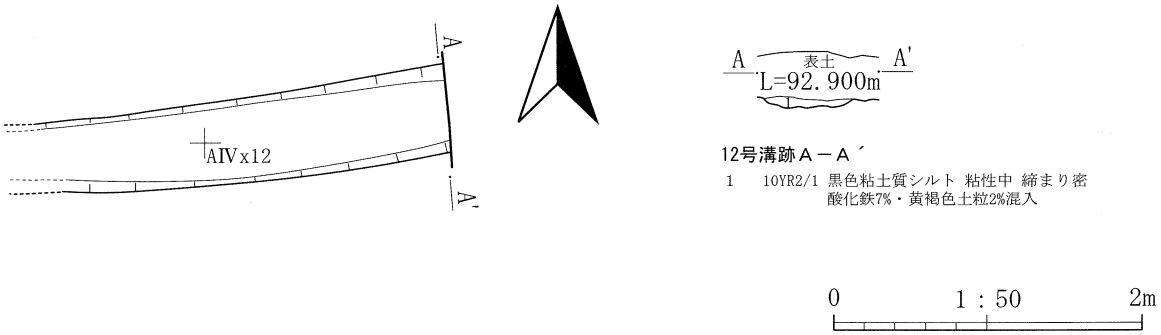


11号溝跡Ａ－Ａ´・Ｂ－Ｂ´

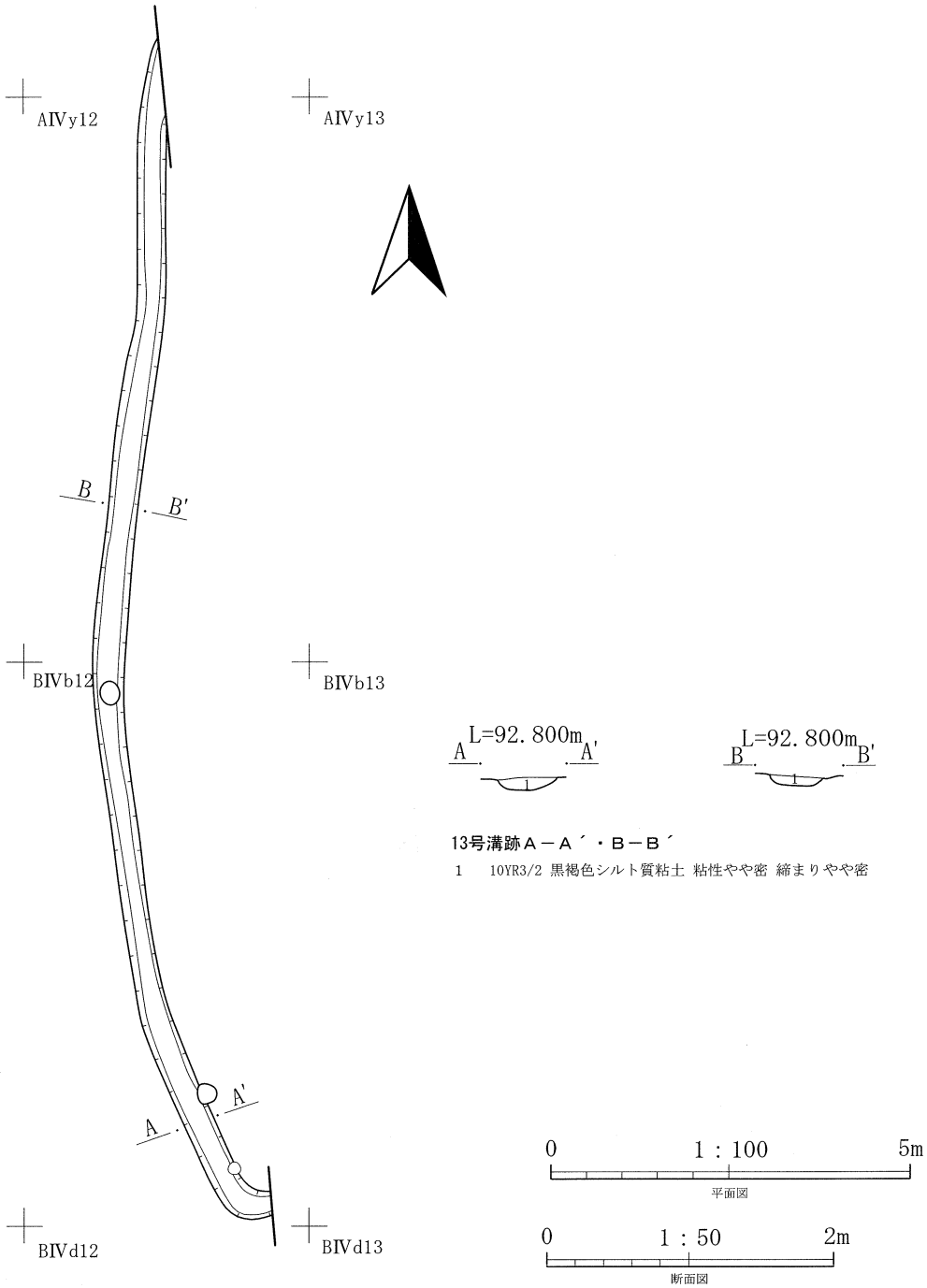
1	10YR2/3	黒褐色シルト質粘土 粘性中 締まりやや密 黄褐色粘土粒7%混入

第46図　17号土坑、９～11号溝跡

12号溝跡

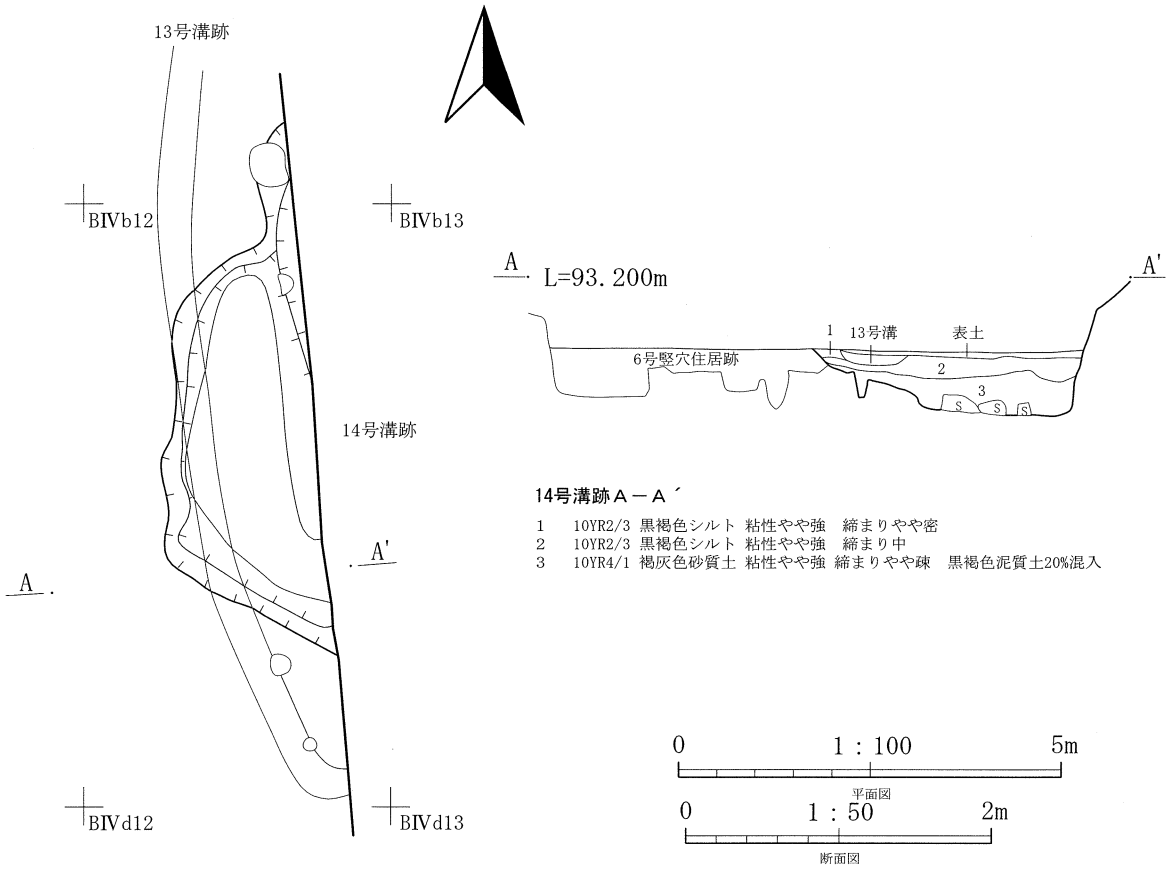


13号溝跡



第47図　12・13号溝跡

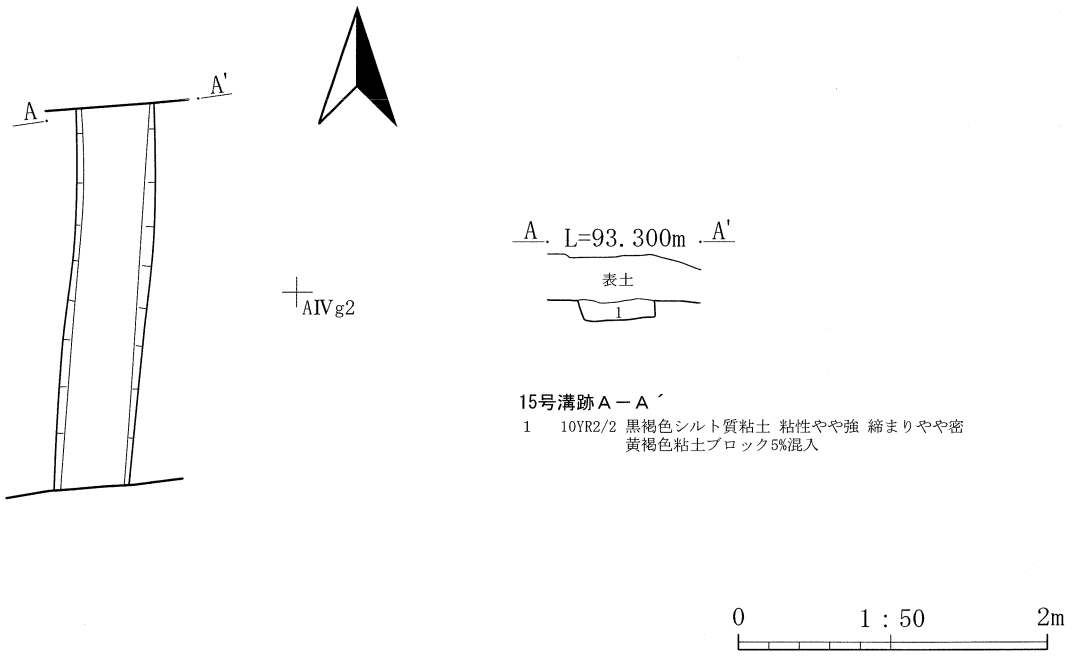
14号溝跡



14号溝跡Ａ－Ａ´

1　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性やや強　締まりやや密
2　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性やや強　締まり中
3　10YR4/1 褐灰色砂質土 粘性やや強 締まりやや疎　黒褐色泥質土20%混入

15号溝跡

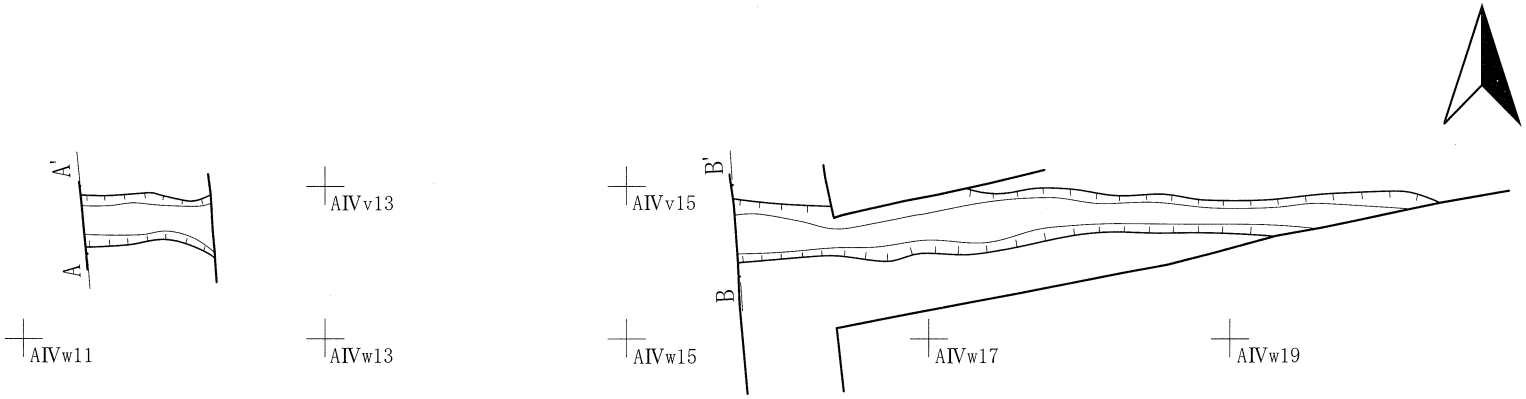


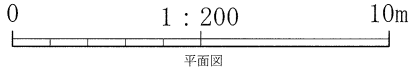
15号溝跡Ａ－Ａ´

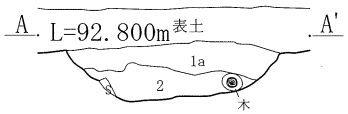
1　10YR2/2 黒褐色シルト質粘土 粘性やや強 締まりやや密
黄褐色粘土ブロック5%混入

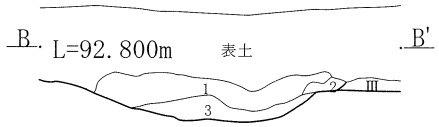
第48図　14・15号溝跡

16号溝跡



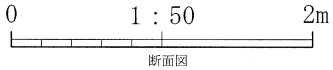






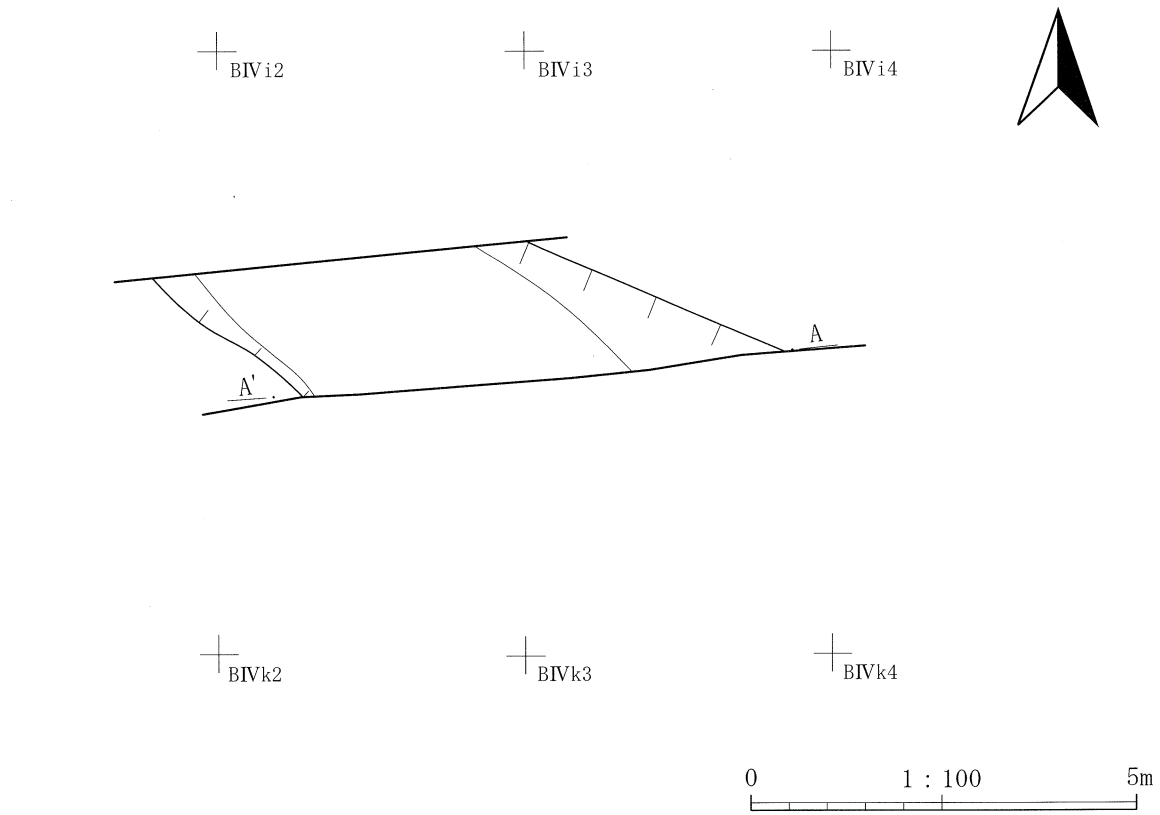
16号溝跡Ａ－Ａ´・Ｂ－Ｂ´

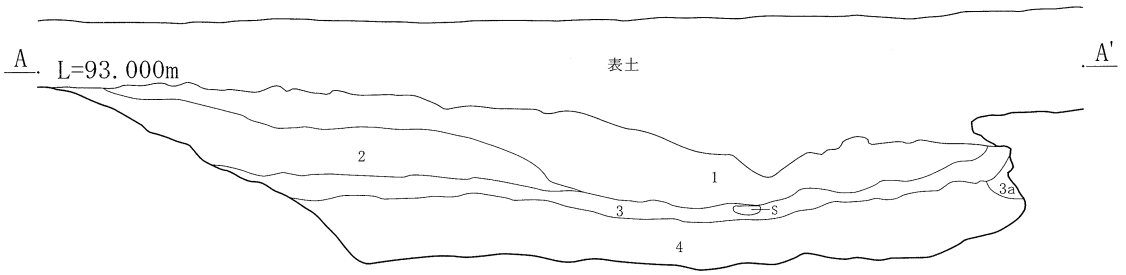
1　2.5Y4/1 黄灰色粘土質土 粘性やや強 締まり中 酸化鉄10%少量・木片少量混入
1a　5Y3/1 オリーブ黒色シルト質粘土 粘性中 締まりやや密　酸化鉄10%混入
2　10YR2/2　黒褐色シルト粘性中 締まり密 酸化鉄3%混入
3　2.5Y4/2　暗灰黄色砂質粘土質土　粘性中　締まりやや密　酸化鉄5%・木片少量混入



第49図　16号溝跡

17号溝跡





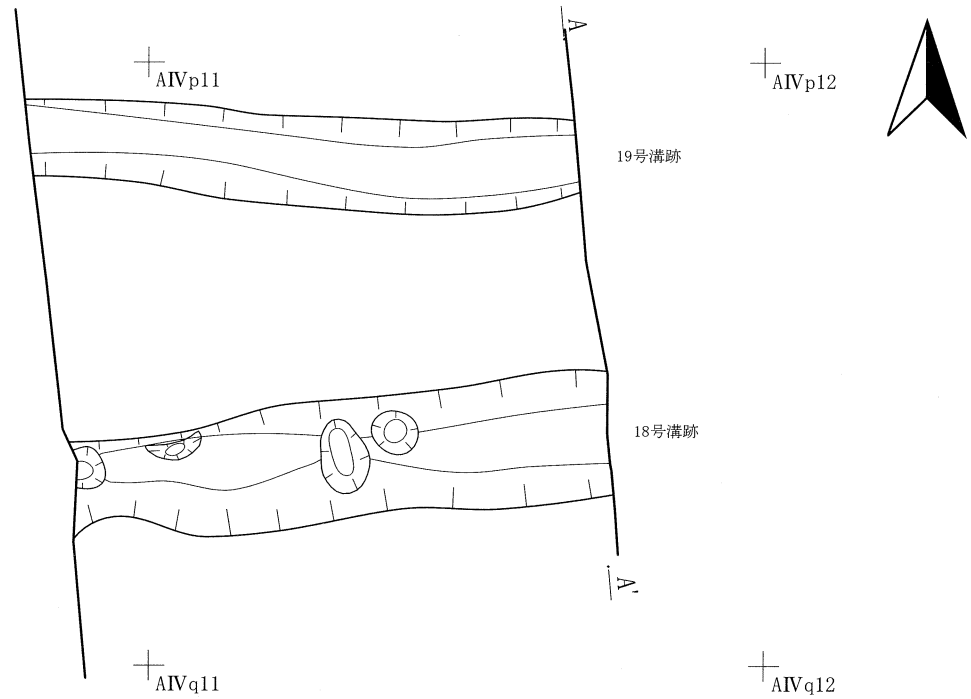
17号溝跡Ａ－Ａ´

1　10YR3/2 黒褐色シルト 粘性中 締まりやや密
2　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘土質砂質土 粘性中 締まりやや疎
3　10YR4/1 褐灰色砂質土 粘性中 締まり中
3a　10YR5/1 褐灰色砂質土 粘性中 締まり中
4　10YR5/6 黄褐色砂礫土 粘性中 締まりやや密　(※地山)

0　1：50　2m

第50図　17号溝跡

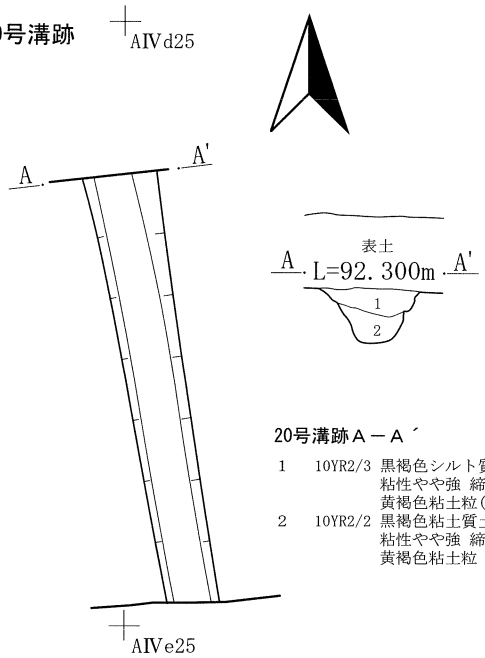
18・19号溝跡



18号溝跡・19号溝跡Ａ－Ａ´

1　10YR2/3 黒褐色砂質粘土質土 粘性中 締まり中 酸化物3%混入（18号溝）
11　10YR2/1 黒褐色粘土質土 粘性やや強 締まりやや密 黄褐色粘土ブロック5%混入（19号溝）

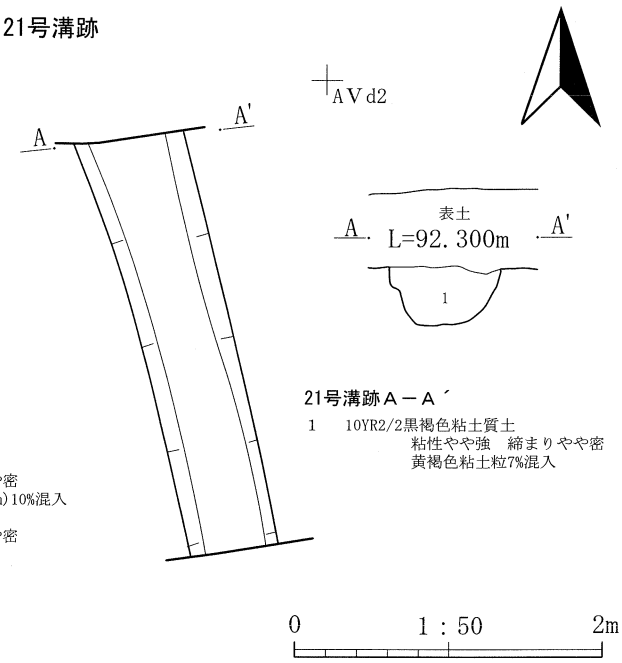
20号溝跡



20号溝跡Ａ－Ａ´

1　10YR2/3 黒褐色シルト質粘土
粘性やや強 締まりやや密
黄褐色粘土粒(径1～5mm)10%混入
2　10YR2/2 黒褐色粘土質土
粘性やや強 締まりやや密
黄褐色粘土粒　3%混入

21号溝跡

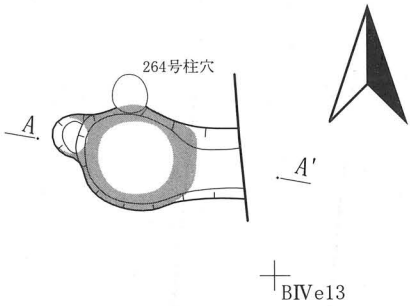


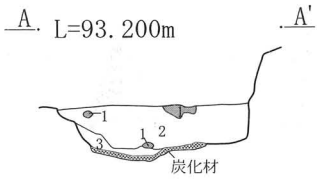
21号溝跡Ａ－Ａ´

1　10YR2/2黒褐色粘土質土
粘性やや強　締まりやや密
黄褐色粘土粒7%混入

第51図　18～21号溝跡

2号焼土遺構

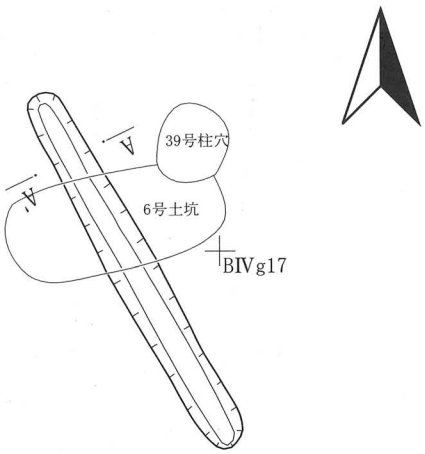


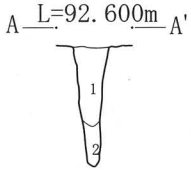


２号焼土遺構Ａ－Ａ´

1　10YR5/8 明赤褐色焼土 粘性やや弱 締まり密
2　10YR2/3 暗褐色シルト 粘性やや強 締まり密
　　黄褐色粘土30%混入
　　（※人為層で合わせて意図的な整地層と思われる）
3　5YR4/8 赤褐色焼土 粘性やや強 締まりやや密

1号陥し穴状遺構

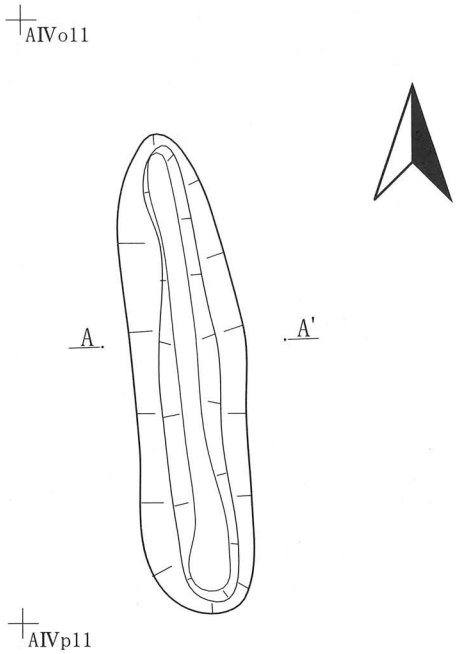


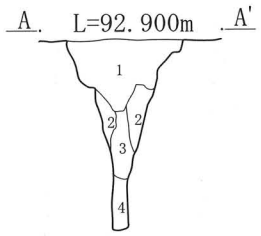


１号陥し穴Ａ－Ａ´

1　10YR2/1 黒色シルト 粘性中 締まりやや密
2　10YR5/8 黄褐色粘土 粘性強 締まりやや疎

2号陥し穴状遺構





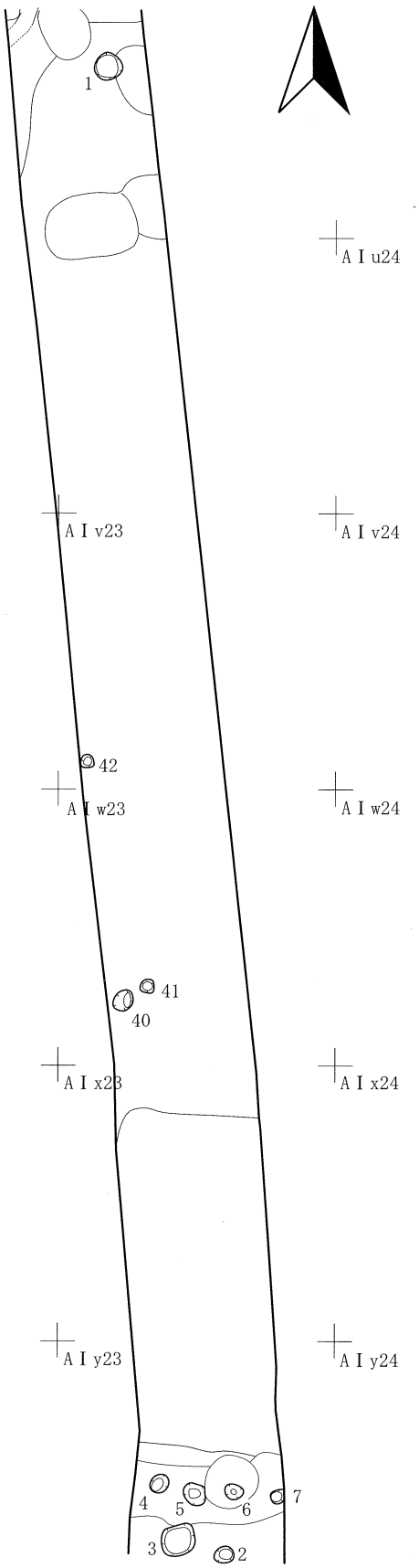
２号陥し穴Ａ－Ａ´

1　10YR2/1 黒色シルト 粘性中 締まり密
2　10YR6/6 明黄褐色粘土 粘性やや強 締まり密　（地山壁崩壊土）
3　10YR2/1 黒色シルト 粘性中 締まり密 暗黄褐色粘土30%混入
4　10YR6/6 明黄褐色粘土 粘性やや強 締まり密　（地山壁崩壊土）

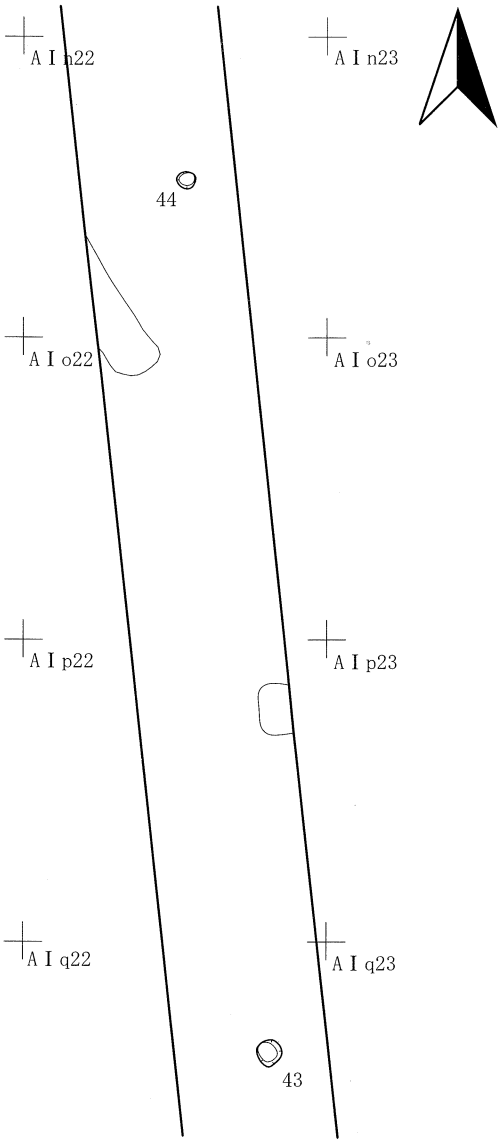
0　1：50　2m

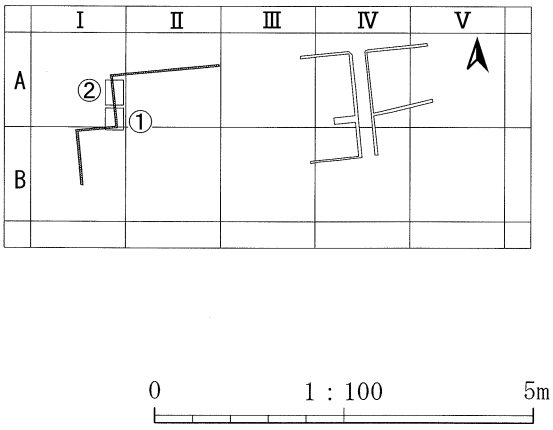
第52図　２号焼土遺構、１・２号陥し穴状遺構

西部柱穴群①



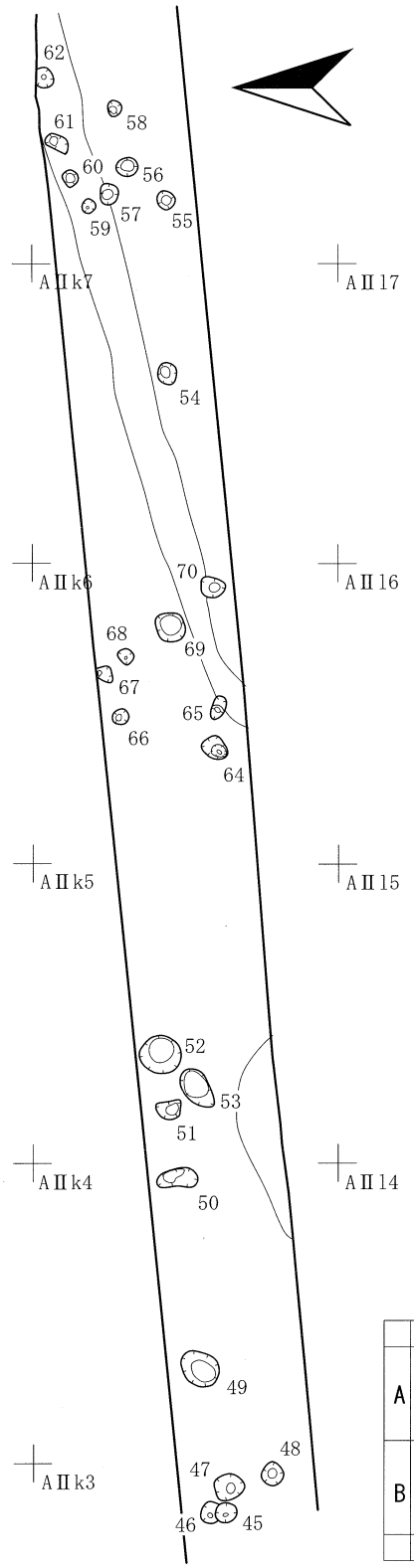
西部柱穴群②



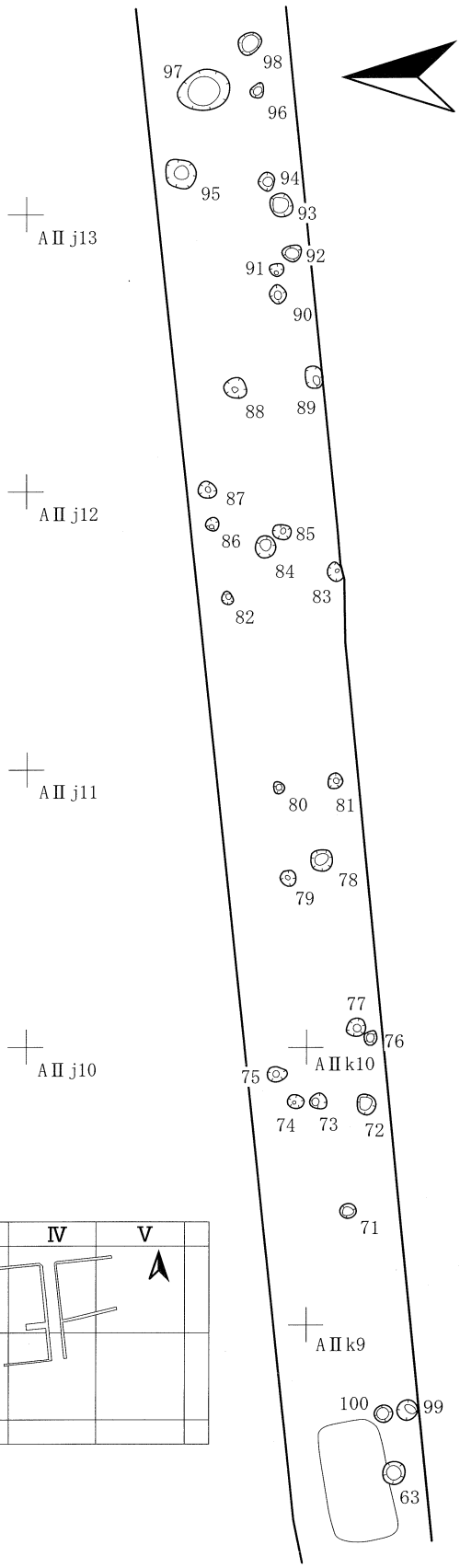


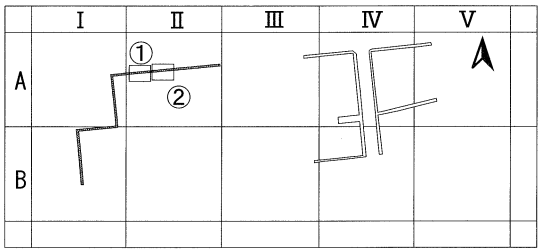
第53図　調査区西部柱穴群①・②

北部柱穴群①



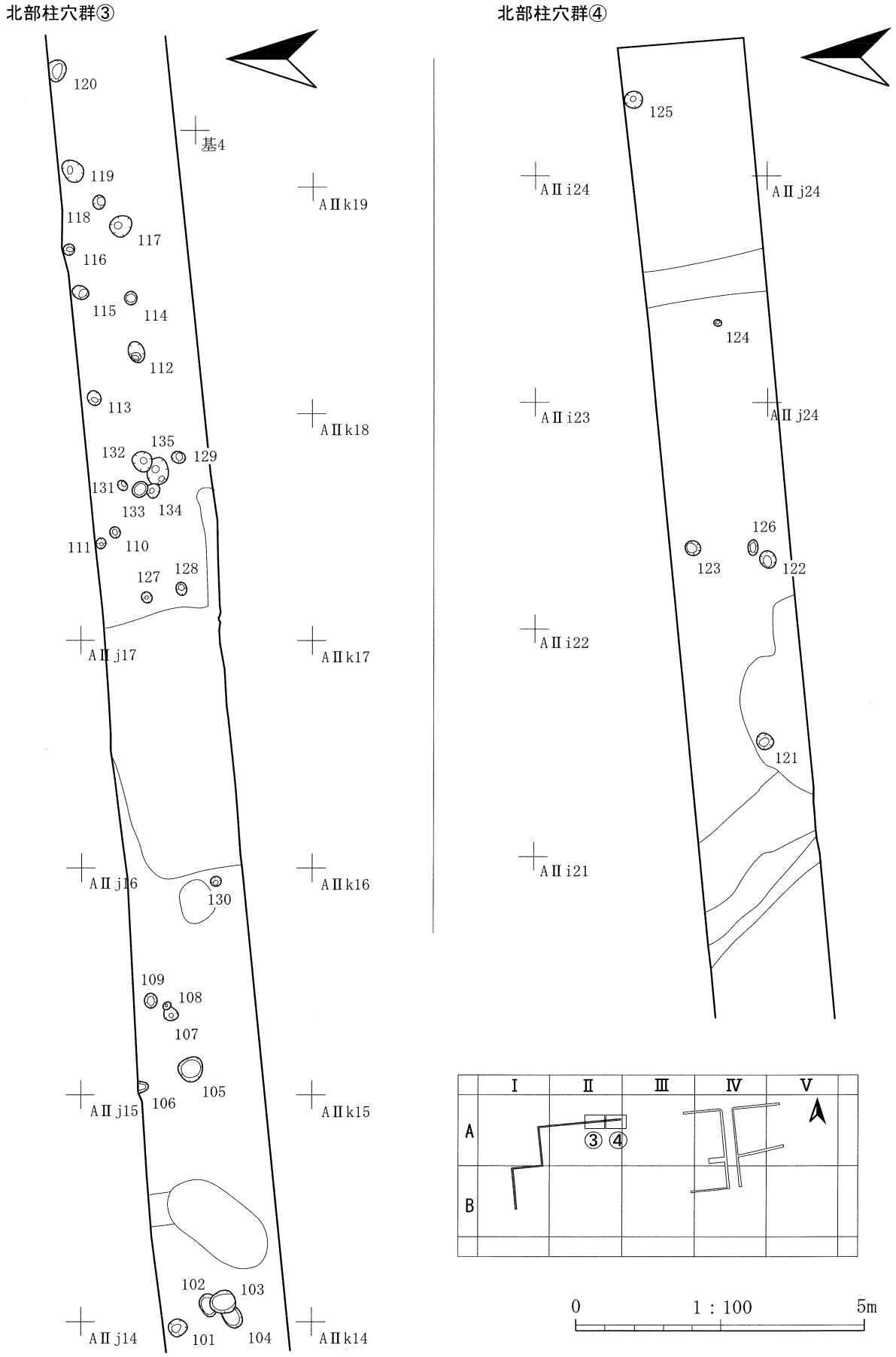
北部柱穴群②





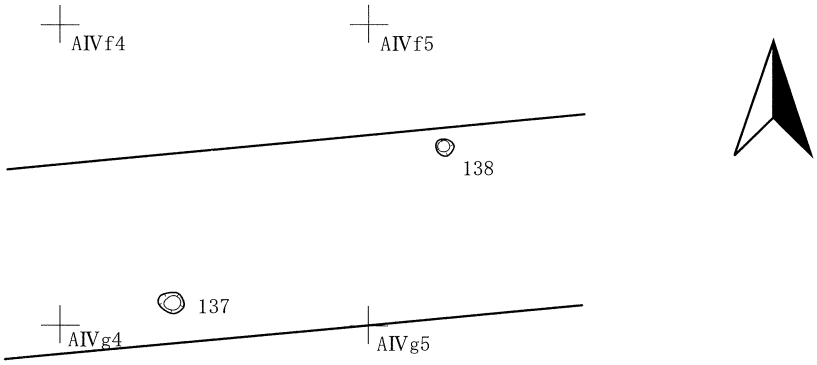
0　1：100　5m

第54図　調査区北部柱穴群①・②

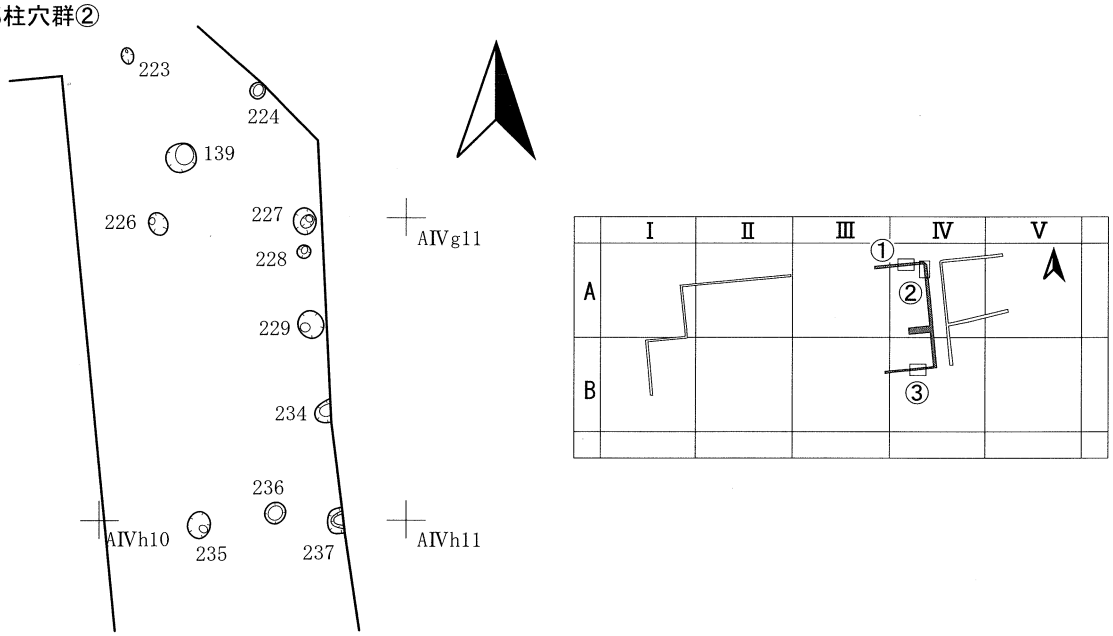


第55図　調査区北部柱穴群③・④

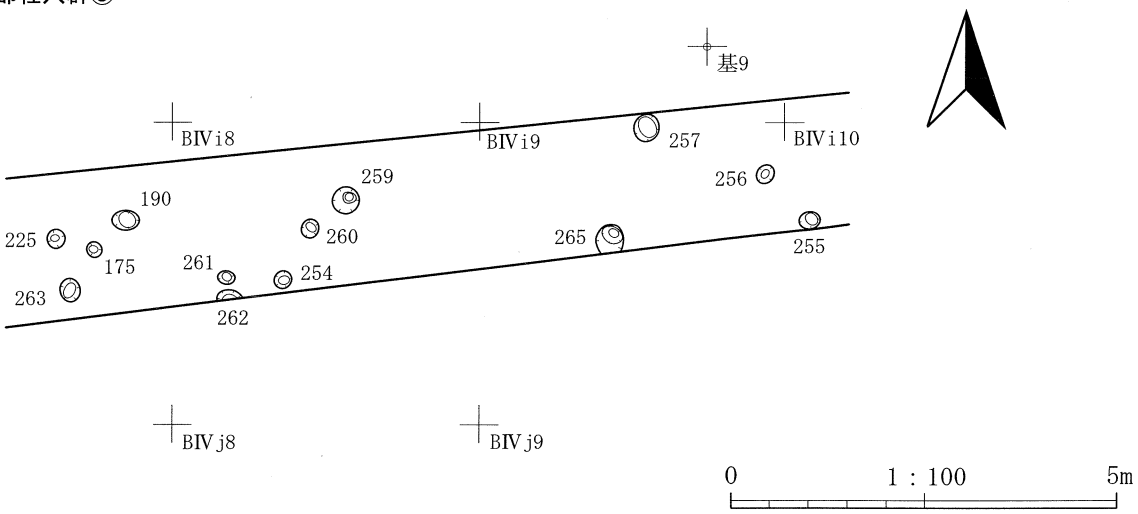
中央部柱穴群①



中央部柱穴群②

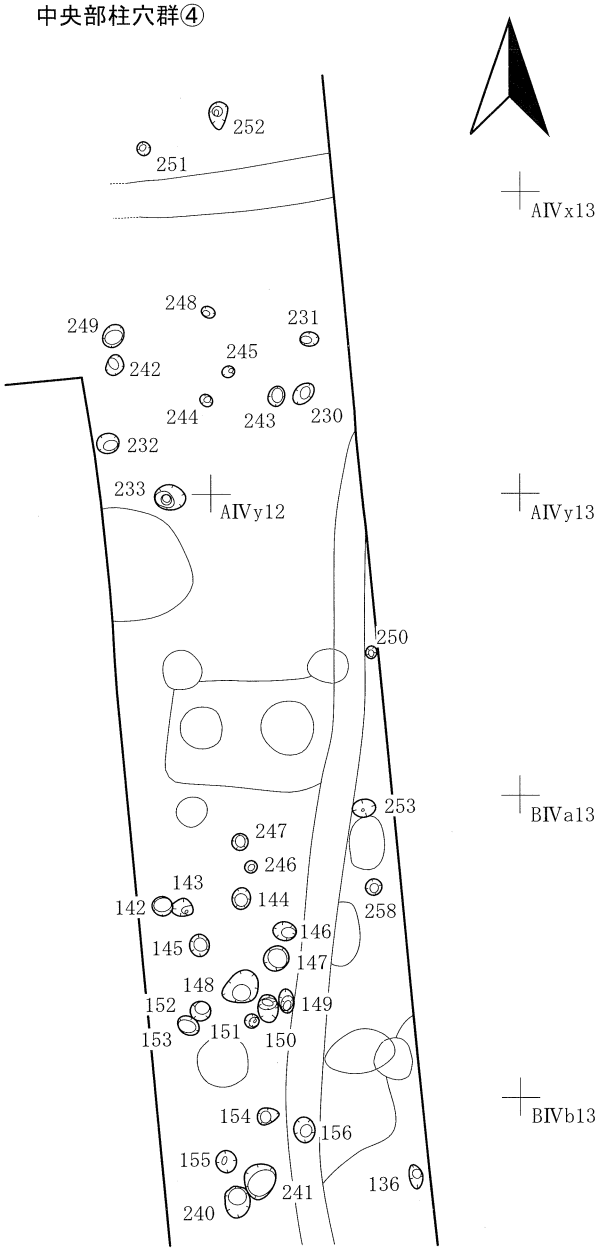


中央部柱穴群③

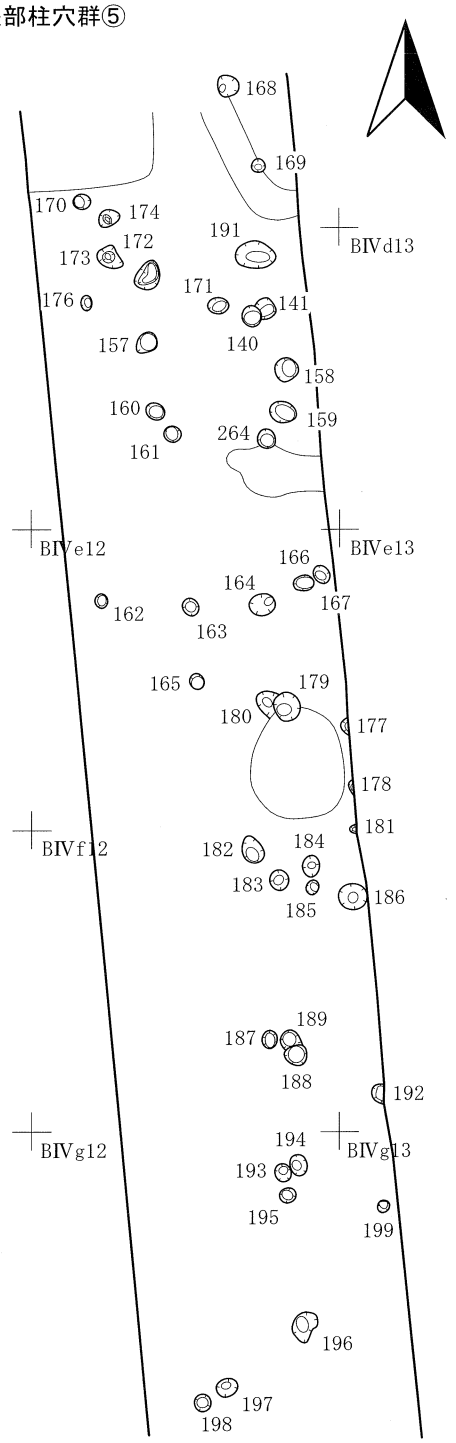


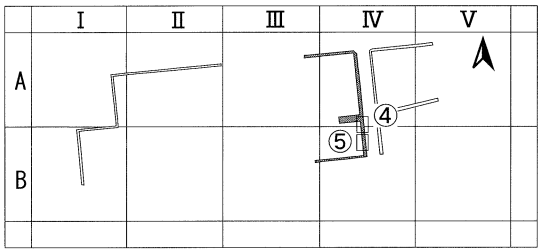
第56図　調査区中央部柱穴群①・②・③

中央部柱穴群④



中央部柱穴群⑤

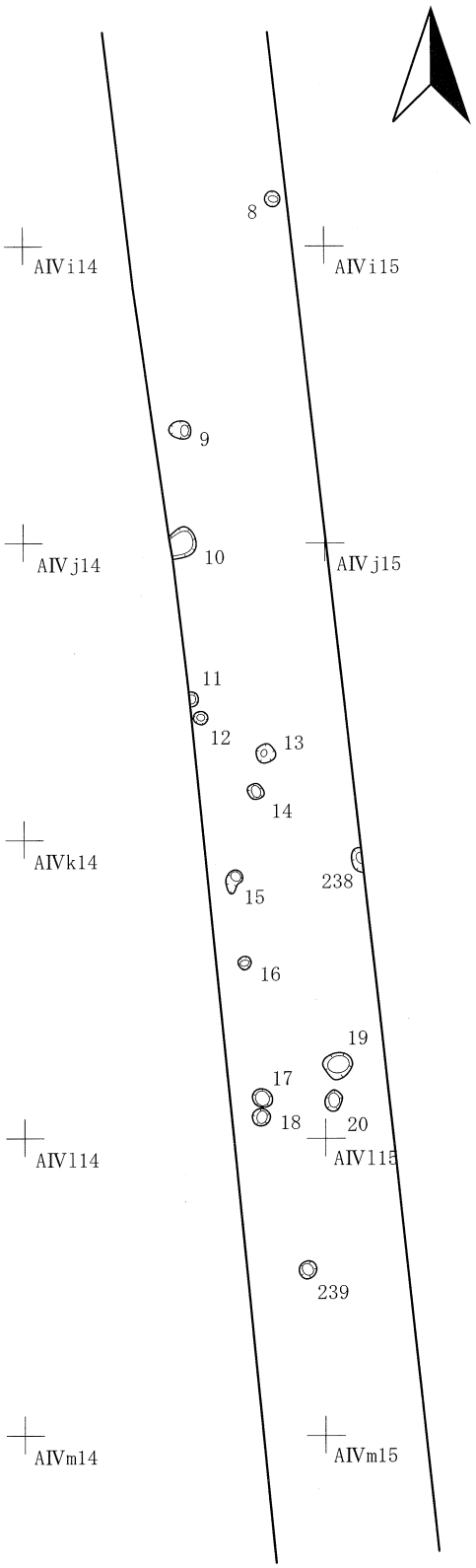




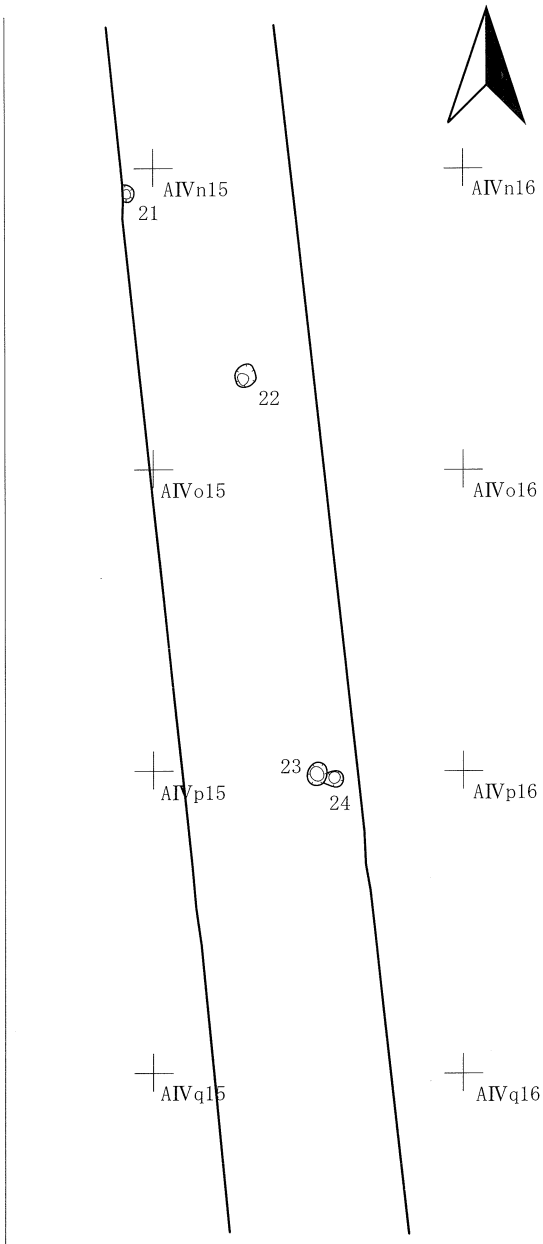
0　1：100　5m

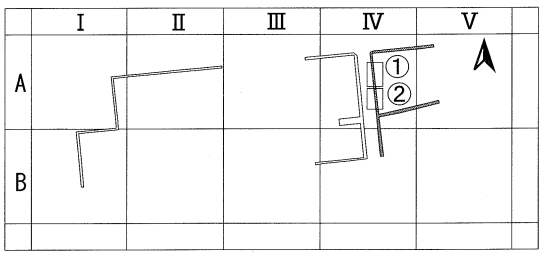
第57図　調査区中央部柱穴群④・⑤

東部柱穴群①



東部柱穴群②

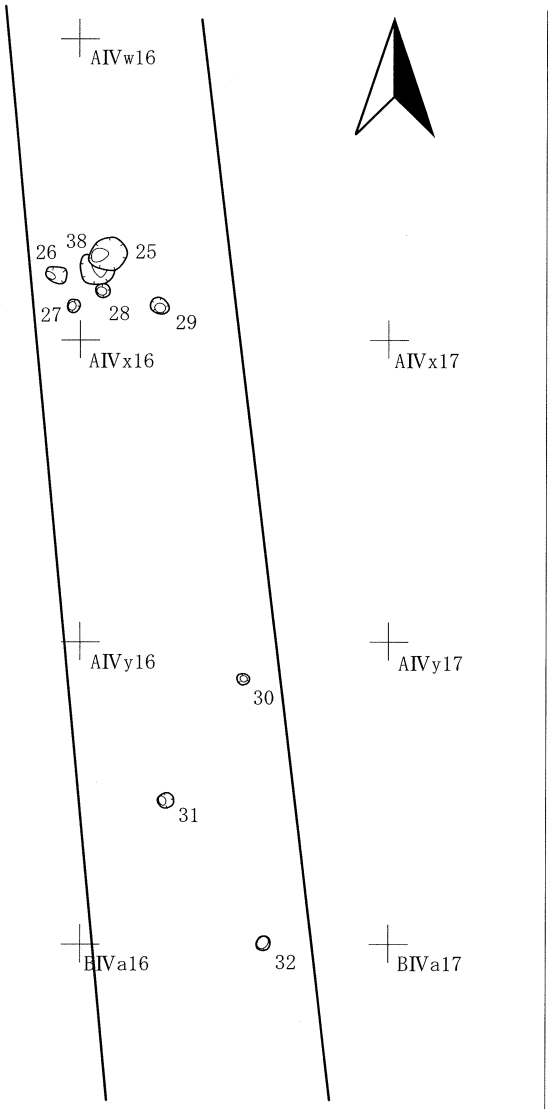




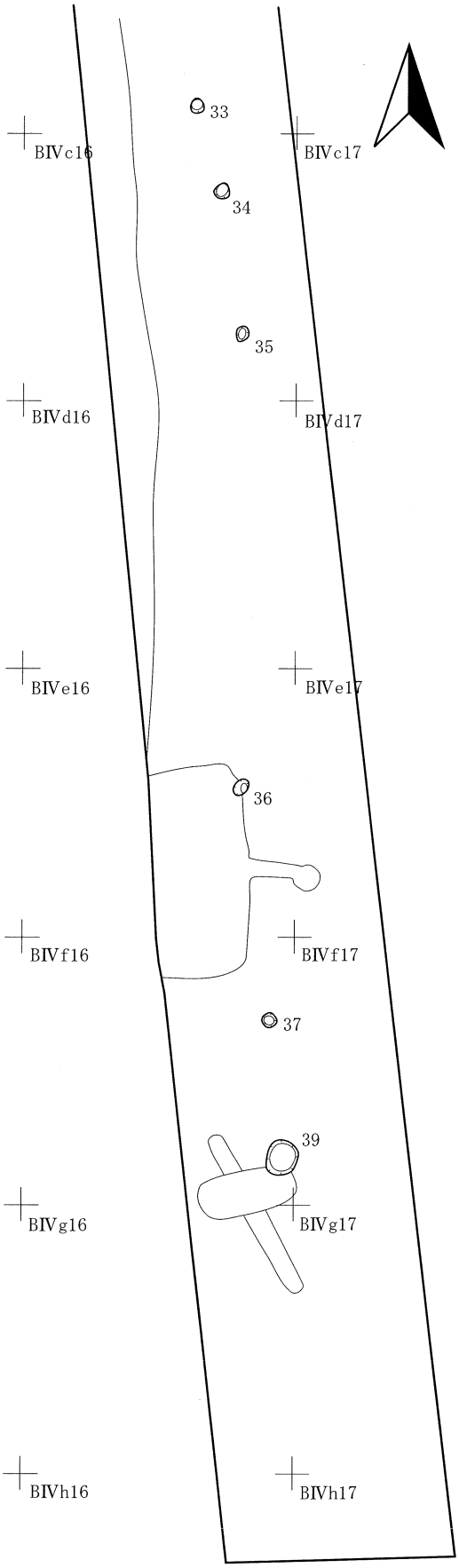
0　1：100　5m

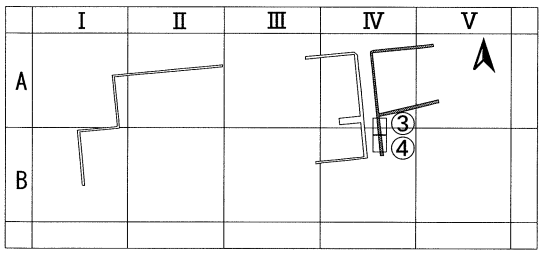
第58図　調査区東部柱穴群①・②

東部柱穴群③



東部柱穴群④



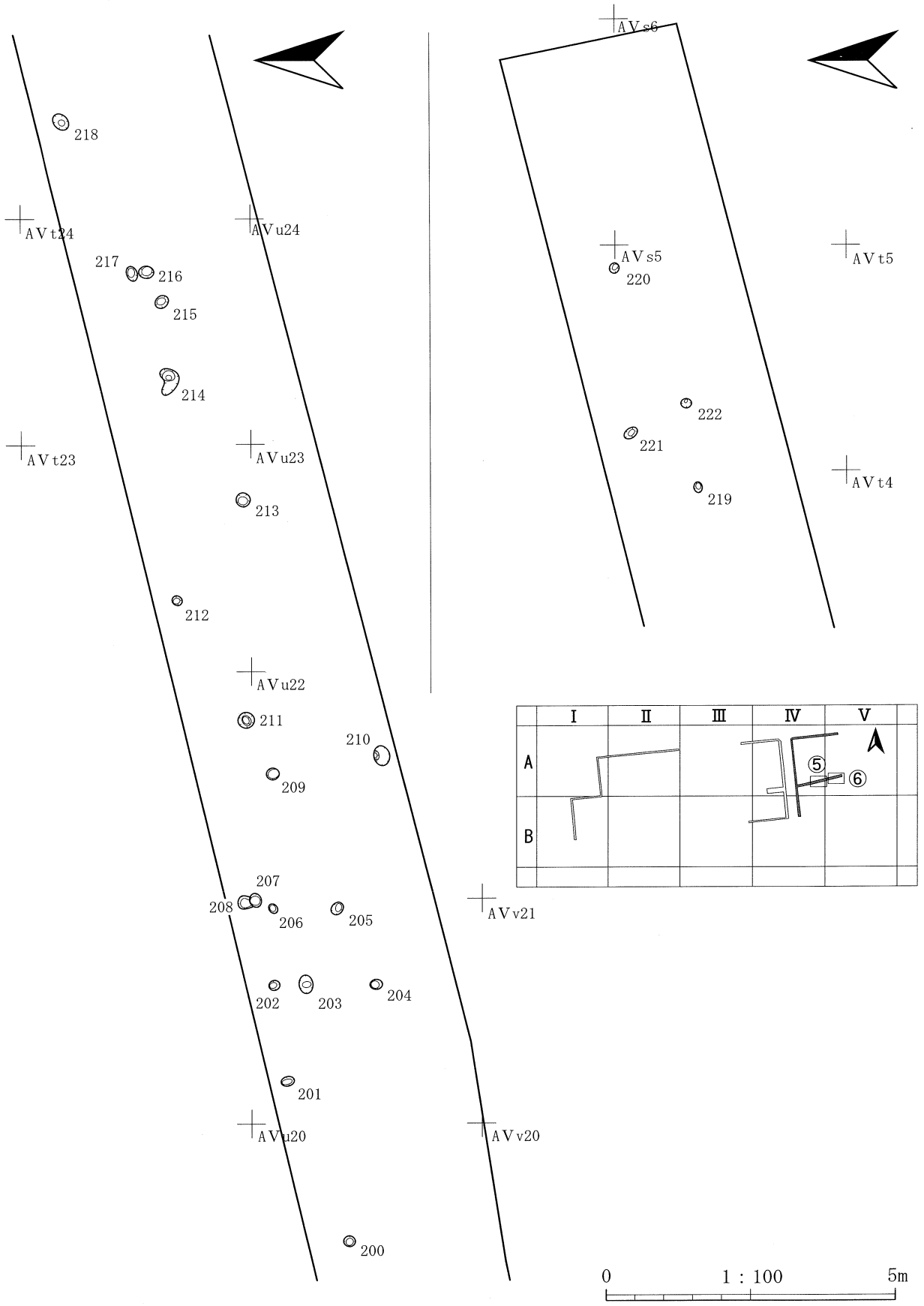


0　1：100　5m

第59図　調査区東部柱穴群③・④

東部柱穴群⑤

東部柱穴群⑥



第60図　調査区東部柱穴群⑤・⑥

第17表　竪穴住居跡観察表

図版番号	写図番号	遺構名	時期	位置	グリッド	規模(m)	壁高(cm)	埋土の堆積状況	カマド	柱穴数(個)	付属施設	重複・その他
29・30	14	1号竪穴住居跡	9～10世紀	西部	BⅠf13	6.0	30	自然	—	8	土坑7	1号土坑に切られる、十和田a火山灰
30	15	2号竪穴住居跡	9世紀後半～10世紀	西部	AⅠx23	4.9	15	自然	—	5	壁溝1	焼失住居
31	16・17	3号竪穴住居跡	9世紀後半～10世紀前半	東部	BⅣe16	3.1	35	自然	東壁際	2	土坑3	4号溝に切られる
32	17	4号竪穴住居跡	9世紀後半～10世紀前半	西部	AⅠt22	不明	15～22	自然？	—	1	なし	2号溝跡、1号焼土遺構、5号土坑に切られる
33・34	18	5号竪穴住居跡	9世紀後半～10世紀前半	北部	AⅡj17	4.6	22～28	自然	東壁	5	土坑3	
34・35・36	19・20	6号竪穴住居跡	9世紀後半～10世紀前半	中央部	BⅣb11	5.4	10～16	自然	東壁	16	土坑5	13・14号溝に切られる、十和田a火山灰
36	21	7号竪穴住居跡	9世紀後半～10世紀	中央部	BⅣh10	6.3	10～15	人為？	東壁際	4	土坑3・壁溝1	
37	22	8号竪穴住居跡	9世紀後半～10世紀前半	中央部	BⅣi10	5.0強	5～10	人為	—	4	土坑1・壁溝1	

第18表　竪穴状遺構観察表

図版番号	写図番号	遺構名	時期	位置	グリッド	平面形	規模(長辺)m	規模(短辺)m	壁高(cm)	埋土の堆積状況	重複・その他
37	22	1号竪穴状遺構	古代	中央部	AⅣi10	長方形	3.0以上	2.2	12～30	自然	

第19表　掘立柱建物跡観察表

図版番号	写図番号	遺構名	時期	位置	グリッド	規模(桁行)m	規模(梁間)m	柱穴数(個)	付属施設	重複・その他
38・39	23・24	1号掘立柱建物跡	9世紀後半～10世紀前半	中央部	AⅣy11	5.3	2.1	6	土坑1	13号溝跡、21号土坑に切られる

第20表　土坑観察表

図版番号	写図番号	遺構名	時期	位置	グリッド	平面形	開口部径(cm)	深さ(cm)	埋土の堆積状況	付属施設	重複・その他
39	24	1号土坑	9世紀後半～10世紀前半	西部	BⅠf13	不整円形	225×100	60	自然	なし	1号竪穴住居跡を切る
40	24・25	2号土坑	9世紀後半～10世紀前半	西部	AⅠt22	楕円形	265×84	35～40	自然？	なし	10号土坑を切る
32	25	3号土坑	9世紀後半～10世紀前半	西部	AⅠt23	楕円形	100×？	18	人為	なし	1号柱穴状土坑に切られる
32	25	4号土坑	9世紀後半～10世紀	西部	AⅠt23	楕円形	100×？	25	自然？	なし	5号土坑を切る
32	25	5号土坑	9世紀後半～10世紀前半	西部	AⅠt23	楕円形	92×？	32	人為	なし	4号土坑に切られる
40	26	6号土坑	9世紀後半～10世紀	東部	BⅣf16	長楕円形	145×65	16	自然？	なし	1号陥し穴状遺構を切る
40		7号土坑	9世紀後半～10世紀	中央部	BⅣa12	楕円形	82×？	10	自然？	なし	13号溝跡に切られる
45・46	26	8号土坑	9世紀後半～10世紀	北部	AⅠl25	楕円形	165以上×140	25	自然？	なし	14号土坑に切られる
40	26	9号土坑	9世紀後半～10世紀	西部	AⅠn22	長楕円形	200×60	26	自然	なし	
40	24・25	10号土坑	9世紀後半～10世紀前半	西部	AⅠt23	楕円形？	190×？	30～38	上位自然？下位人為	なし	2号土坑に切られる
41	26	11号土坑	古代	西部	AⅠp23	方形基調	65×？	13～17	人為？	なし	
41	26	12号土坑	9世紀後半～10世紀前半	北部	AⅡk4	不整形	270×？	37	人為？	なし	
41	27	13号土坑	9世紀後半～10世紀前半	北部	AⅡk9	長方形	172×90	50	自然？	なし	炭窯
45・46	27	14号土坑	9世紀後半～10世紀前半	北部	AⅠl23	楕円形	92以上×80	42	自然	なし	8号土坑を切る
41	27	15号土坑	9世紀後半～10世紀前半	西部	AⅠl22	不整形	280以上×75以上	20～25	自然	副穴1	
41	28	16号土坑	古代	北部	AⅡj15	長楕円形	200×98	48	自然	溝状の張り出し	
47	28	17号土坑	古代より新しい	北部	AⅡi22	不整形	355以上×？	40	人為	なし	10号溝跡を切る、現代？
42	28	18号土坑	9世紀後半～10世紀前半	中央部	BⅣe12	楕円形	148×120	28	自然	なし	179号柱穴状土坑
42	28	19号土坑	9世紀後半～10世紀前半	北部	AⅡj16	楕円形	70×55	30	自然	なし	
42	29	20号土坑	9世紀後半～10世紀前半	中央部	AⅣy12	楕円形	146×？	32	自然？	なし	
42	28	21号土坑	9世紀後半～10世紀前半	中央部	BⅣa12	楕円形	88×54	10	人為	なし	
42	—	22号土坑	9世紀後半～10世紀前半	中央部	AⅣw12	不明	82	13	不明	なし	

第21表　溝跡観察表

図版番号	写図番号	遺構名	時期	位置	グリッド	方向	長さ(m)	幅(cm)	深さ(cm)	埋土の堆積状況	その他
43	29	1号溝跡	9世紀後半～10世紀前半	西部	BⅠh13	北東-南西	3.15以上	24～36	20	自然？	
43	29	2号溝跡	9世紀後半～10世紀前半	西部	AⅠr23	北東-南西	6以上	30～44	12～18	自然	4号竪穴住居跡を切る
44	29	3号溝跡	9世紀後半～10世紀前半	東部	AⅣp15	東－西	不明	70～88	16～25	自然？	
44	30	4号溝跡	9世紀後半～10世紀前半	東部	BⅣb16	北－南	14	不明	12～25	自然？	3号竪穴住居跡を切る
45	30	5号溝跡	9世紀後半～10世紀前半	北部	AⅡk1	北－南	不明	990	130	自然	十和田a火山灰
45・46	31	6号溝跡	9世紀後半～10世紀前半	北部	AⅠk24	北－南	不明	420	96	自然	14号土坑、8号溝跡と重複する、十和田a火山灰
46	31	7号溝跡	9世紀後半～10世紀前半	北部	AⅡk6	南西-北東	11	15～55	4～6	自然？	57・59～62・65・70号柱穴状土坑に切られる
45・46	31	8号溝跡	9世紀後半～10世紀前半	北部	AⅠk24	北－南	不明	80	20	自然	
47	31	9号溝跡	9世紀後半～10世紀前半	北部	AⅡi21	南東-北西	2.7以上	18～34	8～12	自然？	
47	31	10号溝跡	9世紀後半～10世紀前半	北部	AⅡi21	南東-北西	不明	100	25	自然？	17号土坑に切られる
47	32	11号溝跡	古代	北部	AⅡi24	南東-北西	不明	64～75	15	自然？	
48	32	12号溝跡	中世～近世	中央部	AⅣw11	西－東	2.5以上	46～60		自然	6号竪穴住居跡、14号溝跡を切る
48	32	13号溝跡	9世紀後半～10世紀前半	中央部	AⅣx12	南－北	不明	30～40		自然	13号溝跡に切られ、6号竪穴住居跡を切る
49	32	14号溝跡	9世紀後半～10世紀前半	中央部	BⅣa12	北－南	不明	200		自然？	
49	33	15号溝跡	古代	中央部	AⅣf1	南－北	不明	50		自然？	
50	33	16号溝跡	近代～現代?	中央部・東部	AⅣv11	西－東	35以上	90～200		人為？	
51	33	17号溝跡	現代	東部	BⅣi1	北西-南東	不明	370		自然	
52	34	18号溝跡	9世紀後半～10世紀前半	中央部	AⅣp10	西－東	不明	60～85		自然	
52	34	19号溝跡	9世紀後半～10世紀前半	中央部	AⅣp10	西－東	不明	48～60		自然	
52	34	20号溝跡	古代	東部	AⅣd24	南東-北西	不明	35～48		自然	
52	34	21号溝跡	古代	東部	AⅤd1	南東-北西	不明	60～70			

第22表　焼土遺構観察表

図版番号	写図番号	遺構名	時期	位置	グリッド	平面形	焼土範囲(cm)	厚さ(cm)	焼土の様相	備考
32	25・35	1号焼土遺構	9世紀後半～10世紀前半	西部	AⅠt23	楕円形	92×54	5	現地性、やや良好	4号竪穴住居跡を切る
53	35	2号焼土遺構	古代	中央部	BⅣd12	ドーナツ状	75×65	10	現地性、非常に良好	264号柱穴状土坑に切られる

第23表　陥し穴状遺構観察表

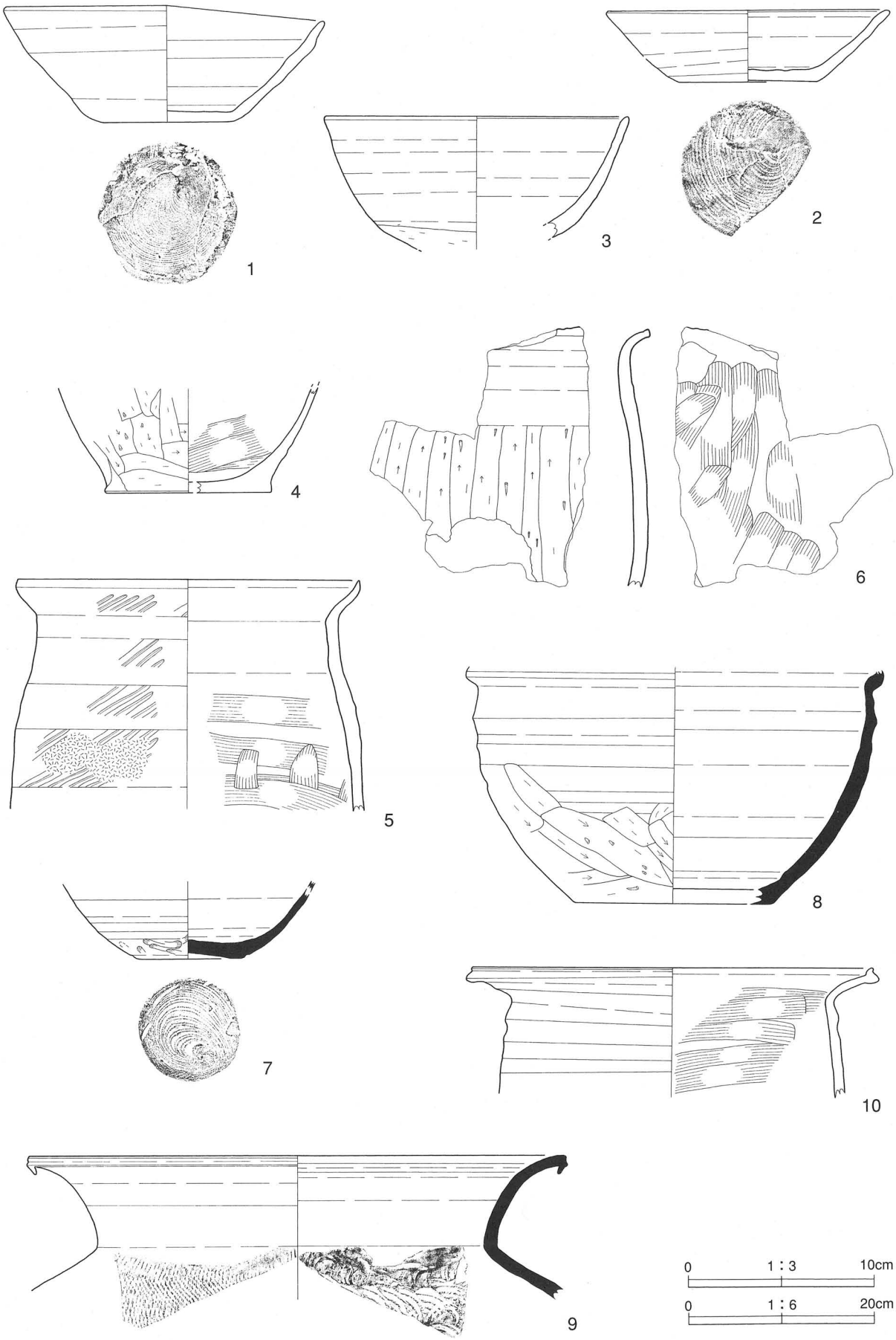
図版番号	写図番号	遺構名	時期	位置	グリッド	方向	平面性	開口部径(cm)	底部径(cm)	深さ(cm)	埋土の堆積状況	重複・その他
53	36	1号陥し穴状遺構	縄文時代	東部	BⅣf17	北西-南東	溝状	270×30	255×10	85	自然	6号土坑に切られる
53	36	2号陥し穴状遺構	縄文時代	中央部	AⅣo11	南－北	溝状	320×75	290×10～20	130	自然	

第24表　柱穴状土坑観察表①

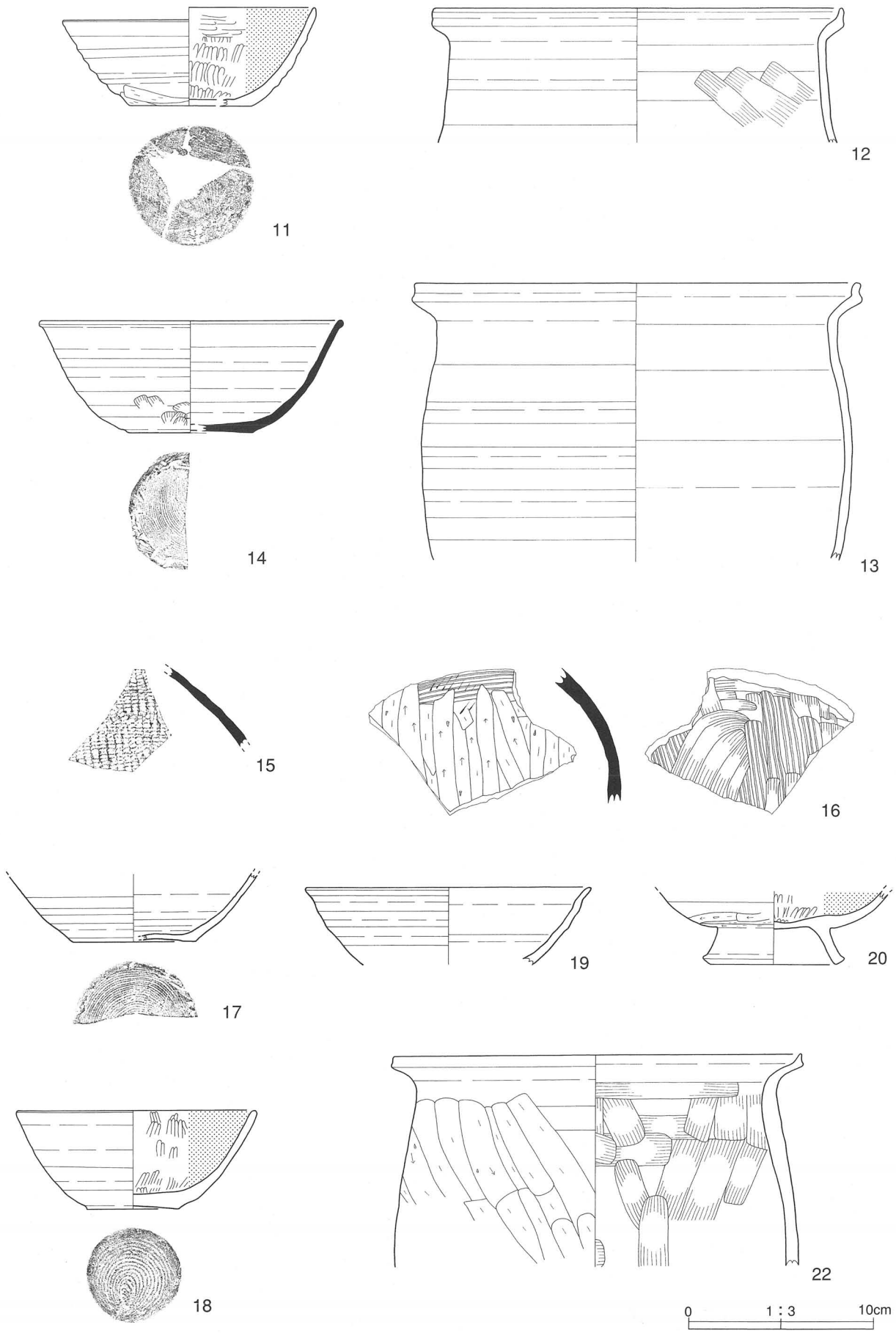
柱穴No	径(cm)	深さ(cm)	調査区	柱穴No	径(cm)	深さ(cm)	調査区	柱穴No	径(cm)	深さ(cm)	調査区
1	41×40	26	西部①	58	22×18	23	北部①	115	30×23	17	北部③
2	29×24	14	西部①	59	19×18	13	北部①	116	21×20	23	北部③
3	56×46	13	西部①	60	23×20	14	北部①	117	40×36	30	北部③
4	27×26	17	西部①	61	34×29	14	北部①	118	25×22	22	北部③
5	36×32	11	西部①	62	(28×24)	29	北部①	119	42×34	31	北部③
6	27×22	22	西部①	63	34×32	21	北部②	120	(39×34)	32	北部③
7	(20×20)	38	西部①	64	36×26	26	北部①	121	30×28	19	北部④
8	21×20	6	東部①	65	32×18	15	北部①	122	32×27	29	北部④
9	29×24	11	東部①	66	22×20	17	北部①	123	28×26	29	北部④
10	(46×38)	18	東部①	67	(26×20)	19	北部①	124	13×13	7	北部④
11	(20×12)	27	東部①	68	22×20	18	北部①	125	31×30	10	北部④
12	20×18	21	東部①	69	42×40	31	北部①	126	28×16	7	北部④
13	26×26	26	東部①	70	32×28	31	北部①	127	20×18	20	北部③
14	24×22	4	東部①	71	24×21	5	北部②	128	23×18	10	北部③
15	33×21	18	東部①	72	30×27	33	北部②	129	23×21	9	北部③
16	19×17	13	東部①	73	24×22	12	北部②	130	18×18	5	北部③
17	28×24	16	東部①	74	24×20	12	北部②	131	20×15	32	北部③
18	24×23	10	東部①	75	29×22	7	北部②	132	36×34	19	北部③
19	39×36	29	東部①	76	22×18	2	北部②	133	30×25	16	北部③
20	29×22	5	東部①	77	28×26	28	北部②	134	(27×20)	26	北部③
21	(23×14)	43	東部②	78	33×33	34	北部②	135	(48×36)	35	北部③
22	32×27	19	東部②	79	24×22	13	北部②	136	32×18	45	中央部④
23	30×26	35	東部②	80	18×15	3	北部②	137	34×28	10	中央部①
24	(26×24)	25	東部②	81	23×20	16	北部②	138	24×22	8	中央部①
25	52×40	18	東部③	82	20×16	11	北部②	139	40×40	44	中央部②
26	29×24	9	東部③	83	(28×20)	17	北部②	140	29×26	45	中央部⑤
27	18×17	10	東部③	84	32×30	25	北部②	141	(30×28)	22	中央部⑤
28	19×19	10	東部③	85	26×22	23	北部②	142	26×26	20	中央部④
29	25×20	9	東部③	86	19×19	9	北部②	143	(28×24)	12	中央部④
30	16×15	12	東部③	87	26×26	15	北部②	144	29×24	14	中央部④
31	21×21	30	東部③	88	34×29	39	北部②	145	30×25	21	中央部④
32	20×18	19	東部③	89	34×27	58	北部②	146	30×24	52	中央部④
33	22×20	23	東部④	90	28×24	30	北部②	147	34×33	9	中央部④
34	24×23	24	東部④	91	21×18	35	北部②	148	51×42	46	中央部④
35	24×19	28	東部④	92	28×24	23	北部②	149	32×20	64	中央部④
36	28×19	21	東部④	93	34×32	53	北部②	150	37×26	13	中央部④
37	22×22	27	東部④	94	27×22	15	北部②	151	20×19	33	中央部④
38	(46×25)	12	東部③	95	47×43	47	北部②	152	27×26	10	中央部④
39	53×49	11	東部④	96	24×19	23	北部②	153	30×25	44	中央部④
40	33×26	46	西部①	97	76×58	13	北部②	154	29×22	55	中央部④
41	22×21	27	西部①	98	34×30	17	北部②	155	29×27	58	中央部④
42	21×20	8	西部①	99	30×28	30	北部②	156	34×28	40	中央部④
43	36×32	55	西部②	100	26×24	18	北部②	157	32×26	28	中央部⑤
44	25×22	14	西部②	101	33×30	24	北部③	158	32×32	42	中央部⑤
45	28×26	18	北部①	102	(40×18)	6	北部③	159	36×28	35	中央部⑤
46	(29×20)	15	北部①	103	44×40	20	北部③	160	26×22	15	中央部⑤
47	40×35	40	北部①	104	(44×33)	4	北部③	161	24×22	15	中央部⑤
48	32×30	41	北部①	105	45×42	23	北部③	162	20×16	12	中央部⑤
49	54×44	38	北部①	106	(22×16)	10	北部③	163	24×21	29	中央部⑤
50	54×24	45	北部①	107	(26×24)	15	北部③	164	35×29	46	中央部⑤
51	33×24	8	北部①	108	15×12	36	北部③	165	21×19	30	中央部⑤
52	54×50	19	北部①	109	26×23	11	北部③	166	29×21	33	中央部⑤
53	60×34	16	北部①	110	20×18	13	北部③	167	25×20	33	中央部⑤
54	30×26	23	北部①	111	19×18	18	北部③	168	30×29	43	中央部⑤
55	25×24	39	北部①	112	27×24	32	北部③	169	18×18	21	中央部⑤
56	29×25	19	北部①	113	38×28	33	北部③	170	23×21	40	中央部⑤
57	29×25	18	北部①	114	24×22	21	北部③	171	28×22	14	中央部⑤

第25表　柱穴状土坑観察表②

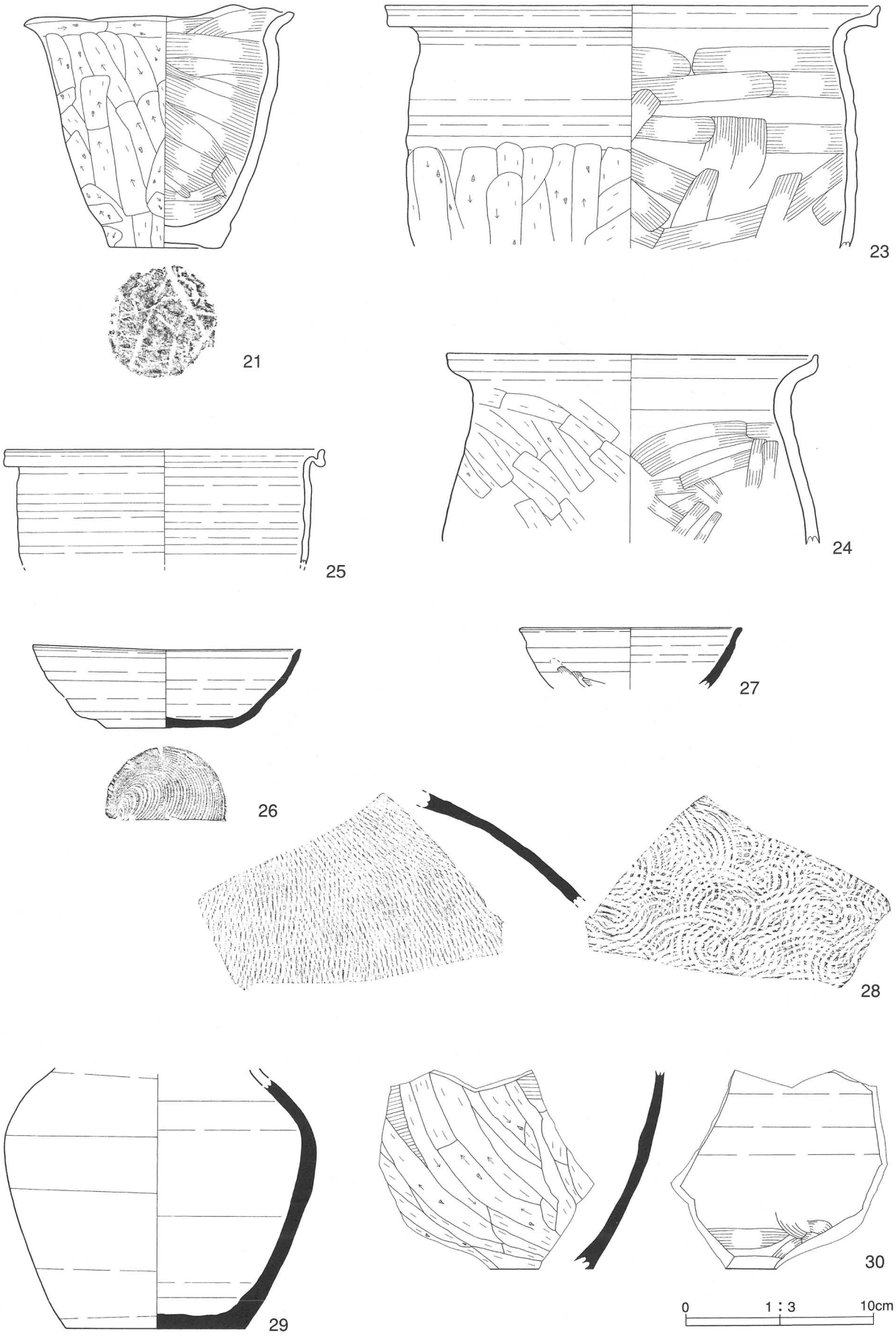
柱穴No	径(cm)	深さ(cm)	調査区	柱穴No	径(cm)	深さ(cm)	調査区	柱穴No	径(cm)	深さ(cm)	調査区
172	40×32	29	中央部⑤	204	22×18	10	東部⑤	236	28×27	9	中央部②
173	37×29	40	中央部⑤	205	24×20	20	東部⑤	237	(34×21)	32	中央部②
174	29×22	14	中央部⑤	206	19×15	12	東部⑤	238	(34×13)	20	東部①
175	22×20	17	中央部③	207	24×21	49	東部⑤	239	24×23	14	東部①
176	20×14	9	中央部⑤	208	(30×20)	6	東部⑤	240	36×32	51	中央部④
177	(25×11)	26	中央部⑤	209	22×21	10	東部⑤	241	48×40	30	中央部④
178	(22×7)	35	中央部⑤	210	36×28	75	東部⑤	242	28×22	22	中央部④
179	38×34	21	中央部⑤	211	29×28	76	東部⑤	243	28×22	22	中央部④
180	(32×32)	36	中央部⑤	212	19×17	10	東部⑤	244	18×14	24	中央部④
181	(13×11)	25	中央部⑤	213	25×24	42	東部⑤	245	17×15	29	中央部④
182	38×26	13	中央部⑤	214	44×28	12	東部⑤	246	17×16	10	中央部④
183	27×25	44	中央部⑤	215	25×21	35	東部⑤	247	23×22	8	中央部④
184	28×22	31	中央部⑤	216	26×22	18	東部⑤	248	18×15	24	中央部④
185	20×16	51	中央部⑤	217	27×19	20	東部⑤	249	32×26	24	中央部④
186	38×35	27	中央部⑤	218	32×24	24	東部⑤	250	18×14	14	中央部④
187	24×20	15	中央部⑤	219	19×15	5	東部⑥	251	19×17	32	中央部④
188	30×27	48	中央部⑤	220	18×18	10	東部⑥	252	36×24	18	中央部④
189	(26×22)	35	中央部⑤	221	26×18	14	東部⑥	253	30×24	36	中央部④
190	36×27	17	中央部③	222	18×16	35	東部⑥	254	24×22	8	中央部③
191	52×36	35	中央部⑤	223	22×16	16	中央部②	255	28×23	27	中央部③
192	(26×17)	19	中央部⑤	224	21×20	9	中央部②	256	26×22	20	中央部③
193	24×21	30	中央部⑤	225	25×23	25	中央部③	257	36×34	16	中央部③
194	29×23	24	中央部⑤	226	31×24	78	中央部②	258	22×21	40	中央部④
195	22×20	44	中央部⑤	227	36×30	66	中央部②	259	35×35	18	中央部③
196	40×33	26	中央部⑤	228	18×17	36	中央部②	260	24×24	13	中央部③
197	28×24	41	中央部⑤	229	37×33	64	中央部②	261	23×18	6	中央部③
198	23×22	12	中央部⑤	230	33×23	14	中央部④	262	(34×13)	20	中央部③
199	16×16	9	中央部⑤	231	24×19	14	中央部④	263	31×26	27	中央部③
200	20×19	11	東部⑤	232	29×27	20	中央部④	264	27×24	30	中央部⑤
201	24×17	10	東部⑤	233	41×34	63	中央部④	265	40×38	40	中央部③
202	20×18	11	東部⑤	234	(31×21)	43	中央部②	266			
203	32×24	67	東部⑤	235	36×31	56	中央部②	267			



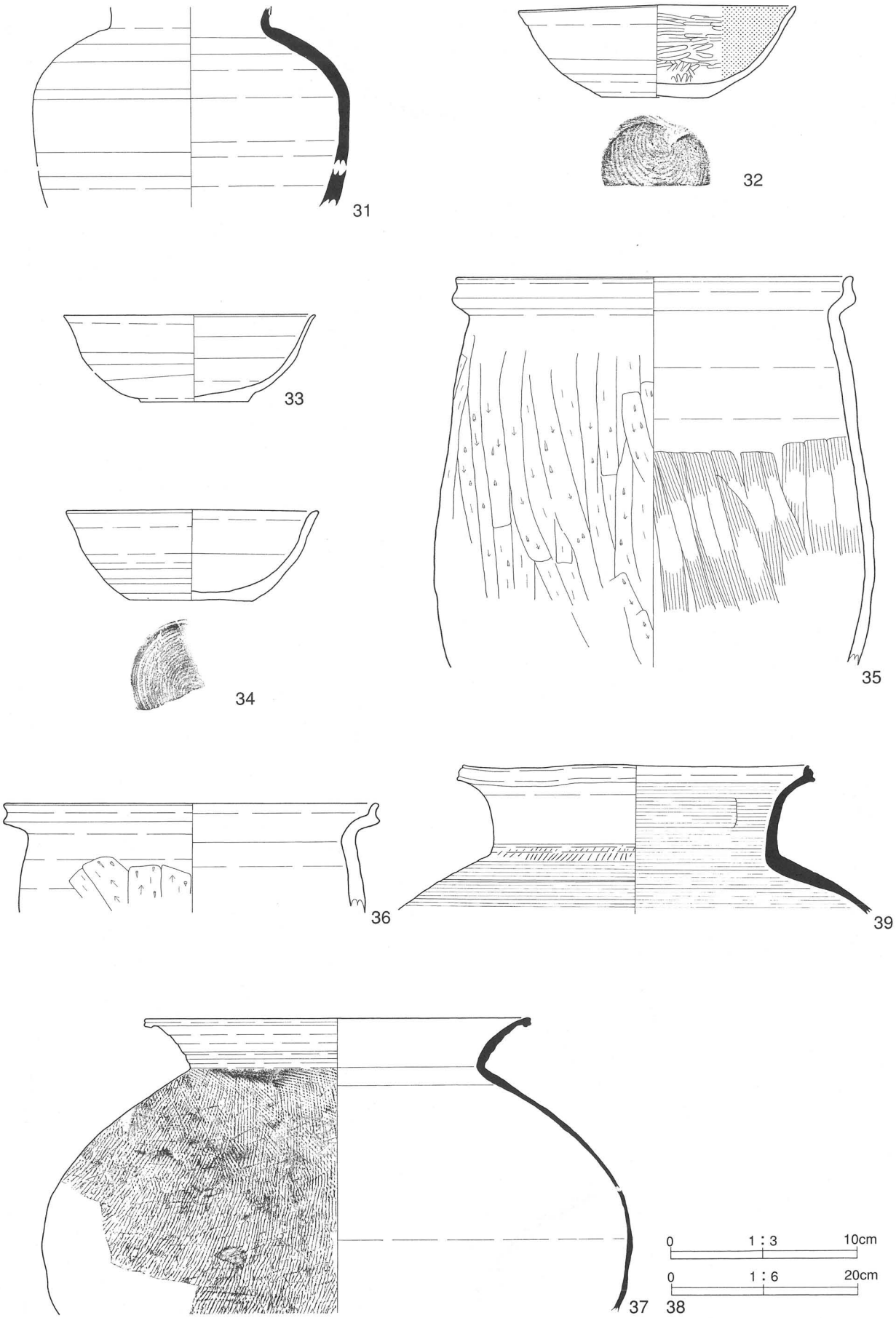
第61図　古代の土器（1）



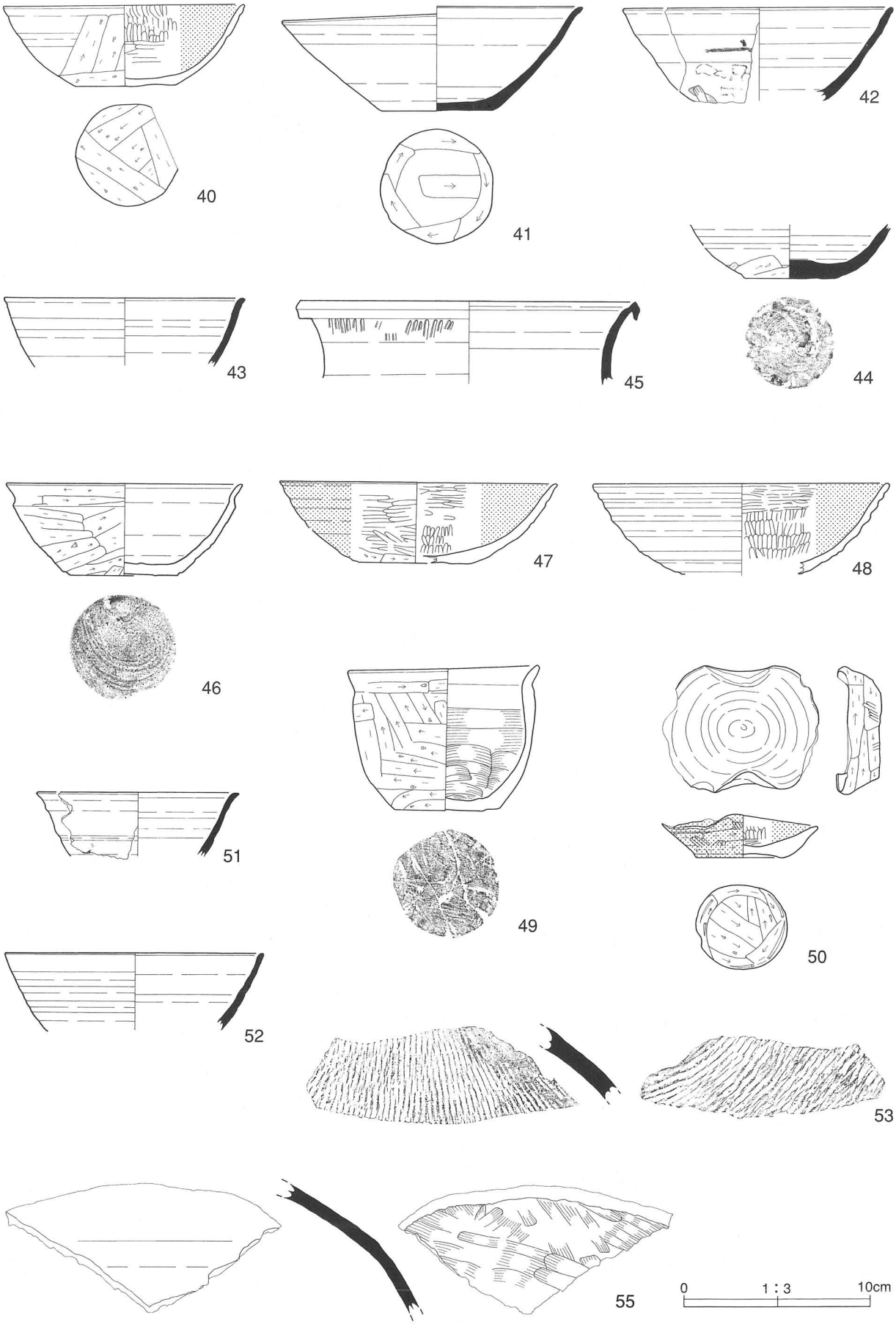
第62図　古代の土器（２）



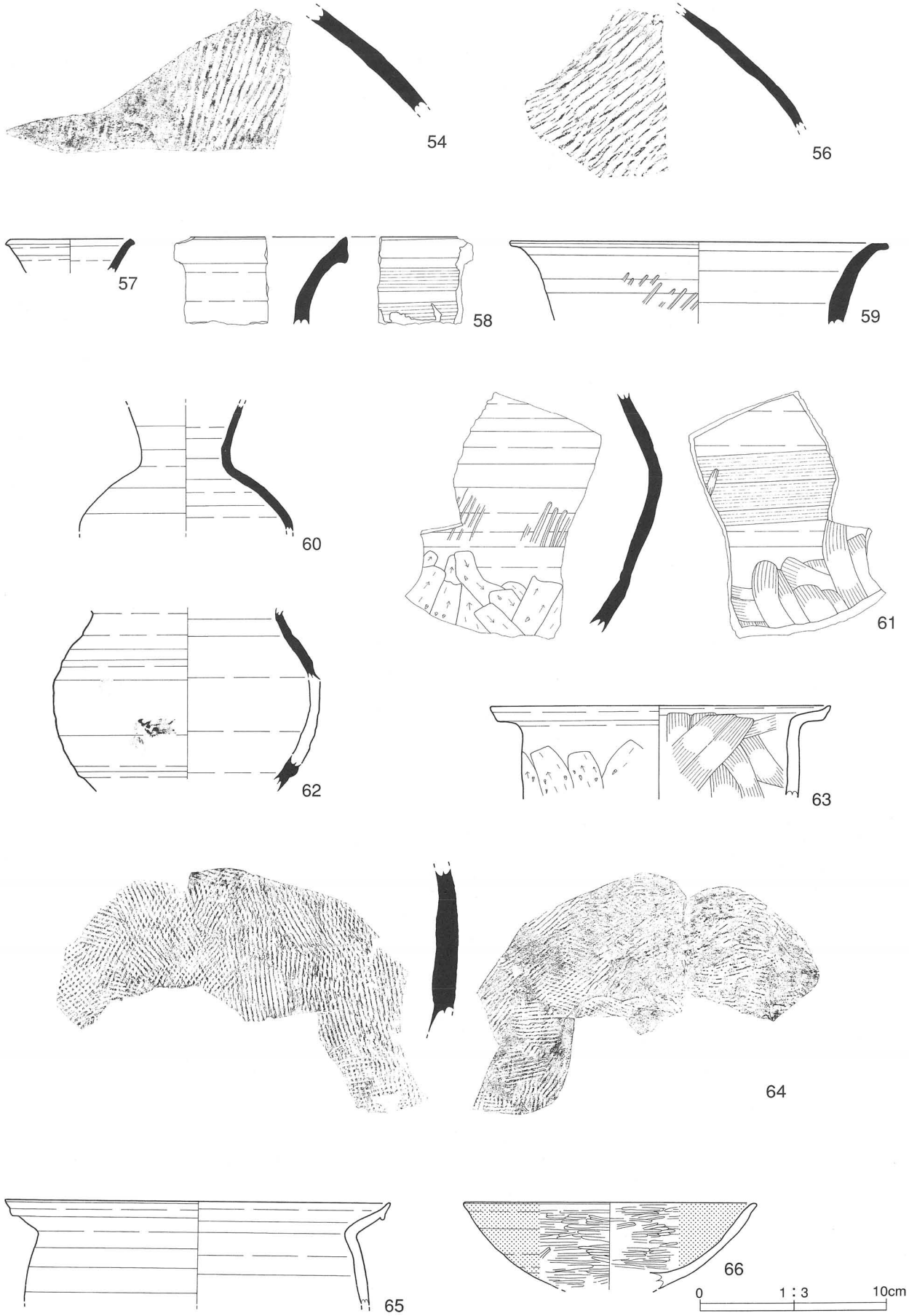
第63図　古代の土器（3）



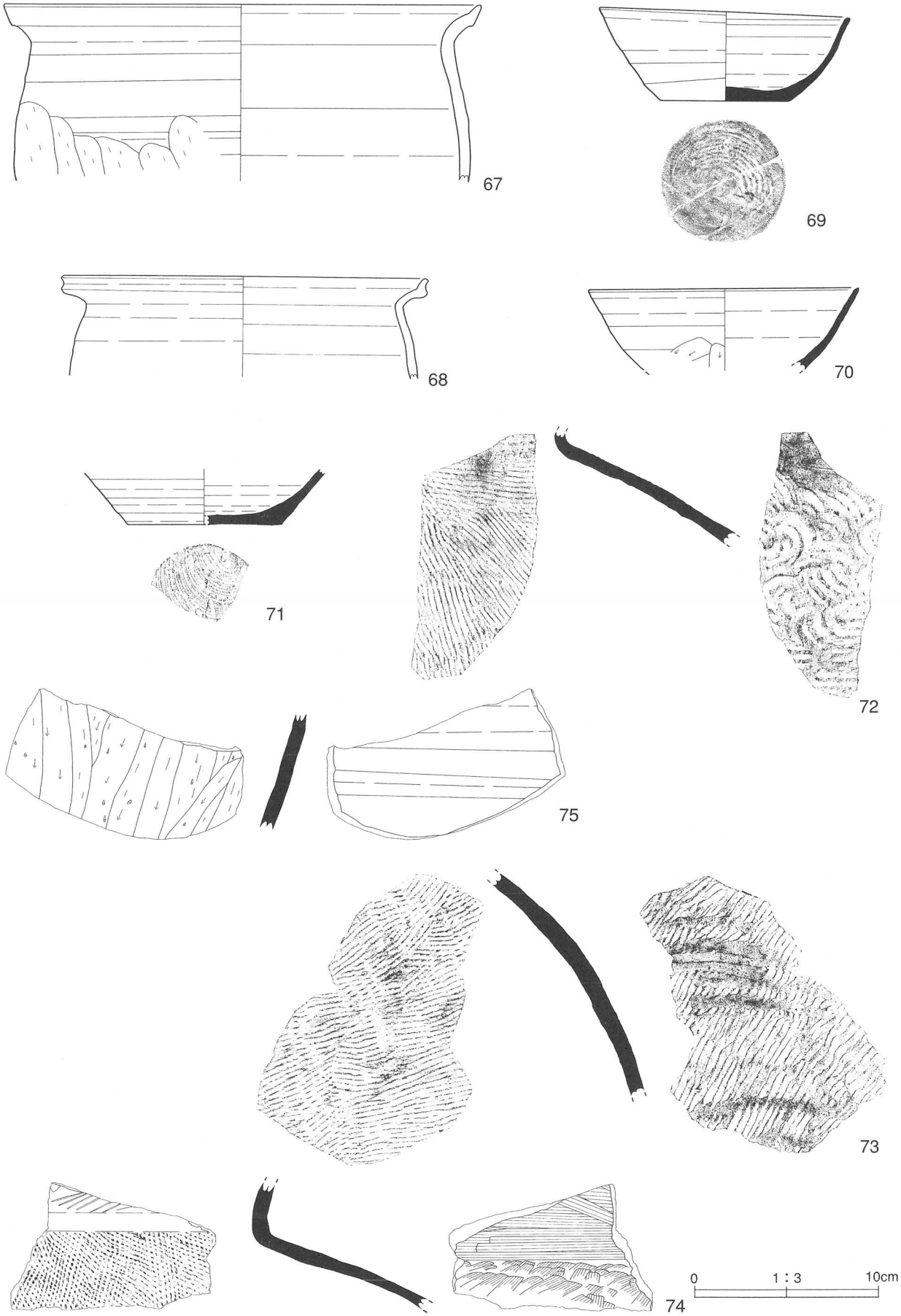
第64図　古代の土器（4）



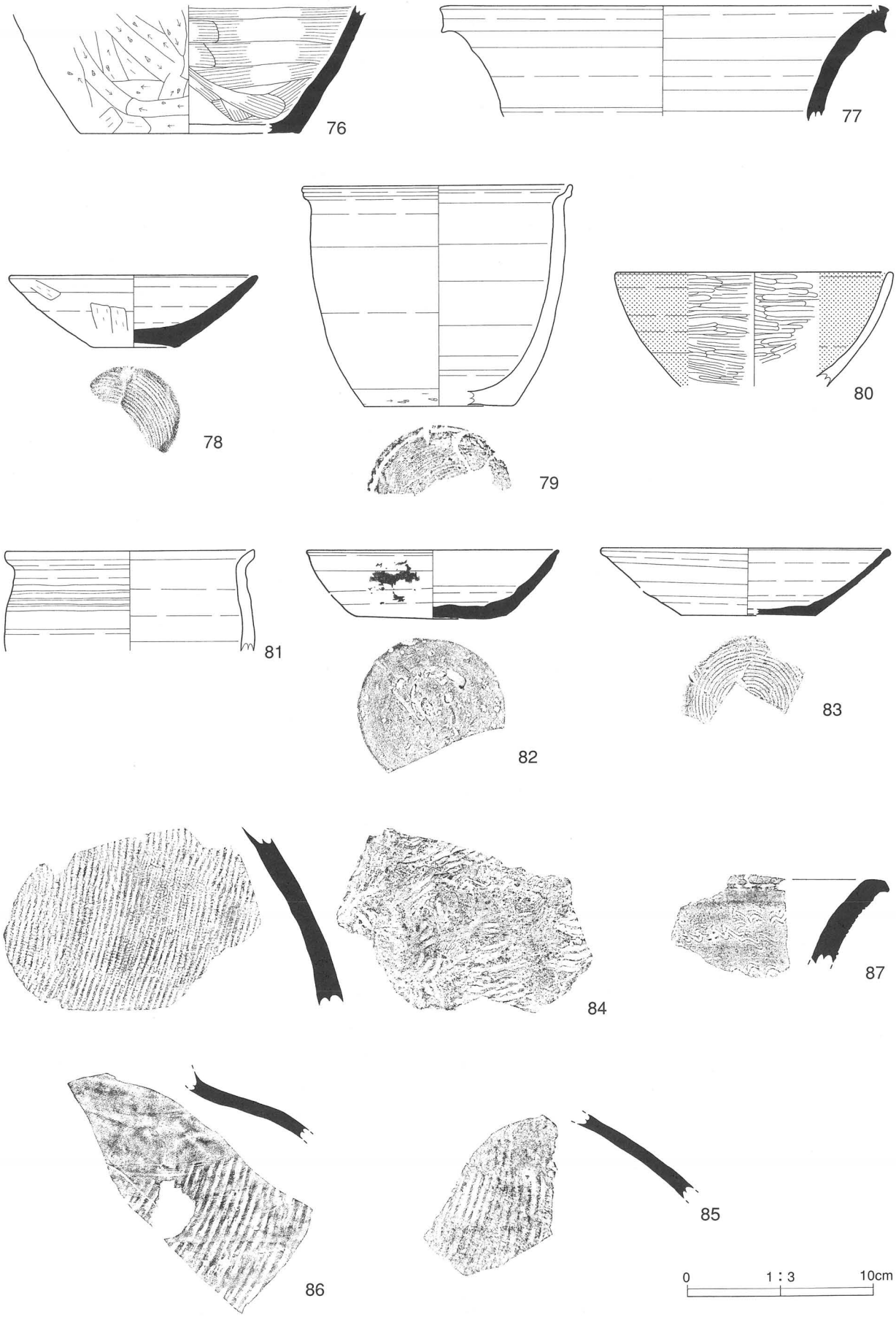
第65図　古代の土器（5）



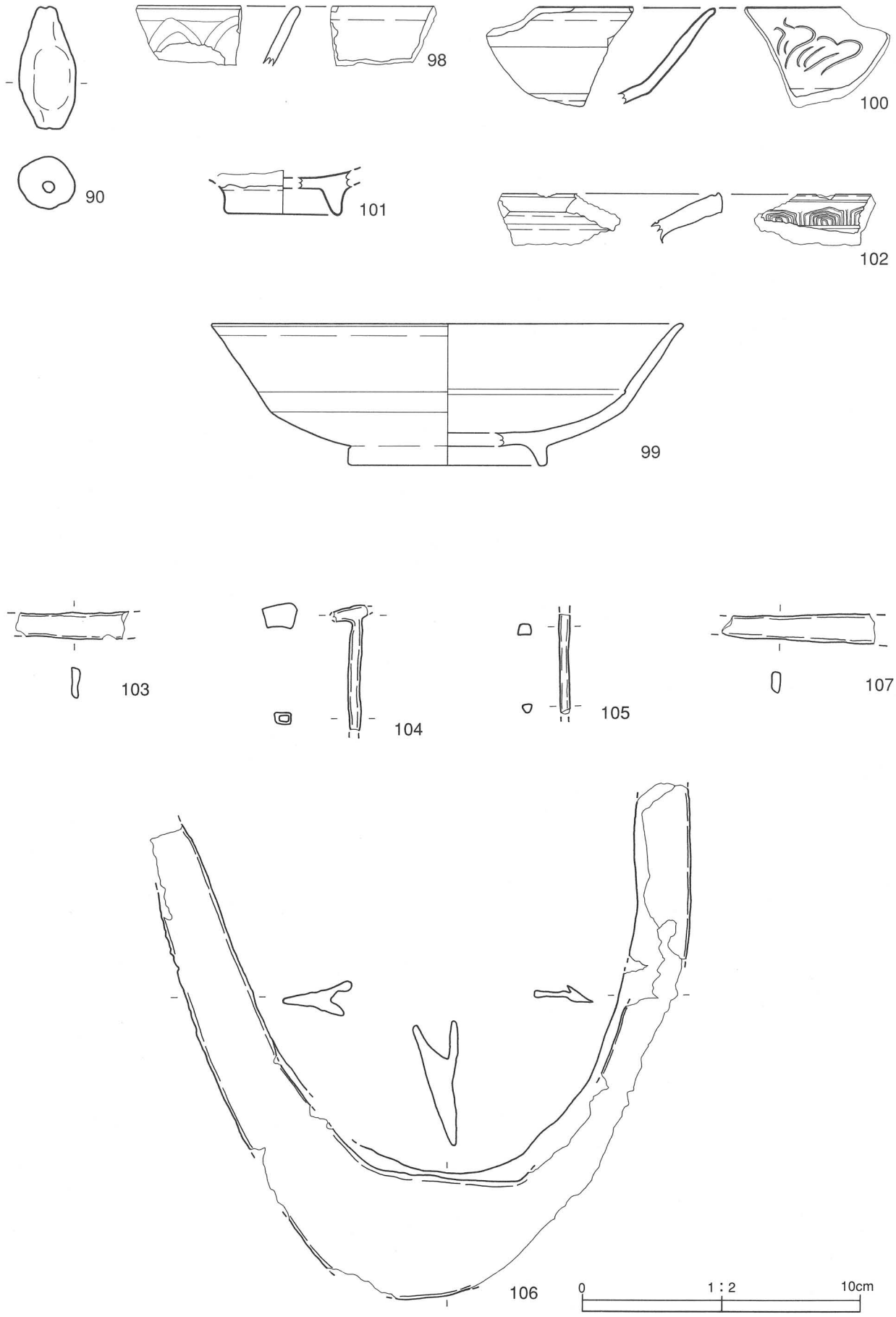
第66図　古代の土器（6）



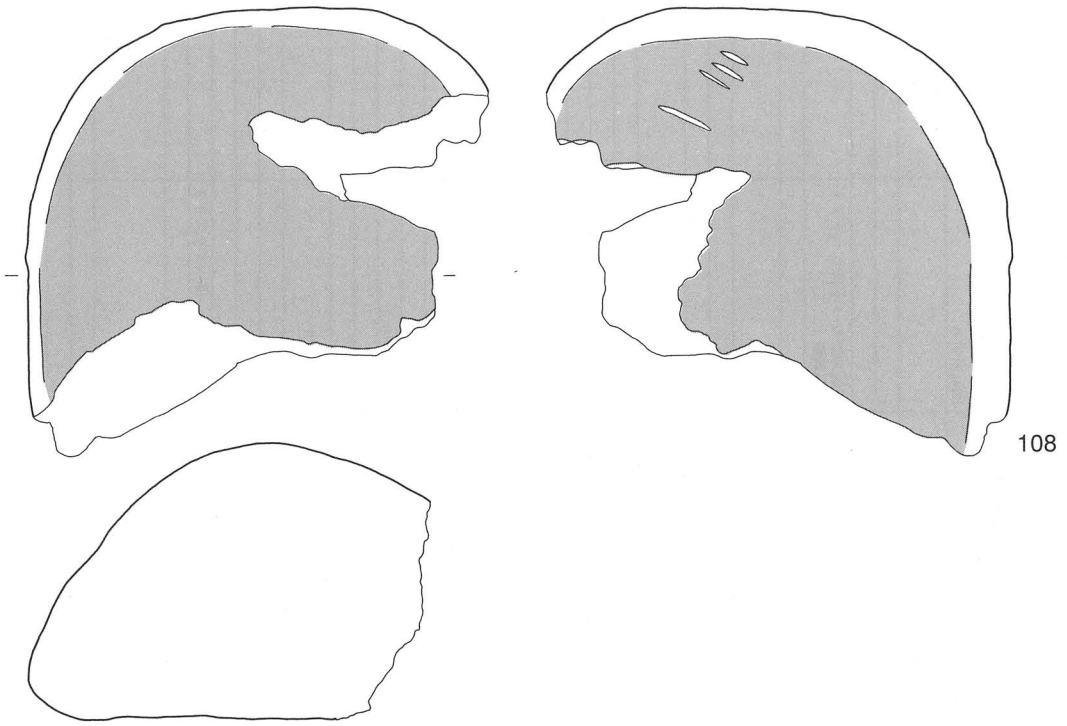
第67図　古代の土器（７）

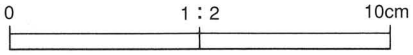


第68図　古代の土器（８）



第69図　土製品、陶磁器、鉄製品





第70図　石器

第26表　古代の土器観察表①

No	出土地点	層　　位	種別	器種	口径	底径	器高	残存状況	外面調整	内面調整	底部調整	備　　考
1	1号住	埋土中位～下位(To-aより下層)	土師器	坏	(17.3)	(7.0)	6.3	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
2	1号住	1層	土師器	坏	(15.2)	(7.5)	3.9	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
3	1号住南壁際	2b層	土師器	坏	(16.4)	-	(7.2)	1/2	ロクロナデ→体部下端回転ヘラケズリ	ロクロナデ	-	
4	1号住南壁際	2b層	土師器	小型甕	-	(8.8)	(5.7)	底部	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラケズリ	
5	1号住	①埋土下位(3層),②1号住内土坑1埋土中	土師器	甕	(18.5)	-	(12.4)	口～体部上半	ロクロナデ→タタキ	ヘラナデ		外面の一部に粘土貼付け
6	1号住・1号土坑	①1号住2b層,②1号土坑埋土中～下位(４ａ層)	土師器	甕	-	-	(13.8)	口～体部上半	ロクロナデ→ヘラケズリ	ヘラナデ		
7	1号住	①埋土中位,②埋土下位	須恵器	坏	-	5.4	(4.2)	体部～底部	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	外面に火襷
8	1号住	①埋土中位～下位(To-aより下),②埋土中位,③埋土下位,④床直	須恵器	鉢	(22.4)	(10.6)	(12.7)	体部～底部	ロクロナデ→ヘラケズリ	ロクロナデ	-	
9	1号住	埋土中位,床直,1号土坑P4埋土中位	須恵器	大甕	(58.2)	-	15.6	口～頸部	ロクロナデ→平行タタキ	同心円文当て具痕	-	
10	2号住	埋土中(撹乱層?)	土師器	甕	(22.2)	-	(7.0)	口～体部上半	ロクロナデ	ヘラナデ		
11	3号住北側	床面直上(12層)	土師器	坏	(13.7)	6.5	(5.4)	2/3	ロクロナデ→体部下端手持ちヘラケズリ	放射状ヘラミガキ→黒色処理	回転糸切り→手持ちヘラケズリ再調整	
12	3号住カマド	カマド内	土師器	甕	(22.2)	-	(7.3)	口縁部	ロクロナデ	ヘラナデ	-	
13	3号住北側	①床面直上(12層),②カマド付近,③カマド貼床内	土師器	甕	(24.0)	-	(15.1)	口～体部上半	ロクロナデ	ロクロナデ	-	
14	3号住	①北側床面直上(12層),②床下(13層)	須恵器	坏	(15.4)	(6.7)	6.2	1/5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
15	3号住	12層	須恵器	甕	-	-	-	体部上半	格子目状のタタキ	ロクロナデ	-	
16	3号住	北側床面直上(12層)	須恵器	壺	-	-	-	体部	ロクロナデ→ハケメ→カキメ→ヘラケズリ	ヘラナデ	-	
17	4号住	埋土上位(黒褐色土)	土師器	坏	-	(6.6)	(3.7)	底部	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
18	5号住居	カマド付近(2層)	土師器	坏	13.0	5.1	5.4	略完形	ロクロナデ	放射状ヘラミガキ→黒色処理	回転糸切り	
19	5号住	2層	土師器	坏	(15.4)	-	(4.2)	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	-	
20	5号住	2層	土師器	高台坏	-	7.6	(4.0)	底部	ロクロナデ→底部付近手持ちヘラケズリ	放射状ヘラミガキ→黒色処理	回転糸切り→手持ちヘラケズリ再調整	
21	5号住カマド	5層(煙道部埋土)	土師器	小型甕	(14.5)	6.0	(13.2)	1/2	ヘラケズリ	ヘラナデ	木葉痕	非ロクロ
22	5号住カマド	5層(煙道部埋土)	土師器	甕	(22.0)	-	(11.5)	口縁部	ロクロナデ→ヘラケズリ	ヘラナデ	-	
23	5号住カマド	5層(煙道部埋土)	土師器	甕	(26.6)	-	(13.2)	口縁部	ロクロナデ→ヘラケズリ	ヘラナデ	-	
24	5号住カマド	5層(煙道部埋土)	土師器	甕	(20.0)	-	(10.3)	口縁部	ロクロナデ→ヘラケズリ	ヘラナデ	-	
25	5号住	検出面(2層上位)	土師器	甕	(17.2)	-	(6.3)	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	-	
26	5号住	5層(煙道部埋土)	須恵器	坏	(14.3)	6.5	4.3	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
27	5号住	検出面(2層上位)	須恵器	坏	(12.0)	-	(3.3)	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	-	
28	5号住	2層	須恵器	大甕	-	-	-	体部	平行タタキ	同心円文当て具痕	-	
29	5号住・20号土坑	①5号住埋土2層・北壁土・　埋土下位,②20号土坑　埋土中	須恵器	壺	-	9.7	(14.1)	体部～底部	ロクロナデ→ヘラケズリ	ロクロナデ	ヘラケズリ	
30	5号住	埋土下位	須恵器	鉢	-	-	-	体部	ロクロナデ→ヘラケズリ	ロクロナデ→ナデ	-	
31	5号住	検出面(黒褐色土)	須恵器	壺	-	-	15.0	体部	ロクロナデ→ヘラケズリ	ロクロナデ	-	
32	6号住内土坑3	土坑埋土2層	土師器	坏	(15.0)	(5.9)	(5.1)	1/2	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色処理	回転糸切り	
33	6号住	①床直、②住内４、③土坑1	土師器	坏	(13.6)	(5.8)	4.8	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り→一部ヘラケズリ？	
34	6号住	①床直、②土坑1埋土中	土師器	坏	(13.6)	(6.6)	5.0	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
35	6号住	①6号住床直、②6号住内土坑4底面直上、③6号住内土坑4底面直上、④埋土中、⑤157号柱穴埋土中	土師器	甕	(21.4)	-	(21.4)	口～体部	ロクロナデ→ヘラケズリ	ヘラナデ	-	
36	6号住PP9	埋土中	土師器	甕	(20.3)	-	(6.0)	口縁部	ロクロナデ→ヘラケズリ	ロクロナデ	-	
37	6号住内土坑3号	土坑埋土2層	須恵器	大甕	(42.0)	-	(32.3)	口～体部	ロクロナデ→平行タタキ	ロクロナデ、指頭圧痕	-	図上でNo.38と同一個体
38	6号住内土坑3号	土坑埋土2層	須恵器	大甕	(42.0)	-	(32.3)	口～体部	ロクロナデ→平行タタキ	ロクロナデ、指頭圧痕	-	図上でNo.37と同一個体
39	6号住	検出面	須恵器	甕	(18.6)	-	(8.1)	口～体部上半	ロクロナデ→ハケメ→カキメ	カキメ	-	
40	7号住	①1層、②カマド内貼床内	土師器	坏	(13.0)	(5.4)	(4.4)	1/3	ロクロナデ→手持ちヘラケズリ	放射状ヘラミガキ→黒色処理	回転糸切り→手持ちヘラケズリ再調整	

第27表　古代の土器観察表②

No	出土地点	層　　位	種別	器種	口径	底径	器高	残存状況	外面調整	内面調整	底部調整	備　　考
41	7号住	①1層、②カマド付近貼床内	須恵器	坏	(16.8)	6.0	5.7	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラケズリ	
42	7号住	1層	須恵器	坏	(14.6)	-	(5.2)	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	-	体部外面に墨書
43	7号住	東壁付近1層	須恵器	坏	(13.0)	-	(3.7)	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	-	
44	7号住	カマド付近貼床内	須恵器	坏	(10.8)	4.8	(3.0)	底部	ロクロナデ→ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切り	
45	7号住	1層	須恵器	甕	(18.5)	-	-	口縁部	ロクロナデ→タタキ	ロクロナデ	-	
46	1号掘立柱建物跡	土坑埋土1層	土師器	坏	(12.8)	5.8	5.0	1/2	ロクロナデ→手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切り→手持ちヘラケズリ再調整	
47	1号掘立柱建物跡	土坑埋土1層	土師器	坏	(14.9)	(6.0)	(4.5)	1/3	ロクロナデ→ヘラミガキ→黒色処理	放射状ヘラミガキ→黒色処理	回転糸切り→手持ちヘラケズリ再調整	
48	1号掘立柱建物跡	土坑埋土1層	土師器	坏	(16.0)	-	(4.9)	1/3	ロクロナデ	放射状ヘラミガキ→黒色処理	-	
49	1号掘立柱建物跡	土坑埋土1層	土師器	小型甕	10.4	5.7	8.0	略完形	ヘラケズリ	ヘラナデ	手持ちヘラケズリ	非ロクロ、内外面煤付着
50	1号掘立柱建物跡	土坑埋土1層	土師器	耳皿	(8.3)	4.8	(2.3)	完形	ロクロナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ→ヘラミガキ→黒色処理	手持ちヘラケズリ→ヘラミガキ？	
51	1号掘立柱建物跡	土坑埋土1層	須恵器	坏	(10.9)	-	(3.5)	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	-	
52	1号掘立柱建物跡	土坑埋土1層	須恵器	坏	(14.0)	-	(4.2)	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	-	
53	1号掘立柱建物跡	土坑埋土1層	須恵器	大甕	-	-	-	体部	ロクロナデ→平行タタキ	平行当て具痕	-	
54	1号掘立柱建物跡	土坑埋土1層	須恵器	大甕	-	-	-	体部	平行タタキ	ヘラナデ	-	
55	1号掘立柱建物跡	土坑埋土1層	須恵器	甕	-	-	-	体部	ロクロナデ	ヘラナデ	-	
56	1号掘立柱建物跡	土坑埋土1層	須恵器	大甕	-	-	-	体部	平行タタキ	ヘラナデ	-	
57	1号掘立柱建物跡	土坑埋土1層	須恵器	壺	(7.0)	-	-	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	-	
58	1号掘立柱建物跡	土坑埋土1層	須恵器	甕	-	-	-	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ→カキメ	-	
59	1号掘立柱建物跡	土坑埋土1層	須恵器	甕	(20.5)	-	(4.6)	口縁部	ロクロナデ→タタキ	ロクロナデ	-	
60	1号掘立柱建物跡	土坑埋土1層	須恵器	壺	-	-	(7.0)	頸～体部上半	ロクロナデ	ロクロナデ	-	
61	1号掘立柱建物跡	土坑埋土1層	須恵器	壺	-	-	-	体部	ロクロナデ→タタキ、ヘラケズリ	ロクロナデ→ヘラナデ	-	
62	1号掘立柱建物跡	①土坑埋土1層,②PP1埋土中位	須恵器	壺	-	-	(10.1)	体部	ロクロナデ	ロクロナデ	-	体部外面に付着物あり
63	1号土坑	埋土中位	土師器	甕	(18.4)	-	(5.1)	口縁部	ロクロナデ→ヘラケズリ	ヘラナデ		
64	1号土坑	埋土中	須恵器	大甕	-	-	-	体部上半	ロクロナデ→平行タタキ	平行当て具痕	-	
65	2号土坑	1層	土師器	甕	(21.0)	-	(5.6)	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	-	
66	5号土坑	2層	土師器	坏	(16.0)	-	(4.7)	口縁部	ロクロナデ→ヘラミガキ→黒色処理	ヘラミガキ→黒色処理	-	
67	5号土坑	2～6層	土師器	甕	(25.6)	-	(9.7)	口縁部	ロクロナデ→ヘラケズリ	ロクロナデ	-	
68	5号土坑	2層	土師器	甕	(19.8)	-	(5.5)	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	-	
69	5号土坑	①2層,②2～6層	須恵器	坏	13.5	6.9	5.1	略完形	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
70	5号土坑	①2層,②2～6層	須恵器	坏	(14.6)	-	(4.5)	口縁部	ロクロナデ→ヘラケズリ	ロクロナデ	-	
71	5号土坑	2層	須恵器	坏	-	(8.4)	(3.1)	底部	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
72	5号土坑	2層	須恵器	大甕	-	-	-	体部	ロクロナデ→平行タタキ	同心円文当て具痕	-	
73	5号土坑	2層	須恵器	大甕	-	-	-	体部	ロクロナデ→平行タタキ	平行当て具痕	-	
74	5号土坑	2層	須恵器	大甕	-	-	-	体部	ロクロナデ→平行タタキ	ヘラナデ	-	頸部外面に6本の線刻
75	5号土坑	2層	須恵器	壺	-	-	-	体部	ヘラケズリ	ロクロナデ	-	
76	5号土坑	2～6層	須恵器	壺	-	(11.8)	(7.1)	体部下半	ロクロナデ→ヘラケズリ	ヘラナデ	-	
77	5号土坑	2層	須恵器	甕	(24.3)	-	(6.3)	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	-	
78	6号土坑	床直	須恵器	坏	(13.5)	(4.7)	4.0	1/3	ロクロナデ→ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切り	
79	8号土坑	埋土上位	土師器	小型甕	(14.6)	(8.0)	(12.2)	1/3	ロクロナデ→体部下端回転ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切り	
80	13号土坑	1層	土師器	坏	(15.0)	-	(6.2)	口～体部	ロクロナデ→ヘラミガキ→黒色処理	ヘラミガキ→黒色処理	-	
81	13号土坑	①3層,②1層	土師器	小型甕	(13.5)	-	(5.5)	口縁部	ロクロナデ→ハケメ？	ロクロナデ	-	
82	15号土坑	1層	須恵器	坏	(13.6)	8.0	3.8	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り→ヘラケズリ再調整	体部外面に付着物あり
83	15号土坑	1層	須恵器	坏	(15.6)	(7.3)	3.7	1/5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
84	15号土坑	1層	須恵器	大甕	-	-	-	体部	ロクロナデ→平行タタキ	同心円文当て具痕	-	
85	20号土坑	1層	須恵器	大甕	-	-	-	体部	ロクロナデ→平行タタキ	ロクロナデ	-	
86	5号溝	埋土下位(15層)	須恵器	大甕	-	-	-	体部	ロクロナデ→平行タタキ	ロクロナデ	-	
87	16号溝	埋土中	須恵器	甕	-	-	-	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	-	頸部外面に波状文

第28表　土製品観察表

No	出土地点	層　位	器　種	重量 (g)
88	1号住南壁際	2　層	焼成粘土塊	24.0
89	5号住	埋土上位	焼成粘土塊	7.1
90	6号住内pp9	埋土中	土　錘	15.2
91	6号住内土坑4	埋土中	焼成粘土塊	18.8
92	7号住カマド付近	貼床内	焼成粘土塊	22.0
93	1号掘立柱建物跡付属土坑	埋土中	焼成粘土塊	7.2
94	2号土坑	埋土中	焼成粘土塊	9.6
95	3号土坑	埋土中位	焼成粘土塊	36.5
96	8号土坑	埋土上位	焼成粘土塊	13.9
97	1号焼土遺構	3層（焼土）	焼成粘土塊	9.8

第29表　陶磁器観察表

No	出土地点	層　位	器　種	産　地	代	文　様	備　考
98	5号住	2　層	椀	青　磁	中世前半（15世紀?）	外面に蓮弁文	
99	5号土坑	2　層	綾　椀	東美濃	10世紀前半	屈曲部内面に沈線	緑釉陶器、黒笹90式
100	8号土坑	埋土中	綾　椀	猿投	9 世紀後半	内面に印刻華文	緑釉陶器（旧4号住）※胆沢城に類例あり
101	12号溝	埋土中	椀	瀬戸・美濃	中世～近世		
102	167号柱穴	埋土中	鉢	東北地方?	近　世		

第30表　鉄製品観察表

No	出土地点	層　位	器　種	長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
103	2号住	埋土上位	刀　子	4.00	1.00	0.50	3.2
104	2号住	埋土上位	釘　?	4.60	1.50	0.80	4.6
105	2号住	床　直	釘　?	3.60	1.00	0.70	2.3
106	5号住	床　直	鋤　先	19.00	15.00	1.40	205.0
107	6号住	床　直	刀　子	5.70	1.20	1.00	10.9

第31表　礫石器観察表

No	出土地点	層　位	器　種	石　質	産　地	時　代	長　さ (cm)	幅 (cm)	厚　さ (cm)	重　量 (g)	備　考
108	8号土坑	埋土中	磨　石	安山岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	(11.5)	(12.0)	7.2	1047.5	楕円球状
109	調査区東部	検出面	砥　石	砂　岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	8.4	5.3	1.4	104.1	

Ⅶ　自然科学分析

1　作屋敷遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

1　測定対象試料

作屋敷遺跡は、岩手県奥州市胆沢区南都田字作屋敷487ほか（北緯39°07′57″、東経141°04′17″）に所在する。測定対象試料は、平安時代と考えられる5号土坑の埋土中位から出土した炭化材（炭化材サンプル1：IAAA-82549）である。

2　測定の意義

土坑の時期を推定する手掛かりとする。

3　化学処理工程

（1）メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。

（2）酸処理、アルカリ処理、酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く最初の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。

（3）試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。

（4）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO2）を精製する。

（5）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。

（6）グラファイトを内径1㎜のカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

4　測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5　算出方法

（1）年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。

（2）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。この値は、δ^{13}Cによって補正された値で

ある。^{14}C年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±1σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

（3）δ^{13}C は、試料炭素の^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により^{13}C/^{12}Cを測定した場合には表中に（AMS）と注記する。

（4）pMC （percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。

（5）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差（1σ＝68.2%）あるいは2標準偏差（2σ＝95.4%）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い、OxCalv4.0較正プログラム（Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001　Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

6　測　定　結　果

5号土坑の埋土中位から出土した炭化材の^{14}C年代は、1250±40yrBPである。暦年較正年代（1σ）は、687～781AD（60.8%）・791～806AD（7.4%）である。試料の炭素含有率は62.47%であり、化学処理および測定内容に問題は無く、妥当な年代と判断される。

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（%）（AMS）	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-82549	炭化材サンプル1	5号土坑　埋土中位	炭化材	AaA	-22.28±0.94	1,250±40	85.61±0.38

[#2685]

測定番号	δ^{13}C補正なし		暦年較正用（yrBP）	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-82549	1,200±30	86.09±0.34	1,247±35	687AD - 781AD　(60.8%) 791AD - 806AD　(7.4%)	679AD - 873AD　(95.4%)

[参考値]

参考文献

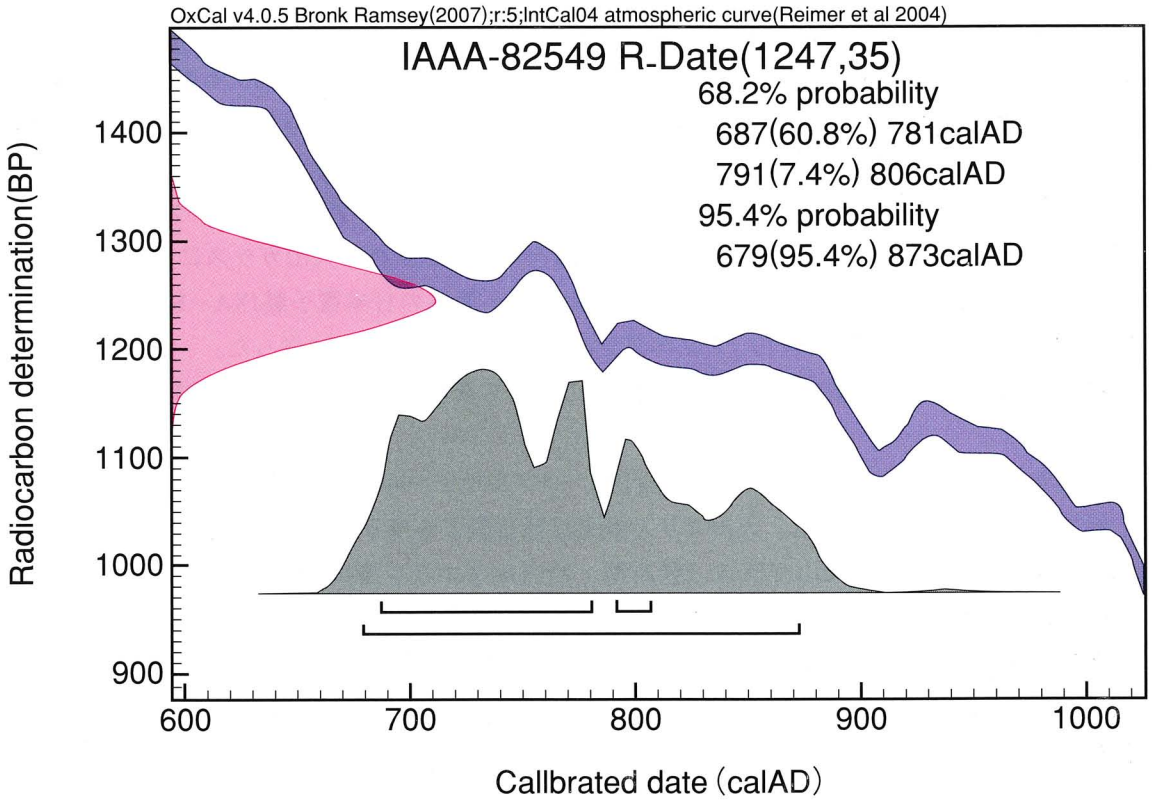
Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19, 355-363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37（2）, 425-430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43（2A）, 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43（2A）, 381-389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058



［参考］暦年較正年代グラフ

2　岩手県奥州市胆沢区作屋敷遺跡より採集されたテフラについて

弘前大学大学院・理工学研究科
柴　　正　敏

岩手県奥州市胆沢区作屋敷遺跡より採集された、火山ガラスを含むテフラサンプル２試料について、以下の観察・分析を行った。

これら試料について、超音波洗浄器を用いて水洗し、粘土鉱物など数マイクロメーター以下の粒子を除去した後、偏光顕微鏡を用いて、火山ガラスの有無、火山ガラスが存在する場合にはその形態、構成鉱物の種類を観察・記載した。その結果を表１に示した。火山ガラスは、その形態、屈折率、化学組成、共存鉱物などにより給源火山を推定することができる（町田・新井、2003；青木・町田、2006）。火山ガラスの化学組成を決定する方法として、近年、電子プローブマイクロアナライザー（以下EPMA）が用いられるようになってきた。本報告では、２試料の火山ガラスについてEPMA分析を行った。使用したEPMAは弘前大学・機器分析センター所属の日本電子製JXA－8800RL　、使用条件は加速電圧15 kV，試料電流8×10^{-9}アンペアである。補正計算はZAFに従った。

本遺跡より採集されたテフラより見出された火山ガラス及びその形態、構成鉱物は以下の通りである：

（１）テフラ１（５号溝）：火山ガラス（軽石型、バブルウォール型）、褐色ガラス、斜長石、石英、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱。火山ガラスは主に軽石型よりなる。

（２）テフラ2（６号溝）：火山ガラス（軽石型、バブルウォール型）、褐色ガラス、斜長石、石英、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱。火山ガラスは主に軽石型よりなる。
プラントオパール、両錐石英、ホルンブレンド、OSTを含む。

ガラスのEPMA分析値（表）から明らかなように、９成分の含有量について、既存の十和田aテフラ起源のガラス組成（青木・町田、2006）と良く一致する。

これらを総合すると、両テフラともに、十和田aテフラに帰属されると考えられる。テフラ２については、両錐石英、ホルンブレンド及びOSTを含むことから、他の堆積物の混入が考えられる。

（引用文献）

青木かおり・町田　　洋　（2006）　日本に分布する第四紀後期広域テフラの主元素組成　―K2O-TiO2図によるテフラの識別．地質調査研究報告、第57巻、第７/8号、239－258.

町田　　洋・新井　房夫　（2003）　新編火山灰アトラス　－日本列島とその周辺－．東京大学出版会、pp.336.

表　奥州市胆沢区作屋敷遺跡、テフラガラスのEPMA分析値

テフラ１　（5号溝）

	SiO2	TiO2	Al2O3	FeO＊	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	Total	N	EPMA
最小	76.35	0.24	12.28	1.75	0.03	0.36	1.92	3.59	1.31			
最大	77.86	0.52	12.90	2.12	0.18	0.51	2.20	4.48	1.55			
平均	77.06	0.36	12.48	1.94	0.08	0.43	2.05	4.18	1.43	99.92	21	WDS
標準偏差	0.342	0.065	0.144	0.090	0.033	0.038	0.065	0.220	0.061			

テフラ２　（6号溝）

最小	76.77	0.31	12.19	1.82	0.08	0.42	1.96	3.71	1.27			
最大	77.80	0.44	12.80	2.08	0.14	0.50	2.17	4.46	1.45			
平均	77.27	0.36	12.51	1.95	0.11	0.44	2.05	3.95	1.34	101.57	8	WDS
標準偏差	0.330	0.040	0.180	0.079	0.022	0.027	0.074	0.275	0.062			

青木・町田（２００６）

To-a

Sample ID	77.75	0.36	12.73	1.62	0.09	0.38	1.81	3.90	1.37	98.41	19	WDS
Sample ID	77.69	0.36	12.74	1.68	0.09	0.35	1.80	3.99	1.31	98.53	8	WDS
Sample ID	76.17	0.42	13.41	1.89	0.09	0.38	1.99	4.08	1.56	92.89	18	WDS

FeO※：鉄はすべてFeOとした、WDS：波長分散型EPMA、To－ａ：十和田ａテフラ、N：分析ポイント数を表す。

写　真　図　版

遺跡全景（上が北）

調査区全景（上が南）

写真図版１　調査区全景航空写真

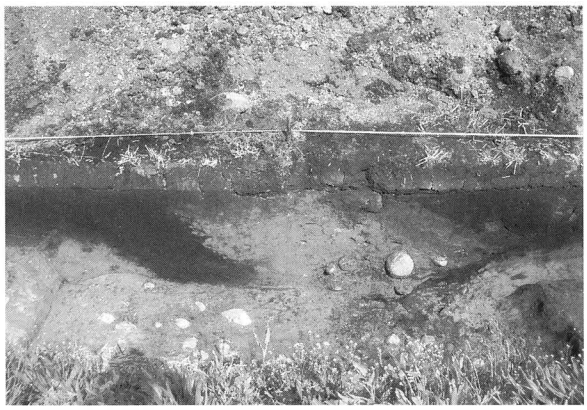
南側調査区全景①（西から）

南側調査区全景②（西から）

西側調査区全景①（南から）

西側調査区全景②（南から）

写真図版２　南側・西側調査区全景



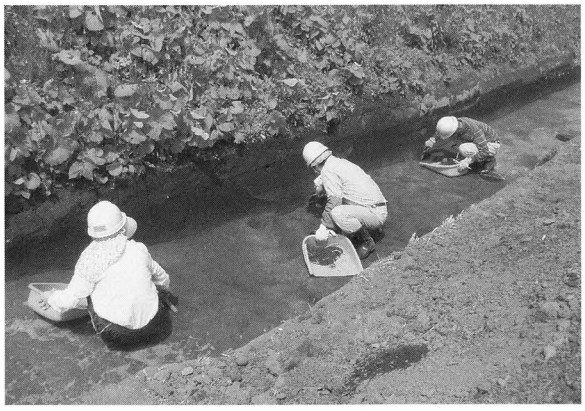
調査区西部基本土層①（東から）

調査区西部基本土層②（西から）

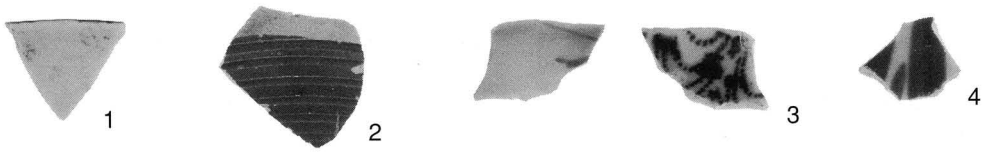
調査風景①

調査風景②

調査風景③



調査風景④



写真図版３　調査風景、陶磁器（Ｓ＝１：２）

遺跡全景（上が北）

調査区全景（上が西）

写真図版４　遺跡全景

1号竪穴住居跡平面（南から）

1号竪穴住居跡断面（南から）

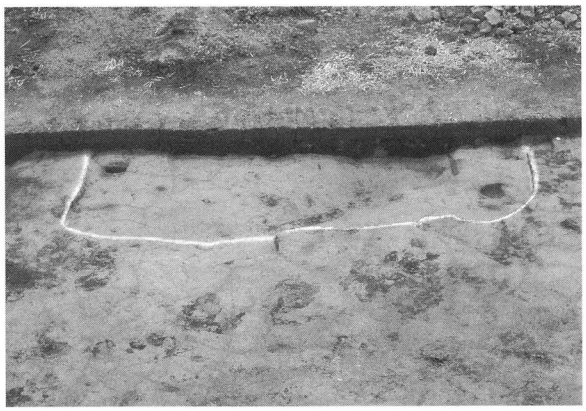
1号竪穴住居跡断面（西から）

写真図版5　1号竪穴住居跡

2号竪穴住居跡平面（北から）

2号竪穴住居跡断面（北から）

2号竪穴住居跡煙道部断面（西から）



1号竪穴状遺構平面（北から）

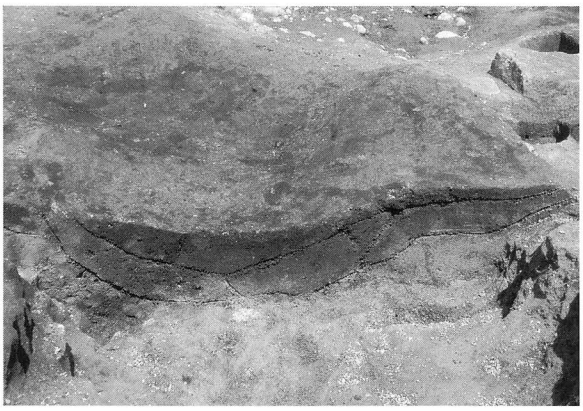
1号竪穴状遺構断面（北から）

写真図版6　2号竪穴住居跡、1号竪穴状遺構

1号土坑平面（南から）

1号土坑断面（南から）

2号土坑平面（南から）



2号土坑断面（南から）

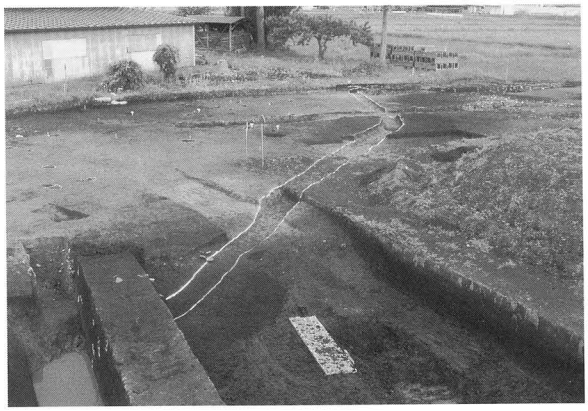
3号土坑平面（南から）

3号土坑断面（南から）

4号土坑平面（南から）

4号土坑断面（西から）

写真図版7　1～4号土坑



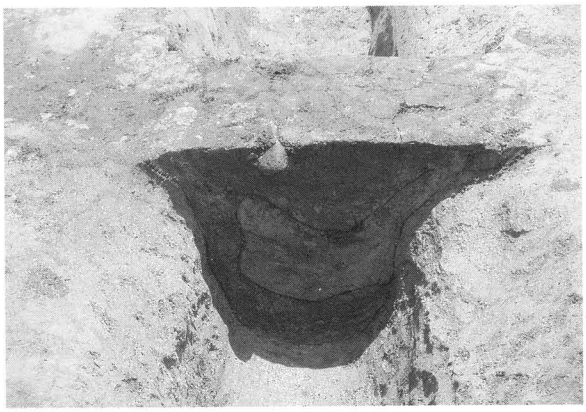
1号溝跡平面（東から）

1号溝跡断面（東から）

2号溝跡平面（西から）

2号溝跡断面（南から）

3号溝跡平面（南から）



3号溝跡断面（北から）

4号溝跡平面（南から）

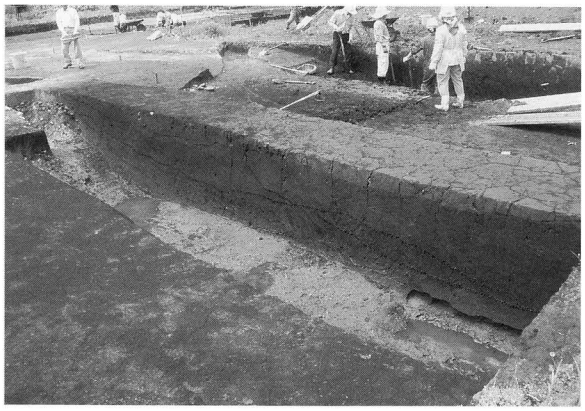
1号溝跡調査状況

写真図版8　1～4号溝跡

1号旧河道断面（西から）

2号旧河道平面（西から）

3号旧河道断面（東から）



4号旧河道断面（南から）

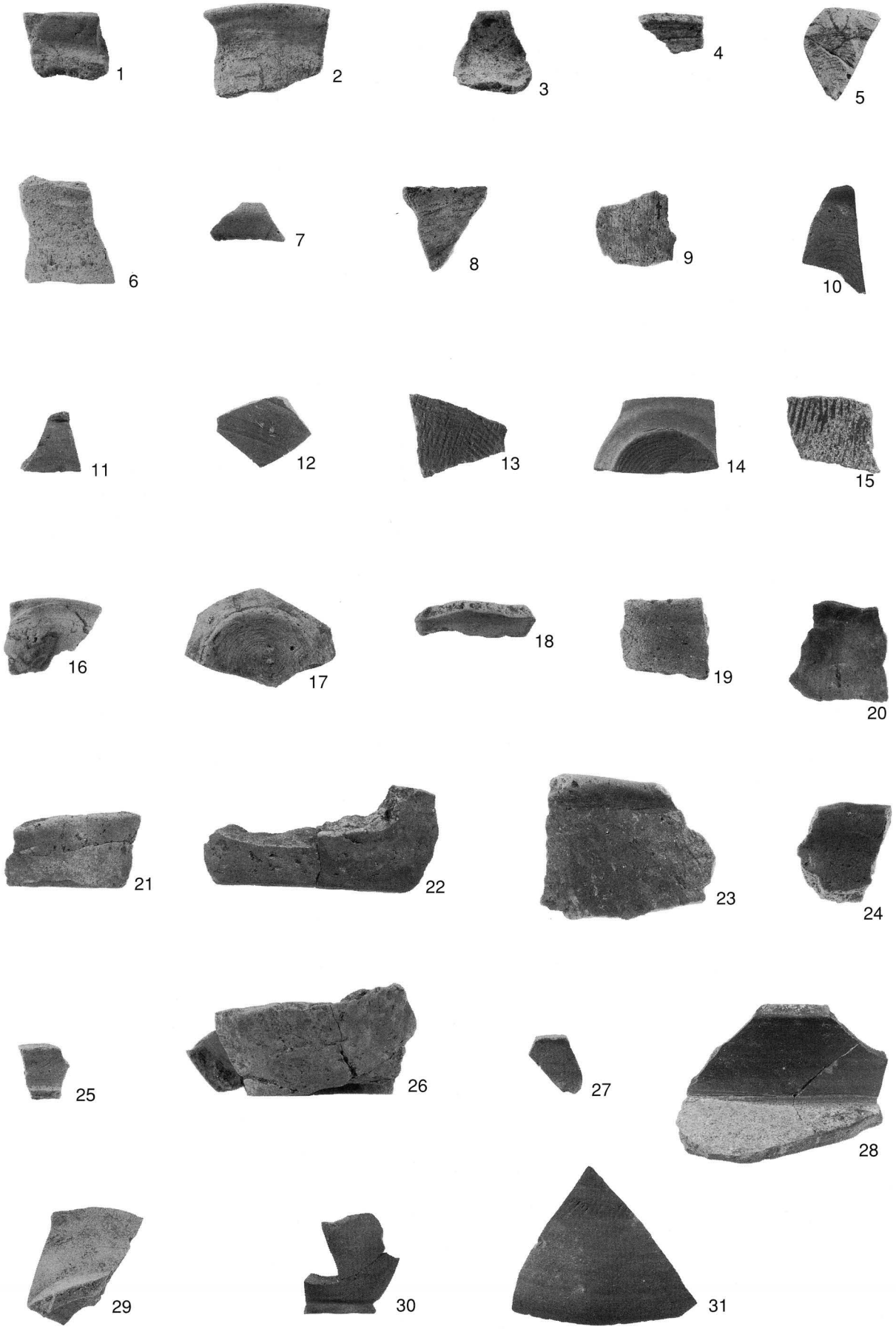
作業風景①

作業風景②

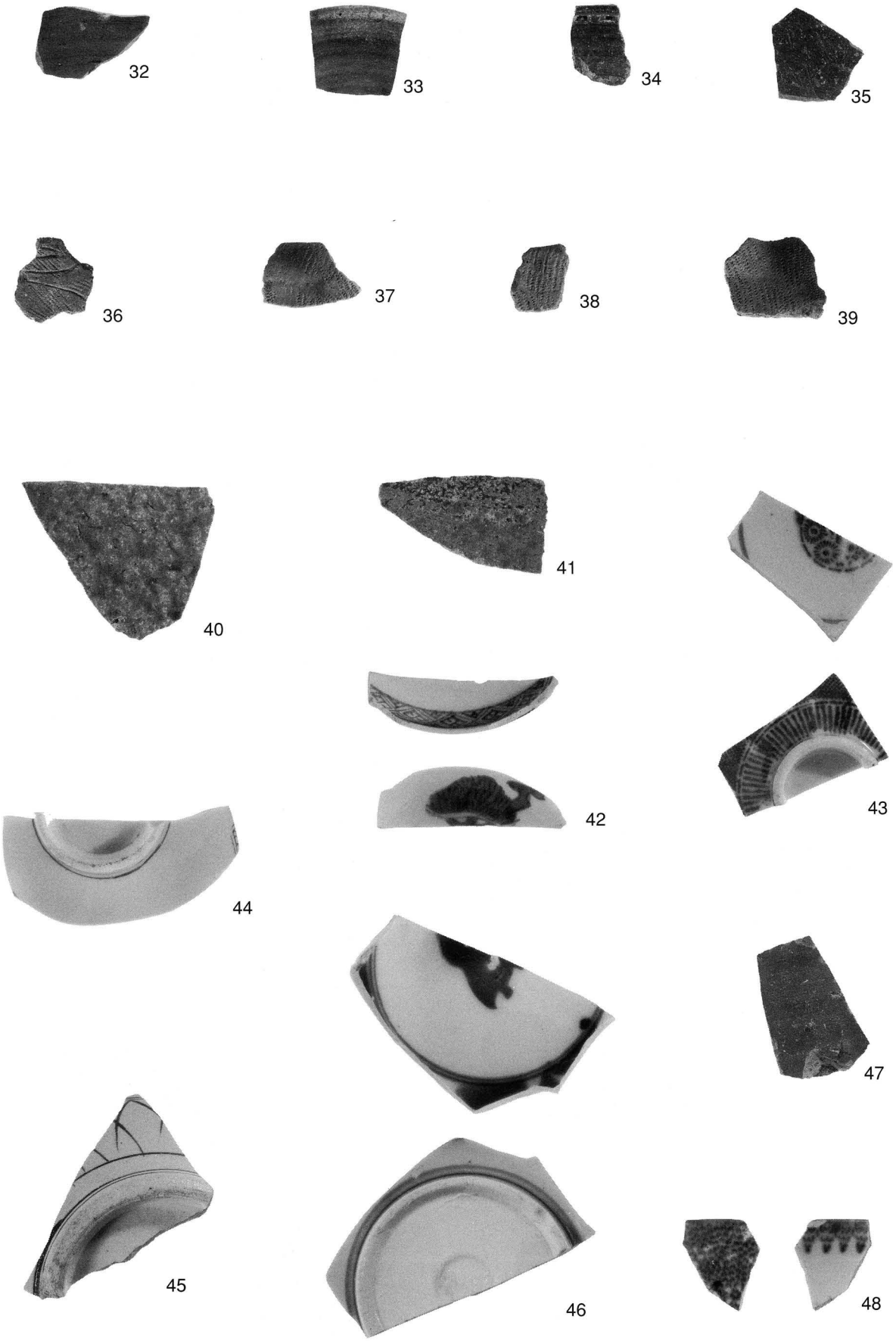
作業風景③

作業風景④

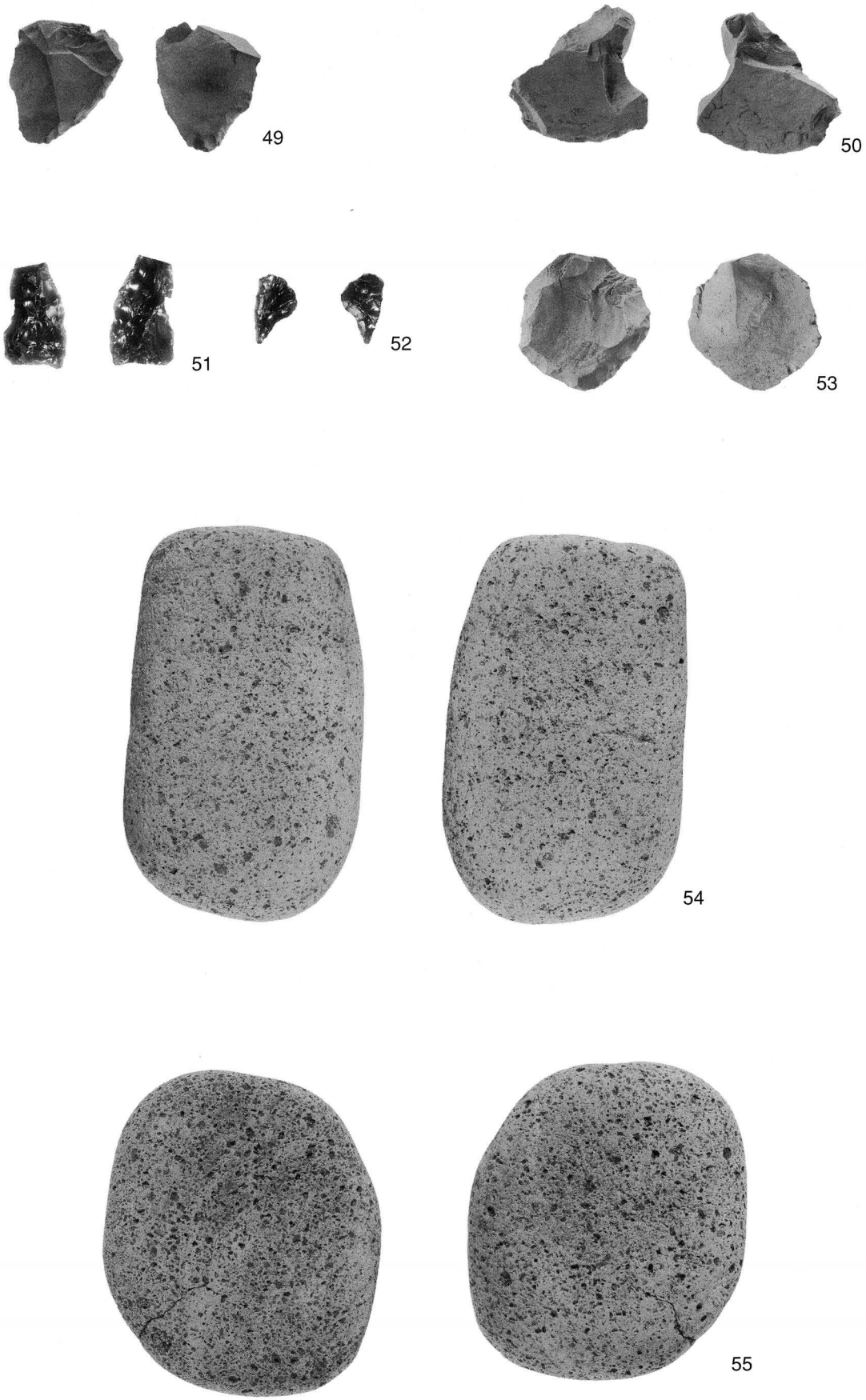
写真図版９　１～４号旧河道、作業風景



写真図版10　古代の土器（1）（S＝1：3）



写真図版11　古代の土器（2）、弥生土器、陶磁器（S＝1：3、※40～48はS＝1：2）



写真図版12　石器（S＝1：3）

遺跡遠景（南から）

遺跡全景（直上※上が北）

写真図版13　遺跡全景

1号竪穴住居跡平面（北から）

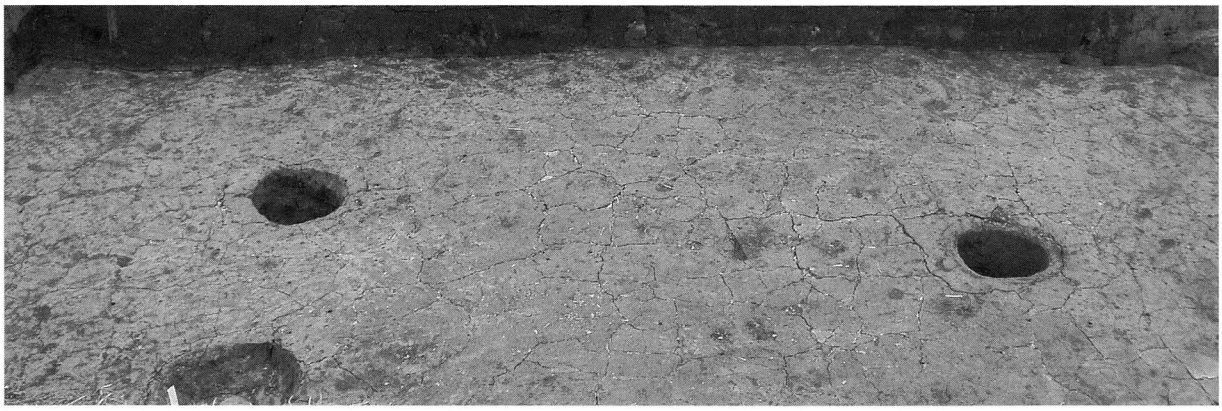
1号竪穴住居跡断面（西から）

1号竪穴住居跡遺物出土状況（北から）

1号竪穴住居跡内土坑５（西から）

写真図版14　1号竪穴住居跡

2号竪穴住居跡平面（北から）



2号竪穴住居跡断面（東から）

2号竪穴住居跡炭化材・焼土出土状況（北東から）

2号竪穴住居跡PP4断面（南から）

写真図版15　2号竪穴住居跡

3号竪穴住居跡平面（南から）

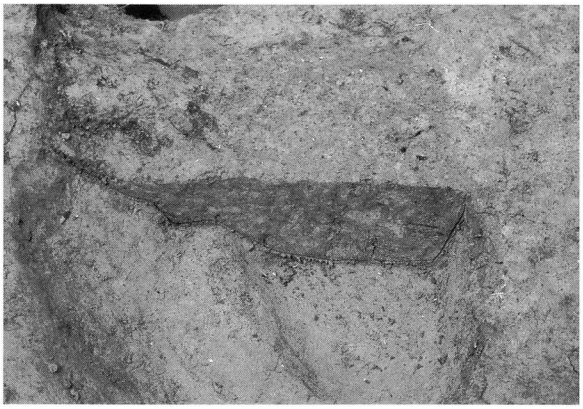
3号竪穴住居跡断面（東から）

3号竪穴住居跡断面（南から）

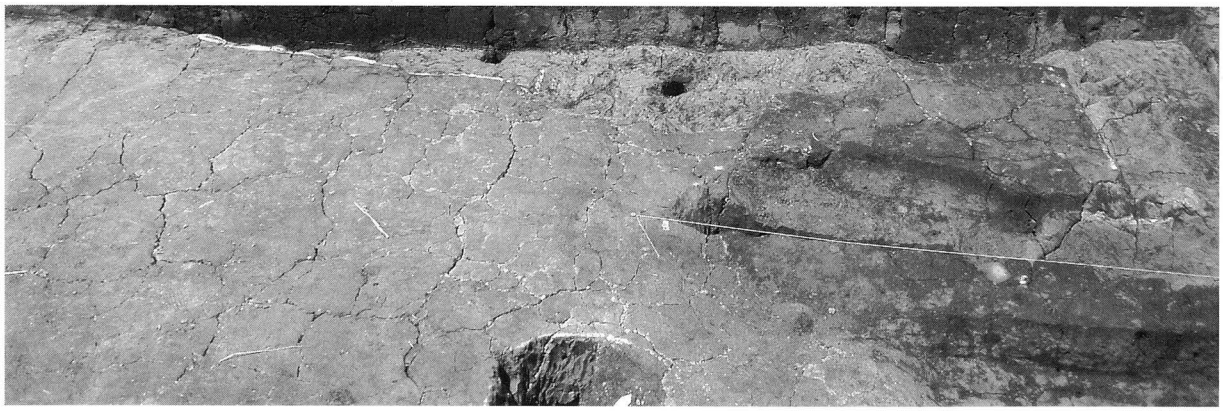
写真図版16　3号竪穴住居跡（1）

3号竪穴住居跡平面（西から※貼床除去後）

3号竪穴住居跡カマド断面（南から）



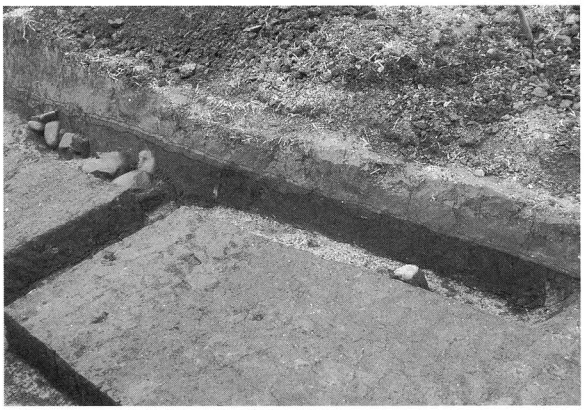
3号竪穴住居跡貼床下PP（東から）



4号竪穴住居跡平面（東から）

写真図版17　3号竪穴住居跡（2）、4号竪穴住居跡

5号竪穴住居跡平面（西から）



5号竪穴住居跡断面（北から）

5号竪穴住居跡カマド断面（北から）

5号竪穴住居跡カマド煙道部土器出土状況（北から）

5号竪穴住居跡土器出土状況（北から）

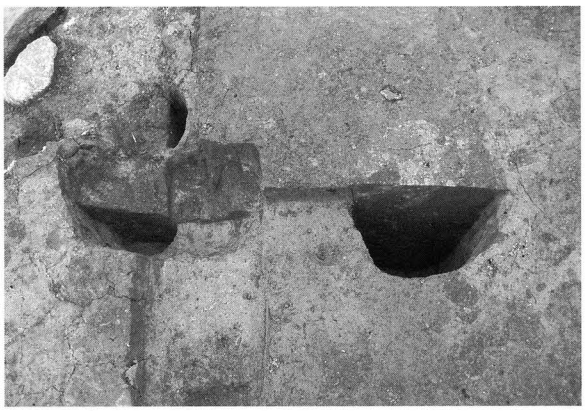
写真図版18　5号竪穴住居跡

6号竪穴住居跡平面（東から）

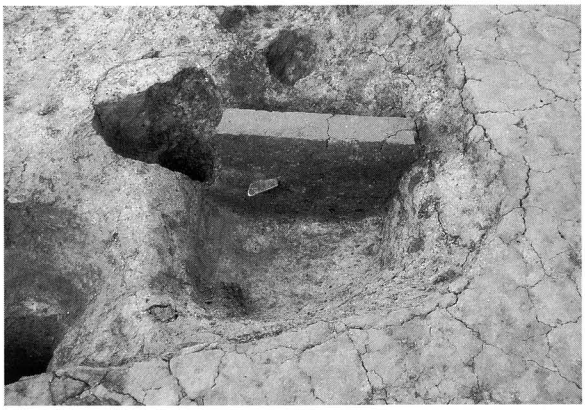
6号竪穴住居跡断面（東から）

写真図版19　6号竪穴住居跡（1）

6号竪穴住居跡平面（東から※貼床除去後）



6号竪穴住居跡カマド燃焼部とPP12断面（西から）



6号竪穴住居跡内土坑4断面（南から）

6号竪穴住居跡内土坑3断面（南から）

6号竪穴住居跡内土坑3土器出土状況（南から）

写真図版20　6号竪穴住居跡（2）

7号竪穴住居跡平面（西から）

7号竪穴住居跡断面（南から）

写真図版21　7号竪穴住居跡

8号竪穴住居跡平面（西から）

1号竪穴状遺構平面（西から）

写真図版22　8号竪穴住居跡、1号竪穴状遺構

1号掘立柱建物跡平面（南から）

1号掘立柱建物跡平面（南から）

写真図版23　1号掘立柱建物跡（1）

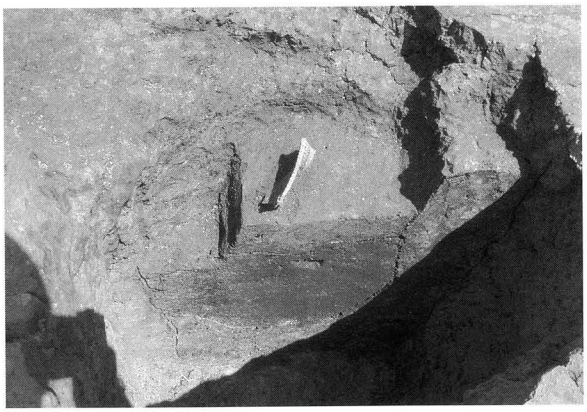
1号掘立柱建物跡内土坑平面（南から）

1号掘立柱建物跡内土坑断面（南から）

1号掘立柱建物跡PP 1断面（西から）

1号掘立柱建物跡PP 2断面（西から）

1号掘立柱建物跡PP 4断面（西から）

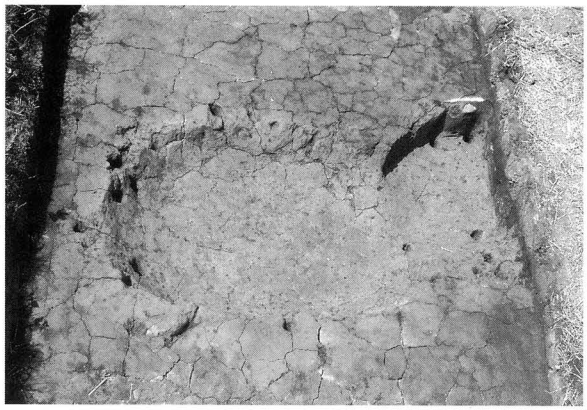


1号掘立柱建物跡PP 5断面（南から）

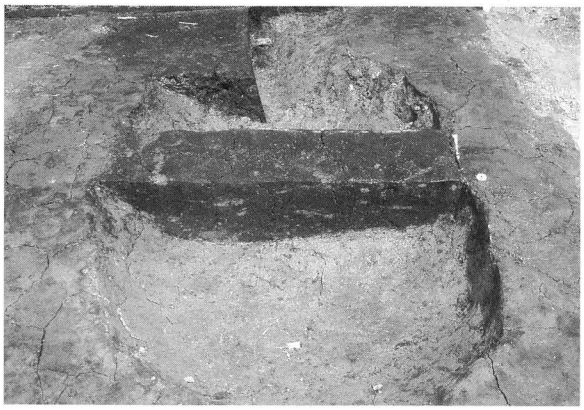
1号土坑平面（東から）

2・10号土坑平面（南から）

写真図版24　1号掘立柱建物跡（2）、1・2・10号土坑



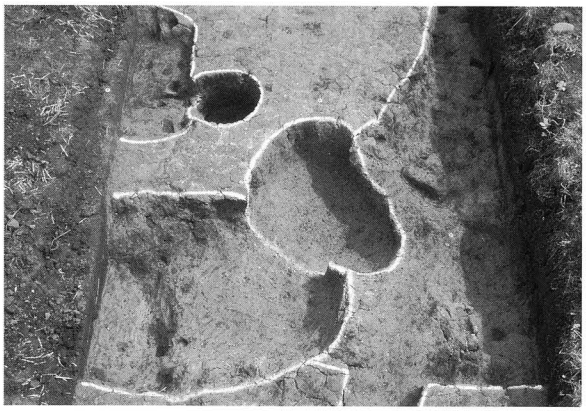
2・10号土坑平面（南から）



2号土坑断面（西から）

2・10号土坑断面（南から）

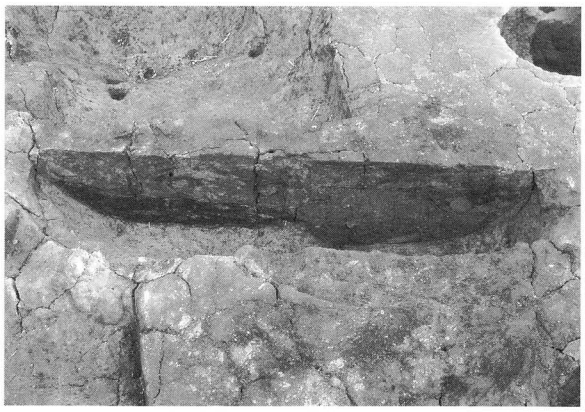
10号土坑断面（西から）



3・4・5号土坑、1号焼土遺構平面（北から）

5号土坑遺物出土状況（西から）

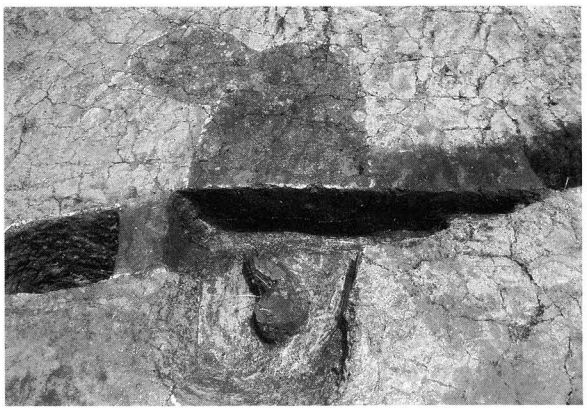
3号土坑断面（西から）



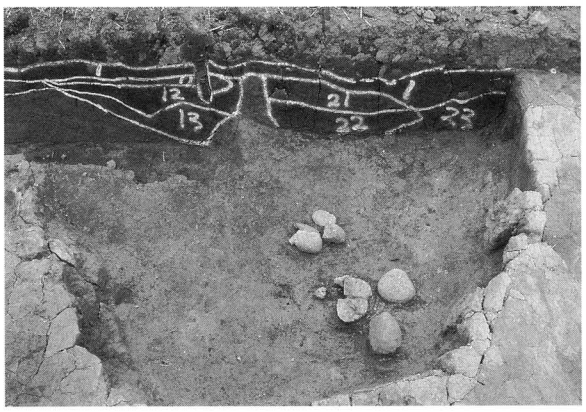
5号土坑、1号焼土遺構断面（西から）

写真図版25　2～5・10号土坑、1号焼土遺構

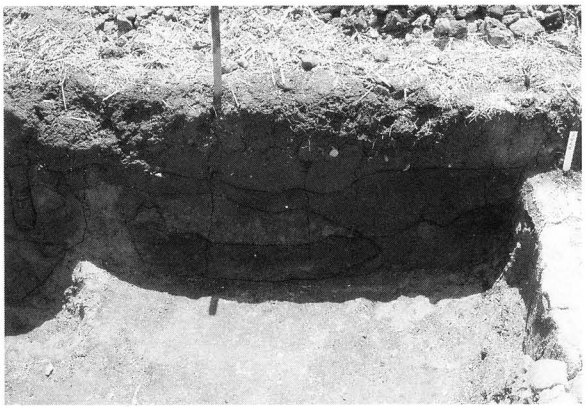
6号土坑平面（西から）



6号土坑断面（西から）

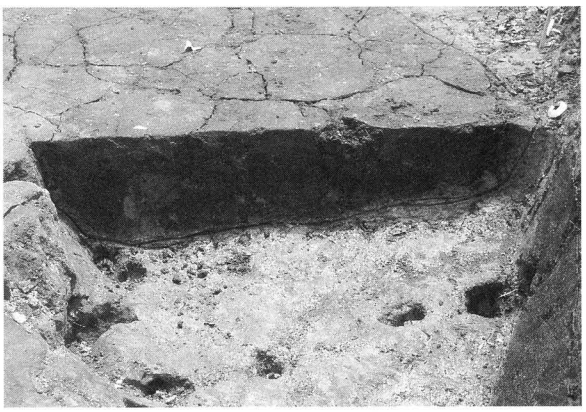


8号土坑平面（北から）



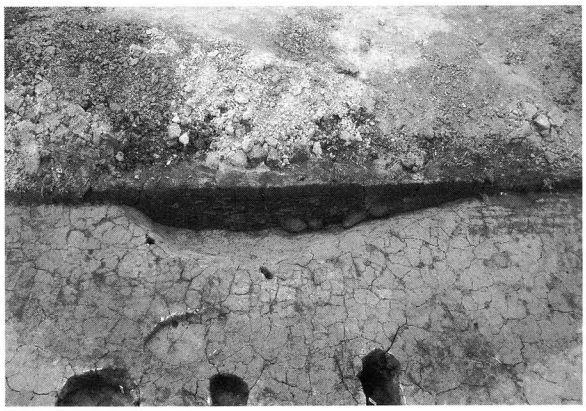
8号土坑断面（北から）

9号土坑平面（東から）



9号土坑断面（北から）

11号土坑平面・断面（西から）



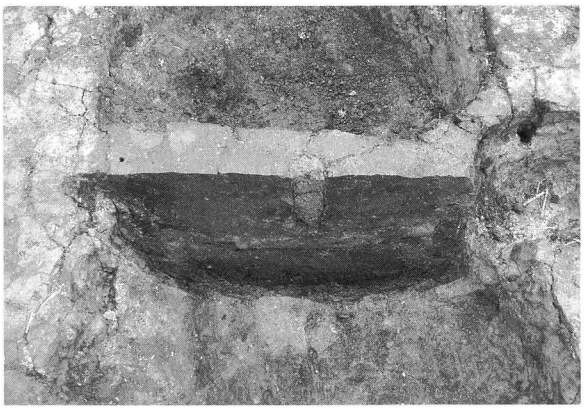
12号土坑平面（北から）

写真図版26　6・8・9・11・12号土坑

13号土坑平面（西から）

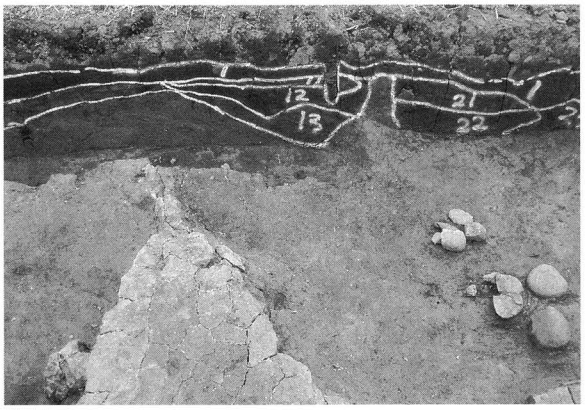
13号土坑炭化材出土状況（西から）

13号土坑炭化材出土状況（西から）



13号土坑断面（西から）

14号土坑平面（南から）

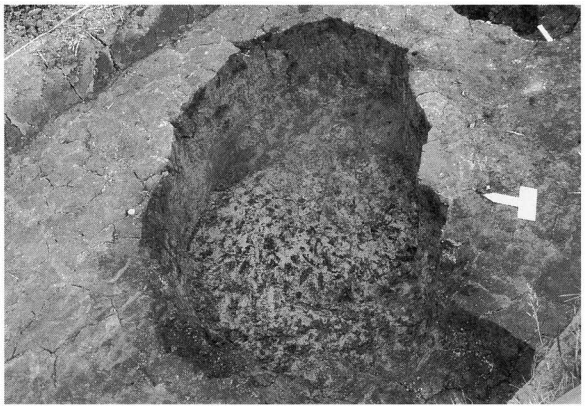


14号土坑断面（北から）

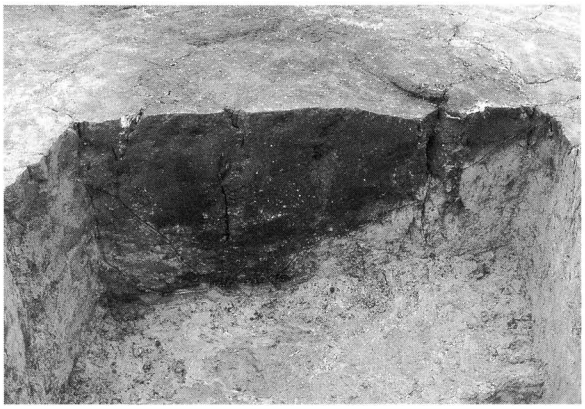
15号土坑平面（東から）

15号土坑断面（東から）

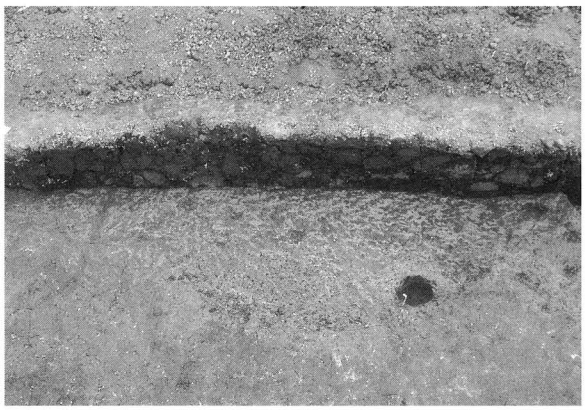
写真図版27　13～15号土坑



16号土坑平面（北から）



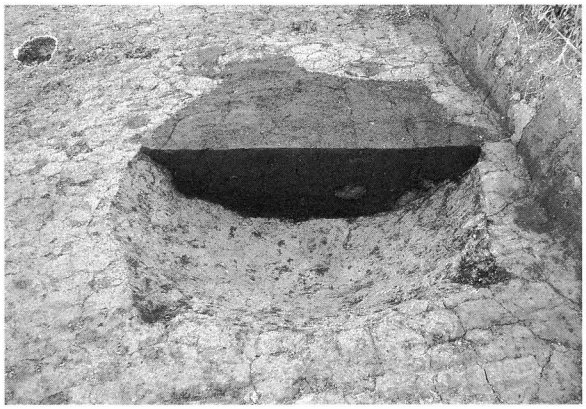
16号土坑断面（南から）



17号土坑平面（北から）

17号土坑断面（北から）

18号土坑平面（南から）



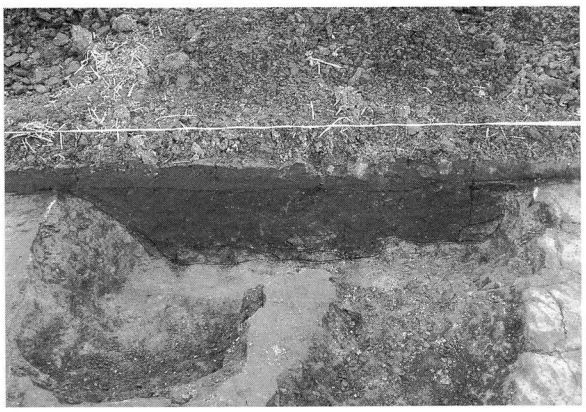
18号土坑断面（南から）

19号土坑平面（南から）

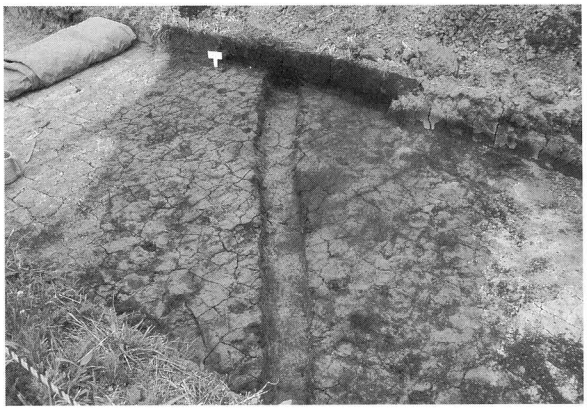
21号土坑断面（南から）

写真図版28　16～19・21号土坑

20号土坑平面（東から）



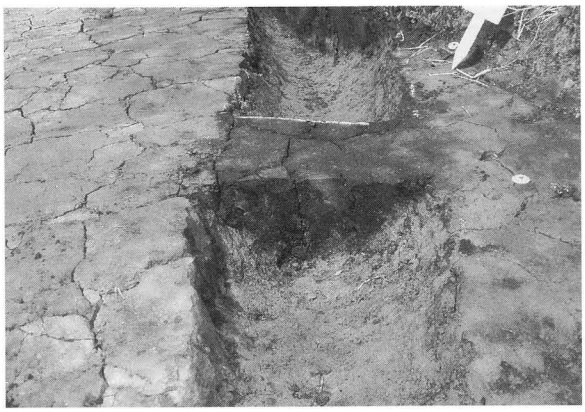
20号土坑断面（東から）



1号溝跡平面（西から）

1号溝跡断面（西から）

2号溝跡平面（南から）



2号溝跡断面（南西から）

3号溝跡平面（西から）

3号溝跡断面（東から）

写真図版29　20号土坑、1～3号溝跡

4号溝跡平面（南から）

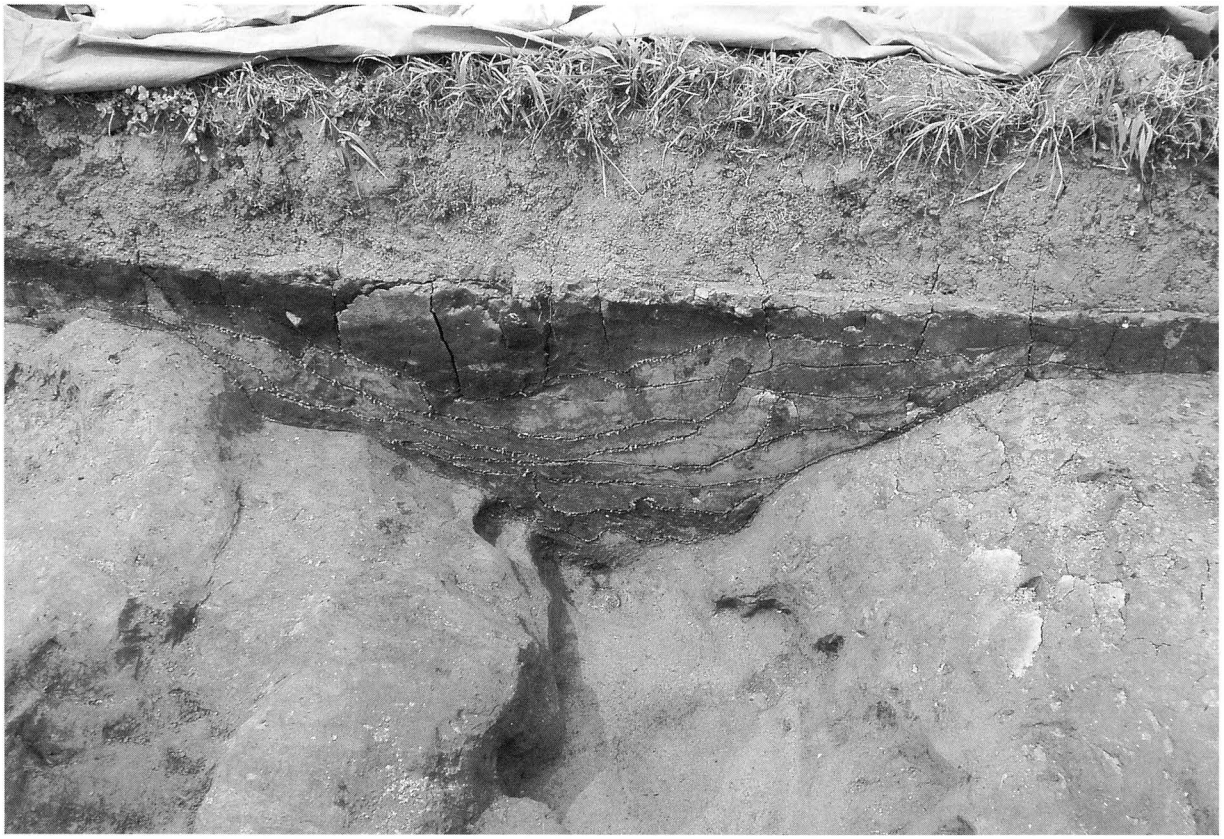
4号溝跡断面（東から）

5号溝西側断面（南から）

5号溝東側断面（南から）

5号溝跡平面（南から）

写真図版30　4・5号溝跡



6・8号溝跡断面（南から）

8号溝跡平面（南から）

7号溝跡平面（西から）

9・10号溝跡平面（北から）

9・10号溝跡断面（北から）

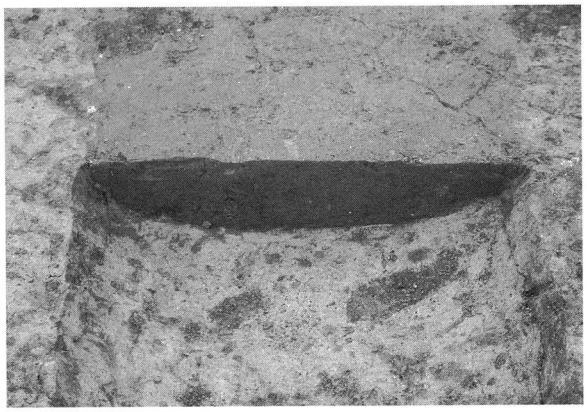
写真図版31　6～10号溝跡

11号溝跡平面（南から）

11号溝跡断面（北から）

12号溝跡平面（西から）

13号溝跡平面（南から）



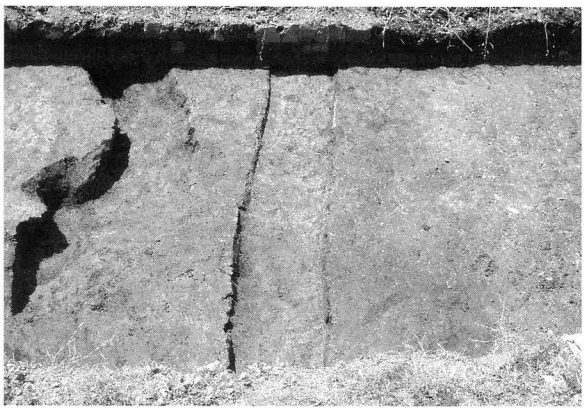
13号溝跡断面１（南から）

13号溝跡断面２（南から）

14号溝跡平面（南から）

14号溝跡断面（南から）

写真図版32　11～14号溝跡



15号溝跡平面（北から）

15号溝跡断面（南から）

16号溝跡平面（西から）

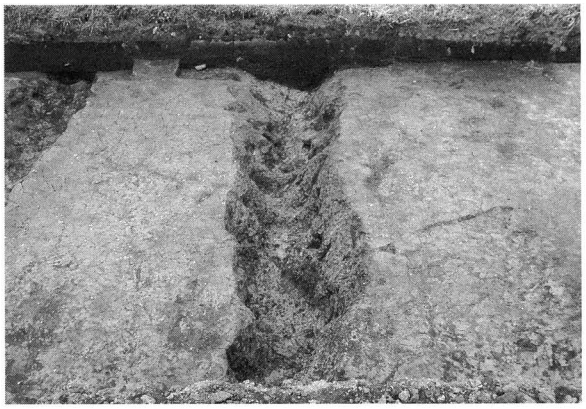
16号溝跡断面１（東から）

16号溝跡断面２（東から）

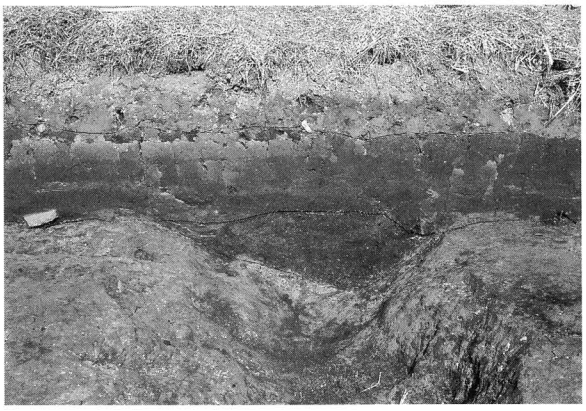
17号溝跡平面（北から）

17号溝跡断面（北から）

写真図版33　15～17号溝跡



18号溝跡平面（西から）



18号溝跡断面（西から）

19号溝跡平面（西から）

19号溝跡断面（西から）

20号溝跡平面（南から）

20号溝跡断面（南から）

21号溝跡平面（南から）

21号溝跡断面（南から）

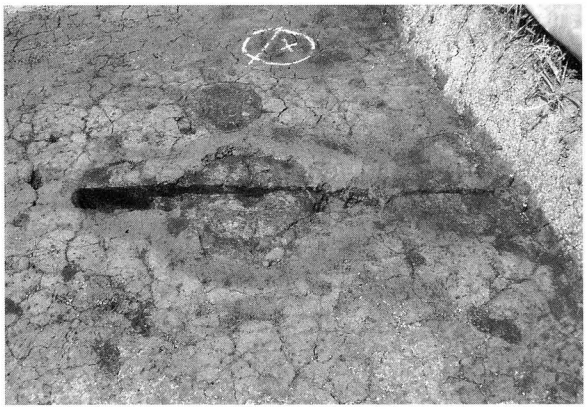
写真図版34　18～21号溝跡

1号焼土遺構検出状況（北から）

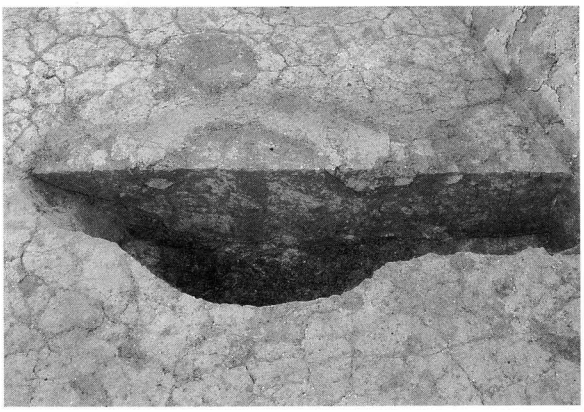
1号焼土遺構断面（北から）

2号焼土遺構検出状況（南から）

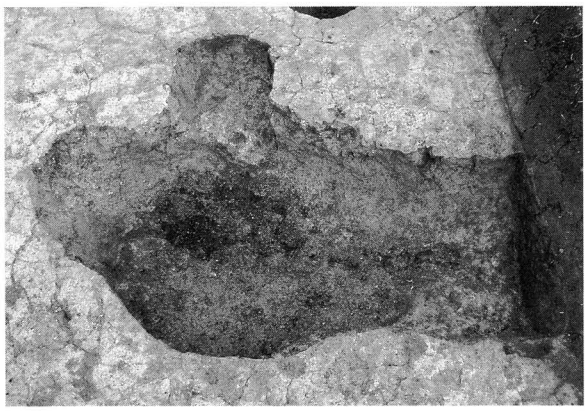
2号焼土遺構検出状況アップ（南から）



2号焼土遺構サブトレ断面（南から）



2号焼土遺構断面（南から）

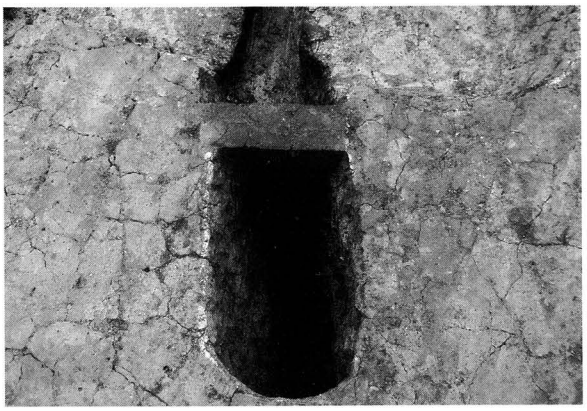


2号焼土遺構平面（南から）

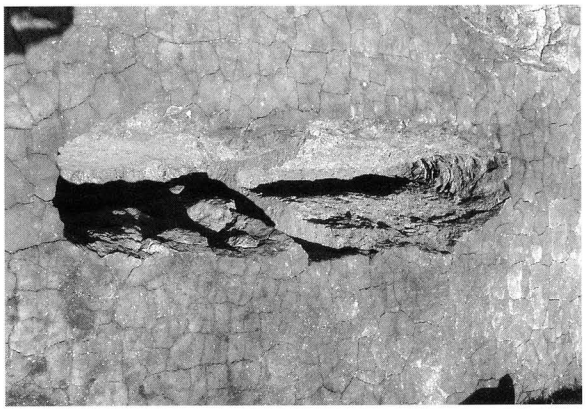
2号焼土遺構平面（東から）

写真図版35　1・2号焼土遺構

1号陥し穴平面（南から）



1号陥し穴断面（北から）



2号陥し穴平面（南から）

2号陥し穴断面（南から）

作業風景1（北西から）

作業風景2（東から）

調査前風景（西から）

調査区中央部神社前（東から）

写真図版36　1・2号陥し穴、作業風景

表土除去作業（西から）

調査区西部（南から）

調査区北部調査中（西から）

調査区北部調査中（北西から）

調査区中央部（北から）

調査区中央部調査中（南から）

調査区南部（東から）

調査区中央部調査中（南から）

写真図版37　作業風景

実測作業中（北から）

実測作業中（西から）

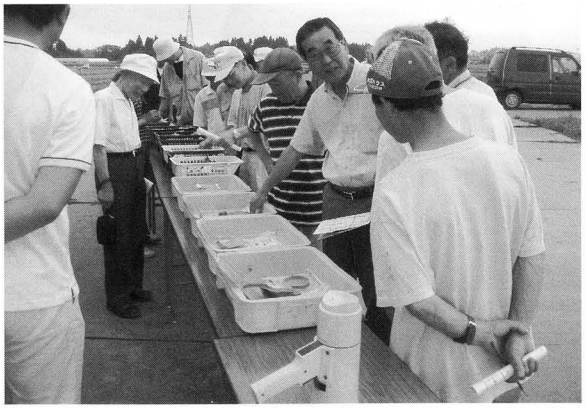
調査中（南から）

調査中（南西から）

現地公開 1

現地公開 2

現地公開 3



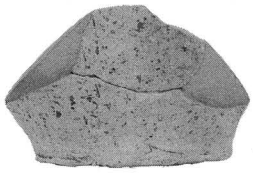
現地公開 4

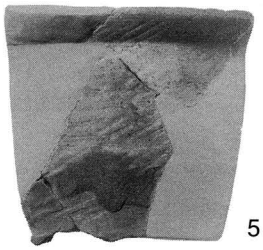
写真図版38　作業風景、現地公開

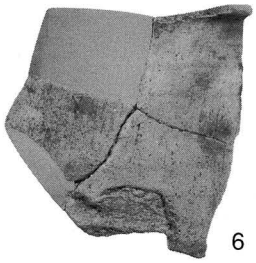
1

2

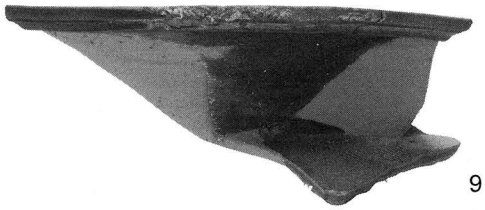
3

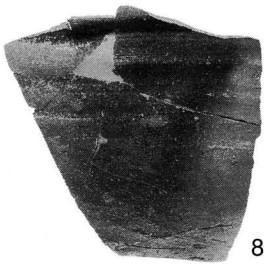

4

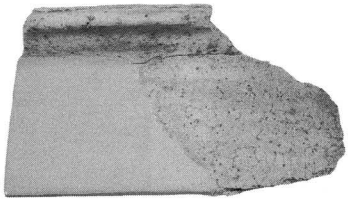

5

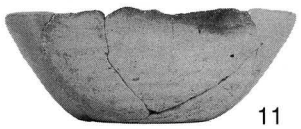

6

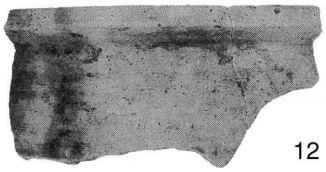
7


9


8

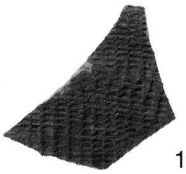

10


11

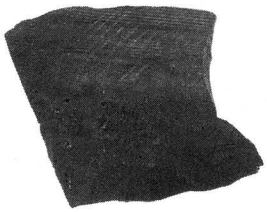

12

13

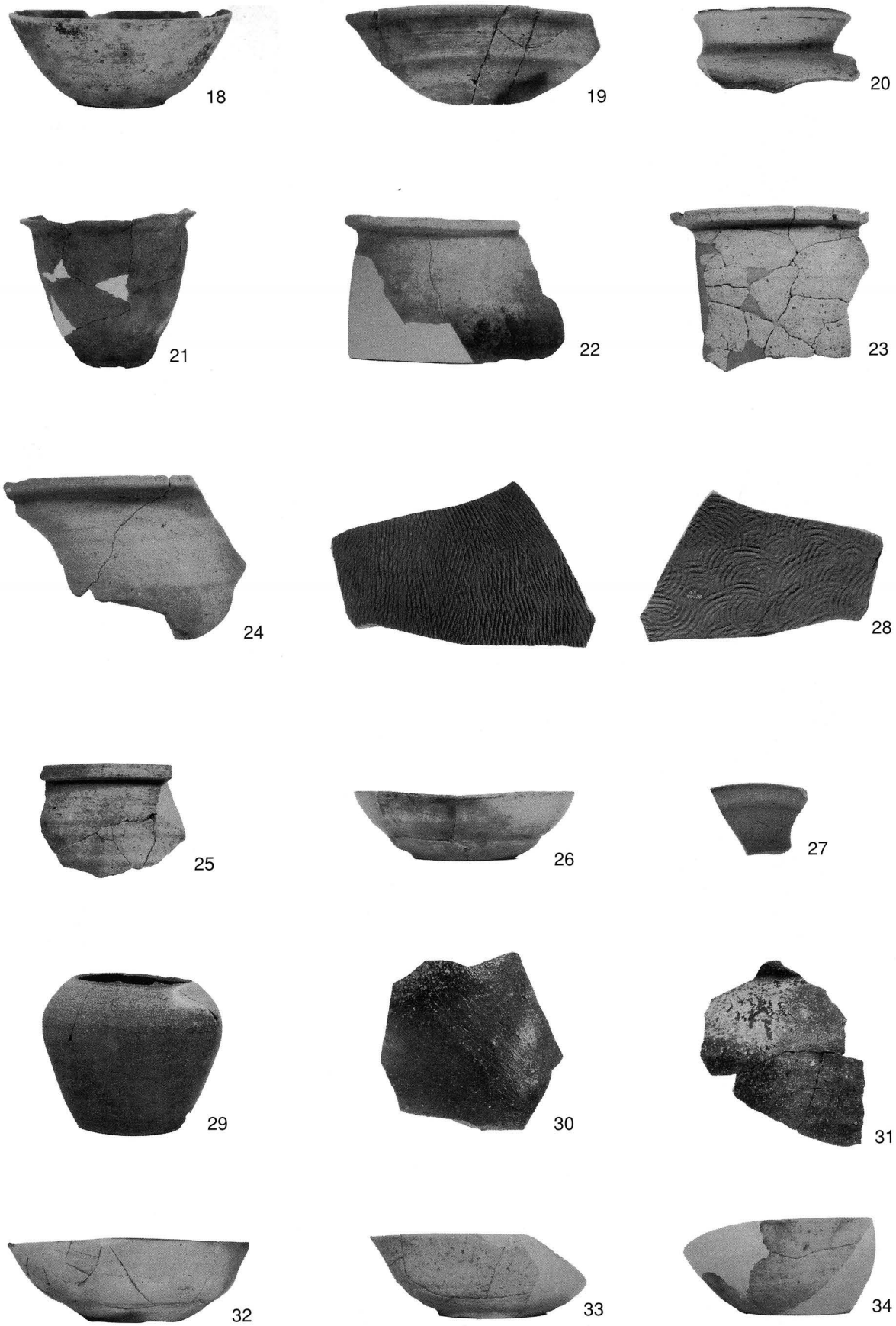
14


15

17


16

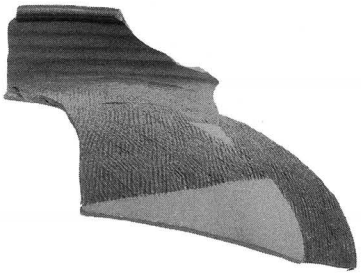
写真図版39　古代の土器（1）（S＝1：3、9は1：6）

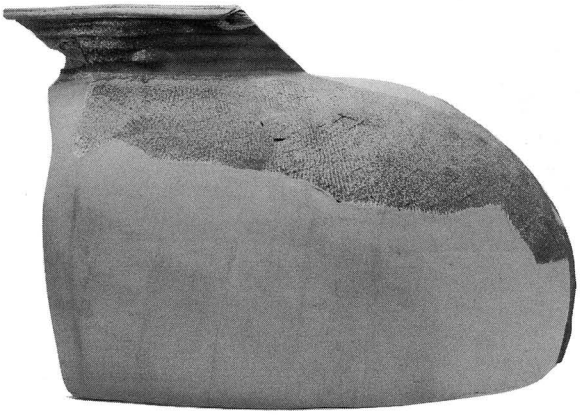


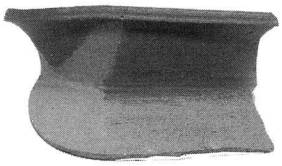
写真図版40　古代の土器（２）（Ｓ＝１：３）

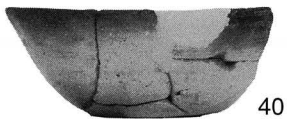
35

36

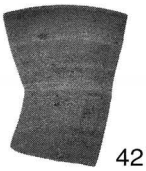

38


37


39

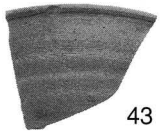

40

41

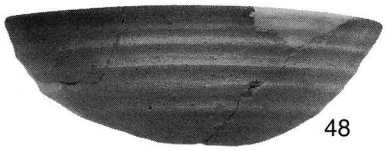

42

44

46

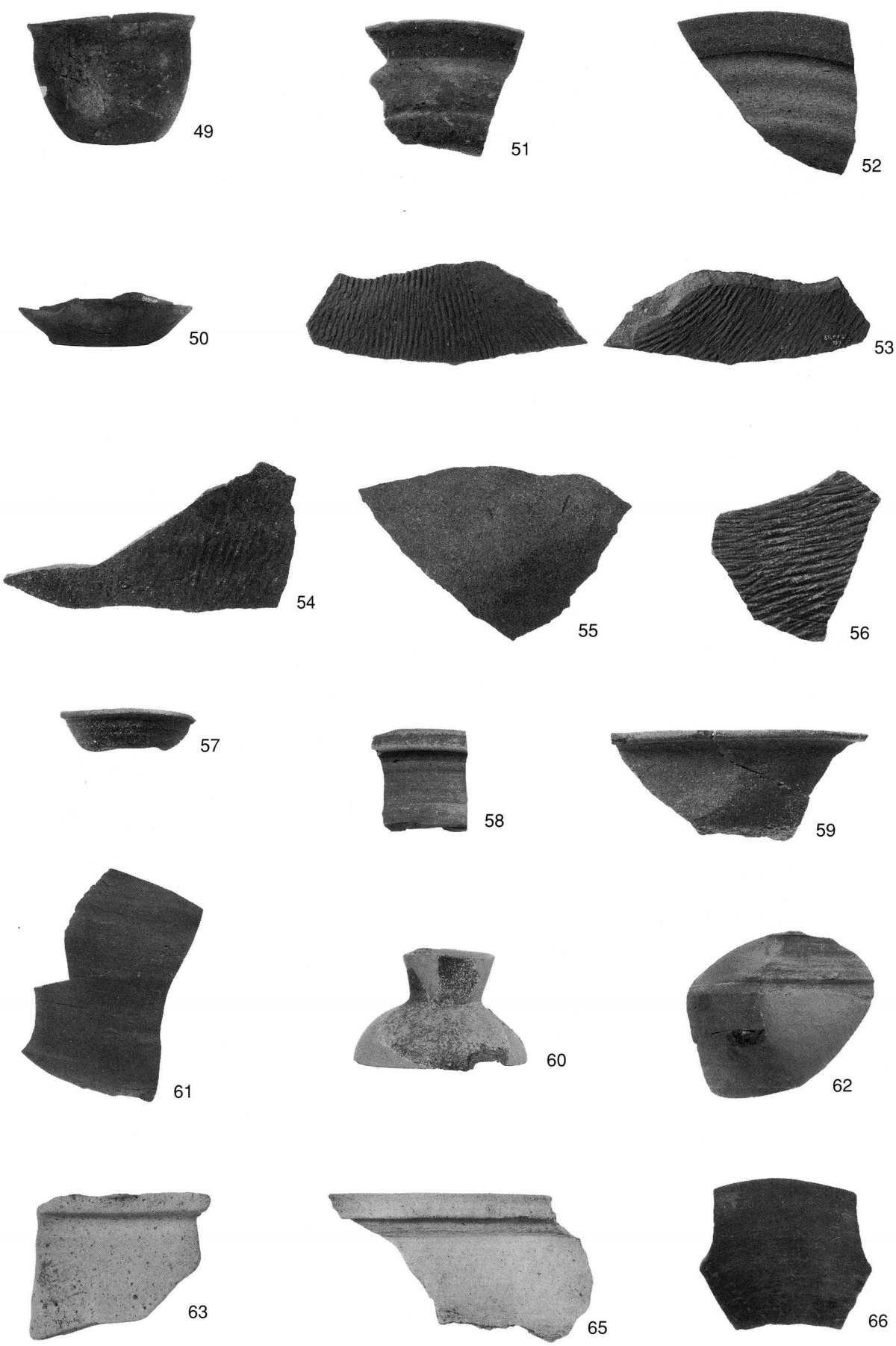

43

47

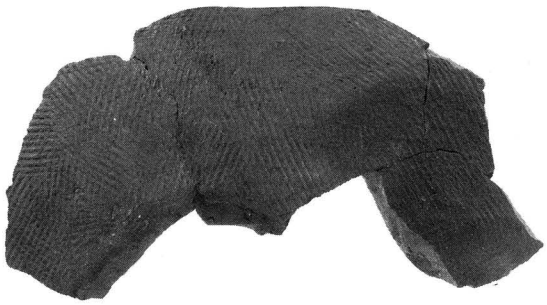

48

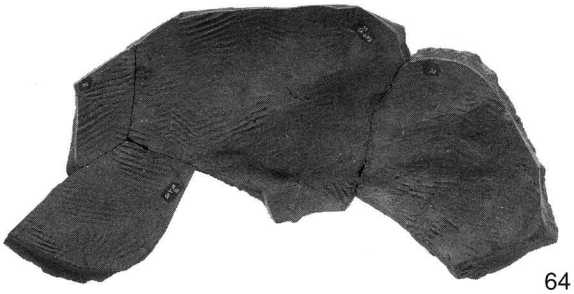
45

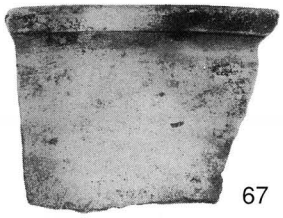
写真図版41　古代の土器（３）（Ｓ＝１：３、37は１：６）

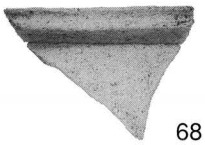


写真図版42　古代の土器（４）（Ｓ＝１：３）

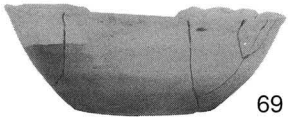



64


67

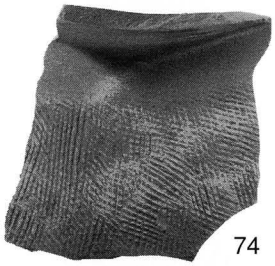

68

72

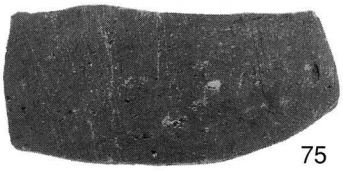

69

70

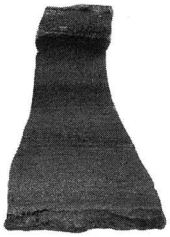
71


74

73

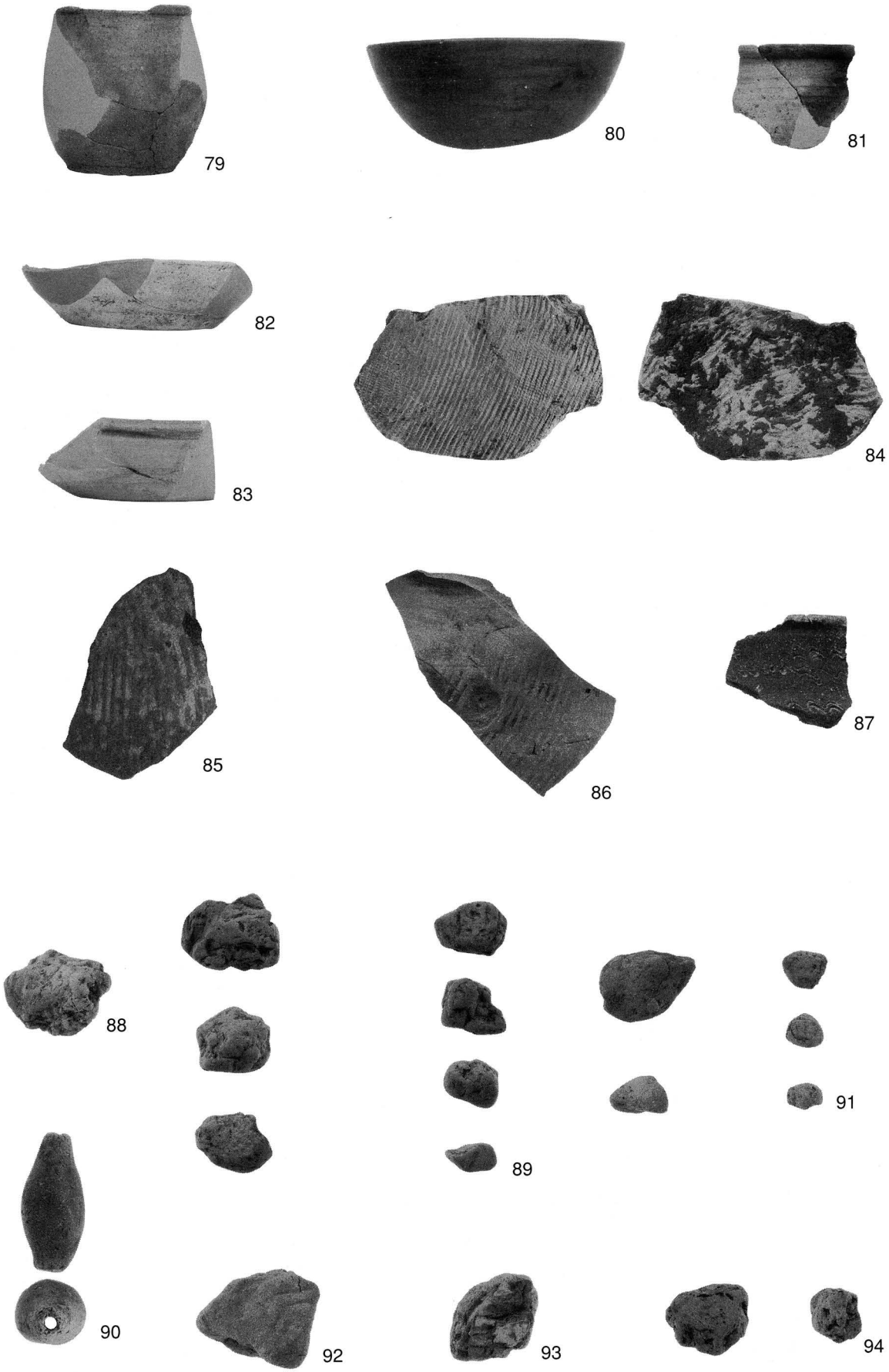

75

76

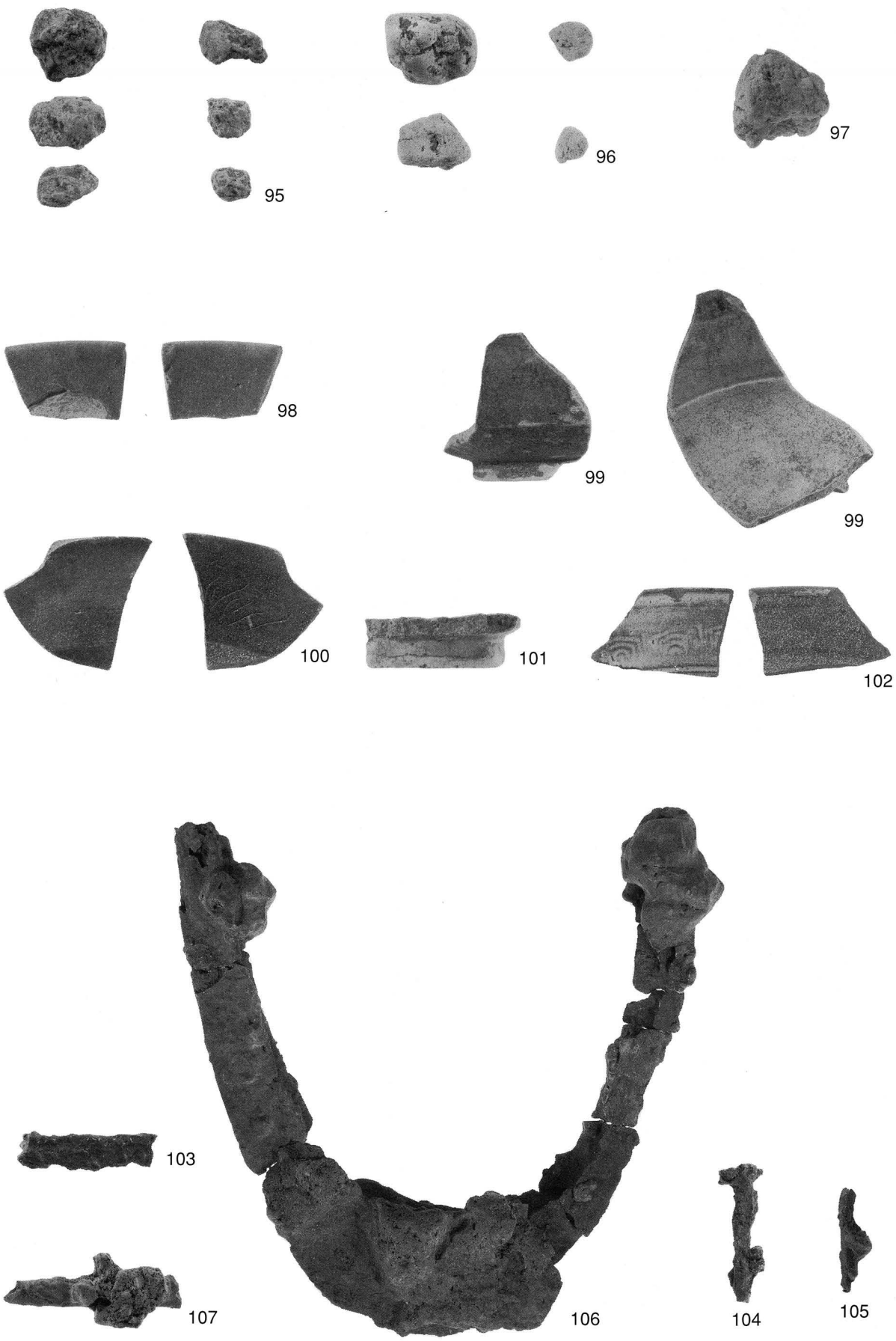

77

78

写真図版43　古代の土器（5）（S＝1：3）



写真図版44　古代の土器（6）、土製品（1）（S＝1：3、※88～94はS＝1：2）



写真図版45　土製品（2）、陶磁器、鉄製品（S＝1：2）

108

109

写真図版46　石器（S＝1：3）

報告書抄録

ふりがな	あまさかいせき・ぼたんのいせき・さくやしきいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	尼坂遺跡・牡丹野遺跡・作屋敷遺跡発掘調査報告書
副書名	経営体育成基盤整備事業都鳥地区関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第569集
編著者名	星雅之・田中美穂
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　TEL (019) 638－9001
発行年月日	2010年2月19日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
あまさかいせき 尼坂遺跡	いわてけんおうしゅうし 岩手県奥州市 いさわくなったあざ 胆沢区南都田字 こくぶん 国分370-1	03215	NE25-1123	39度 07分 34秒	141度 04分 38秒	2008.05.01 ～ 2008.05.15	322㎡	経営体育成基盤整備事業都鳥地区
ぼたんのいせき 牡丹野遺跡	いわてけんおうしゅうし 岩手県奥州市 いさわくなったあざ 胆沢区南都田字 こくぶん 国分371ほか		NE25-0185	39度 07分 45秒	141度 04分 47秒	2008.04.10 ～ 2008.06.12	2,698㎡	
さくやしきいせき 作屋敷遺跡	いわてけんおうしゅうし 岩手県奥州市 いさわくなったあざ 胆沢区南都田字 さくやしき 作屋敷487ほか		NE25-0144	39度 07分 53秒	141度 04分 24秒	2008.06.09 ～ 2008.08.12	2,044㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
尼坂遺跡	散布地	近世	なし	陶磁器	
牡丹野遺跡	集落跡	古代	竪穴住居跡2棟 竪穴状遺構1基 土坑4基 溝跡3条 柱穴状土坑32個 旧河道2条	土師器 弥生土器 陶磁器 石器	
		時期不明	溝跡1条		
		現代？	溝跡1条 旧河道2条		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
作屋敷遺跡	集落跡	縄文時代	陥し穴2基	土師器・須恵器	
		古代	竪穴住居跡8棟 掘立柱建物跡1棟 竪穴状遺構1基 土坑21基 溝跡18条 焼土遺構2基 柱穴状土坑265個	陶磁器	
		中世～近世	溝跡1条		
		近世～現代	土坑1基 溝跡2条		

要約

尼坂遺跡・牡丹野遺跡・作屋敷遺跡は、奥州市胆沢区南都田に所在する、縄文時代・平安時代・中世・近世までの多岐にわたる複合遺跡である。

尼坂遺跡は、過去の調査において縄文時代早期～前期の遺構・遺物が見つかることで知られていた。また、平安時代の須恵器壺などの優品も出土している。今回の調査では近世～現代の陶磁器類が出土したが、遺構は未検出であった。過去の調査地点が福原段丘及びその縁辺であるのに対して、今回の調査地点は一段低い水沢段丘高位面であることも遺構・遺物が皆無に近い状況であった要因として考えられる。

牡丹野遺跡は、平安時代の遺構・遺物を中心に、弥生時代及び中世～近代の遺物が出土した。今回の調査では遺構・遺物ともに希薄の状況であったが、旧河道などの検出があり当時の旧地形を復元する手掛かりとなる。また、平安時代の集落については調査地外に所在すると考えられる。

作屋敷遺跡は、縄文時代の陥し穴状遺構、平安時代や中世の遺構・遺物、近世～現代までの陶磁器が出土した。調査成果からは、十和田ａ火山灰降下より古い時期を主体とする集落跡と考えられる。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第569集

尼坂遺跡・牡丹野遺跡・作屋敷遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業都鳥地区関連遺跡発掘調査

印　刷　平成22年２月16日
発　行　平成22年２月19日

編　集　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電　話　(019) 638－9001

発　行　岩手県県南広域振興局農林部農村整備室
〒023-1111　岩手県奥州市江刺区大通り7－13
電　話　(0197) 35－8443

(財) 岩手県文化振興事業団
〒020-0023　岩手県盛岡市内丸13番1号
電　話　(019) 654－2235

印　刷　有限会社　博光出版
〒020-0122　岩手県盛岡市みたけ5丁目8番43号
電　話　(019) 641－0671

©(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2010